

機動戦士ガンダム オーバーワールド

らむだぜろ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

読者参加方ガンダムもの。

Gジエネなどがメインの予定。

目次

一章 ジエネレーション編

プロローグ	1
新しき者たち	10
共闘、ガンダム	22
アンノウンの対抗策	33
備えるべき時	46
シミュレーションバトル	56
ガンダム奪還	70
真相の欠片	86
双子の特訓	100
名を継ぐ者	115
木星の戦い	125

進化した者の傲慢

狂ったお人形

オーバーインパクト

二章 鉄の仮面編

サヨウナラ、過去のわたし

顔なし名無し

瓦礫の世界で

紅き不死鳥が空を舞う

対立の加速化

彼らの考え

仮面、その憎悪の果てに

連邦の男たち

遙か未来で

142	166	183	199	213	225	240	262	273	287	299
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

互いの覚醒	311
新たな旅支度	328
淀み狂って、光照らして	342
双子の思い出	361
二人で一人には、なり得ない	379
次の名を持つMS	391
閑話休題？ シリアス逃亡	405
運命の交錯	421
運命の悪戯	440
繋ぎ止める鎖	454
交錯する事情	470
援軍到着	485
災いを告げる紅	498

それぞれの戦い	515
匂いが追い付くとき	530
邂逅、そして。	546
N T D	563
戦いの終わりへ	579
望みを叶えるために	593
身の振り方	607
三章 アロウズ編	
新しい行き先	618
アロウズとして	632
アロウズの仕事	646
新たな予感	658
蒼い焔と変態の来襲	670

蒼い燐光	688
雪崩れる剣、新しい仲間	703
アロウズの極秘任務	719
防衛戦 序章	730
戦いの火蓋	742
地上の戦い	756
大空の戦い	769
後方からの攻撃	784
誇りを失った末路	801
仲間	818
人形を選択肢	837

一章 ジェネレーション編

プロローグ

……私がこの世界、オーバーワールドに来てから早いことで一年ほどが経過した。

ああ、とは言っても。日数で数えて一年経過、という感じなのだが。

何時になったらもとの世界に帰れるのだろうか。もう諦めた方がいいかもしれない。

激闘の一年だった。悲鳴と恐怖の一年だった。気がつけば私は怪物になっていた。

元の世界ではもう行方不明ってことで処理されてるんだろうか。帰ってもリスクが

大きい気がする。

オーバーワールド……とところ構わず戦争ばかりしている激動の時代。

異世界が混ざりあい、様々な世界に飛ばされては時系列が混濁し、正確な日数が分からなくなる混沌の世界。

時代も、技術も、歴史も、全部混ざったカオスな異世界。私はあの世界からここに飛ばされた。

戦うのが楽しくなってきた気がする。結構この世界、悪くないかも。勝ち続ければ強くなれる。

努力が実を結ぶ。死に物狂いでやればいずれ誰しも強くなれる。結構結構。嫌いじゃないよ。

日常よりも生きているって言う感覚が味わえる。良いじゃない、オーバーワールド。

……私も気がつけばエースの仲間入り。いや、化け物扱いか。

ずっと一人で生きてきた。ただの高校生だった私は单身世界に放り出され、色々な世界で必死に生き延びた。

時には難民に紛れ込んで隠れて生きてきた。時には傭兵として世界に混乱を招く組織と戦った。

時には連邦軍の一人として、宇宙の民と戦った。あるいは、逆の立場で。

異世界に飛ばされる都度、役目を判断して戦った。生き残った。

最初はくそだった腕前も、今では安易に異世界に飛ばれない方法も理解して、作った拠点を作れるほどに実力も上がったし、お金も余裕ができた。

作業用のロボット導入しておけばメンテは勝手にしてくれる。

個人で所有する戦艦も安いのが購入した。最近増設して、クルーを募集している。

まあ、旧式で弱つちいけど、立派な戦艦だ。元は連邦お下がり、ジャンク同然だつ

たのを修復している。

今では何でも屋をこのオーバーワールドで営んでいる。もつと言うと、戦争を糧にするビジネスだ。

私が今まで経験した世界から奪ってきた機体のコレクションも含めると、私の存在は最早世界にも無視できないものらしい。

……要するに、既に私が纏めたものは一個の組織として出来上がっていた。

私は相変わらず戦うだけのバカだし、面倒なことは雇った艦長に丸投げしている。

結構なおっさんだけど、ああ見えて優秀なビジネスマン。給料を払えば仕事はしてくれる。

世知辛い世の中だ。金と暴力で支配されるカオスな世界で、今日も私は生きていく。

さて。

君は、誰かな？

私？ 私のことは……そうだね、オーナーとも呼んでもいいよ？

ようこそ、オーバーワールドへ。君がこのカオスな世界に飛ばされた理由は知れないけど、最初に言っておく。

君はもう、もとの世界に帰れない。

理由はシンプルだね。オーバーワールドに飛ばされる人間は条件があるの。

それは、『元の世界で死んでいる』こと。つまり君は死人。

良かったね、異世界転生を果たしたよ。

憧れとかあったらごめんね。現実は甘くない。上記のあれは、私の場合。

元を辿れば同類だから、君も多分似たようなものだと思う。

だから言うけど、向こうじゃこれは流行っているんでしよう？

でも、残念だ。この世界は君が憧れる世界じゃない。

殺しあいをしている異世界が重なる嫌な世界。

オーバーワールド……様々なガンダムのある世界が混濁している世界の気分はどうかな？

ああ、まだ意識がハッキリしない？　じゃあ、一応説明しようか。

私はオーバーワールドで傭兵や運搬、護衛などを請け負う何でも屋を経営しているの。

しよつちゆうパイロットが撃墜されて死ぬから、人手不足でさ、君が良かったらうちで働いてくれない？

大丈夫。君がどんな境遇の人間であろうとも、うちは引き受けるから。

MSは知ってるでしょ？　何か欲しい機体があるなら申し出て。私のコレクション貸してあげる。

こう見えて、結構長いことこの世界で生きてるから、色々な世界で恨み買いながらMS奪って保存してるの。

……でもね。一つ、警告。みんなに言ってるから、君にも言っておく。

君がもし、身の程知らずのバカだったら、私の組織は後ろから撃つように命じてある。うちは、その運営上世界を敵に回している。だから、口が軽かったり舐めた態度の奴はいらない。

裏切ったり暴走したりする奴や、過大評価の奴もいらぬ。

さっきの申し出は、一つのテスト。君が欲しいといったMS。

それで大体の性根は分かるんだ。

例題を出そうか。過去に実際あった事案を。

一人の少年はこういった。ストライクフリーダムが欲しいと。

知ってる？ この機体、性能が高すぎて凡人には使えないの。

それを身の程知らずにも申し出た阿呆がいてね。勘違いしてたのよ。

……異世界にすれば、自分は無敵の主人公になれると思ひ込む、痛い子供が。

結果からいうと、カウンターに殺された。

私の分身でね、クローンがうちの組織には何人かいるの。

戦闘用の人工NT。ま、分かりやすく言うと強化人間なんだけど。

そいつが必要なしと判断して始末した。

そういう自意識過剰な子供は割りと癩癩を起こして、みんなを危険に晒すの。

いい？ カウンターとして用意したソイツには勝てないよ。

だって、どんな機体にも適応できるように改造している女の子だから。

嫌でしょ？ 旧式のザクで、最新鋭のガンダムが落とされる現実なんて。

だから、もし君が身の程を弁えずに力を申し出たとしたら。

悪いけど、速攻で死んでもらう。うちにはそんな子供は必要ない。

最低限、戦場で生き残れるだけの知性がなければ、うちには入れない。

引き受けはするよ。いく宛もないし。でも、いつこ言っておく。

君は新米のパイロットだ。いきなりそんな奴が高性能な機体を使えると思わないでね。

思い上がりも甚だしい。君は死んでこの世界に来ているのを忘れてない？

つまり、君は元の世界で死んじゃった魂なんだよ。君がここに来たのは偶然でしかない。

悪いけど、私は神様じゃないから、君に特典はないし君は弱い人間としてオーバーワールドに来たんだ。

この世界ではチートなんてない。カウンターは確かにチートだよ。何せ強くないと意味がないから。

……ごめんね。脅すような真似をして。最近多いの、いきなりガンダムに乗らせろとか言う奴が。

いいよ、乗せてあげても。でも自爆装置込みだからね？ それでもいいなら、貸してあげる。

予備はたくさんあるし、もう一度君が死ぬ覚悟で力を求め、カウンターに殺されることを受け入れ、彼女を打破出来るほどの素質があれば、どんな機体でも用意する。

……どうする？ 君が選べる道はふたつある。

一つは、新米のパイロットとして、徐々に強くなる道。

こっちをお勧めするよ。君は死なずにすむ、優しい道。

こっちを選んだ君には、私は誠心誠意応えようと思う。

もう一つは、リスクしかない力の道。

私の用意したカウンター、自爆装置、何よりオーナーである私を納得させられるだけの實力があるなら、選べばいい。

ただ、君は折角転生した命を溝に捨てる結果になる。

選ばれたチャンスが無駄にするんだ。覚悟は、出来ているんだよね？

君はアムロ・レイじゃない。相手は旧式のザク何かじゃないよ。

圧倒的不利をひっくり返す程の腕前があるんだよね？

いきなり旧式のザクでVガンダムとか相手するような無謀な選択肢。

それでも、進む？　いくら性能のよいものを欲しても、カウンターは必ずその上をいくようになる。

不利を打開できるほどの實力と自信、素質があるなら選んでもいい。

……後悔するよ、絶対にね。そして、無駄に死ぬ。

でも。もしも、彼女を破って勝ったのなら。

それ相応の待遇も約束する。どんな機体も好きにしている。

どんな事も求めてもいい。私は叶えてあげる。

我が儘に振る舞うために、警告を無視して進むのなら。

……好きにしていよいよ。

さあ、どうする？ 新しいわが社の転生してきたパイロット諸君？

君はどうしたい？ 何を求める？

二つの選択肢の……どっちを選ぶのか。

私は見ているから、進むといい。

ようこそ、オーバーワールドへ。そして、戦場へ。

私と一緒に戦うことになることを、祈っているよ……。

新しき者たち

オーバーワールド。

いくつもの可能性が重なりあい、形成される不安定な世界。

ちよつとした偶発で次元の境界があやふやになり、気がつけば歴史の違う世界に飛ばされるのが当たり前。

共通するのはガンダムと呼ばれるMSが活躍する世界に飛ばされること。

時間も技術も歴史さえ、ここでは混ざりあり混沌となる。

そんな世界にいきる、何でも屋があつた。

護衛から輸送、戦闘から探索まで。

金さえ貰えれば如何なる時代、如何なる組織にも手を貸す中立中庸の一団。

経営者は若い少女と言う以外全く不明な、あらゆるパイプを持つ数多の世界を駆け抜ける。

彼らの名は……ジエネレーション。

良くも悪くも好き勝手に生きる、世界の軍事バランスをも無視した最強の集団の一つ。

その物語を少し、語ろう。彼らに誘われ、導かれた新人パイロット達の物語を……。

ここはとある戦艦の一室。

世界を越えて活動する何でも屋、ジエネレーションに採用された新人たちが集まっていた。

基本的に皆、己の出身世界の軍服なりを着ている、元パイロットだった。

黒いバイザータイプの仮面をはめて素顔を隠す長身の男。

アカデミーという学校を卒業したばかりの緑の軍服をすっかり着る青年。

短めに綺麗に切り揃えた、天然パーマの金髪の男性。

他にも何名かいるようだが、今回は彼らが面接に呼ばれたのだった。

ドアが開き、端末を持った一人の少女が室内に挨拶をして入室。

「お待たせしました」

ピンク色の長髪をドリルのように左右に垂らした妙な髪型の少女だった。

恐らくは異世界の連邦と思われる軍服を身につけていた。

「本日より、ジェネレーションに所属する三名ですね？ 初めまして。わたしはジェネレーションのマスターユニットを務めております、アリア・アメリカスと申します。以後、お見知りおきを」

幼い少女は無表情で名乗る。三人はそれぞれ挨拶をして、着席。

彼女は一瞥して、様子を見ている。

聞きなれない言葉を言った。『マスターユニット』。

それはいわく、ジェネレーション独自の階級らしく、またの名をオーナー代理。

彼女は姿さえ見せたことのない謎の創設者、通称オーナーに唯一繋がるこの組織で艦長以上に偉い役職。

権限がとてつもなく強く、彼女の意向はオーナーの意向。誰も逆らうことはできないらしい。

事実、彼女は何でもできた。MSの改造、整備から戦闘、艦長、通信、操舵、求めら

れば完璧にこなす。

実際研修期間にいやと言うほど見た。淡々と仕事をこなす、敵を滅ぼす戦闘用の強化人間。

そういう風に作られている、身の程知らずの新人を始末したりするカウンター。

オーナーのクローンの一人である彼女が、二隻所有する戦艦の片方の最高責任者。

もう一つのほうも顔が違うだけの同じスペックのクローンが管理している戦艦があった。

「皆さんは合格です。……ただまあ、言わせて頂ければ問題がありますかね」

声色に糾弾を込めて、少女——アリアは、バイザーの男に言った。

「DD……と言いましたか、その仮面。貴方が提出した経歴、少し洗ったんですが……全部偽造でした。見た目通り、随分と胡散臭いですね。うちに一体、なんの目的があって潜ったのかは知りませんが、大人しくしててください。今回は咎めなしにして差し上げますが、次はその右半身だけじゃなく、全身サイボーグになりますのでご承知を」
全身肌を晒していない仮面の男に、アリアは警告する。

ぎよつとして二人が見るなか、DDと名乗った男は軽く首肯。

「……肝に命じておこう」

とだけ、一言返答したのみだった。

過去を詐称してジエネレーションに入るとは中々大変な過去があったと新人は思う。

まだ少年と言えるような彼に、アリアは矛先を向けた。

「ヴァイス・ベルオール。あなたはアカデミー時代に訓練中の操縦に失敗して、事故を起こしてますね。その左頬の傷痕は戒めですか？ プラントの技術なら治せるでしょうに」

「……そうですね、二度と失敗しないための決意です」

「そうですか。うちではミスしても、取り返せます。死なないように精進してください」
新米、ヴァイスはアカデミー時代に訓練用MSの操縦をミスして大破させたことがあった。

普通ならばそこで大事になるのだが、当時の上官が本当によい人で、彼を庇ってくれたおかげで無事に卒業することができたのだ。

その時の傷痕は残している。もうミスしないと言う決意の現れで。

配属されるはずの部隊が壊滅し、代わりに推薦されたのがこの組織。

ザフトはどうやら、彼らとも繋がりが深いらしい。一種の出口としてヴァイスはここにいる。

「ええと、ヴォルフガング・エルヴィン・ビッテンフェルト。あなたはとくに問題なしです。……然し、やたら名前長いですね。面倒なのでヴォルフでいいですか？」

「卿が呼びやすいようにしてくれて構わない」

名前の長い彼はヴォルフと呼ばれ、男性は精悍な顔を崩した。

育ちのよさが感じられる雰囲気、アリアは満足そうに無表情で頷いた。

「えー……本日から数日の間は、わたしが皆さんの部隊を纏めます。隊長とでも呼んでください」

新人の彼ら三人は、マスターユニットたる彼女の指揮を受ける。

然し彼女は基本的に個人主義だ。

危険にならない限り、あるいは全体の妨げにならない限りは好き勝手にさせる。

基本給に加えて歩合制のこの組織では戦闘部門の場合、敵を撃墜した数によって報酬が増える。

エースと思われる場合は尚更だ。競わせる方が効率がいいらしい。

統率など彼女はしない。勝手に野放しにさせて、ピンチの時だけ彼女が割って入る。

卓越した操縦技術の塊である彼女だからできる方法である。

みな、そのやり方に異義はない。個々を尊重するのは正直有りがたかった。

「で、わたしは今戦闘部門なので、皆さんは戦闘に出ていただきます。何か質問は？」
簡単に仕事の内容を説明するアリアに、ずっと沈黙していた仮面が問う。

「我々の機体はどうするのだ。私は陸戦の機体しか所持していないが」

DDの言う通り、各自個別の機体は最低限所持している。

それが条件だったのだが、研修の際に回収されて、それつきりだ。

今まで訓練用の機体を貸し出しを受けて乗っていたが、入隊するとなると己の機体が好ましい。

アリアはそれが本題だとDDに言う。

「良い質問です、黒仮面」

「黒仮面……」

妙なあだ名をつけられた。アリアはしれつと言った。

「あからさまに偽名使っている奴に律儀に付き合う気はありません。黒仮面で決定です。では、話を続けます」

（黒仮面……。なんだこのペテン臭い響きは……）

反論を認めないアリアによって強引に進められる。

ヴォルフもヴァイスも笑いを堪えているのに必死だった。

アリアと言う少女は全くもって相手を気にしない。

誰であろうが怯まず話す豪胆な少女だ。黒仮面に無言の抗議も気意にも止めない。

「黒仮面。まず、貴方の機体は一度破壊されていますね。壊れたのを違うパーツで補った形跡がありました。ヴァイス、貴方の機体は型落ちが激しく、現在の戦況では厳しい

ものがあります。ヴォルフ、貴方の場合は整備が不十分。今までよく、あんな雑な整備で生きてきましたね」

三々五々、彼らの機体の特性を理解しているエリアは手元の端末を軽く操作。渡されていた彼らの端末に、己の機体の状況が各自データで送られてきた。

酷評とも言えるような言い方に渋くそれぞれ反応する。

目を落とす彼等は、同時に目を疑った。

そこには、同じ外見なのに中身が最早別物に変わった己の愛機のデータがあったのだ。

「黒仮面。貴方は確か、今まで地上をメインに戦ってきたと聞きましたが、宇宙での戦闘に経験は？」

「……ないな。私は陸戦型ジムにしか搭乗したことはない」

「結構。なら、入社祝いです。オーナーが、余っていたジムーを配備してくれました。どうぞ、好きに使って下さい」

何と。オーナーは、無料で彼に機体を譲ってくれたのだ。

軍が配備するような機体を、しかもわざわざ彼のニーズに応じてカスタムした状態で。

カタログをチェックする。装甲はガンダム系の機体と同じ。

ジェネレーターは強化され、エンジンも一回り高性能なものに変更されている。

フレームも見直され、より高級かつ性能が向上していた。

武装も新型。彼の好むバランスの良い仕上がりになっていた。

これは最早ジムではない。初期のガンダムに匹敵する性能なのだ。

しかも陸戦型ジムも同じように全て部品交換、及び改造を受けていた。

「……良いのか？」

「構いません。オーナーは、死なれるよりは稼いでくれる方が有難いらしく、この程度の改造は倉庫で眠っている在庫処分を兼ねて丁度良かったと仰っていました。機体の改修はみな、受けています。おきになさらず」

DDが聞いても涼しい顔でアリアは言う。

入っただけでここまで尽くしてもらえる破格の待遇。

噂通り、数多の世界で活動するジェネレーションは、伊達ではない。

ヴァイスのジンも、ザフトの技術をふんだんに盛り込まれ、別のなにかに仕上がって
いた。

恐ろしい改造技術。

スラスターやブースターの増設、装甲の新造、ビックリなのが全身に耐ビームコー
ティングまで施されている。

「……………これ、俺のジン……………」

基礎性能がバカみたいに向上していて彼は顔がひきつる。

新人の機体を別物に改造した女はなにごともないように言うのだが……………。

「なにか問題でも?」

「俺、こんな高性能な機体を扱いきれる自信が……………」

「そのうち慣れます。大したことじゃないです。ストライクガンダムみたいなものですから」

OSまで別物にしてくれた彼女は愛機がガンダムレベルにまで引き上げられて困惑する新米にけろつと言う。

乗って慣れろと言う始末。やっていくしかないだろう。多分、なんとかできる。

ヴォルフも唾然としていた。

彼の愛機、ユニオンフラッグが何か変な状態になっていた。

普段は空中での可変は不可能に近いと言われ、卓越したアリアのようなパイロットでなければ出来ない。

事実、持ち主のヴォルフも今までは成功した試しは皆無。なのに……………。

(可変が自由自在に出来るようにOSが追加されているだ?!?)

柔軟性を高めるためか、勝手に新しく補助のOSを追加され、武装のアップデート、エ

ンジン回りの強化にフレームの新品に交換、機動力と運動性能が馬鹿げた上昇を見せている。

要するにヴォルフでも補助OSのおかげで夢だったフラッグでの空中可変が可能になっていたではないか!!

「お、オーバーフラッグかこの機体は!?!」

「いえ、ユニオンフラッグです。貴方がやりたいと言っていた空中変形、今なら自由にできますよ。大丈夫です、空中分解などの心配ありません。しっかりと基礎まで見直して、尚且つ扱いやすいように仕上げましたので」

なんと言うか、尽くされまくっていた。雑な整備と言われたが、部品が少なく発注が難しかった彼のフラッグ。

今は新しい翼を手に入れ、大喜びしている気がしてならない。それほど見違えていた。

しかも薄い防御を補うべく当たり前のように耐ビームコーティングされていた。

みな、この辺は基本セットらしい。量産型なのにコスト度外視の贅沢の極みである。

「……さて、では今日から任務に出て頂きます。いきなりですが、実戦です。テストも兼ねて、気軽に行きましょう」

戦慄する三人を連れて、アリアは出撃を命じた。

先ずは補給に寄った中立のコロニーの中で、入り込んだ賊の排除。

コロニーの管理する連中から緊急の依頼だとアリアは告げた。

パイロットスーツに着替えて、格納庫に向かうように指示。

既に準備は整っていた。彼等は新品のように生まれ変わった愛機に乗り込み、初の出撃に気合いを入れた。

オペレーターの指示で、緊急出撃。カタパルト準備も完了。

「……DD、陸戦型ジム。出る！」

「ヴァイス機、ジン！ 出ます！」

「ユニオンフラッグ、出撃するぞ!!」

三人の新人はそれぞれ叫び、戦艦を飛び出していった。

敵の情報などを受け取りながら、それぞれ戦うために。

アリアはというと。

「アリア、デナン・ゾン。行ってきます」

たまたま、格納庫に放置されていた小型MSに飛び乗って、勝手に出ていった。

武器をショットランサーという刺突武器のみという命知らずの状態で。

彼等はまだ知らない。ここでは、伝説の始まりと呼ばれる運命の出来事が、動こうと

していることを……。

共闘、ガンダム

依頼を受けて出撃した部隊。

最初に現場に到着したのはヴァイスだった。

何かの倉庫の前で、激しく戦闘を繰り広げていた。

救援信号を発しているのは……二機。

(あれは……！)

ヴァイスも知っている。複数の機体に囲まれ三つ巴になって戦うあの戦域。特徴的なツインアイにフェイスタ입。あれは……。

追い付いたヴォルフも、目を凝らしているようで、呟くように言った。

『ガンダムタイプ、か……？』

『そうだな。片方はRX-78。もう片方は知らん』

黒仮面も到着して、ライフルを構える。

センサーに反応あり。向こうは気付いてこっちにきた。

ザクラーが四機。あとは見覚えのない空を飛びまわる妙な機体が十機。

MSかも怪しい、龍のような外見の物だった。それがザクやガンダムタイプを無差別に襲っている。

龍の方はデータベースを検索するも該当がない。完全なアンノウン。

生体反応もないらしく、しかしその割にはよく動く。

大きな翼を持ち、尻尾らしき部分はビームライフルになっているようだ。

着地と同時に変形して人型になり、肩に担いでライフルを撃っている。

数で負けている、ガンダム二機は苦戦していた。ザクもガンダムに食いつくのが見えてれる。

『……!! その人たち、もしかして援軍ですか?!』

広域無線で呼び掛けがあった。

皆が開くと、画面に子供の姿が映った。

「おい、子供がなにやってんだ!？」

ヴァイスが怒鳴ると、もうひとつの回線が開いた。

『それはこちらの台詞です！　ここは中立のコロニーですよ、軍は何をしているんですか!!』

「俺達は軍じゃねえよっ!!」

思わずキレて怒鳴り返すと、ヴォルフにたしなめられた。

こつちも若い高校生らしい男児。天然パーマよろしくの髪型で私服を着ている。

ザクと切り結ぶガンダムと、そこに襲いかかるドラゴンをカバーするガンダムタイプ。

うまくやっているが、やはり厳しい。

三人の所にやってきたザク二機と、それを追ってくるドラゴン三機。

掌と思われる場所からビームのバルカンを掃射してくる。

ザクは軸から回避してマシンガンを連射。双方混戦となる。

「迎撃するぞ。あのドラゴン型……何者かは知らないが、陣営は関係ないと見た」

DDが応じて、シールドで防ぎながら散開する。

ジンとフラッグはシールドを持たない。故に分散して回避に入る。

「こちら、ジェネレーション所属、ヴォルフだ。そのガンダムとガンダムタイプ、援護に入る」

ザクに実弾のライフルを撃ちながらヴォルフが事情を説明して、応答する。

『助かります！ 僕はフリット。フリット・アスノ！ そっちのガンダムのパイロットはアムロ・レイさん！ 皆さん、奴等はただのモンスターです、気を付けてください！！ 無差別に破壊活動をする化け物なので！』

フリットと名乗るガンダムタイプのパイロットが情報がない未知の敵だと告げる。性能も高いので用心したほうがよいとみる。

向こうは向こうで残ったアンノウンと戦っている。

漸く五分に建て直したようだった。

「……らしいな。俺も長いこと戦っているが、あれは見たことがない」

ザクを威嚇して追い払うヴォルフだが、あんな奇妙な可変式は見覚えがない。

敵ながら悪くないシステムだと、バルカンとライフルを撃ち合う空戦で応じながら思う。

敵の機動力は高い。ライフルが全く当たらない。こっちの動きを先読みしている節がある。

格段に性能の上がるフラッグやジム、ジンだが……。

(……妙に硬いな、奴等の装甲は。新型のビームを拡散している……?)
(ヤバイ、ジンの弾薬じゃ装甲に弾かれる!! くそ、なら接近するか!?)

敵は同等の性能か、守りに関しては上だったようだ。

黒仮面の予想通り、あのドラゴンにはビームが効きにくい。

生半可な出力では装甲に当たっても流れてしまつてダメージがない。

一度あげて撃つてみると、即座に回避する。こちらの危険な攻撃のみを見分けているとみた。

仮面はバズーカを構えて試しに撃つ。弾頭が大きいのを試すと、バルカンで叩き落としてきた。

成る程、と確信する。ニヤリとDDは笑つた。

奴らは、有効じゃない攻撃は防御しないし回避も鈍い。

ならば、突破口はある。

対してヴァイスは戦闘経験自体が浅い、本物の新米である。

身を引いた敵に深追いついて、迂闊に前に出すぎて、それが仇となった。畏だとも知らずに。

『その人、危ないっ!!』

フリットが気付いて叫ぶ。

ヴァイスがセンサーの音に気付く。危険信号。

頭上だった。見上げれば、ドラゴンが胸部に光を溜めている。

資料で見たことがある。ああいう部分には拡散型のメガ粒子砲が搭載されている事

がある。

上からの拡散攻撃。恐らくコーティングしてあっても、ダメージは受ける。保険があるとはいえ、危険にはかわりなかった。

「しまっ……!?」

周囲には誰もいない。

失態を悟るヴァイス。敵はルーキーを的確に見抜いていたのだ。罠に嵌めて、確実に数を減らそうと画策してきた。

それぞれ、ザクを始末したとはいえドラゴンが残っている。

慌てて逃げようとするにも、発射までに離脱できない。

分かった。今、この瞬間は命の危険に晒されている。

(しくった……!)

焦って不用意に接近するとは。

ヴァイスは解する。死ぬかもしれない。

庇おうとするにも、距離が空きすぎた。

間に合わない、ならせめて受け身をとる。

ヴァイスは腕を交差させて防御体勢をとった。

最悪、爆発するかもしれないが……その時はその時だ。

死ぬ前に脱出するしかない。はんば諦めている、その時だった。

この戦場にいた、才能ある人間はあるものを感じた。

後にニュータイプと呼ばれる男、アムロ・レイは恐ろしい威圧感を。

Xラウンダーと言われるフリット・アスノは言い様のない寒気を。

それぞれ、背後から感じ取った。思わず身構えそうになるほどおぞましい感覚に襲われた。

——迂闊ですね、ヴァイス。

彼は通信で聞こえていた、女の声。

……途端。レーダーに超高速で接近する熱源が表示された。

その物体は迷うことなく、こっちに向かって突っ込んでくる。

そして。

頭上の、今にも攻撃しそうなドラゴンが、横合いから突撃してきた何かと衝突。

残像を残して消えた。

遙か彼方にまで諸とも吹き飛ぶドラゴンと飛翔物。

で。ヴァイスが見ている先で、数秒後オレンジ色の光と黒い煙が見えた。

レーダーから敵機が一つ、減る。同時に味方の信号も減った。

……自爆したのかと思ひ、焦るヴァイスに。

『……無事ですか、ヴァイス?』

当たり前にかれる通信。

映し出された、ヘルメットが派手に割れて頭から血を流す少女がいた。

「あ、アリアさん!?!」

それはリーダー、アリアの姿だった。

彼女は画面越しに酷い怪我を負っていた。

背後では、撃墜した機体が炎上しているのが見えた。

『すみません、道中ザフトのバカ共が絡んできて……遅れました』

無理やり来たせいで機体が爆発してしまつたと報告。

上手く脱出できたが大ケガを負つてしまつた。

ザフト。彼にとつては故郷となり、今でも所属する組織。

アリアが言うには、敵対している戦艦がここに隠れていたらしく、その戦闘に巻き込まれたらしく、

ヴァイスには関係のない世界のザフトだったらしく、彼には無関係だと断じるアリア。

その時、一人で無意味に戦闘を広げる双方を追い払つたらしく、爆発寸前だったらしい。

ガンダムと一騎討ちして、とつと出ていってもらったようだ。

『無事だったか、リーダー殿？ いや、待て。何で生きている……？ 今しがた、爆発しただろう!』

『まさか、一人で一部隊を壊滅させるとは……。卿は命知らずと言うか豪胆と言うか……』

戦いながら軽口を言い合う仮面とヴォルフ。敵は対処法をそれぞれ見だし撃墜している。

アムロとフリットが何事かと聞くと、アリアは思い出したように言い出した。

先ほど、避難している区域にまで戦闘を広げていたザフトのアホを皆殺しにして、ついでに逃げ遅れた民間人の女の子を保護して、誘導していたとアリアは言った。

折れた右足を引きずり、頭に挟れるように出来た裂傷から流血しているのだが、気にしない。

「えつと、フリットさんって方、います?」

『は、はい! 僕です!』

一名、通信に割り込んできた。男の子だった。

彼はアリアを見て騒ぐが、無視。伝言を預かっているのだ。

「ああ、いましたか。貴方のお連れユリンさんという方は、無事に避難所に送り届けて

おきました。ザフトが不意打ちで仕掛けてきて、巻き込まれたのですが無事です。今、その座標を送ります」

みつあみの可愛い女の子が、ザフトとの戦闘に巻き添えを受けて、危うく死ぬところだった。

アリアが介入して、ザフトを全滅させてモタモタする戦艦に威嚇して無理矢理出港させたのち、連れ添って移動しておいた。

尚、ユリンと名乗る少女は集団でタコ殴りにされて半壊する機体から出てきた時点でだいぶビビっていた。

負傷して明らかに不味そうな大ケガなのに動いていればそうもなろう。

『ユリンが……。あ、ありがとう(ござ)いますっ!!』

「いいえ。成り行きとはいえ、無関係な人間が死ぬのを見るのは流石に気分も悪いので」
血の軌跡を残しながら移動するアリア。心配していたのかフリットは安心していった。

霞んでよく見えないが、皆上手くやっているようだ。

アリアは皆になるべく周囲を壊さないように言いつけて、通信機を切った。

コロニー内部で自爆芸をしたバカに言われる筋合いなどないだろうが……。

「……参りましたね」

それよりも、彼らだ。

数日鍛えればきつと強くなるだろう。

然し、機体に改造を施しているのに相手のMSが高性能だった。

思った以上にオーバーワールドにおける敵の軍事力が上昇傾向にあると見る。

(オーナーに掛け合ってみますか……)

新人に扱える範囲での改造だったが……どうやら、見通しが甘かったと見える。

もう少し大胆に改造すべきか、創設者と相談してみる事にした。

身体を引き摺りながら、後始末を任せると言う醜態をアリアは仕出かしたのだった

……。

因みに、戦果は上々。

誰も目立った損傷も怪我もなく全員帰投した。

機体を失い、大ケガをしたのはアリア一人だった。

ヴァイスには礼を言われたが、二人には呆れたように見られたのは、言うまでもな

かった……。

アンノウンの対抗策

コロニーでの戦闘を終えて報酬を得てから、翌日には母艦に戻り再び出発。

依頼された異世界へ、次元の境界を緩めて移動する。

オーバーワールドの一部の母艦には、次元跳躍能力と言うものが備わっている。

これは近年オーバーワールドで開発され、実用化されたもので次元の境界線が緩い区域にまで移動して、不安定な空間で跳躍に必要なエネルギーを爆発させて、人為的に歪めて目的の時代にまで移動する方法。

目的地の異世界に予め目印になるものを配置しておかなければ移動できないが、頻繁に移動していた過去にばら蒔いておいた遺産が残るジェネレーションには関係ない。

元より、オーバーワールドにおいてもこの技術を持つのは一部のみで、故に自由に行動できるのだ。

軍事のバランスを無視する、動くオーパーツ。それが彼ら。

目的も理想も信念もない。

ならず者に与えられた過剰な技術が、あらゆる世界におけるバランスブレイカーとして君臨する最大の理由なのだから。

今度は宇宙世紀のある時代にやってきた。

尤も頻繁に訪れる機会の多い時代、時系列であり技術の革新が凄まじい激動の時代でもある。

そんな中を、彼女は広いトレーニングルームで腰かけて、パソコンに向かってしかめ面をしていた。

もうひとつの艦隊であるクローンから有益な情報を得ることが出来た。

どうやら、彼女らもあの得体の知れないドラゴンと戦ったらしい。

そしてオーナーにこれを伝えると、あっさり彼女は連中の正体を教えてくれた。

同時に告げるのだ。連中のMSの水準は量産にしても極めて高く、ジムやジンでは食らいつくので精一杯。

特別に奴等と戦う場合に限り、決戦に使うような高性能機体を使うことを許可した。現在、シミュレーションで訓練中の三人や普段皆が使うような機体では厳しい戦いになるという。

因みにオーナーはやつぱり連中の機体も鹵獲しているらしく、必要なら配備していいと言っている。

アリアは己の主ながら、いい加減な考えにため息をついて通信を終えた。

「どうました、アリア。妙に疲れたような顔をしています。昨日の傷が痛むのですか？」
タンクトップとハーフパンツ姿の、汗だくで筋トレをしていた屈強な男が声をかける。

長めの赤い髪の毛を適当にひとつにまとめた、優しそうな瞳の男だ。

「ん……ああ、アンダーソン。おきになさらず。昨日のは既に完治していますので」
「無理やり治しているだけでしょ。治療のナノマシンとはいえ、負荷はかかる。……無理をいけません。薬の打ち過ぎは、生体CPUのようになるだけ。ご存じと思いませんけれど」

彼はカズヤⅡⅠアンダーソン。ザフトのいる世界の地球軍、連合からスカウトされ

たパイロット。

屈強な外見とは裏腹に物腰は柔らかく、丁寧に接する偏見を持たない男である。

アンダーソンの心配は、アリアの身体のこと。

彼女は戦闘用クローンであり、彼が知っている連合の戦闘用の人間と似ているらしく、いつも心配している。

いわく、薬が切れて最後は戦場で悲しい叫びを残して散っていったとか。

「わたしが出来損ないの奴等と同類とでも？ アンダーソン、舐めて貰っては困ります。わたしはあらゆる世界の技術を結集して生み出された安定型戦闘用NT。かの黒歴史の一部も入っているのですよ？」

「ですが、同時に人間でしょうか？ アリア、己を蔑ろにするのはいけません。貴方は、生きていますから」

諭すようにアンダーソンはアリアに言う。アリアは世界最高峰の技術で作られたクローンだ。

彼女の言う通り、薬一本で致命傷も完治し、例え死んでもバックアップをとった記憶をロードして新しい身体になって戻れる。

原理はイノベイドと同じ、クローンの強みを生かした最強のパイロット。

それが、アリア。命は同じというアンダーソンとは相容れない。

「……まあ、良いでしょう。疲れているのは、例のアンノウンの事です」

アリアは会話が平行せんになると感じて話題を切り替えた。

アンダーソンも、興味があるのか話題に乗ってくる。

「連中の名はヴェイガン。……火星に取り残された人類だそうですよ。オーナーいわく。つまりはまあ、よくある人類同士の戦争です。連中は独自進化した形態のMSを使ってくるんですよ。連邦の水準を軽く越える次元で。これは他世界の観点から見ても、技術レベルは高いでしょう。下手するとソレスタル・ビーイングに匹敵します」

「成る程」

ソレスタル・ビーイング。他世界最高峰の技術で圧倒する私設武装組織。

GNドライブなる動力炉をいくつか保持して、少数精鋭で世界に喧嘩を売ったテロリスト。

無論、ジェネレーションも彼らとは戦ったこともあるし、共闘もある。

互いに警戒しあう関係であった。ガンダムを何機か所持しておりパイロットも一流揃い。

伊達に戦争を吹っ掛けた訳ではない。アリアも何度かやりあって、痛感した。

「ヴェイガン……自分も興味ありますね」

会話に入ってきたもう一人の男。

黒髪の天然パーマに、無精髭に同じく汗だくで寄ってきた。

だらしのない印象だが、変人の多いジエネレーションのなかでは、常識のある人間だとアリアは思う。

「伊織。興味、ありますか？」

「そうですねえ。自分なんかでも役に立てるなら、後学のために聞いときたいですわ」

若干卑屈な性格だが、人のよい彼は伊織歩。

アンダーソンとは仲のよい同じ部隊の僚友。

アンダーソンが彼に問うと、頷いて会話に参加する。

「アリアさん、自分とミチアさんも、ここで聞いても構いませんかね？」

「ええ、どうぞ。……現状の機体では厳しいかもしれませんが。少し方法を考えましょう」

伊織は許可をもらい、同じ部隊の最後の男を呼ぶ。

仏頂面で、頭をタオルでふく男が近づいてきた。

「ああ？ んだよ、何の会議だ？ ブリーフィングならあとにしてくれや」

口の悪い、焦げ茶の癖毛を左わけにした男はアリアを見下ろす。

ミチア・タカハラ。アンダーソンや伊織と同じチームを組む、ある程度実戦を経験した部隊の一人。

達観しているようだが、実は情に熱く義理堅い男だった。

「ミチア。前から希望していた機体に、新調しません？」

「……あ？」

唐突に振られた話に怪訝そうな表情をする。

彼らにヴェイガンのMSの話を軽くするアリア。

その結果、今の装備では戦うにあたって不利な条件なのだと説明する。

「あ……つまり、なんだ。今後戦うにあたっての基礎戦術の一つか？」

「ええ。ヴェイガンの機体にはこちらも相応の機体に取り換えます。ミチアだと……リゼルが妥当かと」

現在乗っているジムニーからガンダム系統の量産型、リゼルを提案するアリア。ミチアは解する。

この組織は兎に角、所属するパイロットを死なせない事に尽力する。

気に入らない相手はアリアがゴミのように始末する一方で、働くパイロットには手厚くするのがこの組織の流儀というか。

「要するにそこまでの相手かよ。性能で負けてるとパイロットの腕じゃフォローが効かねえってか？」

「はい。実際この目で確認しています。念のため、データも送りますので目を通してください」

オーナーから受け取ったサンプルデータ。

個人の端末にパソコンのキーボードを軽快に叩いて操作、転送する。

彼らはそのデータを拝見。個々に表情が変わる。

アンダーソンは閃いたように、伊織は雲って、ミチアは納得。

大体言いたいことは理解して貰えたよう。

「活路はおおよそですが、見出だせました。然し、あくまで理屈としてなのが悔しいですね」

「自分のツダじゃ、無理ですかねえ。軽装ですから、壁にもなりそうにないっすわ……」
「チツ……。何だよこの数値。本当に量産型か？ 後期型に至ってはビームコーティン
グが標準ってどんだけコスト割いてんだこれ」

アンダーソンが普段使うのは彼専用のストライクダガー。近接を想定した装備に改良してある。

伊織は問題を改善したツダ。欠陥品として名高いが機動性は随一の実弾装備が多い。

ミチアは汎用性重視のジムニー。だが、その装備では相手の防御機構には勝てそうにない。

「問題は火力です。相手の装甲を貫くだけの決定的な火力がこちらの機体には出しにくい」

アリアは指摘するのは堅牢な装甲。機動性は無理矢理追い付けばこの面子ならば問題はない。

だが、火力だけはどうにも出来ない。それは元の機体に依存する。改良にも改造にも限界があるのだ。

故に、乗り換えも視野に提案する。一つランクの高い機体か、装備できる火力をあげるか。

そこをクリアすれば、恐らくは倒しきれぬ。腕前はこの三人ならばいける。ヴァイスもヴォルフも黒仮面も、突破はしていた。

苦労はしていたようだが、そのデータはしっかりと記録してある。

彼らは己なりの答えを出した。

「ソードストライカーの許可をください。大質量による切断か殴打なら破壊できると判断しました」

アンダーソンは接近が得意だ。慎重に守り、大胆に切り捨てる。

その戦法は、持久戦になればより堅実な戦いになる。

飛び回るドラゴンごときなど、彼の敵ではない。

「了承します。貴方の105ダガーのストライカーパックの変更を許可します。場合によっては……あの機体を持ち出しても構いません」

アリアが機体を管理している役目を持つ。

交代したい場合はアリアに申し出て、許されれば次の出撃には変更される。

そして、アリアはアンダーソンが尤も大切にしている機体まで持ち出しを許した。

極めて稀な、それこそエースと一騎討ちする時にしか許さない機体までいいと言ったのだ。

「!! アリア、それは……」

「相手はGN-Xと比肩するような強力な機体です。四の五の言っている暇はない。あんなものが物量で攻めてきたらそれこそ決戦ですよ。いいですか、アンダーソン。いいえ、三人とも。もしも、ヴェイガンと決戦に関する依頼を遂行する場合。状況に応じては、ガンダムの使用を許します。特に伊織。ツダに拘るのはいいですが、一芸だけで太刀打ちできる相手じゃないんですよ。貴方も任務内容によつては命令によつてガンダムタイプに搭乗して頂きます。拒否は許しません」

普段からツダに拘る伊織も、機能で劣る欠陥品では死ぬ可能性がある。

今回はいいが、質にも数にも負けた場合は、強制的にガンダムタイプに乗せることにした。

卑屈かもしれないが、伊織もそれだけの価値があるとアリアは判断した。

「りよ、了解です……」

雰囲気気圧されて、伊織は頷いた。

今回ですら無理と判断しているようだが、ツダの加速を活かせば、不可能ではない。「ツダの武装なら、シュツルムファウストと対艦ライフルを使えば可能でしょう。大火力による物理的な破壊ならば、突破は可能だとDDが言っていました。事実、バズーカであいつは撃墜していましたし」

急接近して、近距離でぶち当てると彼女は伊織に告げた。また結構な難題を提案してきた。

アリアはそのぶんリスクをカバーすると言った。

「ツダのエンジンを試作型から改良型に変更し、後は……ジエネレータを大容量に交換して、薄い装甲でも防御に不安が残らないようにします。最悪、無理矢理ですがIフィールドの搭載も検討に入れておきます。ビーム使わないツダだから、無理でも……やってみるしかありませんかねえ……」

ツダ愛が強い伊織にアリアは頭を悩ませつつ、応えようと頑張っていた。

伊織も何度も自分なんかのワガママに付き合ってくれてありがとうと礼を言う。

で、MSを相棒と呼ぶミチアは、リゼルに対して希望があった。

「アリア……あれ、試してみていいか?」

「了解です。……隊長用の機体を更にいじるんですよ。ミチア、使えます?」

「意地でもやってやるさ。任せな。俺は相棒を裏切らねえ」

ミチアは逆転の発想だった。ビームコーティングがあるなら、諸とも蒸発させるだけの出力で焼き尽くす。

力業に近い乱暴な方法だが、着眼点は悪くない。実際、リゼルはそれだけ融通が聞く。「フレームからの基礎設計の見直しときましたか。ミチア、覚悟してください。こうなった以上、わたしは加減しません。加速が殺人的になりますが、Gで潰れないで下さいよ」

「あたぼうよ。これでもトルギスの加速に堪えた男だぞ、俺は」

彼の提案。それはとあるガンダムが使う武装、ビームマグナムを装備することだった。

この武器、かするだけでMSが蒸発し、直撃しようものから戦艦のフィールドですら易々と貫通して破壊する威力がある。

無論、短期決戦のための作られた専用装備。リゼルでも使えばフレームがイカれる。

然しアリアは貴重な素材、サイコフレームを全身のフレームにふんだんに使って作り直すと言い出したのだ。

性能が上がりすぎて、下手すると加速のGで潰れるかもしれないが、生憎本人は耐性があるのでギリギリなんとかなる。

最悪、アリアも使うことも視野に入れておけば無駄じゃない

オーナーも使い手を選ぶ素材を使ったMSが格納庫の肥やしになっているので、解体ついでに再利用よろしくと頼まれた。

めちやくちやだ。全身を専用機として作り直し、与えると言う優遇っぷり。

最早ガンダムよりも手間とコストがかかる。でも作る。資材は腐るほどあるから問題ない。

「では、早速作業に取りかかります。皆さんは、いつも通りをお願いしますね」
ヴェイガンという厄介な勢力と戦うために、アリアは格納庫に向かう。

その背に挨拶をしてトレーニングに戻る三人。あれは数日は出てこないパターンだ。

そんなアリアの、パイロットのためのヴェイガン用のMS改造計画が、今始動するのだった……。

備えるべき時

他の部隊が依頼をこなしている間に、アリアは格納庫で改造を行っていた。

例のアンノウン……ヴェイガン。

連中の目的が何であろうが、彼らには関係ない。

パイプのない組織として存在するのだ。

宇宙世紀で仕事をしながら、試験的に出来上がった機体をテストしてもらう。

その辺にいる宇宙海賊相手に使ってもらおうと。

「くうっ……!?!?」

まずは、アンダーソン。

機体がソードストライカーパックを装備した105ダガー。

かなり機体のバランスが悪くなってしまつて、増えた重量を補うために推力を強引に引き上げにしてしまった結果、操作性が悪化。

複雑になりすぎた機体のバランスがアンダーソンであっても負荷になっていた。

現在、海賊のMS相手に大振りで振った主武装、シユゲルトゲベルがスカツた。

隙だらけの所をビームを撃たれるが、本体にはファミネット装甲を何重にも施してある。

多少かすつても、問題はない。

アンダーソンも建て直し、再開する。

次、隊長用の機体を改造したりゼル。

全身をフルサイコフレームに変更してビームマグナムの反動にも耐えるようにした方がいいが。

忘れていた。ミチアはオールドタイプだった。普通の人間にフルサイコフレームは扱えない。

単純に強化のつもりで使っていたが、今度は機体が敏感すぎて彼の本能的な意思を脳波で勝手に感じ取って暴走している。

オールドタイプレベルの微弱な脳波にまで反応するあたり、さすがと言うことか。

「お、落ち着け相棒!! 俺は平気だ、平気だから!!」

ミチアは焦る。機体が言うことを聞かずに暴れまくり敵を執拗に攻撃し続ける。

ミチアでなければ暴れ馬のリゼルが出す圧倒的Gで潰れている。

敵意を感じてパイロットを守ろうと、サイコフレームが勝手に判断しているようだ。次、伊織のツダ。無理だった。

ツダは欠陥だらけのゴーストファイター。

改造しようとしても、安定していたバランスが崩壊して自爆する可能性が再び浮上。然し改造しないとやはり勝てない。いつそ、乗り換えを推奨するべきか。

なので、伊織は現在母艦でシミュレーションで試している。

案の定、無理な加速が崇って宇宙に汚い火花が出来る。

フレームエンジンの加速に追い付かない。分解してしまう。

だからと言ってデチューンすると敵に追い付かれる。

試作の時点で可能性は皆無となったに等しい。

(ふむ……)

伊織によろ、相談。

二人の機体には、補助用のOSを組み込んで操作性と親和性を高めた方が良さそう
だ。

データを取りながら貫徹数日目のエリアは目元にくまを作りながら考えていた……。

翌日。

ダガーの頭にアリアがプログラミングしたOSが搭載された。

同時に、新しい情報が入ってきている。ヴェイガンの新型が登場したらしい。

今度は更に装甲が分厚くなり、とうとうコーティングをされたビームにも実弾にも強い新型。

ついでに、何でもNTに近い性質を持つというXラウンダーなる人種もヴェイガンのパイロットにはいるようだ。

人間が乗っているなら、間違いなくエースと見る。サポートは必須だ。

「Xラウンダー……。まあ、NTと同じ特殊な脳波を出す人間でしょう。だったら、良い方法があります」

特別な人間の相手にアンダーソンは苦悩していた。

エースキラーとしても中々なアンダーソンでも、根っから違う人種には対応しにくい。

アリアはそこで彼のダガーにあるOSをリミッターを噛ませた状態で組み込んでお

いた。

「これは……?」

「EXAMシステムです。宇宙世紀で開発された、本来はわたしのような人間を皆殺しにするためのシステムですが、幸いオールドタイプには反応しません。あくまで、NTと根本を同じくする人間のみに対応して戦います。ただまあ、改良してもやっぱり言うことを聞かない場合が多いようです。アンダーソンなら、システムの掌握ができると思います」

EXAMシステム。

NTを抹殺するべく開発されたOSの一つ。

飛躍的に能力を向上させるがそれはオーバーロードのよるリミッター解除。

自立起動し、敵を殺すことを優先する悪魔の所業。機体に乗っ取られる場合もある。

アンダーソン程の男ならば、システムに張り合い制御することも可能だろう。

過去に似たような事案を経験する数少ない生存者だ。

更に通常の補助のOSとしても簡易的ではあるが機能する。

勝手に発動しないように手動で起動するが、アンダーソンは渋い顔をする。

「ふむ……。あまり、使いたくはありませんが……」

「相手はわたしみたいなものですよ。能力で大きな差があるんです。死にたくなければ

使ってください。一定時間で止まりますし、倒せばそこで強制的にストップします。甘さと迷いは……捨てた方が良いですよ、アンダーソン」

殺戮マシーンにはなりたくない。あくまでアンダーソンは必要な戦いしかしない。そこは譲歩するが死なれたら困るのも事実。一種の保険として組み込んだままでだ。

使わないなら越したことなどない。

気乗りしないようだが、正式な決定だ。切り札として使ってもらおう。

リゼルに関してだが。此方にはパイロットの親和性を高めたバイオコンピューターを内蔵してみた。

彼の意思を機体にスムーズに伝えるようにオールドタイプでも、これなら問題なく使えるだろう。

実際、リゼルとミチアは一つになった。あれほど暴れていたリゼルが、ミチアの意思に従うようになったのだ。

更にバイオコンピューターはパイロットと共に戦うシステムの一環であり、ミチアの能力も向上させる。

「これが、NTがいう、機体が応えてくれるつてやつなのか……。何だろうな、すごいあったかいんだ。俺の知らない、何かが伝わる気がして……」

ミチアは己の広げた両手を見下ろしアリアに言った。

バイオコンピューターを通じて、フルサイコフレイムと繋がって、彼には何かを感じ取れるのだという。

「サイコフレイムは人間の脳波増幅したりもするらしいですから。きつと、リゼルとミチアは共に戦う、本当の意味での相棒になったんだと思いますよ」

思いに応える。ナンセンスな話かもしれないが、あり得ない事もない。

彼はNTを否定しない人間だ。だからこそ、こう言う感覚を感じ取れるのかもしれない。

「アリアさん……あの、自分は……」

一方、ツダの限界を越えてやろうとして、シミュレーションで不可能と判断したアリアが下した結論に戸惑いを隠せない伊織。

新しい機体を押し付けられた。そして強引に試運転してきた。

……結果、遭遇してしまったジオンの旧式巡洋艦三隻を落として帰ってきた。何が起きたのかというところ。

「ALICEが貴方を守りましたか。彼女は気に入ったパイロットが大好きですからね。良かったですね、伊織。好かれてますよ？」

「ええ……」

機体の中身を調べたアリアが見ると、どうやら搭載しているAIが伊織を守っていた

ようだ。

伊達にガンダムではない。明確な意思を持つ人工知能だ。

好かない奴は助けられないし、多分伊織の卑屈的ところが彼女の母性愛を刺激したに違いない。

伊織はツダが好きで決戦に用いる機体を所持していなかった。

なのでこの際、ガンダムを与えることにした。名はSガンダム。

人工知能、ALICEを搭載する高性能MS。

バカみたいな性能の機体で、しかも乗っているAIのアリスとアリアが呼ぶ人工知能が好みのパイロットでないかと全力を出さない困った機体だった。

一応オリジナルとは違うシステムのALICEだが、どうもこのアリスはダメ人間が大好きらしく、完璧なパイロットが乗ってもそっぽを向いて言うことを聞かずにコミュニケーションもとらない。

伊織は試運転中、機体のディスプレイに何故か、困ったときとか大変なときはスペリオルに甘えていいのよ？ というメッセージが常に浮いていて困惑していたと説明。

人工知能ゆえ、高い知性もあるし、選り好みもする。

伊織はスペリオルの好みのだ真ん中のようなだった。

その証拠に、彼の端末にはひっきりなしに機体からラブコールが飛んできている。

アリアがコミュニケーションを取れるように改造した結果、伊織はガンダムに好かれるという類を見ない経験を体験しているのだった。

「アリスがツダと一緒に使ってくれていていますが……どうしますか？」

アリアが聞くと伊織は頭を抱えた。因みに人工知能の思考は女の子である。

割りとはアリアと年齢設定が近いので、アリアの数少ない友人の一人だったりする。

「ガンダムからラブコール……伊織、すごい経験をしていますね」

「なんだ、この……相棒が物理的って状況は……シユールすぎねえか……」

アンダーソンとミチアが見ている先で、端末の連絡事項は増え続ける。

早く会いに来てー、早く一緒に出撃しよー、もつと一緒に頑張ろー、愛してるわ伊

織ー。

すごい早さでメッセージが届く。微妙に言葉が崩れているのがアリアが言うにはなっている証拠。

気に入らない相手には機械的にしか接しないし、酷いときはだんまりらしい。

「……自分のような男に……なぜ、女性が……」

伊織が困惑するのは言い寄られてる事であり、ガンダムが相手だからじゃないのがズレている。

目元に陰りが入る。彼は女性との付き合った経験はない。ずっと独り身だ。

まさか初めてのラブコールのお相手がガンダムだとは誰が想像できよう。ツダが好きでもいいのー、スペリオルは伊織の二番でもいいのー、愛人でいいから一緒にいてー。

「あらあら……スペリオルにしては真面目に口説いていますね」
メツセージを見るアリアが意外そうに言う。

伊織はどうやら、スペリオルガンダムに本気で恋されているようだった。
益々頭を抱える伊織に、ミチアは肩に手をおき一言。

「……良いじゃねえか、命を共にする相棒だぜ？ 付き合つてやれ」
ミチアは楽しそうにけしかける。アンダーソンも同意。伊織は更に苦悩する。

「じ、自分なんかで……ガンダムに相応しい男なのか……!?!」
伊織ー、スペリオルをもっと頼っていいのよ？

何やらこつちはこつちで面白い展開になりそうだった。

アリアの正式な命令で、彼らの新しい機体の強化を終えた。
来るべき、ヴェイガンとの戦いに備えて、今は強くなつていく……。

シミュレーションバトル

さて、とアリアは皆に問う。

「準備は出来ましたか？ シミュレーションを開始しますが」

今、彼女は宇宙のど真ん中にいた。

周囲はデブリが多く、視界が悪い。

黒い空間に煌めく星を見ながら相手に問う。

これは機体のシミュレーションで、今からここで新しい機体を使った模擬戦闘を行う。

実際にやると機体が大変な目に遭うので、シミュレーションでやることに。

今回はアンダーソン、ミチア、伊織の三人。

次に黒仮面、ヴァイス、ヴォルフの三人を予定していた。

『準備完了です』

通信越しに返事をもらい、彼女は動き出す。

ダガーにSガンダム、リゼルとよくわからない組み合わせの三人相手に、アリアは一人で戦う。

元より単独行動が多く、連携をとらないアリアは一人のほうが効率がよかった。

その為、基本的に全部のせの機体やMAを得意とするアリアにとってはハンデにもならない。

不利な条件など日常茶飯事。

一騎当千を行う彼女に認められるノルマだと自負している。

今回はアルケーガンダムに乗っていた。近距離の得意な異形のガンダムである。

深紅の体躯、異様に長い手足に半比例して細長い胴体に四つの真つ赤なメインカメラ。

他にも使うパイロットがいたのだが、気味悪がって捨ててしまった。

アリアはそれを譲り受けて改造している。深紅のGN粒子も彼女の趣味だ。

デブリを抜けて疾走するガンダム。レーダーに反応はない。

コックピットで、レバーを握って相手を探す。然し視界が悪い。

回りはデブリと小惑星だらけ。左右に動いて回避しつつ、進んでいく。

(……成る程、熱源反応しないように上手く動いていますね。やはりあのチームには少し、本気を出させばなりませんか)

熱源探知をするリーダーに反応しないように操作を慎重にやっている。

アリアもできる芸当だが、真正面から堂々と圧倒的に叩き潰すがメインのアリアはあまりやらない。

況してや、決戦などの混線においては遊撃が主な仕事の彼女。

故に大量の敵を纏めて一網打尽にするのが尤も得意な戦法だった。

味方がいないほうが誤射しないですむ。

殲滅を優先すると、余程怪物じみたエースでも出ない限りは皆に譲る。

アリアは出すぎてはいけない。オーナーに命じられた数少ない命令にこれがある。

出番を奪うな。仲間を守れ。敵は殺せ。この三つが遵守するべきものであり、アリアのモットー。

そんな彼女に三人で挑む彼らの心境は、だいぶ追い詰められていた……。

(くっ！ EXAMが勝手に発動しようとするとは……。余程、アリアが脅威と見ますか、ダガー)

アンダーソンの乗るダガーは、EXAMを搭載している。NTだけを殺すシステムだからか。

ストッパーが無ければとうに暴走している。勝手に発動しようとしては、制御されていた。

デブリに隠れて、息を潜めるアンダーソン。アリアが敵を探して周回している。

後ろから襲って一刀両断を目論むが、アリアには隙がない。

適当に彷徨いているように見えるならそれは素人の目だ。

アンダーソンにも分かる。誘っているのだ。先制攻撃を。

後手で間に合う自信があるから、譲ってくれようとしてくれている。

その証拠に、手を抜いて探している。此方がある程度慣れたと知っているのに、しっかりと探さない。

その気になれば直ぐに終わる。でも、それでは意味がない。

経験を互いに積もうとするなら、やはり戦いになら無ければ。

(……)は、奇襲などと言わずに真つ向から行きますかね)

アンダーソンは皆に知らせる。アリアには奇襲は意味などない。

反応速度が強化されたNT以上の彼女にははつきり言えば、追い抜ける訳がない。そう、判断した。二人も納得して、了解した。

ミチアは遠くで狙撃しようとするマグナムを構えていたが、先程から耳鳴りが酷い。

全身のフルサイコフレイムが、アリアの無自覚に放つプレッシャーを機敏に感じ取って、バイオコンピューターに伝えている。

繋がったミチアにリゼルは言っている。

不意をついても、それ以上の速さで防いでくる。

アウトレンジなど、無意味。敵意を感じとられたら最後、速攻で殺される。

耳鳴りはリゼルの泣き言だった。

情けないことに、擬似的なNTのようになっていくミチアはアリアの威圧感に怯んでいた。

(こ、これがアリアの醸し出す感情か……。くそ、怖エ。なんて冷たい意思だ……。指先に力を込めたくねえ)

躊躇う。このままシミュレーションと言えど、あの宇宙よりも冷たい相手にトリガーを引いていいのか。

待っている未来はきつと死ぬことだとリゼルのサイコフレイムが言うのだ。

ミチアはそれでも、自分の限界が見えたかった。

化け物上等。死ぬなら死ぬ間際の経験だつて手に入れる。

リゼルを宥めて、ミチアは決心していた。

一方、ALICEと共にする伊織はというと。

ダメだよー、やめたほうがいいってばー、あの人相手しちやダメー、スペリオルでも勝てないよー。

アリスが撤退を提言していた。無理だから逃げた方がいい。死ぬよりも恥を取るべきだと説得してくる。

モニターにデカデカと、撤退推奨、と浮かび上がる。

「アリス……自分、アリアさんと戦ってみたいッス」

正直に言ううと。

ダメー。

速攻で却下された。良くて逃げきれ、可能性はゼロではない程度の確率らしい。

アリスが機体を制御して、逃げようとしているのを必死に止める伊織。

どうも死なせなためのシステムのせい、倒すのではなく、生き延びる事に尽力するアリス。

ちよつと採めていた。何だかんだ、アリスも友人のアリアが怖かった。

自分も撃墜は嫌だ。勝ち目のない戦いは数値化すれば一発。故に、愛する人といきる

道を選ぶ。

大切なのは生きることと判断するアリスにとって強大な敵から逃げるのできるのならそつちを優先する。

逃亡は恥ではない。無駄に死ぬことこそが真の恥であると。などと、喧嘩をしているうちに。

……伊織ー、見つかつたー!!

アリスの文字フォントが焦つたような変な形に変化。

いち早く気付いたアリスが、逃げるか迎撃か判断に迷う。

伊織は戦うと言う。アリスは逃げたい。チームでも勝ち目は薄い。

でも、相手が何処までも追ってくるなら、追い払うことはしないとイケない。

選択肢はない。戦つてやる、と半分自棄の決定でアリスは機体を動かしていく。

仲間もいる。勝てるのは無理。でも、一泡吹かせてやるとアリアに一矢報いる覚悟を決めて、突っ込んでくるアルケーに向かって迎撃開始をする……。

アリアは彷徨っていると、デブリの影で青い機体が身を潜めているのを感じ取った。アリスの意思だ。どうやら、揉めているらしいのでわざとらしく突撃。

面白いように動揺したアリスは伊織と共に背中を向けて、逃走。

追いかけるアリア。デブりを掻い潜って、スムーズに逃げる。アリアも慣れた手つきで回避。

すると、右方のデブரிから、妙な肌触りを受けた。

急停止して、そのデブりをソードと一体化したライフルで撃つ。

デブりが爆発して、煙が覆う。だが、その煙を突っ切って何かが突貫してきた。

アンダーソンのダガーだった。シユゲルトゲベールを構えて、袈裟懸けに切りかかる。

速い。OSの補助を受けているのでスムーズに動いている。大きな剣に斬られたらアリアも耐えきれない。

後方に下がって、回避。外れる斬撃。アルケーはライフルで撃つも、シールドの防御が入る。

しかもアルケーの遙か後ろで、デブரிだらけの中を狙撃してきた。派手にデブりを焼きながら撃たれる一撃。

着弾する前にアリアもシールドの防衛で防ぐ。然しシールドのダメージが大きい。煙をあげていた。そりゃ、ビームマグナムを防げばこうもなる。GNフィールドを貫通して左腕が死んだ。

大破しただけまだよかった。

前方のダガーが隙を見て、ビームのブーメランを投げて、陽動をする。

上方に急加速して回避。さらに上からインコムによる、攪乱が入った。

「フアング」

音声認識で、機体のスカートアーマーに入った無線兵器、フアングを半分射出。

一つをインコムのビームに合わせてビームを撃ち込み相殺。

残りを迎撃に突撃させた。

後ろでまた狙撃。マグナムの一撃をデブリを盾にして防ぐ。

無論、貫通するので時間稼ぎ。追ってきたアンダーソンのダガーを相手する。

『おおおおおおっ！』

右腕のアンカーを射出。捕らえようとするのを避けて、ダガーに近づく。

「遅い」

警告するように眩き、右腕のGNソードを展開、切り払う。

それを受け止めるゲベール。巨体の割にはよく動く。

背後から戻るブーメランが、色々ぶつ壊して近づくのを残りのファングを吐き出し迎え撃つ。

軌道に邪魔させて爆発処理して防いだ。

『読まれていましたか……!』

「発想はいいんですけどね。端末兵器もつ相手には、使い捨ての盾があると思ってください」

スパークさせて競り合いをしながら、アリアは悔しそうに言うアンダーソンに言った。

巨体のパワーを片腕で互角にしている。性能の差もあった。

これがストライクガンダムだったら競り負けて切り殺されている。

二つほど、援護射撃するミチアに向かってファングを向かわせた。

これで飛び道具は終了。残りは剣のみ。

弾き飛ばして、切り払うゲベールを避けてもう一度突撃。

ぶつかると同時に、スパークが走る。

ダガーも小回りの聞くアルケー相手に善戦していた。

だが、よく見るとメインカメラが真っ赤に変色。

機体の各ダクトから熱を捨てて、推進材も赤く染まっていた。

……EXAM発動の証拠だ。相手は殺すつもりで襲ってきていた。

アリアは道理で速いわけだと納得していた。

オーバーロードして無理矢理追い付いていたようだ。

アンダーソンも加速している性能だと言うのに、アルケーのその余裕に苦戦していた。

システムはとくに全開にしている。なのにアリアはまだまだ余裕だった。

リゼルも、フアングの射撃と突撃の複合攻撃に苦しんでいた。

二つだけと言うのに、射撃と格闘を混ぜ混んだ攻撃に対処しきれない。

なにせ、敵意がない無線兵器。先読みが速すぎてしにくい。

腕と足を破壊されて、マグナムも爆発して無くなった。

残った左腕で、何とか突っ込むフアングを切り払う。

最後の一個は、腕を犠牲に頭部のバルカン掃射でようやく破壊した。

だが、援軍にはいけない。頭しかない達磨状態では変形も満足にできない。

「フアングか。いやいや、参った。接近されるとキツイな。この手の兵器つてのは」

完全に白旗だった。これがNTとの戦いつて言うものだと分かって苦笑い。

強い。だからこそ、越えたいと思った。今の全部を出しきれなかった事が悔やまれた。

次は負けないとリゼルと共に誓いながら。

一方、より多くのフアングと戦う伊織。

アリスがムキになって結構叩き落としていた。

流石はA I。先回りして、落としていたが。

キヤー!?

悲鳴のようなフオントが画面に浮かぶ。同時に頭部にフアングが突き刺さって自爆。

なんとアリアは、A L I C E を搭載していた頭を潰すことで、Sガンダムを統括するすべてを無力化してきた。

「な、なんと……!!」

複雑しすぎて、伊織一人ではSガンダムは動かない。動かせない。

だらりと力なく流れるガンダム。弱点はどこにでもある。

伊織はアリスを倒されて降参。流石にここまで複雑だと無理があった。

凄い。パイロットを殺さずに完全な倒してしまった。同時に弱点を知った。

アリスを如何にして守るか。この機体はそれが肝と言うこと。

「ううむ……勉強になります」

動かないついでに、少し調べながら終了を待つことにした。

アンダーソンは奮戦していた。

手数はアリアの方が多し。純粋な殴りあいになっている。

一発が重いゲベルで、とうとうソードが耐久力が尽きて爆発した。

と、同じくして使っていた右腕も勢いの乗った一刀で切断。

両手を奪った。武器もない。EXAMの稼働限界で、動きが緩慢になる前に奪いきつた。

(よし、武器はない。……やりましたね！)

アリアのアルケーは最早なにもできない。

アンダーソンは、そうやって油断をしてみました。

構えを解除して、ゲベルを降ろした。

その瞬間。アリアの呆れた声、聞こえた。

『ところがギッチョン。油断しましたね、アンダーソン』

何と。アルケーの足の爪先から、赤いサーベルが突如発生。

そのまま遠慮なく、ダガーのコックピットに向かって蹴りを放った。

「!？」

アンダーソンはギリギリ反応して、腕を交差させるが見事に貫通。

コックピットが潰されて、彼はブラックアウトした。

結果、アリアのギリギリな勝利。

流石に中堅三人の専用カスタムMSは辛かった。

暗器がなければ、負けていた。

シミュレーションから出てきた三人に、汗をかいているアリアは嫌そうに、ぶんぶん頭を振るいながら先に出ていた。

「……楽しかったです。皆さん、また良ければお相手してください」

そう、若干沈んだ三人に滅多に見せない笑顔で、アリアは笑いかけた。

無邪気なその表情に、三人は苦笑して対応した。

年相応にかわいい顔も出来るのだと、どこか安心した気がしながら……。

ガンダム奪還

アンダーソン達とのシミュレーションを終えて、DD達とのシミュレーションも終えたアリア。

丁度宇宙世紀のとある時代において、補給をするため地上に降りているところだった。

停泊していた連邦から、緊急の入電をキャッチした。

何でも、格納庫に忍び込んだジオンに、新型ガンダムを強奪されらしい。

アリアは直ぐ様報酬の話にはいる。どんなときでも対価を払え。それがジエネレーシヨンの流儀。

艦長は焦りながら、何を要求するかを聞いてきた。

アリアは機体のパーツを寄越せと言う。新しい陸戦の機体を組み上げるのに欲しい。

「搭載している予備のパーツを報酬として支払うのなら、迅速に取りかかりましょう」
渋い表情で唸っていた艦長だったが、仕方無く了承。

彼女は悪く笑って契約を結んだ。そして、母艦にいる待機中の隊員に命じる。

仕事が入り込んだので、出られる者はアリアの指示に従い、機体の準備に取りかかれ
と。

アンダーソン達はもうひとつの母艦の方に移って他の世界で仕事をしている。

今残っている者は……例の新人たちか。

ブリッジにいた艦長に出撃を伝えて、格納庫に向かう途中にすれ違う連中も声をかけた。

結果、結構な数を揃えて出撃ができる。

「……ガンダムの強奪？ ジオンか？」

格納庫にいた黒仮面は、近くにいるヴァイスに向かって喋っていた。

「可能性は高いかと。つたく……どこの世界でも、戦争の火種はガンダムってか……！」

ヴァイスは知っている。ガンダムの強奪。それは行えば必ず戦争になる。

開発された兵器を平然と奪っていく悪行をザフトも過去に行い、そして行われた。

結果として戦争になり、大惨事を引き起こしたのは言うまでもない。

「拳げ句には核兵器を単体で持っているらしい。ふむ、危険極まりないな」

ヴォルフも渋い表情で唸る。任務内容は、ガンダムの奪還、あるいは破壊。

現在追撃に連邦の士官が一人で奮闘しているらしい。

敵の戦力は中規模で、上空にスナイパーがいる模様。

「……狙撃しているものがあるか。よし、ならば此方も支援に徹した奴がいた方がいいな。後ろは俺に任せろ」

到着したアリアが搭乗する機体を早口で伝えている。

任務に合わせて機体を変える。ジェネレーシヨンの豊富な戦力だからできる贅沢なやり方。

アリアにDDはそう切り出した。いわく、狙撃には自信があるようだ。

「そうですか。……陸戦型のジムになれているなら、ジムはお得意と見ます。いいでしょう、スナイパーの使用を許可します。黒仮面は後方で支援を。ヴァイスは遊撃を。ヴォルフ、スナイパーは任せます。わたしがガンダムを何とかします」

「了解」

「卿の指示に従おう」

役割は分担した。

この時点でアリアはガンダムを破壊する気満々であった。

核兵器の持っているらしいガンダムなど、奪還など無理と断定。

何に使うかなどどうでもいい。破壊してしまえばそれまでだ。

それに、破壊するといつても気を付けないと大変なことになる。

アリアの方が、効率がいいだろう。

ヴァイスにはジンのハイマニューバを、カスタムしたフラッグで駆けるヴォルフ、黒仮面は後方で支援にあたる。

わざわざ、皆で兼用して使うスナイパーを引っ張り出して、OSの書き換えをして出撃していく。

アリアはガンダムにはガンダムを、と言うことなのか旧式と言われるアレックスに飛び乗った。

それぞれ、機体に乗込み、次々に発艦。

今回は地上戦。重力のかかる戦いならば、宇宙になれた中堅よりも彼らの方に分がある。

アリア含めて、孤軍奮闘している士官を救いに、ジェネレーションの仕事が始まるのだった……。

……リーダーを見て唾然とした。

停泊して身動きのとれない母艦に相当な数のMSがへばりついている。

雀の涙ほどの抵抗が続いているようだが、被害は甚大と見える。

「各自、散開。攻撃を始めてください。皆さん、スナイパーは恐らくはかなり上の方で狙撃していると思います。十分注意してください。ヴォルフ、早めに対処を。位置を発見次第、データをそちらに送信します」

マスターユニットとして指示を出しつつ、戦線に殴り込みをかける。

「その連邦のガンダム。こちら、ジェネレーションです。今から、そちらを援護します」

デカイシールドを持つガンダムと、もうひとつのガンダムがいるが……強奪されたのはあの重厚な装甲の方だろう。

知っている連邦の回線に合わせて伝える。

『ジェネレーション……何でも屋の方々ですか!? こちら、連邦のコウ・ウラキ少尉。援護、感謝します!』

新米らしい若い男が応答した。相手はガトーとかいうジオンの軍人らしい。

彼の乗るガンダムは通称、G P O 1。向こうは02。名を聞ければそれでいい。

「了解。では、少尉は引き続き迎撃を。わたしたちで、連中を掃討します」

『気を付けてください。連中の大半は手練れのパイロットのようですよ！』

少尉はそうとだけ告げて、母艦の護衛に回る。

何名か、アリアが言う前に自己判断で迎撃に向かっているよう。

アリアは戦場を見渡す。撤退を支援されているガンダムを発見。渦中の相手はあれか。

周囲にはドムのトローペンが何機か護衛についている。

そして、追撃しているMSを邪魔するように、上空からビームの流星が走る。

狙いは上手いが、此方が連れてきているパイロットを甘くみているようだ。

支援用の火力の高いMSいるし、後はザクとかグフとかで統一性がない。

まるで残党のような連中だ。異世界から飛ばされてきたジオンの連中が集まっているのかもしれない。

機体の製造された年代がカオスになっているが、統一されているのは系統がみな、ジオンだと言うこと。

パイロットの練度が高いからどうした。ジェネレーションのパイロットは死線を潜り抜けた修羅が多いのだ。

多少新人が混ざっているからハンデにもならない。何故なら、此方にはアリアがいるのだ。

落とした機体は数知れず。殺した相手は覚えていない。

そんな次元の相手に戦争を挑めばどうなるかなど簡単に予想がつく。

では、今日も始めよう。アリアは気合いを込めて、スラスターを吹かせて敵陣に突撃していく。

DDは傾斜に腰をおろして、大型のライフルを構えてスコープを覗いていた。

上空からの狙撃には心配はない。仲間が一人、対処に向かっているから此方には飛んではきまい。

一人、高所から構えて支援をしながら思う。結構な腕前の敵が多い。

動きに迷いがなく、冷静に対応しているところから見ると、やはり何かしらで戦争の空気を知っているのか。

(ん……なんだ、あのザク？ 高機動型にしては……動きがいい？)

スコープのなかで、踊るように回避する一機のザクがいた。

機体は恐らくカスタムされた高機動型ザク。

然し、接近してサーベルで切りかかるアッシマーの攻撃を一手先に回避して、そのままコックピットを貫いて殺した。

旧式を感じさせない、洗練された動きに加えて、コックピット的位置を知っているかのような一撃。

(エースか……。ならば、撃ち落とすのみ)

黒仮面は感じた。奴はまごうことなき、エース。

こちらの仲間を殺されてもDDは動揺しない。

戦争をしているのだ。死ぬ生きるは当たり前。

イチイチ参っているのは己の明日すら危うくなる。

心構えに関しては、一度死にかけた身としては文字通り痛いほど知っている。

(悪いが……死んでもらうぞ)

スコープの照準をセット。トリガーを引いた。

放たれる一撃が、次の瞬間には奴を貫くはずだった。
然し。

ザクは反応した。黒仮面の狙撃に対応した。

全力で上昇しずれた。だが結果、逃げ損ねて足を抜かれて爆発。

墜落する機体に、連続して撃ち込む。頭、両手、残った足を破壊。

（敵ながら、大した奴だ……。だが、その隙を逃すほど俺は甘くなかない。弱さは憎むべきことなのだから）

甘さは弱さ。弱さは憎むべき事態。独特の美学を持つ黒仮面は、ゆっくりと目を離れた。

集中していた意識を解いて、深呼吸するD.D。

敵はダメだと理解すると直ぐ様降参の信号を出した。

投降するらしい。潔さは彼は弱さとは見ない。

それは、強さだ生きること続ける事が尤も彼が信じる強さ。

安易に死ぬことは弱さだと彼は考える。

アリアに一報を送った。投降者あり、後で回収よろしくと。

アリアは了解と返答。ガンダムの男と口論に戻る。

『忠義も持たぬならず者などに、我らの志が、分かるまいッ!!』

『そうですか。知りませんよそんな都合。甘ったるいのは名前だけにして頂きたい。ええと……ガトー・シヨコラ?』

『アナベル・ガトーだ!!』

何やら精神的なもので揉めているようだ。

アリアには何を言っても無駄だろう。最も精神的な意味で破綻している女だ。

ため息をついて、黒仮面は援護に戻る為にスコープを覗いていく。

一方、此方では。

新米同士の一騎討ちが勃発していた。

ヴァイスと敵の新米と思われるパイロットが壮絶な戦いをしている。

突撃銃を連射しながら旋回しつつヴァイスと、同じくビームマシンガンをぶっぱなして牽制する敵。

互いに決定的なダメージが入らない。

軽装な武装と判断して相手が突っ込み、それを華麗に回避しつつヴァイスも実体剣で切り裂く。

空振りする相手のビームサーベル。振るったヴァイスの一撃が切断ではなく殴打で相手の頭部を破壊する。

然し、優れた直感でも働いたのか、サーベルを一閃。防いだ腕を焼き切った。

(くそ、強い……けれど、俺一人で対処できない敵でもない!!)

ヴァイスなりに責任を果たそうと、任された敵は釘付けにするべく奮闘する。

それは相手も同じだった。

(冷静になれ……。実力は拮抗してると見ていい。私と同じ日の浅いパイロットと判断するが、なんだ、このMSは。圧倒的な機動力のわりには、火力は薄い。然し隈無くビームコーティングしてあるようだから、手持ちの武装では不利。メインカメラもやられてる。くっ、引き際か……?) 私の役目は既に果たした。義理も返した。どうする、今ここで私が生きるためにするべき事は)

彼はある種の部外者だった。

いく宛もなく、拾われた恩を返すためにこの作戦に参加した志願者。

決して、志が同じな訳ではない。恩を返すために共に戦ったのみ。

同時に、既に頼まれた仕事はした。

何やら口論しているガトーは撤退しきっているようだし、これ以上の戦いは無駄だろう。

丁度、切りかかった相手とサーベルで防ぎ、切り結ぶ。

派手にスパークしているなか、彼は思い付いた。

今なら、接触通信でコミュニケーションが取れる。

オーバーワールドという広大な混沌のなかで生きる術を見出だした。

その結果が敗北を悟ってからの、通信だった。

「すまない、そちらのMSのパイロット。聞こえるだろうか？」

『ああん!?!』

怒っているような声だったが、反応してくれた。

助かると判断。いきなり殺すような相手でもなさそうだ。

彼は慎重に言葉を選んで相手に伝える。

即ち、白旗。投降するという、意思を。

一方、上空では。

大型の輸送船に乗っかって、狙い打ちしていたMSをヴォルフが攪乱している所だった。

「良い腕だが……諦めは悪いな!!」

ヴォルフは思う。見たところ、相手は旧式も旧式のザクーのスナイパー。カスタムタイプだろう。

外付けのジェネレーターや、大型のライフルを構えているが、空戦において、輸送船と
いう大きながある以上、敵に勝ち目は無い。

ヴォルフはオープンチャンネルで呼び掛ける。投降しろと。

既に敗北は決定している。さっさとガンダムを強奪して大将は撤退していった。

取り逃がしてしまったエリアが、最後の獲物を求めて上昇してきている。

撤退の支援ももう十分果たした。下は壊滅しているし、残ったのは上空の輸送船にスナイパーだけ。

足掻いても勝ち目はないのに、無駄に抵抗する。

輸送船は機銃を乱射して、ザクは狙撃を止めない。

全て回避するヴォルフ。

懸命に説得している彼だが、そろそろ時間の限界だ。主に、アリア的な意味で。

いけない。少しイラついているのか、八つ当たりにはスナイパーを殺そうとしているの

だ。

無理だと判断したヴォルフは、今まで変形してずっと逃げ回っていた。

然し、ここまで言ってもダメなら……仕方ない。

「仕方ない。では、見せようか……フラッグファイターの矜持を!!」

ならば、輸送船ごと無力化して捕虜にさせて頂こう。

ザクはまだ、しぶとくライフルを撃つてくる。

急速に加速して、急上昇からの急旋回。

凄まじいGがかかるが、これの快感は……戦闘中に不謹慎だが、病み付きになる。

折り畳んでいた手足を展開、MS形態に移行。吐きそうになるものの、だからこそ良

い。

アリアに頼んで、補助用のシステム回り以外をカットして貰った甲斐があった。

これこそ、これこそがヴォルフ夢見たフラッグの境地。己には叶わぬ幻想だと思って

いた卓越した技術。

その名も……。

「人呼んで、ヴォルフスペシャルツ!!」

ドヤ顔で一人、コックピットのなかで叫び意味不明に愉悦していた。

尚彼のフラッグに搭載されたシステムで誰でもフラッグの空中変形は出来るとはアリアは言った。

然し、そのGに堪えきれるとは言っていない。耐えきれなければ墜落する。

変形しながら回避も出来るなどはヴォルフの腕前の賜物である。

つまり、本当にスペシャルな技術だったりする。

「スナイパーよ、往くぞオっ!!」

フラッグによる変形が相手にはプレッシャーになったようで、狂ったように乱射するも一発も当たらない。

輸送船のエンジンに向かって発砲。直撃して、高度を下げる。

対処するべく機体から飛び降りたザクを、直ぐ様追撃。

落ちていくさなかに、丸裸にする為に手足を高速で移動しつつすれ違いに刻み込む。

その都度凄まじい加速がヴォルフに襲いかかるも、愉悦している彼には無意味。

鼻血が出ているが、気にしていないまま突撃。

バラバラにされたザクを抱き抱えるように鹵獲。

無駄な抵抗をさせないために、輸送船も墜落する前に脱出させた。

「……………ふう。目眩がするな……………」

戦闘を終えて着地するフラッグ。

半壊したザクを横たえて、ヘルメットを外したヴォルフは、ちよつと人前に出られないような無様な状態になっていた。

こうして、ガンダム強奪の任務は終わったが、失敗に終わった。

一応、防衛報酬としてある程度の資材は確保した。転んでもただではいきない。

ジェネレーションの面々は、皆殺しにしたと伝えて、捕虜にした一部に関しては自分の所に勝手に回収していったのだが、それは連邦の知らない話である……………。

真相の欠片

連邦の戦艦の窮地を救い、報酬を受け取り再び異なる世界へと旅立つジェネレーション。

アリアは渋い顔で、暗算で膨大な数値を計算しながら収益の結果を纏めていた。

前回に失った人的損失は大きい。手練れのジオンの連中に若いパイロットを何人も殺された。

失った機体の損失も大きかった。

全体から見れば微々たるものだが、本人が使っていたMSのOSの書き換えや遺品の整理、部屋の片付けなどを指示したり自分でやったりとアリアの負担は増えている。

そして、ジオン残党から投降してきた捕虜の扱いをどうするかを決定権もアリアに委ねられた。

拘束されて床に無様に転がる捕虜たち。

計算しながら入力するアリアは絶対零度の冷たい視線で見下ろしていた。

なにも言わない。口に猿轡をされて唸っている男たちは、己の今後に正直竦み上がっていた。

何せ、尤もあの戦いで仲間を殺したのはこの女だ。容赦もなく、的確に殺す動きは機械に似ていた。

そのパイロットがこんな小柄で華奢な少女とは思っておらず、男たちは恐怖した。

「……やれやれ。尋問を始めましょうかね」

一通り入力を終えたアリアが座っていた椅子から立ち上がる。

室内には転がる男たちとアリア。無機質な部屋の中で、彼女は語りだす。

「ようこそ、ジオンの負け犬共。ここは何でも屋、ジェネレーシヨンの母艦です。投降すれば生きていられると思った判断は正解でしたね。然し……うちに喧嘩を売ったらどうなるか、分からないジオン公国でもないはずでは？ 正直言って、わたしに勝つのは無理があるかと。何であんな場所でガンダムの強奪なんぞに手を貸していたか。説明なさい。拒否権はありませんし、下手に黙ったり虚偽の発言をした場合は拷問します。良いですか、正直に言うんですよ？」

物騒な前口上を言ってから、一人ずつ猿轡を外して経歴を問う。

一人は貴様のようなテロリストに教えることはないと豪語して、無表情かつ、無言でアリアは言葉の最中に足を徐にあげて。

——グシャツ!!

男の股間を思いつき踏みつけた。聞いているだけで、完全に潰れた音がした。踏まれた男は絶叫して転がって悶えだした。半狂乱で耳の痛い悲鳴をあげている。

アリアは更に、悶える男を捕まえて、無理矢理首をあらぬ方向にねじ曲げた。ひどい音がして、真後ろに曲がる首。男はそのまま沈黙した。

「はあ……。面倒くさいのでわたしの手を煩わせないで下さい」
ため息をついて、次の男に近づいていく。

目の前で突如起こった殺人に、竦み上がる男たち。

噂は本当だった。ジェネレーションは逆らう者には容赦はしない。

敵は殺す。どこの陣営だろうが、どこの世界の人間だろうが。

アリアは二人目の男の猿轡をはずし、聞いた。

拷問もへつたくれもない。言わないつもりなら始末する気だ。

男は俯いて、小言で事情を話す。

アリアは黙って聞いて、納得して次にいく。

死体は邪魔なのか蹴り飛ばし、部屋の隅っこに置いておく。

股間を潰され命まで奪われると言う二重の苦しみに、彼らは抵抗する氣力を根こそぎ奪われた。

「成る程。要は異世界から流れてきたジオン残党ですか。それぞれ理由があるようですね」

アリアは血を流す死体を持ち上げて、一度姿を消した。

途端に騒ぎ出す男たち。

歴戦の猛者たちがたつた一人の子供に畏怖して命乞いの言葉を探すほど、追い詰められていた。

暫くすると戻ってくるアリア。その後ろには、厳つい顔をしているのに化粧をしている妙な大男がいた。

紫色の髪の毛の男は、値踏みするようにじろりと彼らを一瞥する。

別の意味で、危険を感じた。その予感、正しかった。

「こちら、この艦の艦長、ブランド・フリーズと言います。これより、あなた方の処遇を艦長に一任します。……ブランド、好きにどうぞ」

「あらあ、随分と気前が良いじゃないアリアちゃん！ 本当に好きにしているののお？」

オネエ言葉を使う、艦長という男の魂胆が既に捕虜たちには、分かっていた。

悲鳴をあげ出す男たち。予想通りの事をアリアは言った。

「ええ。気に入った者がいるなら、残します。気に入らないなら、始末しようが食い荒らそうが気にしません。……ああ一つ、重要かもしれないけれど、わたしにはどうでもいいことを、皆様に言い忘れていました。うちの艦長は通り名に『ハンター』というのがあります。聞いたことあると思いますが。ブランドは所謂、ゲイです。ハツキリ言いますと、これから皆様には艦長に食われていただきますので。残念ですが、あなた方のケツの穴がどうなるうがわたしの知ったことではありません。精々、今夜はお楽しみください。ブランド、暫くするこの区画を立ち入り禁止にしますので、存分に尋問なり食い荒らすなりしてくださいな」

嬉しそうに手を合わせる艦長、ブランド。再び絶叫する捕虜の男たち。

知っている。ジェネレーションの『ハンター』。

あらゆる世界のよい男を発見しては捕獲して食い荒らす執拗なストーカーの変態だ。

一度目をつけられたら異世界に逃げようが必ず見つけ出してケツの穴を貫いてくるという逸話の持ち主。

そんなのが今、目の前にいた。

生き残ったのはいいが、同性のオカマに食われるというあんまりな拷問に抵抗して暴れだす。

「活きがいいわねえ……!! もう我慢できない、頂きまーすッ!!」

アリアはさつきと部屋を出ていく。

ハッスルしたブランドが鼻息荒く、捕虜に近づくと、

抵抗すればするだけブランドは興奮すると、最後にアリアが嫌な言葉を残して、出ていった。

と、その前に。

「ブランド。……その三人は、手出ししないように。ジオン系列の人間は貴重です。別室に移してから、お楽しみタイムにしてください」

一部、とある三人だけはどうかやら無事に逃れることが出来るらしい。

その三名には別の拷問を用意するとして、ブランドに隔離を命令した。

「あら……かわいい子がいるのに……残念ね」

「監視は任せます。少しでも怪しい動きを見せた場合は、食い散らかしても構いません。ですが我慢できずに言った場合は、生身で木星に叩き出しますよ」

「はいはい。了解よ、アリアちゃん」

結局処刑の先伸ばしに過ぎないようだった。

三人は手早く隔離されて、それぞれ独房に放り込まれた。

物欲しそうなゲイの視線に怯えつつ、三人は大人しく牢の中で過ごすのだった……。

——ピギヤアアアアアアアッ!!

という、男の断末魔が聞こえる深夜。

まだまだブランド艦長のマツスル拷問のお時間は続いているようだ。

「……で？ スズキと言いましたが。まさか、オーナーと同じ……ですか？」

アリアは一人の男のところに来ていた。

黒髪的眼鏡をかける、地味な青年。まだ顔つきは不自然に若い男を見てアリアは問う。

「……」

男はなにも答えない。目元をフードで隠して目線を見せない。

「ブランドに食われたいんですか」

「やめて。本当に、あれだけは勘弁して」

軽く脅すと、ボソボソと嫌がる。名前はスズキ。但し本名不明。自称だ。

恐喝しても言いたくないと頑なに拒否し続ける胆力に免じて、許してやるとして。

埃まみれの古いジオンの軍服をきるスズキは、言った。

自分には、此処とは違う遠い世界の記憶がうつすらとだが、あると。

アリアはそれを詳しく説明しろと言う。

ジエネレーションには、大きな秘密があった。

それは、スカウトされる人間はみな、何かしらで遠い世界から流れ着いた存在である
と言うこと。

詳しくは知らない。アリアもオーナーに言われたことをしっているのみ。

いわく、オーバーワールドとは違う次元の世界で生きた人間の魂が、色々な世界に存
在する。

ジエネレーションは、その人間を集めて居場所にするための作られた組織。

だから優先して、色々な世界にいつてはアリアなどの直近のクローンのみが分かる感
覚で察知させる。

そして、否応なしに回収しては引き入れている。

オーナーはそれを、『転生者』と呼び、混沌の世界でも生きる場所を提供したいと願っ
ているのだからか。

スズキは稀にいる、己が転生者と自覚できる貴重な存在だった。

殆どはそれぞれの世界で息づいて、その人生を歩むがゆえに前の人生のことなど覚え

ていない。

スズキは言った。日本と言う国の、高校生と言う学生であった、と。

それはオーナーと同じく覚えているという事であり、先ほどエリアが気付いた三人の中で唯一、自分でも理解している人物であった。

「この事はトップシークレット。誰かに言えば……どうなるかは、分かりますね？」

知られても困ることはないが、自覚のある人間が言いふらすのはオーナーが嫌がる。故に、エリアは見えないが端末の映像を見せつけるようにスズキに向ける。

きつと画面にはブランドによるマッスルでハッスルな酒池肉林が繰り広げられているのだろう。

「言わない。絶対、言わない」

「誓いますか？ この映像に向かって、決して口外しないと。はい、復唱。さもなくばこの場でマックスに音量出しますよ」

「口外しませんツ!! 誓います!!」

青ざめるスズキは震えて叫んだ。

音声は情けで出していないが、絶対の誓いを立てさせるため、何度も脅す。

「ケツの穴を穿たれたくなくば、忠誠を誓えますね？」

「はい……。決して、喋らないと誓います……」

漸く心が折れたらしい。だーっと滝の涙を流して土下座して謝るスズキ。最後まで仲間を守るべく無駄な足掻きを続けていた往生際の悪い青年は、この日ジェネレーションに組み込まれた。

後ろには、いまだスズキを狙っているハンターの魔の手が迫っている。

彼は大人しく、未知の世界に行きたくないので言うことを聞くしかないのであった……。

明け方になっても、母艦の一面から悲鳴が止むことはなかった。

ハンターの本領発揮である。精々苦しむがいい、とアリアは思いつつ知り合いと話し

ている。

「……アリアちゃん。例の捕虜だけど、本当に艦長の餌にしちゃったの？」

「ええ。別にいいじゃないですか。マリーに怖い目を合わせないで済みますよ」

「だからってあの艦長に食わせるとか……うわあ、アリアえげつなー。いいぞもつとやれー」

「ふふふつ、アンヌならそう言ってくれると思ってましたよ。一部は艦長のデザート扱いはなくて、隔離はしていますが……美味しく召し上がってもらえるまで時間の問題でしょう」

明け方だというのに、母艦の中にある食堂で三人は談笑していた。

アリアの友人の双子だ。名を、姉がマリー・ロール・デュボワ。

妹がアンヌ・ロール・デュボワ。

金髪のセミロングを一つみつあみにしているスタイルの良いのが姉のマリー。

シヨートボブの金髪に姉に比べて一部貧相なのが妹のアンヌ。

二人とも、先ほどもう一つの母艦の方から移動してきた、アリアの親友的な存在。

仕事上がりに三人で、徹夜して駄弁っている。アリアも珍しく気が抜けており、結構

辛辣なことを吐きまくる。

元々はOZという組織のパイロットであった二人だが、度重なる上司からのセクハラ

やパワハラを受け続けて、脱走覚悟で逃げ出したところを上司の部隊に追われて、たまたま不機嫌だったアリアと出会い、アリアに助けを求めてアリアが追っ手を八つ当たりして壊滅させたのち、今に至る。

アリアとはマリイもアンヌも仲良しで、パイロットの腕も非凡なものであり、双子という強味を活かしたコンビネーションが得意。

セクハラなどのせいで、大の男嫌いもあつて、野郎所帯のジエネレーションでは数少ない女性のわりに周囲から浮きまくっていた。

「しかし……リーオーを破壊したそうですね。一体何を相手したんですか？」
二人して、何やら他の世界で相手していた際に撃墜され、泣く泣く逃げ帰ってきたという。

二人はそれぞれ、表情が異なった。

マリイは落ち込んだ表情で、アンヌは悔しそうに。

二人は口を揃えていった。自分を負かした相手を。

「ガンダム……」

「ガンダムに負けたの!!」

何でも、自分の世界に仕事に向かった際に、いざこざに巻き込まれて、参入してきた翼のガンダムに大敗。

一方的にやられて危うく死にかけたらしく、マリーは怖かったと泣きべそをかいていた。

因みに相手のパイロットは男。言うまでもなく、嫌いな相手だった。

地団駄を踏むアన్నを宥めて、二人にアリアはため息をついて語った。

「よく生きてましたね……。お前を殺すつて脅されたんでしよう？ 奴は、ウイングガンダムゼロ。真正正銘の化け物です。死を告げる天使を相手しておいて無傷なら十分。ゼロシステムを使いこなす奴と戦うのはしんどいでしょうから」

ガンダムは未来予測を可能とする化け物だ。

二人の為に建造していたMSはまだ、完成まで当分先になる。

アリアは機体を破壊されて落ち込んだり悔しがったりする双子に、仕方なく切り出した。

腕はかなり高い双子だ。普段アリアが気に入っているMSを貸し出しても、許せる相手でもある。

親友の為なら、一肌脱ごう。

「もう……。マリーもアన్నも、今回は特別ですよ。今度は壊さないで下さいね。わたしの機体なので」

苦笑するアリアが端末を操作。

遠隔で機体の所有権を切り替えた。

「アリアちゃん？」

「マリーはお友達ですもの。これ、使ってください」

「私は？」

「アンヌだってお友達です。どうぞ、遠慮しないで」

二人のために、アリアは笑顔で機体のデータを送信して渡した。

「ガンダムに負けたのなら、ガンダムに乗ればいいんです。……ウイングガンダム、ガンダムエピオン。それぞれ、使ってください。ああ、でもエピオンはゼロシステムは封印してありますので。危ないのでくれぐれも使わないで下さい」

二人してさらっと同類のガンダムを寄越された。

二人の機体がロールアウトするまでの繋ぎだ。

唾然とするマリーとアンヌに、アリアは朗らかに微笑んでいるのだった……。

双子の特訓

……さて、困ったことになった。

頭痛の種が増えて何度目のため息をついたアリア。

例のジオンの捕虜たちは大半が逃げ出してしまったらしい。

艦長のあれが余程堪えたよう。しかも艦長、わざと逃がしやがったようである。

「やっぱり、ハンターって言うのは……逃げる獲物を追いかけるものでしょう?」

鬼畜オネエめ、とアリアは内心毒づく。

自分が追いかけたいが為に逃がして追い回して再び捕食する魂胆か。

邪悪に笑う変態を見つめて、アリアは放置を決め込んだ。

隔離しておいた三人のうち、一名は大人しくなったが二名が少し問題あり。

まだ少し様子見しておく。

目下の問題はそこじゃない。

と言うのも……。

「……」

「……」

双子の姉妹がアリアと共に組むことになったのだ。

以前よりも男嫌いが酷かったが、一部ここの母艦にいる人間といざこざを起こして早速アリアに叱られた。

相手は中核を任せている男だが、姉のマリーが嫌いな粗暴なタイプで、そもそもが傲慢をデフォルトでしている問題のある男だったのだが……。

キレてマリーに手を出そうとして、アンヌに邪魔されおっさんと若者の喧嘩が勃発。

流星に大の男にはアンヌも追い詰められたが、アリアが騒ぎに気がついて介入。

相手を蹴りの一発で壁まで吹っ飛ばし、壁に大きな凹みが出来るほどの威力で沈静させた。

肋が砕けたようだが、アリアに逆らって生きているだけまだ御の字。

普通ならば殺しているところなのだから、幸運な方であった。

アンヌもマリーも調和を乱すなどアリアにどやされ、不貞腐れている。

「……どうするんだ、マスター。あいつらがあんなんじや、仕事に支障をきたすぜ？」

「ギル……そう思うのなら止めてくださいよ」

「あの場にいなかった俺に言われてもな」

キザに肩を竦める隊長の一人、マーク・ギルダーにアリアはぼやく。

本来、隊員の調停は彼ら隊長の仕事なのだが。

そこはマークいわく、「俺が仲裁していたら余計に拗れていたぞ？」との事。

彼に怪我をして医療用ナノマシンを注入されて強引に治された男の面倒を任せるアリア。

「……やれやれ、あのブラッドの性格もなんとかならないもんか。じゃあなアリア。あいつらは任せた」

ヒラヒラ手をふってマークは隣の母艦に戻っていった。

双子はマークには多少態度は軟化するが、やはり気に入らないのは同じなようで。

悪人面しているから、仕方無いとはアリアも思う。

目付きとか最悪に近い。子供に泣かれたのは数えられないほど多い。

至って真面目な男性なのだが、顔で損をするタイプなのである。

「マリー、いい加減にしなさい」

「……ごめんなさい」

アリアの渋い顔で言う苦言に謝罪する姉。

妹は納得していないようで、文句を言うがアリアが睨むと謝った。

「お願いですから、問題を起こさないでください。うちの人材は基本人格に問題があるうとも、受け入れる者は受け入れるのです。向こうのマスターユニットはあなたたちに、一体どういう教育をしているのですか？」

「げっ……」

もうひとつの母艦のマスターユニットの話をする、アンヌは露骨に嫌な表情をした。

マリーも目をそらして俯く。

「……シンシア、仕事してます？」

アリアが問うと、双子はぎこちなく頷いた。

シンシア・アメリカス。それがもうひとつの母艦のマスターユニットの名前だ。

アリアとは違い、臆病で小心者で、何処までも頼りない情けない性格で、自己主張も弱い。

教育などできるはずもない。押しが弱すぎるのだ。

その癖、アリアとほぼ同等の能力を持ち、戦闘は怖いからという理由でわざと理性を破壊して暴走するバーサーカーとなっている始末。

アリアのように、放任主義ではなく、完全に野放しにしているだけ。

人の上にたつ器ではないとよく言っていた。

「シンディはねえ……。追い詰めると引きこもっちゃうから」

「ヘタレですわ本当に」

アンヌが少し強く言えば、落ち込んで自室から出てこなくなる。

元々向こうの母艦は割りとマトモな人間が多く、マスターユニットが皆に支えられている状況だった。

一方アリア担当の此方は、新人を受け入れたり教育したり、問題のある人間が集まったりで忙しい。

アリアの負担はオーバーフローしているのはいつもの事だった。

「もう少しマシな男居ないの……」。いや、ブランド艦長とかアンダーソンとか、ヴォルフはいいよ。あの人たちはマトモだし」

「ゲイがマトモって言われるのを初めて聞きましたが」

「えっ？ マトモじゃん？」

「アンヌ、絶対マトモじゃないから……」

アンヌはそうやって、反りの合わない人間ばかりと嘆く。

アンダーソンやヴォルフは、アンヌとよく話す。

理由とすれば、戦い方の共通だ。アンヌは接近して戦うことを好む。

普段より双子ゆえか、以心伝心で協力する事で勝率を安定させる二人。

アンヌはアンダーソンと同じで前衛をこなすので、彼の戦いの姿勢は教訓になるのだ
そうだ。

ヴォルフは来て日は浅いが、真面目かつ実直な男だと評価しており、彼も悪名高い男
嫌いの双子の妹には気遣いをしているので、良好な関係を保っていた。

ブランド艦長は……趣味的な理由だろう。ゲイだし。繰り返し、ゲイだし。

対して、姉のマリーはというと。

「……アリアちゃんが黒仮面つていつてる人は、私は気が合うかな」

「え、あの胡散臭い仮面？ あー……でもそうね。マリーはああいう禁欲的な奴とは上
手くやれるかもね」

マリーが言うのは経歴不詳のあの変人だ。

見た目からして怪しい不審者だが、マリーはその本質を感じていた。

強くなりたいという志。弱さを憎み、前に進む探求の意思。

ある種の狂気さえ滲ませる程の渴望は、それ故に純粋な澄んでいる感情であり、マ
リーは共感できるという。

「あの人とは、同じ部隊でもいいかなくて……思う。見ていても、邪な感情なんて抱いて
いる余裕はないし。そんな暇があつたら、前に進もうとする人なら、背中を守つてもい
いと思えるわ」

「参考になります。覚えておきましょう」

結局、過去のセクハラされ続けた思い出が男への不信感を高めている訳だ。

その感情がない者には、不信感を抱かない。性格的な好き嫌いを含めなければ。

「あー、でもアリア。あのザフトの新人は止めてね。あと伊織も。私あいつら嫌いだから」

アン又はそういって、某二人を嫌がった。それは知っている。

伊織はあの卑屈の性格が勝ち気なアンヌとは相性が悪く、ヴァイスも見ていて結構な短気なのか、時々戦闘中にキレていたりするので、理解している。

「……まあ、人事は私の仕事なので要望は聞きますけど。問題は起こさないで下さい。此方も暇ではないのです。大人しくしている分は、何も言いません。わたしの手を煩わせないで下さい」

「善処するね……」

「はい」

マリーもアンヌも反省しているので、これ以上は小言を言わないが。

一応このあと、新型のテストをシミュレーションでやる予定なのだ。

アリアの部隊に入る以上、アリアの次元まではいかないが、ある程度の実力は求める。彼女の足を引っ張らないぐらいには扱ってもらわないと困るのだ。

三人は、その足で格納庫へと向かっていった。

「ぐは……ッ!!」

「ぐっ!!」

姉妹は苦しんでいた。

格納庫に向かって、借り入れたガンダムに試乗して、シミュレーションを開始。然し、元々はアリアの数ある機体の一つ。

所有権を受け取り起動しても、アリアのカスタマイズでやればこうもなる。

余りの加速にアンヌは真正面から力づくで肺を潰される感覚に陥った。

マリーは急激なGに頭が働かずに、目眩を起こして失神しかけた。

シミュレーションでも、Gを再現する程の高性能さが仇になった。

出てくるや、グロッキーになって青ざめてぶっ倒れてしまったのだ。

「……これでダメですか。リミッターを噛ませているのに」

ガツカリしたように、同系列の機体に乗っていたアリアは見下ろしている。

二人して四つん這いになり、吐きそうになっているのを堪えていた。

アリアは安全装置は挟まずダイレクトにGを受けていた。なのにケロツとしている。

マリーはそのまま金属の床に仰向けで転がった。

アンヌはうつ伏せで力なく倒れた。

冷たい床が気持ちいい。通りすぎるパイロットたちが同情するような視線で見なが

ら歩いていく。

パイロットスーツに緩和するように手を加えてあるのだが……それでも二人は気絶

寸前。

訓練の前に何も食わなくてよかった。食べていたら大惨事だった。

「おう、やってるじゃねえか」

「二人とも、大丈夫か？」

そこに、ミチアとヴォルフもやってきた。

アリアが参考に普段から常人離れのGに晒されている二人にアドバイスを貰うため

に招いていた。

二人は汗をタオルで拭いながら、ドリンクを片手に寄ってきた。たった今、同じ訓練をしてきた。

軽く機体を振り回しただけだったが、彼らは顔色は変わらない。

「み、ミチア……さん……。お疲れ様……」

「な、何で……ミチアとヴォルフは……平気なのさ……?」

姉妹が無様に転がっているのを見下ろしている男二人。

苦笑いするヴォルフは、双子に向かって衝撃の事実を告げた。

「卿たちには俺が平気に見えるか? 悪いが、普段から可変に乗るからな。幼少時より耐性があったと思っただが……。アリア、なんだあれは? 俺も意識を何度か持つていかれたか?」

何とヴォルフも数回短くではあるが、気を失っていたらしい。

鼻血も吹き出したと苦情を言うと、アリアも驚いていた。

「……えつ? ヴォルフ、ダメでしたか?」

「当たり前だ。何だ、あの数字は。瞬間的に最低でも13Gと出ていたぞ。普通の人間に堪えきれぬレベルではないぞ。俺だって、自己最高は11だ。人間の最高は10が限界だと言っているだろう。アリアのような者ばかりではないぞ」

彼は呆れていた。

アリアの基準では最低でも13は堪えられると思っていたのだろうが人間の限界はそもそも10いくかいかないかだ。

訓練していない者では6Gで、気を失うと言われていたのにその倍を平然と要求する。

アリアは戦闘用のNTだから平気だろうが、一般的なパイロットでは、まずコントロールが出来ない。

可変に慣れているヴォルフとて、危うく事故で死ぬところだったのだ。取り繕ってはいるが、正直快感を通り越して死ぬかと思つたぐらいだ。

「然し、言い換えれば……リミッターを挟めば、堪えきれぬ。そう聞こえますか？」

「……卿のような、勘の良い子供は苦手だよ。ああ、そうだな。予想ではあるが、俺はい

ける。設定を変えてもう一度やらせてくれ。今度は戦闘を頼みたい」

アリアが含み笑いをして聞くと、両手あげてヴォルフは苦笑する。

今のは直で受けていた。ならば、限界の半歩手前までは行ける気がするかと判断した。ヴォルフの所望通り、設定を端末で手早く変えようと、彼らはワクワクを我慢できない子供の顔をしていた。

「フツ……。悪くないな、何故だか俺は楽しくて仕方ない。新しい環境で駆け抜ける快

感は、シミュレーションでも胸が踊るな。果てが見えないのがここまで嬉しく感じるとは。俺もまだまだかな」

本当に楽しそうに、機体に向かうヴォルフ。

もつと高く速く、己の望む世界へと近づけることを愉悦する男の顔。

姉妹はぐつたりして見送っていた。

「リミッターあればいけるんだ……」

「ヴォルフさんも大概、別物だね……」

双子が漸く起き上がるのを、ミチアは苦笑うばかり。

「俺はお前らがぶっ倒れたとはいえ、乗り越えたのが驚きだけ。普通なら潰れて死ぬぞ？」

「死なないようにしましたよ。一応」

しれつと言うアリアにミチアは助言する。

「トールギスよりも派手に加速する機体に乗せてりや一応だよな。加減してやれ、アリア。こんなんじや戦闘は到底無理だ。まずは身体に慣れを与えてやらねえと」

「彼はGに対する耐性がこの部隊では数少ないアリアに匹敵する才能がある。

ケロツとしているのもそれが理由だ。

「加減はしているつもりなんですが」

「お前な。いきなりガンダムに試乗して急加速に堪えろって無理あるからな？」

アリアの感覚は宛にならない。ミチアが詳細にデータを指定する。

アリアは黙って言う通りに変更した。

「因みに……ミチアの限界は？」

参考にアンヌが聞くと、アリアが代わりに答えた。

「21Gです。一度、トルギスの限界を知ろうとして、互いにフレキシブル・バインダーを増設したトルギスで試運転したのですが、ミチアはその状態でコントロールを完璧にこなしました。危険なので緩衝材を挟み、少し薬物も投与しましたが」

「あー……あれか。アリアが一回事故って死んじまったあれね。お前結局潰れちゃったんだよな。何も安全策しなかったら」

何てことのない様に言うが、マリーは絶句した。

アリアが死ぬような加速を、安全策をすればミチアは大丈夫な時点で人間じゃない。

そりゃ、現在のあのリゼルを止めたりゼルを扱えるわけだ。

あれも相当なGを産み出すのに、彼はキチンと使いこなしてた。

「ああ、眼球潰れましたしね。わたしもあれは無謀だったと思います。クローンでなければデータは手に入りませんでしたし、有益な死に様だったと思いますが？」

「お前の限界は俺レベルじゃないと無理だ。二人を殺すつもりかよ」

化け物だ。化け物がここにいた。

フルスロットトルトルギスを乗りこなしているとか、ミチアは別次元だった。

「……スゴいですね……ミチアさんは」

マリリーがそう溢すと、彼は双子に言った。

「いや？ 慣れればお前らも多分トルギスいけると思う。緩衝材挟めば、安全に戦える素質はあると見た。普通のやつはこの時点で死んでる。堪えたつてことは、アンヌもマリリーもいけるクチだ。頑張れよ。これは場数踏めば身体が慣れる。要は特訓あるのみだ。応援してるぜ」

そういつて、彼は去っていった。

乗りこなすパイロットのお墨付き。

アンヌは気合を入れて立ち上がった。

「ミチアが言うならできるっしょ!! やる気出てきた!! やるよマリリー!!」

「うん……そうだね……。頑張ろうかな!!」

マリリーもガッツポーズでヤル気満々。

アリアはヴォルフが終わり次第、続けると言つて休憩を挟んだ。

姉妹とアリアの特訓はまだまだ続く……。

皆は知らない。

G に対する高い耐性を持つ赤い男の名を。

彗星の再来と言われたかの男が、近くに何かを企てていることを……。

名を継ぐ者

アリアはその日、捕虜の使っていた機体を修理していた。

監禁されていた彼らは今、手錠をされながら格納庫の隅っこに繋がれていた。

監視のもと、限定的ながら解放された彼らは作業を見つめていた。

「俺達の機体を直して、何するってんだい、アリアの嬢ちゃん？」

捕虜の一人がそう、声をかける。ジオンではよく見かけ黒髪の黒目の青年だった。

今では珍しい一年戦争の時のジオン軍服をきている。

「全部白状したぜ？ 何だよ、俺達も雇ってくれるのか？」

「ええ。腕は悪くないと思ってますね。こんな古い機体でうちの連中を殺した手前、少なくとも激戦は越えてますね。ねえ、『袖付き』の皆様？」

アリアがそういって、振り返ると彼らは渋い顔で頷いた。

そう。通りで強いわけである。

こいつらはかの、赤い彗星の再来と言われた男が率いるテロリスト、袖付きのメンバーだったのだ。

袖付き。

それは箱とか言うものを探して連邦の一部、特にユニコーンガンダムと対立しては色々な場所で戦っていたり、異世界のジオンと手を組んで連邦を壊滅させようとする組織。

基本は金のない残党に過ぎないが率いているのが、比較的に時の進んだ異世界より来た赤い彗星と呼ばれる男が纏めているのが厄介だった。

彼等の機体は特徴的なマーキングをしており、それを掻き消した痕跡が見られる。

「シヤアが戻ってきたとか言いますけど……。フロンタルの顔を見たことは？」

「ないな。うちは支援がメインで、そもそも大佐の顔までは知らねえ」

「所詮はテロリストですか。うちも大概ですけど、袖付きも喧嘩を売る相手を間違えないで欲しいもんですよ」

「違うないねえ。嬢ちゃん率いるジェネレーションに戦争吹っ掛けるつてのは危なすぎ。文字通り身に染みたよ」

末端の相手は顔を知らない。袖付きとて、そこそこの規模がある。

金がないのでMSが大半、旧式ではあるが。

それでも時代を越えてやりあえるのは改修の腕がいいのと、パイロットの実力が確かだから。

朗らかに笑っている捕虜は判断する。彼女に敵意がないのは肌で感じる。

リユーン・デルクと言う彼は長いこと戦争を続けてきた男だった。

その賜物か、経験で少しは相手の出方が分かる。

今のアリアには、殺すつもりなどないと感じるから、呑気に会話をできるのだ。

「私はあるぞ。……四六時中、仮面をしている金髪の男だ」

「ん……ああ、ガルマとか言いえましたか。親衛隊をリストラになったとか言ってますんでしたか？」

「その通りだ。大佐に言われてしまった。坊やには戦争は必要ない、と……」

ガルマ・フォン・ザビリアスと名乗った美男子は、もとジオンの将校であると聞いている。

名前は似ているがザビ家には関係ないらしく、青い髪の毛を揺らして彼女に言う。

「皆は何か勘違いしている。大佐は……フル・フロントルは、そんな男ではない。離れてみて分かる。奴はただの人形だったと」

フロントル。袖付きの頭領であり、赤い彗星の再来と言われる怪物。

卓越した技術を誇り、圧倒的なカリスマで残党をまとめあげる豪傑と噂される。

「指導者に対して随分と辛辣ですね。一応とは言え、上官だった相手でしょうに」

「……アリア・アメリカスと言ったな。お前は機械を上官と思えるか？」

ガルマは、何かを悟ったような表情でアリアやスズキ、リユーンに語る。

実物を見た、かの男、フル・フロンタルという人物を。

「求められる赤い彗星という英雄の偶像のイメージを、そのまま具現化したような人だった。赤い彗星の再来などは、スペースノイドやジオン軍人による身勝手な空想、幻想だ。私も目にして納得した。噂通りの好青年だったとも。ああ、本当に。噂そのままを表したような、シヤアそのものがそこにはいた。然し、こう思ったのだ。この場にいる誰か一人でも、実際のシヤア・アズナブルに会ったことがあるのか？」と

それはオーバーワールドだからこそ、言える台詞だ。

おそらく、フロンタルの生まれた世界はシヤアのいない、死んだ未来だったのだろう。実際、故人であるシヤアに会うことはできないはずもない。

但し、オーバーワールドでは異世界の生きているシヤアも頻繁に訪れる。

交わる混沌の中で、出会うはずのない邂逅を、この世界は可能とする。

「……私は、親衛隊を解雇されてから、一年戦争の世界に飛ばされたことがある。そしてそこで、若き日の赤い彗星と一度だけ、出会ったことがあるのだ。戦場で、僚友として

だが」

赤いザクに乗って宇宙を駆け抜ける赤い彗星。

フロントルの戦いを見たことのあるガルマは、その戦いぶりを見て思ったのだそう
だ。

「機械と人間の違いだ。シャア・アズナブルは人間で、フル・フロントルは機械だ。なん
と言えば良いのだろうか。フロントルの言動は不自然に芝居がかつているんだ。周囲
が求める姿勢に応える道化。期待通りに動く人形。まるで、考えがない機械のような振
る舞いだった。救いを求めれば救いを与え、指導を求めれば指導者になる。自らを器と
称していたが、まさにそれだ。奴は人間ではない。単なる機械だ。持て囃されている
が、あんなものがスペースノイドを導くとするなら、私は袖付きを抜けてよかったと思
う」

ガルマは青ざめて、身震いをしながら皆に言う。

アリアはその考えには賛成だった。

「ガルマの言う通りでしょうね。わたしも、奴とは戦ったことがあります。気持ち悪い
野郎でしたよ。悪人ではないでしょうが、善人でもありませんね。わたしを奴は毒虫と
非難していました。あんなのに言われる筋合いはないのですけど」

アリアは過去、何度か袖付きの部隊を襲撃している。

仕事で連邦についたときには、壊滅もさせた。

フロントルはアリアたちを全ての未来を己のために食い潰す毒虫と非難して、襲ってきた。

無論、アリアが返り討ちにした。

流石に追い詰められたので、マスターユニット二名による集中攻撃により撃退した。

「二つ言えることですが、フロントルは決して、悪人ではありません。手段は褒められたもんじゃないですけど、だからと言って他の連中と違ってエゴもない。単なるリアリストですよ。そして、ペシミスト。所詮なるようにしかならないから、なるようにしてください。ただ、善悪など関係なく動いているのでしようし。奴等は何だかんだ、スペースノイドの為にも戦っています。……話は変わりますが、皆様はどんな形であれ、一年戦争を経験しているんですっけ？」

質問に、三人は首肯。

ずつと黙っているスズキは一年戦争があつたさなか、飛ばされて異世界に行つて、細々と生きてきた。

リユーンも違う世界の一年戦争があつた時代を生き抜き、飛ばされてまた違う世界で生きてきた。

ガルマは逆に未来から並行世界の過去に移動して、そしてまた異なる宇宙世紀を旅してきた。

最終的に、このオーバーワールドに戻ってきてから、この世界で時代も事情も違う袖付きというジオンの残党として活動して、敗北し今に至る。

それぞれの旅の軌跡を聞いて、アリアは言う。

「ジエネレーションには、思想も、人種も、経歴も関係ありません。ただ、オーナーが決めた相手を引き取って戦ってもらう。それだけです。正義も悪もないです。立場も陣営も知ったことじゃない。生きるために何でもする。戦争を幫助もする、荷物を運ぶ仕事もする、誰かを救う事もある、何かを取り戻す戦いもやる。全ては報酬次第で、どの場所にもどんなときでもこなします。シンプルでいいでしょう？ もっと言えば、自由。わたしたちは、自由なのです。誰にも邪魔されずに己を突き通すだけの力を持つ自由な存在。軍事バランスがなんですか？ 戦争助長がなんだと言うのでしょうか？ 文句があるならかかってくればいい。わたしたちに物申すのであれば。実力で来なさい。わたしたちに戦いを挑みのであれば滅ぼします。ジエネレーションは誰にも縛られない。簡単に言う让世界最強の何でも屋こと、テロリストです」

けろつと彼女は自分達は好き勝手に振る舞う邪悪そのものと認めた。

正義も悪も、思想も矜持もない。好き勝手にやって、好き勝手に生きる。

強いて言うなら自由。悪く言えば身勝手なテロリスト。

「好きなように生きて結構です。戦うのを楽しむもよし。戦争を広げてもよし。逆に平和のために戦うもよし。皆様の生き方までジェネレーションは制限しません。ただ、裏切ったらわたしが殺しますので悪しからず」

機体の整備に戻りながら、アリアは三人に言うのとスズキが漸く口を開いた。

「……死にたくないから、ここで働く。自分の、明日のために」

「結構。最低限の衣食住と機体ぐらいはサービスしましょう。拒否権はないですけど、お二人は？」

スズキは腰を置くことにした。ここでなら最低でも飢え死にすることはあるまい。

今までの生きるために泥をすすり何かに怯えて生きるより数倍好ましい環境だ。

「俺も異論はない。ま、気楽に行こうや。根無し草も、嫌いじゃないぜ」

リユーンもまた、ここに居座る事に決めた。

居心地は悪くなさそうな感じが気に入った。

「……まあ、私も行く宛もない。暫し、世話になる。よろしく頼もう……」

ガルマも結局残ることにした。混沌の世界に放り出されて生きる自信はない。

少なくとも、安全があるならここに居る理由にはなった。

「契約完了です。あ、機体はわたしが改造しますから。こんな古ぼけたジャンクパーツ

で稼働する機体は見ていて吐き気がします。嫌がってもいじりますので」

アリアは、ボロボロになった機体を早速解体。

悲鳴をあげる三人。長年付き添った相棒がパーツに分解されていく。

命を共にした戦友が、数分で見事にバラバラになってしまった。

「な、なんと言う所業!! 貴様は悪魔か!」

血の気の失せたガルマがたまらず叫んだ。

するとアリアは懐かしむように、その呼び名を聞いていた。

「懐かしいですねえ……。オーナーがわたしにくれた切っ掛けなんですよ、それ」

上機嫌になったのか、微笑みながら彼女は手元の端末を叩いて言った。

「知らないと思うので、教えてあげますね。わたしの『アメリカス』という名前は、嘗てオーバーワールドを破壊しようとした、とある魔王の名前だったらしいのです。アメリカスは、オーバーワールドでは大罪の証です。名を継ぐわたしやシンシア、そしてオーナーはオーバーワールドに災いをもたらす魔王の末裔、と思われているようです。……実際は、まあその通りなのですが。世界を破壊するなんて面倒なことはいしません。だからどのみち、目の敵にされるんです。世界の歪みとつか、ガンダムのパイロットに言われましたが……。歪みなんて生易しいものじゃない。アメリカスは、世界を惑わし振り回す魔王の名前。悪魔、なんてものじゃないのです。魔王、なんですよ。我ら、ジエネ

レーションを率いる女はね……………」

外見に似つかわしくない妖艶な笑みを浮かべて、クスクスとアリアは笑う。
ゾツとする三人。アメリカスの名前の由来は知らなかった。

気持ち悪い、というのが正直な感想だった。

「悪魔とは呼ばないでくださいね。悪魔は……わたしたち、アメリカスに従うだけの者です。赤い不死鳥も、青い不死鳥も白い狩人も。みな、アメリカスの下僕ですから。呼ぶのなら、たつぷりの軽蔑と嫌悪を込めて魔女と、呼んでください……良いですね？」

頷くしかなかった。何だ言い様のないおぞましさを感じている。

鳥肌が立つ。心臓の鼓動がやけに早く感じる。

思い知った。これは、恐怖だ。

目の前にいるのは幼い魔女の名を継ぐ者。

彼女が放った寒気による恐れだった。

アリアは紛れもない、アメリカスという魔女だったのだから……。

木星の戦い

オーバーワールドを移動中のことだった。

木星の辺りに差し掛かる頃、けたたましい警報が鳴り響く。

何事かと皆が顔をあげるなか。艦長のブランドが指示を飛ばしていた。

なんと、木星区域における大規模戦闘に巻き込まれたようだった。

レーダーには忙しなくM Aが宇宙を駆け抜けているのが映っていた。

戦況は混戦している。識別信号は……二機のM SとM Aが連邦軍、その他母艦が識別不能、小型M Sも識別不能。

何がどうなっているのか。ブランドが食堂で夕食を食べていたエリアに考えを問う。

「データ、拝見します」

早速戦闘に巻き込まれているのに悠長に夕飯を食べながら確認するアリア。

隣ではアンヌとマリーがあわあわしながら食器を片付けて戦闘の準備。

アリアはというと、呑気に餃子を頭から丸のみして、目を通す。

「……ああ、とうとう来ましたか。ヴェイガンです、皆様。出撃準備を。全力で迎え撃ちましょう」

木星の辺りまで勢力を伸ばしていた例の化け物集団だった。

しかも数が凄まじく多いのに、敵の母艦が見当たらない。

ざっと確認できるだけで300は最低でも戦っている。

対して大型MA一隻と母艦一隻、MS三機では多勢に無勢。

母艦から少し小型機が出てくるも、焼け石に水だった。

「……これは、付近に隠れている可能性がありますかね。さて、少し食後の運動かねて行つてきますか」

「アリアちゃん少しは動じようね!？」

「呑気すぎるんじゃない!？」

マイペースに片付けをして、艦長に第一戦闘配備を命じて、食堂にいたパイロットたちになんか軽く言った。

「相手はヴェイガンですよ。はつきりいつて勝率は今までのどの戦いよりも低いです。」

敵は質も量もすべて上。ですから、一騎当千で対抗しましょう。……全力出撃を命じます。最期の晚餐が嫌なら死に物狂いで戦ってきなさい」

アリアが決戦と言える規模というと、表情を引き締めるパイロット。

各個撃破が基本のアリアが、命令をしっかりと出すのが本気だという証だった。

「部隊規模で動いて、互いにフォローしてください。連中の機体は並大抵じゃ壊れません。全力で叩き込んで、補給に戻って最悪機体を乗り換えても構いません。兎に角、全力です。これから詳細を手早く説明します」

的確に配置を説明するアリア。捕虜たちも無論、初出撃にしていきなりの決戦だった。

母艦を守るのに部隊を残し、遊撃と迎撃をメインとする。

母艦も戦うし、戦力になるのなら全部使う。

『ちよつと、速くして頂戴!! お客さんが待ちわびているわよ!!』

艦内放送でブランドが怒鳴る。

アリアは今まで改良してきたMSが通用するか、テストする気だった。

最悪、破壊したジャンクを使って再生できないかとか考えている辺り余裕である。

駆け足で皆が格納庫に向かっていく。アリアは整備士に作業準備を言いつけて、自分も向かっていった。

宇宙に混沌が出来上がっていた。

右も見ても左を見ても、ヴェイガンヴェイガン。

ドラゴンが走り回り、暴れまくり、好き勝手にしている光景だった。

「然しまあ、相も変わらず凄まじい機動性だな……」

『同感だ。……背後は任せるぞ、ヴァイスよ。しくるなよ』

『分かっています。援護は俺がやりますんで』

先ず、黒仮面の部隊は出撃して早々、近寄ってきた敵を片っ端から凧ぎ払う。

練度の低いのと高いのが混ざり会う仮面部隊は、母艦及び支援機体の護衛についている。

何かアリアが、陸戦仕様のガンダムをめちゃくちゃに改造しておいたので今回はこれ使えと無茶ぶりしてきた。

(フツ……ジム乗りの俺が、遂にはガンダムか……。人生、生きていると分らんもんだな)

DDは自嘲するように笑った。アリアの太っ腹には度肝を毎回抜かされる。

陸戦型を宇宙用にいじくり回して挙げ句には専用チューンアップもしておいて、突然渡す。

知っているとも。この機体、今までのデータを基盤に改良されていることぐらい。

ガンダム・ピクシー。妖精の名を冠する格闘を視野に入れた軽量高機動MS。

武器がマシンガンと頭部バルカン、高出力のビームダガーのみというシンプル武装で、シールドも持たない。

そのぶん、全身にバーニアやらスラスタージャラが増設されており、凄まじい機動性を発揮していた。

軽い。機体が扱いやすく、手足のようにスムーズに動く。

黒板面の技量もあって、アリアが送ってきたコックピットの位置を援護ありで的確に貫いて破壊していた。

装甲のビームコーティングなど最早意味がない。

威嚇のマシンガン連射をしつつ近づいて、反応する前にダガーで貫き沈黙させる。

(うわあ、黒板面半端じゃねえ……。俺も仕事しないと、な!!)

ヴァイスは、ザフトの新型を借りていた。ザク・ウォーリア。そのブレイズ装備だった。

ビーム突撃銃を連射して威喝しつつ、隙について弱った敵機を破壊する。

ミサイルをばら蒔き、ハンドグレネードを投擲して惑わせつつ、不用意に近寄ってきた相手をビームアックスでコーティングごと切り伏せた。

アリアがガンダムの随伴には十分追い付けると言うだけであった。

一応量産型らしいが、スペックはガンダムに匹敵する。

全てにおいて、ハイスペック。一般にも扱いきれぬ高性能さだった。

(晩飯のあとにこれは少々キツいが……四の五の言つてられんか！)

ヴォルフは、長年の相方であるフラッグを没収された。

こっちは変態過ぎる加速に胃袋が絶叫している。

何せ、今までで尤も激しい機体に乗っているのだ。

なんと、彼のフラッグは某魔女の魔の手にかかり解体、分解されたのち改造をさせられた。

その名も、GNフラッグ。

ヴォルフの先日の訓練の成果を見て、これはもうビームサーベルだけで戦えるんじゃないというアリアの無謀すぎる改造案を受けた結果生まれたヴォルフぐらいしか使

手のいない変態機体だった。

武装、GNビームサーベル。以上。武器はサーベル。以上。

大切なので二回言った。

(最初はどうなるかと思つたが……使えている辺り、俺も末期だな……)

戦闘中でも、そんなことを考える余裕があるほど、ジエネレーシヨンのパワーアップは成功だった。

あまりにも無謀なチャレンジだった。接近しないと戦えない欠陥機体。

ビームコーティングや実弾を弾く新型軽量装甲に加えて、どつから持つてきたのか本物のGNドライブまで乗つけやがった、謎のロマンの出来上がり。

しかもオーバードライブであるトランザムまで使える、アリアの趣味全開だった。

そんな、機動力とロマンに極振りなヴォルフのフラッグだったが、意外と戦えた。

ビームコーティング？ そんなもん、出力あげて敵機ごと全部纏めて蒸発させれば問題ないぜと言わんばかりに兵器に回されたバカみたいな出力のせいで、相手の新型——いわく、装甲の分厚いバクトとかいうらしい——を、一刀両断出来ていた。

振るっただけで敵の機体が真っ二つになるのはある種の爽快感すら感じてしまう。

これで、まだリミッターをかけている状態。機動力あるわりには食後に乗っても気持ち悪くなるだけ。

アリアの本気を見た気がした。

『ピクシー……ふむ、上々な仕上がりがりだな。これならば、ジムと併用しても問題ないだろう』

黒仮面も満足しているようで、上機嫌で敵を葬っていた。

『すんません、ミサイルとグレネード切れたんで補給してきます！』

「了解だ」

この部隊唯一の射撃をするヴァイスが一時撤退。

援護のない状態でも、この超加速と頼もしい相方がいれば持ちこたえは可能と判断する。

『ヴォルフ、あいつが戻るまで戦線を維持するぞ』

「ああ。やってみせよう！」

ガンダムと変態フラッグによるインファイター共の護衛は、結構な速度でスコアを加算させていくのだった……。

一方。母艦の上で、母艦のエネルギー直結で援護をするジオン組は。

前線を任せるにも初戦。あと信用がないなら後ろで援護しているとエリアが命じた。

目の前で解体された相棒たちは……何とか、元通りにはなっていた。

一名、損傷が激しいので新品に交換されたが。

狙撃ライフルを装備する初期型のゲルググ。

中身が別物と化したザクスナイパー。

親衛隊どころか妙な性能の良さのギラ・ズール。

(……何が、起きてる?)

これ本当にザクなのか。旧式の皮をかぶったジェカンか何かか。

何で表示されているジェネレータの数値がおかしい。

何でコックピット内部に何でスコープが追加されている。

何でライフルの貫通力が何でコーティングしている筈の重厚MSを易々と破壊できる。

何で接近されたときのサーベルが腰にマウントされている。

何でOSが高性能学習型に変更されている。

何でライフルの型番がガンダム系統のライフルになっている。

何で規格違うのに何で連動して問題なく動いている。

何でもそもそも機体が丸ごと見た目だけ同じになって中身が別物になった。

結論。これザクか？

『……私のズールに何があった……？』

ガルマも困惑している様子だった。

冷静に追加されたスコープを覗いてトリガーを引くスズキ。

OSが勝手に補正して面白いように近づく敵を落としていく。

鋭いビームの流星が、改良されていると聞いていた敵を簡単にぶっ壊すのはなぜだ。

(おかしい。ザクが何だか別人になってる……)

総合した性能は特化ゆえに低いのだろう。

言い換えれば特化した部分は当然勝っているという意味か。

ガルマも、大型のビームキャノンを放ちながら戸惑っていた。

(待て……。ギラ・ズールにビームマグナムどころか、こんな超火力な武装は装備できな

いはずだ。あの規格外リゼルとは違うはず。なのに……かすただけで対策をしてい

るMSが消し飛んだだとおっ!?)

ガルマは決して、己の技量は高くないと客観的に判断している。

狙い撃ちなど慣れていない。

なのにスコープの覗いた先の世界では、己が放つ一閃が間違いなく敵を倒しているのだ。

敵の反応は早い。手練れなのだろうが……何でかズールが勝手に先読みして銃口を補正して放つ。

結果、数をどんどん減らしていく。アウトレンジで一方的に蹂躪する様は戦争ではなく虐殺に等しい。

一体、自分の機体に接続されたこの武装は……何を求めて開発されたものだろうか……？

リユーンは割りとお気楽だった。ザクが壊れて限界だったから、与えられたこのゲルググ。

悪くない。しつくりくる、この手触り。この肌触り。好きな部類の機体の仕上がりに「うっし。お仕事しますかねえ」

無論、初戦と言えど手は抜かない。これでも、長いこと戦争で食い繋いできた。彼は与えられた力に動揺せず己の仕事を果たしていた。特性は知っている。

ゲルググ。古い機体とは言え、上物をくれたものだ。近代化改修も済ませてある。

(俺がジオンでも関係ないみたいだしなあ。一応でも、同じ何でも屋の身内って扱いでいいのかね。信用は戦果で勝ち取れって事なら、ご期待に添えるようにいっちょやった

るか！)

前向きなリユーンは、まずは新人らしくやることをやると決めた。信用は仕事をすれば後からつくものだ。細かいことは後回し。

今は、敵を倒し、新しい居場所を守ろうと思う。

隣の少し頼りない、ジオンのチームメイトと共に。

伊織ー。あいつら、何か気持ち悪いのー。

「気持ち悪い……？」

一方。

母艦周辺の迎撃に回っている三人のうち、二人が違和感を感じていた。

伊織はSガンダムに搭載されるアリスが訴えかけてきていた。

「一体何が……？」

分かんないけどー。アリアに似てるのー。

アリスはアリアがたくさんいるみたいな感覚がして気持ち悪いと戦いながらずっと伊織に訴える。

スマートガンで敵を撃墜すると、言い様のない不快感をアリスは感じるのだという。

「くっそオ……!! 相棒、なんだこの声……頭が割れるッ!!」

ミチアは酷い偏頭痛に襲われていた。

出撃してからと言うものの、そこらじゅうから男女の様々な叫びが聞こえるのだ。

死にたくない、殺してやる、くたばれ地球人、我らの悲願はきつと……!!

意味の見えない不快な声が、ずっと聞こえて堪らない。

サイコフレームを全身に使い、バイオ・コンピューターを通じてリゼルと繋がるミチア。

その敏感すぎる機体が、いらぬ声まで集めて彼に届けていた。

庇っているようにコンピューターもカットはしていた。

然し、流れてくる声の量が圧倒的すぎて防ぎきれない。

「苦しいか、相棒よ……。俺も苦しい。けどよお、こんな事で……怯んでられねえよなあ!?」

ただ、幸いなことに。

ミチルという男のメンタルは、NTと呼ばれる人種よりも遥かにタフだった。普通、こんな断末魔を戦場で聞き続けければ精神の許容を越えてオーバーフローを起す。

結果、発狂して暴走するかそのまま動けず撃墜され死ぬ。

だが、ミチアは違った。相棒を通して感じる謎の声。

彼が我慢できないのは、機体が同時に呻き声をあげていることだった。

さつきから動きが雑だ。

無理矢理な急加速、急停止を繰り返してはミチアに精神的にも肉体的にも負荷を与えている。

この挙動は……リゼルが苦しんでいるとミチアは感じ取った。

ミチアが命を預ける相棒を苦しめるのは、本意ではない。

不愉快な頭痛がなんだ。響く嫌な声がなんだ。

それよりも、今は。相棒と共に生き残り、あの場所に帰ることこそが戦う理由のはずだろう。

「俺達は死なねえ……。死ぬもんかよ!!」

ビームマグナムを構える。ノイズが走る頭でも、ミチアには迷いが無い。

敵機を狙ってぶち抜く。蒸発する敵機。

機動力があらうとも、頭にジャミングされようとも。

その先が、何となくでもリゼルが教えてくれる。

相棒がいる限り、ミチアには敗北の文字はない。

気力は邪魔な声にねじ伏せて抑えていた。

「無茶はしないで下さいね、ミチア！」

前衛でガンダムに乗るアンダーソンと、それを支援する伊織は話す。

『アリスが、自分にアリアさんがたくさんいるみたいなこといつてるんですが……』

困惑する伊織に、新型のソードカラミティを操るアンダーソンは言う。

「一種の強化人間がいる、という事でしょう。気をつけて、敵は危険な相手です」

両手のアンカーを飛ばして、逃げ出す相手を捕獲して引つ張る。

抵抗するのを押さえつけて、両の腕でしっかりと引き寄せた相手を組み付いた。

アンダーソンは呟く。

「この距離ならば……自慢の装甲も無意味でしょうね！」

胸に搭載された、威力の高いビーム、スキュラの接近射撃。

ビームは拡散することなく、爆発。こっちにも自慢の装甲がある。

爆発程度では無傷だ。

敵討ちに来たのか、ライフルで狙撃するのを、アリスが察知。

なんとスマートガンのビームで飛んできたビームを相殺した。

挙げ句には頭部のインコムをその間に伊織が操り射出。

相手の手足に頭までビームで狙って動きを止める。

低い出力では流れてしまつてダメージはないが、それでもいい。

「今ツス、アンダーソンさんっ！」

伊織が叫ぶ前に突撃。

防御の姿勢を取る相手に、背中中のゲベルを二つとも連結して、大きな一つにするのを上段で構えて。

「……ハアッ！」

気合いの込めた一撃で、防御の姿勢ごと両断して破壊した。

縦に真つ二つにされた新型のバクト。やはり純粋な大質量の武器には弱いと見る。

「助かります、伊織。アリスもありがとうございます」

アンダーソンは深呼吸して礼を言う。

『アリスが気にしないといい、と言ってます。自分もおきになさらず』

伊織もそういつて、次の相手に対応する。

手一杯だが、隙を見てミチアの援護に回ろう。

あんなスピードで駆け回っていると流星に追い付けませんが、うまくやる。

ヴェイガンとの激戦を続けるパイロットたち。

母艦を守るべく、懸命に不利な状況でも足掻いていた。

そんな中。アリアの部隊は、先に戦っていたMAとMSの所に、合流しているのだ
た……。

進化した者の傲慢

……夥しい数の敵機がリーダーに映る。

先んじて交戦中の機体と合流するため、道中の敵機を切り払いながら進む。

可変させた機体で移動する双子は、美しい翠の粒子を撒き散らすマスターユニットに声をかけた。

「ねえ、本当に良かったの?」

『何がでしょう?』

通信相手のアリアは、首を傾げていた。

喋るアンヌは、渋い顔で彼女に聞く。

「ほら……ジオンの捕虜まで引つ張り出して。あいつらの機体、アリアが整備していたついでにめちやくちやに改造していたじゃん。ろくに試験稼働もしてないし、っていう

か今まで捕まっていた連中だからシミュレーションもしてないのに……。死ぬんじゃない？　ぶつつけ本番とかさ、普通のパイロットなんて出来ないよ？」

『……何故ですか？　わたしとて、バカではありません。機体にサポートOSも組み込みました。死なないように護衛もしっかりとつけました。大体、後方ですから安全圏だと思いますけど……』

『アリアちゃん。そういう問題じゃないの。見てなかった？　あの人たち、自分の機体なのに搭乗するとき凄く戸惑っていたのよ？』

姉のマリーが、アリアにそう指摘する。

双子の時もそうだったが、基本的にアリアは教導には向いていない。

その規格外のスペックが、皆の感覚とは違いすぎて、彼女の基準は高すぎる。

今回もアリアなら即座に機体に対応して、完全に使いこなせる。

そういう風にクローン故に仕込まれたデータでやれる。

アリアには経験がないのだ。経験で育つ人間が彼女には理解できない。

求められたものが、マスターユニットと一般パイロットでは雲泥の差。

彼女は仲間を過信することが多い。

これぐらいなら大丈夫、だって自分だって大丈夫だからという根拠のない判断で、こんなすれ違いを頻繁に起こしていた。

『わ、わたしが間違っていると聞いたのですかっ!!』

珍しく、怒鳴ってアリアは言い返した。

彼女は、滅多なことでは動揺しないし声を荒くすることもない。

知性的で余裕があり、常に感情を完璧にコントロールできる。

例外として、親友や友人に近い人物に何か言われると、自分を正当化しようとして、ムキになる。

「落ち着きなよ、アリア。責めている訳じゃないって」

アンヌが宥めるように言うと、アリアは画面越しに睨んでいた。

それは、マリーに対しても同じだった。

「そうよ。責めているつもりはないの。でも、言葉がキツかったわ。ごめんなさい」

マリーが謝ると、不機嫌になりつつも彼女は頷いた。

移動中敵機が空気を読まずに絶えず襲ってくる。

その大半を八つ当たりのように、アリアが片っ端から叩き落としていた。

意識は双子に向いている。反射的に敵機を見分けて、身体が勝手に動いているのだ。

「まあ、捕虜に対しての態度はあれでいいと思うな。信用はできないし、後ろから撃ってくる可能性もゼロじゃない」

『平気です。こっちを標的にした瞬間、あの機体は自爆します。裏切りは死をもつてし

て払わせるのがうちの流儀です』

マリーも、捕虜に対してのアリアのやり方に異論はない。

今回犠牲になったのがあの捕虜三人だったただだが、元々は敵だ。しかも男。信用する価値などないと双子は思う。

異論があるのは普段からあの対応であること。

めちやくちやな要求をする悪癖が問題なのだ。

アンヌも、アリアが規格外ゆえの無理解と知っている。

自覚させるために優しく指摘して、少しずつ改善していけばいい。

大体、腕前は悪くないが……アリアの改造に適應できない程度の物ならジェネレーションではやっていけない。

彼女の改造は基本的には本人だけのカスタムをするが過剰に盛る場合が多い。

特に試行錯誤する前の初回は大体パイロットが振り回される。

今回の事で死ぬのならば、別にいい。興味もない。

アリアの問題点を少し教えているうちに、マリーがあることに気づく。

アンヌも、アリアも気がついた。

「……味方が減っている?」

『四名程、撃墜されましたか。……ああ、ダメですね。生命反応がありません。多分コッ

クピットを潰されて落とされたようです。アンダーソンも消耗が激しいようですし……ふむ、ダガーに切り替えましたか。兼用の機体も出すように指示だしておきますかね』

決戦に相応しい規模だ。敵の数は全く減らない。

対して、ジェネレーション腕利きが数名死んだ。

識別反応がロストしている。消耗が激しいのか、頻繁に乗り換えるパイロットもいるくらいだ。

『結構ヤバイね……。一向に敵の母艦が見当たらないんだけどさ、もしかしてステルス持ってるのかな』

アンヌの言う通り、厳しい戦いを強いられている。

この間にも切りまくるアンヌのエピオンとマリーのウイング。

アリアが乗っているのは連携を視野にいれているガンダムアクエリアスを予定していたのだが、特性が噛み合わない挙げ句に火力不足を懸念して、GNドライブ搭載型のガンダム、Oガンダムを引っ張り出して来た。

普段からアリアが長期戦に備えて使う愛用の一つで、シンプルな武装しかないが逆に怪物的な火力を有しており、

扱いを間違えると非常に危険な機体だった。

『……一人とも。今、母艦に近寄らないでください。アンダーソンがEXAMを使ったそうです。暴走しているようですので』

「暴走!?!」

アリアが聞き捨てならないことを報告した。

いわく、母艦近くに何やら強化人間の乗った集団が襲来しているとのこと。

劣勢になっているようであった。

Xラウンダーとかいう件のヴェイガン強化人間だったらしい。

無論、似たような存在にNT殲滅用のOSであるEXAMが黙っている訳がなく、意図的にアンダーソンが解放した事もあり、見事に暴走。

敵だけを皆殺しにするべく、味方を退避させてアンダーソンが単機で一画を相手取っている。

同じ部隊のALICEも伊織に文句をいう敵にキレて暴れまわっている。

ミチアも、機体を通して聞こえる声に限界が近いと判断したバイオコンピューターがリミッター解除。

短期戦に持ち込み、消耗を抑えるべく何か見たことのない速度で駆け回って、かなり数を減らしている。

「嘘……!? 通常の三倍も速度が出て……!?! 何で!?!」

ミチア、アンダーソンの機体は通常時の三倍近くに速度で戦っていた。

あれでは、伊織はともかくも二人が持たないとマリーは思いアリアに一度撤退をいうが。

『……いいえ。今は戻りません。此方だって、今戦っているでしょう？ そろそろ、到着しますよ』

合流できそうなポイントにまで既に来てしまっている。

今さら戻れないとアリアは言う。

仕方がない。さっさと倒し戻るしかない。

マリーとアンヌは、そう判断して直ぐに無線のチャンネルを開いたのだった……。

『こちら、地球連邦軍所属、デカルト・シャーマン大尉。そちらのMS、応答せよ』

戦域に突入。MAのパイロットからの通信が入る。

すると、アリアはなにかを感じる。画面を通して頭に過る嫌な感情。

これは、苛立ち？

アリアが代表して応答すると、デカルトと名乗った男は不敵に笑った。

『ジエネレーション……成る程。聞いたことがある。異世界を渡り歩くテロリストだと

な。で、この戦いに何の依頼を持ち込んだのか、お聞かせ願えるかな？』

「依頼をするかどうかは、そっちですよイノベーター」

傲慢と取れる見下しの言動にマリーが眉をつり上げるが、アリアは至って普通に対

応。

デカルトも、アリアに何かを感じ取ったのか、態度を訝しげに切り替える。

『……なぜ、イノベーターだと分かった？ まさか、貴君は戦闘用NTか？』

「お察しの通り。結構イラついていますが、油断して死なないでくださいよイノベ

ーター。ハッキリ告げますが、この戦闘は貴方が支えているんです。軍人ならばもう少し

気合入れてほしいもんです」

互いに分かる。デカルトは高い次元の純粹なる人類の進化した姿、イノベーター。

アリアは戦闘用NT。互いの脳波が広域でもシンクロして、同類に似た別の種類だ

と。

エリアはこの区域に入ってから連中がいうアンノウンエネミー……UEに襲撃され、対応に追われていると説明。

交戦中のデカルト達に合流し、合同戦線を張らないか提案した。

敵の数は未確認。規模すら不明で未だに減らない。

戦況を支えるMAが味方がいるから良いものの、このままいけば敗北する。

故に即興でいい。手を組もうと言うことだ。

『……全く。どいつもこいつもいい加減なことばかりいう。非常時とは言え、宇宙海賊といい、例の子供といい……。まあ、良いだろう。此方は異論はない。但し、目をこぼすのはこれ一度だ。次はないぞ、ジエネレーション。そしてそちらから介入してきたのだから、対応の働きをしてもらう』

「了解しました。確か、ガデラーザ……でしたねその機体。色々大変でしょう、デカルト大尉。人間は珍しいものがあると、何でも実験したがりますので」

『流石ジエネレーション。ガデラーザも知っていたか……。然しまさか、テロリストのなかに気苦労を共感される相手と出会すとはオーバーワールドは分かんものだな。劣等種の相手は嫌気がするが、来るべき時のためだ。今は我慢してやるさ』

「心中、お察しします」

デカルトにも気苦労があるようで、何処か疲れたようにエリアに言う。

イノベーターはオーバーワールドでも非常に珍しく、NTと違って肉体にも変化が出る。

しかも彼らの脳波は一般的なNTとは波長が違っており、強い脳波としかリンクできない。

強い脳波とは即ち戦闘用のNTとかの事であり、デカルトからすれば劣等種と蔑む旧人類のモルモット。

立場が違えど、同じような苦しみを味わっているのは明白。

彼はアリアに対してはそこそこ、態度を改めた。

ずっと双子は黙っているが、典型的に気に入らない相手と知ったからにはなにも言わない。

揉めてアリアの邪魔になったらいけないのは理解している。

『粒子残量はまだ余裕がある。後方の敵は此方で対処しよう。貴君はその宇宙海賊と子供の支援を頼みたい。目の前でチョコロチョコロされると目障りだからな。離れていると伝えてくれ。……それぐらい、Xラウンダーとかいうのならばいう前に理解してほしいものだが』

「子供や普通の人間にそれを求めるのも酷なものですよ、大尉」

『まあ、だろうな。所詮は劣等種。真のイノベーターと相互理解などできるはずもない』

デカルトは一貫して傲慢な態度でアリアに接する。

アリアも相手に合わせて笑っているが、怒濤のように襲いくる敵を二人は話し合っ
て捌いていた。

癪だが、アリアと同等の相手なのは双子も分かった。

デカルトは苛立ちから一転、機嫌が良くなったのか言いたいことを愚痴のように吐き
捨てて戻っていった。

しつかりと罵っておきながら仕事はする。腐っても、軍人は軍人としての矜持がある
ように。

融通のきかない、権力に腐った連邦の世界もあるなか、態度は大きいがマトモな部類
だとアリアは思う。

『……嫌な人ね』

『うぎ……なにあの態度、ムカつくっ!!』

双子には案の定の評価だった。

ともあれ、一行はまず後方支援を取り付けた。

更に進んで、今度はガンダムタイプと思われる機体と母艦に接触を図る……。

狂ったお人形

アリアは二人を連れて急ぐ。

何だか、妙に喧しい。

四方八方から耳障りなノイズが徐々に大きくなっていく。

戦場を進めば進むだけ、不愉快さは増していく。

次第に我慢の限界がくる。

舌打ちしながら、目的の機体に近づいていく。

母艦から得た情報を検索。

宇宙海賊……クロスボーンバンガード？

該当データ発見を発見して首を傾げた。

……ならばあれはクロスボーンガンダム？　もうひとつの白い機体は知らない。

でもいつぞや見たガンダムタイプに似ている。

(うるさい……。うるさい、何なんですかこの声は)

雑魚が沸く。コックピットをぶち抜いて殺す。

悲鳴が聞こえた。なんだ今の断末魔。

うるさい、煩い、五月蠅い。

この戦場自体が不協和音となっていた。

何でだ。こんなこと、今まで経験したことがない。

いったいここで何が起きているのか分からない。

戦闘用故に高いNT能力を持つアリアには耐え難い環境だった。

沢山人が死ぬ。沢山の声が宇宙に広がる。

沢山の声が、ノイズとなってアリアを苦しめる。

『アリア……アリア、先行しないで、聞いてる!?!』

アヌが叫ぶ。見れば、アリアだけ勝手に進んでいる。

双子の周りに群がる雑魚。

質に加えて今回は物量さえも負けている。

ぎやあぎやあと耳障りに騒ぎ立てる。

(煩い、五月蠅い、ウルサイ!)

意識が持つていかれる。頭がガンガン響く痛み。

加速的に激しさを増す。鬱陶しい。

潰す。出てくる。潰す。出てくる。キリがない。

『くっ……アリアちゃん、援護を——』

マリーが四方八方から飛んでくるライフルを回避しながら、アリアに要請。

言い切る前に、アリアは戻ってきて、的確に狙ってパイロットを殺した。

装甲？ 機動力？ そんなものをもともせず、最早技量などは関係なく。

強引、無理矢理に相手よりも上回って片っ端から切り払う。

人間がコバエを叩き潰すかのような粗っぼさ。

(チツ……雑魚が、次から次へと鬱陶しい……)

アリアはかなり苛立っている。双子の話を聞いていない。

反射的に味方の救援をしただけで、舌打ちして、偏頭痛を起こし始めた頭を整える。

『アリア、なにしてんの!?! リーダーでしょ、しっかりしてよ!』

『アンヌ、落ち着いて……。アリアちゃん、どうかしたの?』

怒るアンヌをマリーが宥めるものの、アリアは徐々に歯軋りまで行っていた。

おかしい。後ろではデカルトのナルシストな声が響く。

前方では、何やら喧しい声が聞こえる。

アリアは耳を塞ぎたい。集中できない。全部ノイズにしか聞こえない。

それでも、目的のために進む。身体の判断は機械的。

丁度、その時。母艦のブランドから通信が入る。

どうやら、向こうの防衛は粗方終わったのでこっちに護衛をつけて向かうとのこと。

かなり被害が出ているが、持久戦なら大丈夫と言うが……。

『アリアちゃん、ちよつと大丈夫なの!? 脳波が凄い勢いで乱れているんだけど!』

「はあ……はあ……!」

アリアが大丈夫じゃなかったのだ。

母艦でモニタリングしていたブランドが確認しても、アリアは返答せずに苦しそうに

呻いている。

機体のコントロールにサイコミュを使っているアリアには致命的な障害。

サイコミュが、多種多様な人類の進化した存在が混在するこの戦場において多量の声を広げ続けてアリアに伝え続けた結果だった。

Xラウンダー、イノベーターに彼女は気づいていないが、高いNTが搭乗するガンダムもこの区域にはいた。

それらと感応するかのよう、端から端まで雑念と一緒に纏めて吸収した挙げ句に全部アリアに聞かせていた。

戦闘中の呼応するそれぞれの脳波。それが、アリアの乗るOガンダムのサイコミュに
反応。

混ざりあつて増幅して、機体がアリアを追い詰めていた。

普通の人間に、音量マックスで悲鳴とシャウトの混ざったデスメタルを延々とヘッド
フォンで聞かされるような状態だった。

いくらアリアでも、そんなものが激しくいつたり来たりする決戦に長時間居れば、
オーバーフローを起こす。

普段ならばXラウンダーなどいないし、イノベーターという脳波がより強い者もいな
い。

激戦区に飛び込んだ結果、敵にも多数いるその手の人間の残しているものをアリアは
拾いすぎた。

状況が悪かった。彼女たちの予想を遥かに越えて、入り交じって同類が揃いすぎて。

デカルトのように我慢できる筈もなく。何とか佳境を越えた彼とは違い、アリアは元
から戦闘用のお人形。

……長くいれば長くいるだけ、戦えば戦うだけノイズが蓄積し、体調に異変をきたす。

呼吸が荒くなつてきている。視界が何故か揺らいでいる。偏頭痛が加速する。

止める、口を閉じろ。止める、声を出すな。止める、その絶叫を今すぐ止める!!

頭が割れる！ 頭が狂う！ 五月蠅い、煩い、ウルサイ、うるさいっ！！

——黙れッ！！

「あ、あああああああああッ！！！！」

とうとう、アリアは頭を抱えて悲鳴をあげた。

精神のセーフティがなかったがゆえの、限界突破。

理性が、感情に飲み込まれる。

止まらない騒音。静まらない雄叫び。

アリアの頭が、染められていく。

その声が、遠くにいるはずの一部に届いていた。

——アリアの悲鳴がするの！！

人工知能、アリスがアリアの悲鳴に気がついて伊織に伝える。

焦るようなフォントで大きく画面に浮かべて。

「なんだ、今の……？？」

サイコフレームを通じて、母艦を通じて補給していたはずのミチアにすら、届いてい
た。

ある程度母艦周りの敵は片付いた。ローテーションで出撃すればどうにかなるレベルにまで落ち着く。

損傷した機体を応急処置して、休憩をかねた待機中。

格納庫では忙しそうにクルーがいたり来たりしている。

何も聞こえないのか、彼らに異変はない。

「……?」

機体のなかで休憩しているミチアは、幻聴かと深呼吸して汗をぬぐう。

冷や汗をかいていて、気持ち悪かった。

『ミチアさん、聞こえます!』

伊織が慌てて、通信を開く。

「伊織か。どうした?」

『アリスが!! アリスが自分に言ってるんです! アリアさん、暴走しているって!!』

「何だどつ!」

伊織は真っ青になって片っ端から待機中のパイロットに伝えていた。

血相を変えるミチア。慌ててブリッジに報告すると、

『アリアちゃん!?! アリアちゃん何してんの!?! ちよつと、聞いている!?! ねえ!!』

艦長やクルー、オペレーターまでパニック状態で対応していた。

落ち着かせて問うと、案の定アリアが突然半狂乱で暴れだしたのだと伝えられる。

片っ端から敵機を切り殺して無作為に戦場を荒らしていたようだ。

(今の叫び声……!! 相棒、そう言うことか!?)

ミチアが聞いた幻聴。戦場を散々聞こえたあの声と同じなのか。

アリアの痛々しい悲鳴。彼女のピンチだと言うことだった。

リゼルは行動で返答を示した。バイオコンピューターが、機体のリミッターを再び外している。

同時に機体が勝手に判断していた。

登録されているアリアのマークが更新される。

色が赤く染まる。

この識別は……敵対。

「相棒！ お前、俺にあいつと戦えって言うのか!?!」

思わず声が出ていた。相棒の答えは、イエス。

「アリス、本気ですか!?!」

伊織もアリスに問うていた。

アリスはアリアが錯乱していると説明。

混濁した意識では説得は不可能。撃墜するしかないと言った。

「……」

今はまだいい。

アリアはより強い敵機を狙って暴れている。

だが、敵機を皆殺しにしたのち、矛先は……こっちになるとアリスは予言するのだ。
「戦え……と？」

勝ち目はない。元より次元の違う化け物。

敵機はアリアに任せればいい。今のうちに体勢を建て直すべきだと進言する。

迷う伊織。仲間に攻撃するのは躊躇いがあった。

そのぐらい、アリアには世話になっていた。引き金は引きたくない。

「チツ……世話の焼けるリーダー様だな。いいさ、俺も足止めをしよう。ピクシーの補給、急いでくれ」

暴走と聞いて、黒仮面はあっさりと踏ん切りをつけた。殺すのは無理でも、時間稼ぎはできる。

説得は艦長が続けているが、たぶん無理だ。錯乱した人間には言葉は通じないのは経験している。

DDは、混乱する現場で仕方なく、あわてふためく人間を落ち着かせる事にした。

……強化人間や戦闘用の人間には暴走は付き物だ。

今までよくもまあ、安定していたもの。知っていれば対処自体は容易い。

だが、それができるかは……別の話だが……。

「アリア、どこいくの!!? アリアあー!!」

アンヌは必死に追う。凄まじい加速で一直線でアリアは誰かを殺そうとしている。

敵機を切り払い、立ち塞がれば貫いて爆発させる。

『アアアアアアア!!』

その都度、辛そうに声を荒くして叫ぶ。

最早双子は追うだけいい。

目の前で寄ってくる敵機は全滅していた。

抜ける相手は一機足りとも存在せず、ただ猛獣と化したアリアの餌食になっているだけ。

『アリアちゃん!! 止めて、落ち着いて!』

変形して無理矢理追い付く姉のマリーの言葉は届いていない。

攻撃すれば多分、反撃を貰うのは目に見えている。

異変はあったのに。アリアの調子がおかしくなっていたのは、わかったのに。

止められなかった。アンヌは歯噛みした。

ミスったのはアリア自身だ。合流を優先して事を急いで、限界が来たのなら代わりに

双子に行かせれば良かった。

慣れない機体とはいえ、双子はアリアに負けてもある程度なんとかなる。

なのに、そうしないでこうなった。どうすればいいのか、分からない。

止めるといつても、まだこっちはなにもしてこない。

敵機を殺しているだけ。そして何処かを目指しているだけ。

聴て、アリアが目指していたであろう機体が黙視で確認できた。

『おい、そのMS！ 何をしているんだ、止めろ!!』

マントを羽織ったガンダムタイプが、アリアに組つく。

無線で聞こえた男の声。

恐らくは目指していた機体の一つ。なのにアリアは蹴り飛ばして突き放したのだ。

「アリア、何してるのよ!?!」

思わずアンヌは叫ぶ。

小柄なガンダムタイプは体勢を立て直して反撃しようとする。そこにマリーが割って入った。事情を説明して、止めてもらう。

『アンヌはアリアちゃんを!』

姉に託され、応答し後を追う。

アリアは既に消えている。まだ違うらしい。

突っ走った先。道中、相変わらず殺しまくるアリアは臆て。

見たことのないMSに真っ直ぐ飛びかかっていた。

ヴェイガンの……新型?

周囲にガンダムタイプの機体が、台座に乗った機体を羽交い締めにして、何やら抵抗する機体のコックピットをこじ開けていた。

向こうは放置でいい。問題はこっちだ。

『な、なんだよお前!? なんで僕に……!?』

『耳障りな声出すなアリアー!!』

アリアは幼い子供が乗っていると見えるドラゴン型に切りかかっている。スパークさせながら、キレルアリアの接触通信がこつちにも聞こえる。

『うるさい、お前が一番五月蠅い!! 女の悲鳴をわたしに聞かせるなア!!』

何を言っているのか理解できないが、そういうことらしかった。

アリアとその機体は戦闘を開始。アンヌは判断して、先ずはガンダムタイプの支援に入ることにした……。

オーバーインパクト

……付きまとう声が消えない。

『なんだよお前！ 折角僕が遊んでたのに!! 邪魔するな!!』

……遊び？ 遊びとは、この声の事か？

『……また勝手に動く……!! フリット……!!』

何処かで聞いた、悲しそうな女の子の悲痛な声。

悲しいの？ 苦しいの？ アリアには分からない。

ただ、一つだけ分かったことがある。

目の前にいる見たことのない機体が、この声の原因で。

もしかしたら知り合いかもしれない彼女を悲しませて、泣かせている。

頭が痛む。この声が一番響いて、他の声が全部邪魔。

助けて。助けて。助けてっ!!

そんな事を喚かれて、平気な人間はいるものか。
アリアは平気じゃない。煩い。兎に角耳障りだ。

イラつく原因。悲鳴や断末魔よりも継続して聞こえるのが刺りにもウザつたい。

「お前が……お前が一番、五月蠅いッ！ 黙れエツ!!」

そうだ。やかましい声は全部消してしまえばいい。

不愉快な頭痛も、耳の穴にへばりつく不協和音も。

全部、消してしまえば良いんだろう？

『ひっ……!?!?』

おい、お前にも此方が分かるんだろうそのクソガキ。

アリアにだってわかる。こいつは例のXラウンダーとかいう人種だと。

お前が、あの女の悲鳴を聞いて楽しんでるんだろう？

『ち、違う!! 僕は……僕はただ、ファルシアを使ってお兄ちゃんと……!』

だったら何で悲鳴を撒き散らしてるんだ。

戦場で遊ぶな。他人の迷惑だって習わなかったか？

喚いているなら身内でやれ。他人が蔓延る宇宙でそんなことしていいと、誰が許した

?

ここは、お前の遊び場じゃない。それとお前、誰に喧嘩を売ったか分かっているんだ

ろうな？

「ジェネレーションに喧嘩を吹っ掛けておいて無事に帰れると思うな、このクソガキがアツ!!」

『う、うわあああああー！?』

勝敗とかそんなものはどうでもいい。

お前が悪い。お前が喚くから。いいや、お前とそこの女が喚くから。

目障りだから殺す。鬱陶しいから消す。それでいい。

敵は皆殺しだ。邪魔するなら全員殺す。うるさいやつは居なくなれ。

……だから。

……死ね。

アリアの暴走は止まらない。

ガンダムタイプが、どうやら操られていたと言う敵機を破壊し、パイロットを救出。慌てて自分のコックピットに流し込む。

それを目敏く発見して邪魔しようとするも、そもそも外部コントロールを察知されてもう一機乱入してきたガンダムに蹴り飛ばされて吹っ飛ぶ。

物理的に阻んで、目の敵にして殺そうとする。

「あの声……前にコロニーで助けてくれた……！」

ガンダムAGE-1のパイロット、フリットは聞いたことのある声に驚いた。

以前感じた威圧感が嘘のように、今は激情しか感じない。

怒りではない。憎しみではない。単なる八つ当たり。子供の癩癩のような暴走。

助け出した彼女も知っていた。前にプラントのMSに巻き込まれているのを助けてくれた人の声。

でも……凄く怖い。殺意にまみれて、別人のように彼を追い詰めていた。

既にフリットのガンダムはボロボロだった。

手足の一部ごとスラスターが死んでいる。

不利な状況で人質にされていた彼女をどうにかするべく、手をこまねいていたのだが、突然乱入してきたガンダムによって、彼の動きが邪魔された。

おかげで動きの鈍った機体、ファルシアをコックピットを壊して救出。背後にいた味方も戻ってきたが……酷く損傷していた。

『どうする、フリット。……ディーヴァまでは、距離が離れすぎている。ここまで損傷が激しいと戻れねえぞ』

熟練のMSのパイロットがフリットにこぼす。

一緒に抱き抱えるように座る少女を見て、助け出そうとしていたのを知っていたので、安堵した。

ここで演習をしていた彼らだった突然ヴェイガンの強襲を受けて応戦。

二人で多数の機体を相手していたが、丁度宇宙海賊の母艦とガンダムが手を貸してくれて、さらには連邦のMAまで参戦して何とか拮抗していたが、次第に物量に押され始めた。

その頃、かのジェネレーションにまで手を出した奴等は案の定、物量をひっくり返された。

特に翼のガンダム、赤いガンダム、そしてあの緑の粒子を放つガンダムが凄いい勢いで倒したおかげで、現在残った敵機は撤退を始めていた。

しぶといのは……目の前のあの顔見知りの少年だが、彼は怒り狂う彼女の手にかかっていた。

『なんじゃありや……まるで野獣じゃねえか』

一切手出しをさせない、視線の釘つけと言えば言葉はいいが、現実には単なる食らいついて離さない野獣。

戦術なんてない。武装を鈍器のように振り回して殺そうとする野蛮なやり方で壊そうとする。

先輩のパイロットからしても異質なやり方に野獣と例えるが、まさにその通りだった。

その頃。母艦が二つ、護衛をつけて合流してきた。

フリットたちに、着艦許可を出しているジェネレーションの母艦。

機体を応急措置するから、早くしろと急かす。理由は……。

『早くなさい！ アリアちゃんに殺されたいの!?!』

艦長らしきおネエが怒鳴る。どうやらあの少女、錯乱しているらしい。

戦闘用NTのせいか、暴走しており今はいいが早くしないと襲ってくるというのだ。慌てて、一方的に追い回される敵機を尻目に撤退する二人と人質だった少女。

『あつ、待て……!!』

「お前はもう、喋るなアアアツ!!」

アリアの猛攻は収まらない。

吠える彼女は普段ならばそんな激情は見せない。

苛立ちすぎて、周囲が既に見えていない。

敵を殺そうと躍起になっていて、自分が損傷するのも恐怖など微塵も感じない。

口調すら別人。周囲が余りの剣幕に制止を躊躇った。

敵機が追撃しようとするのを無理矢理遮断。

出力をあげたサーベルで乱暴に腕をぶった斬った。

相手のパイロットは幼い子供らしい。

着艦して、直ぐ様補修に入るフリットがクルーに説明した。

慌ててモニターを回す。

アリアのOガンダムは容赦なく、気圧されて動きが鈍った機体のコックピットを潰そうとするも、寸前で相手が防御。

持っていた実体剣が爆砕されて、悲鳴が聞こえる。

怖がっていた。明らかに殺気立つアリアは敵を殺すだけのマシーンとなっている。

片腕損傷、挟れた一部からはフレームがむき出しになり、逃げるように後退するドラゴン型。

「逃げる気か……逃げられると思うな……。お前は殺す。ここで殺す」

ぶつぶつとオーブンチャンネルで呟くアリア。

相手は泣き出していった。そしてアリアに言い返した。

『負けてない……僕はお前なんかには負けてない……!!』

精一杯の虚勢。負け惜しみだったのだろうが、完全に悪手だった。

今のアリアに挑発行為は自殺と同義。

「だったら死ぬ！」

サーベルを振り上げて、突進してくるガンダム。

誰もが思う。この光景は戦争じゃない。

ただの殺人。相手に戦意はないだろうに、アリアは執拗に殺そうとする。

これが、ガンダムのすることか。絶望の象徴のように、意味のない理不尽をばら蒔く

この光景が。

……見ていられなかった。とうとう、我慢できずに味方がアリアに銃口を向けた。

「！」

途端、アリアはぴたりと止まった。

ゆつくりと、こちらを見て……発見する。

「いい加減にしなよ、アリア。暴走も大概にしないと、怒るよ？」

「もう戦いじゃないわ。それ以上続けるなら、私達が相手になるわよ」

……アンヌとマリーだった。エピオンがソードの切っ先を向け、ウイングがバスター

ライフルを向けている。

怒り。そう、二人は怒っていた。話を聞かない子供のワガママに。

味方を不用意に危険に晒すリーダー失格の行為。

二人は明確に、アリアに強い感情を向けた。

……アメリアスは、災いの魔女。

……アメリアスは、裏切りの魔女。

……アメリアスは、孤独の魔女。

アメリアスと呼ばれる女の宿縁。

（わたしを……狙っているんですか？ 何故？ わたしは、皆の味方なのに。ただ守ろうって思うのに。何で……わたしを狙うのです？）

アリアの脳内に浮かぶ、二人の睨む顔。

理由が分からない。なんで、狙うのか。

魔女と呼ばれる呪われたクローンだから？

アメリアスは、魔女の系譜だから？

なんで、裏切る？ 親友の二人が、率先して。

ただ、五月蝍い声を黙らせようとしただけなのに。

一度も味方にはなにもしていないのに。
どうして？ どうして？ ……どうしてッ!?

アリア。『裏切りのコード』って、知ってる？

ふと、随分昔にオーナーに聞いた話を思い出した。

それは古い時代に魔女が使用した、世界を混乱させる忌まわしい力。

オーナーは言う。陣営を越えて、必ず裏切りを発生させる特異な力。

アメリカスを継ぐ者には、その能力もまた、名と共に継承される。

そう、聞かされた。

「オーナーはそれを使えるんですか？」

「勿論。伊達にあの厚化粧のババアから名前継いでないよ。まだ世界征服やろうとしてるみたいだしねえ……。懲りろよ、一回あれだけフェニックスとアプロディアに叩きの

めされたんだからさあ……。ま、うちらは必要ないから滅多に使わないけどね。でもアリア。あんたも使えるんだよ、忌々しい魔女の力を」

「わたしも使つていいですか？」

「別にいいよ。誰に使おうが、あんたの勝手さ。ただ、限定的なモノだし、ババアレベルの災厄は無理よ。精々、

少数の機体を無理矢理裏切らせて、敵にするだけ。弱体化は免れない。自分も襲われる。ぶっちゃけ、使う機会はないね。あんたは面白がつて戦況をかき回すこともないし」

「意味ないじゃないですか」

「そりゃ本来、味方がいないババアが使うから強力なのであって、うちらは意味ないに決まってるじゃん」

「世界中から否定されているのに、特典はそれだけですか……」

「まーねえ。所詮何でも屋のテロリストだし。あつて御の字、程度のおまけ。でも、シンディは使えない。あたしはあの子には与えなかった。アリア、あんたしか今のこの世界に裏切りのコードを使えるクローンはいない」

「何ですか？」

「あんたにしか、能力は継承できなかったんだ。多分、あんたはババアに近い本質を持つ

からかも。ま、好きに使いな。……ただ、使ったあとにどうなるうが、あたしは知らないよ。それも含めての、あんたの力」

オーナーは告げた。自己責任で使えばいい。

アリアにしかない、アリアの中に眠る災いの力。

（マリー……。アンヌ……。どうして、わたしを……。う？）

アリアには自覚がなかった。

ノイズに惑わされて、自分が何をしているか分からない。覚えていない。

酷い偏頭痛と耳鳴りだけが戦闘中の記憶であり、思い返しても二人に敵対される理由が見当たらない。

身体が判断して、ここまで来たんだろう。ならばよいはずなのに、双子は何で裏切るのか。

カウンターであるアリアに逆らうのか。反逆行為だと知っていながら。

アリアはこう思った。自分が暴走しているなどと思わない彼女は、常に自分は皆の為にと思いつむ。

見れば、周囲は……敵しかない。

マーカーが……真っ赤に。真っ赤に、染まる。

全部、敵。逃げようとするそいつからは意識が途切れた。

ガンダムレーダーに浮かぶ、脳波で操るそれは……信じていた仲間の、敵対信号。

アリアが反射的にやっていた行動が、我に返って記憶のない彼女には……裏切りに見えた。

「どうして……」

俯いたアリアは、小さく呟いた。

何で。何で、全員アリアの敵なのか。

アリアは全然理解できない。

『落ち着いたのか……？』

『ふんっ……戦闘用のNTとて、所詮はこの程度か』

聞き覚えの男の声と騒ぎに気がついたデカルトの嘲笑。

彼らも、向こうの味方。アリアは……独りぼっち？

何故？

何故、皆アリアを睨む。

何故、臨戦態勢に入る。

何故、アリアと戦おうとする。

何で、アリアを。

(わたしを……裏切るんですかつ!!)

敵しかいない。誰もいない。

そう言うことか。全員、グルだったのだ。

全部嘘だったんだ。アリアは理由も分からず見捨てられたのだ。

この状況が証拠。アリアは、全員に切り捨てられた。

敵意しか感じない。怒りしか感じない。

要するに、アリアはもう要らないってことか。

何か言おうとする無線を全部シャットアウトした。

もう、いい。

アリアが邪魔なら、それでいい。

良いだろう。そっちがその気ならば、相手してやる。

嘗ての魔女のようにこの身一つだと言うのならば。

徹底的にやってやる。アリアは、独りでも戦える。

マスターユニットである、アリアは。

最強であることを、義務付けられた存在だから。

孤独になろうが、決して負けない。

(裏切り者……!!) みんなグルだったんですか!! わたしがそこまで気に入らなせんか!! そこまで目障りでしたか!! みんな……お前らが、お前らが裏切ったんだ!!)

そつちが悪いんだ。

そつちが攻撃しようとするから。

一生懸命頑張ってきたのに。

台無しにしたのは、全部ジェネレーションの連中だったんだ。

(殺されてたまるか……!!) ここで死んだら、敵陣営のど真ん中に放り出される!!)

予備の身体がジェネレーションの施設にできる。

下手に死ねば、向こうに送られて更に地獄を見る。

アリアは、躊躇いを捨てた。今までの事を忘れようと振り切った。

狙ってくるなら殺すまでだ。敵は殺す。それがアリアの流儀。

(オーナー……。こうなることを見越して、わたしにこれを授けたんですか? 何で

……わたしが、独りぼっちになるんですか? わたし……何もわかりません)

アメリアスの魔女として同じ結末に向かおうと言うのか。

裏切りを司る魔女には、相応しい結末なのか。

アリアには悲しい気持ちで溢れて、もうどうでもいい。

(ええと……確か、発動ワードは……こう、でしたよね)

アリアだけが持つ、特異な能力。

言葉を紡いで、意識を広げる。

壊れる、混じれ、混沌よ、踊れ。

敵も味方も全部無くなれ。絆も繋がりも全部断ち切れ。

さあ、宴を始めよう。

アリアの取って置きを、ご照覧あれ。

悲しい、呪われた能力を。

「起動……開始」

——オーバー……インパクト。

二章 鉄の仮面編

サヨウナラ、過去のわたし

切り札は、隠しておくから意味がある。

いいや、違う。言わなくても……良かった。

だから、言わなかった。必要がなかった。

けれど。全部、無駄になった。

もういい。どうでもいい。

(……サヨウナラ、わたしの居場所。わたしの理由。わたしの意義。わたしの意味。わたしの過去。わたしの全て)

決別しよう。己はもう、何もなさないただの人形。

己のアイデンティティーを失うと言うのは……こんなに辛いものだったのか。

……胸に浮かぶ感情は、ただ悲しかった。

彼女に残されたのは……この、Oガンダムだけだった。

否。違うか。まだあった。

何時だったか、捕虜に告げた言葉がある。

悪魔は魔女に従っている。悪魔は魔女の下僕だと。

主が去るのだ。従者も、共に来るべき。

悪魔たちはアメリカスにしか従わない。

……今ここにもう一人がいないのが幸いだった。

無駄な取り合いを、しないで済む。

「おいで、フェニックス。ハルファス。……行くよ」

もう、丁寧な口調で話すこともない。

皆に失礼のないようにと、自分で判断した言動だったけれど、関係ない。

もう、丁寧に接する相手も、居ないのだ。

ここからは、ジェネレーションのアリア・アメリカスではなく。

ただの名無しとして、生きよう。

この混沌を内包する世界で。

この瞬間を持ってして、彼女は名前も捨てる。

世界には、己の過去と決別する際、仮面を纏う風習があるらしい。だつたら、少女も心に仮面を被ろう。

もう、素顔なんて誰にも見せないように。

二度と誰も信用することがないように。

彼女に名付けてくれたのはオーナーだつた。

だが、オーナーが管理する連中から捨てられた。

ならば、せめてこの名前は返そう。彼女はクローンなのだ。

……代用品は、オーナーなら用意してくれる。

だつて、名を返上する少女は、たくさんいるうちの一人に過ぎない、単なるクローン

なのだから……。

突然、爆発が響いた。

母艦の片隅で、ずっと機能を停止していた機体が二機、自立起動して周囲を破壊しながらハッチに向かっていったのだ。

整備中の機体壊しながら、歩き出した。

「な、なんだ!？」

クルーが慌てて避難する。

その目先では、赤いガンダムと青いガンダムが、内部から穴を開けて、外に逃げていった。

まるで誰かに呼ばれるように。主に従う従者のように。

「フェニックスとハルファスが動いている……」

事情を知る一人が呟く。それは、最近ジェネレーションに加入した新米のパイロットだった。

だが、この騒ぎで気付いた。どうやら、彼女が暴走していることを。

何故なら、彼女にも声は聞こえていた。数少ない、生粋のNTだったから。

(……って、しまった!?! やばい、置いていかれる! ええと……空いている機体は……)

彼女は名を捨てた少女と同じ素質を持っている。そう、あらゆる機体を操縦できる。

唯一、事情の違う彼女は一週間ほど前に加入、もうひとつの母艦に所属していた。

然し、生来の機械好きの性なのか、メカニックに転属して一日目にこの騒ぎに巻き込まれた。

そして、彼女の目的は多数の機体を整備すること。その都合上、少女がいる方が良かったのだが。

（多分、この状況じゃあ敵対、よくて逃亡かな。折角こつちに来たのに……ま、いいかな。一番の可能性があるのは……彼女だ。裏切り者は殺される、ねえ。確かに始末されるかもしれないけど、するのが彼女だったら関係ない。僕だって逃げ足なら自信あるし）

格納庫の中で、多くが彼女の暴走を止めるべく、そして甦るから殺していいと判断して全力で狙う連中が大半だったが、メカニックは違った。

彼女はあくまで、このマスターユニットに興味があつて来たのだ。

それも、彼女の方に。だから、少し様子を見て、場合によつては……。

（上物をお土産にしよう。なるべく、ついていける機体に……。そうだな、うん。あれにしようか）

戦場は混乱していた。

『き、機体が……勝手に動いている!?!』

『く、あああああああッ?!』

少女が切り札を切ってから、一部の機体がパイロットの意思を無視して独りでに戦闘を始めた。

ガデラーザ、そしてクロスボーンガンダムが、突然ジェネレーションの機体に発砲を開始。

更には母艦まで、操作を受け付けずに攻撃をこちらにしてくる。

デカルトが悶えていた。脳波が乱れて、ジャックされたような感覚に蝕まれていた。海賊の若きエースも対応が遅れる。なにせ内部から何をしても受け付けない。

コックピットすら開かず、判断を機体が行いジェネレーションを敵とした。

二機と母艦は、近くにいたジェネレーションの戦力を攻撃開始。

離れた場所で、少女は吐き捨てる。

「……今回は、手加減してあげる。戦うのはわたしじゃない。コイツらで十分でしょう。さあ、好きなだけ暴れるといい。破壊と憎しみをこの宇宙にぶちまける、ガデラーザ。クロスボーン」

オーバーインパクト。少女が持つ裏切りのコード。

使用する相手を選べ、選んだ相手は物理を無視して機体が暴走。

名無しを含めた全てに襲いかかる、混沌を呼ぶ忌々しい禁忌の力。

冷たい視線で、それを眺める名無しの少女。

ぎやあぎやあ騒ぎながら乱戦になる戦場。相手していたヴェイガンの機体はいつの間にか逃げていた。

代わりに増援だったガンダムとMAが、彼らに意図せぬ牙を向く。

従者が母艦を壊して駆けつけた。四つの特徴的なスラスターが翼に見える、赤と青のガンダム。

控えるように、名無しのガンダムの隣に浮かぶ。

「……行こうか、ハルファス。フェニックス。もう、あそこはわたしのいる場所じゃない」

……ありがとう、ジエネレーション。楽しかった。そして、サヨウナラ。

胸中の感情を振り払い、背を向ける。迎撃する連中などもはや、知ったことではな

かった。

名無しはGNドライブの出力リミッターを外す。

翼のように粒子を広げて、広範囲にジャミングをかけた。

「GNフェザー、散布開始」

GN粒子による通信のジャミング。及び、視覚的な威圧を出す。

彼女に銃を向けた双子や、母艦から慌てて顔を出す機体など最早無関係。

戦えば簡単に殺せる。敵になるなら、殺す。

……でも、手を下す程の相手がいない。全部、格下。

温情を切り捨てれば、機械のように冷静に判断できる。

相手取るだけ、時間の無駄。

（相手する理由もないか……。ま、良いよね。裏切ったのは向こうだもん。わたしは悪くない）

思い込みの激しい彼女は、そのまま戦域を離脱していく。

「アリア!? ちょっと待ってよ!! アリアーッ!!」

「くっ!! 通信が出来ない……! アリアちゃん、待って!!」

可視領域から居なくなる彼女を、追うアンヌ。

然しガデラーザの広域ビームが道を阻む。

同じくマリーも阻害されている。

母艦同士の艦隊戦闘まで勃発する始末。

エースクラスの敵が突然襲ってきて彼らは混乱していた。

大パニックに陥る彼らを尻目に、どさくさに紛れて目視で確認して数名も離脱しているのに、誰も気付けなかった。

理由は言うまでもない。ガデレーザーとクロスボーンガンダムのせいだ。

怪物クラスの人間が敵となって、しかもパイロットは殺せない。

「おのれ……なんと言う厄介なことをしてくれたのだあやつは!？」

黒仮面が苦言を口にする。二機とはいえ、反応速度が違いすぎる。

仲間がいるからいいが、消耗した現状では厳しいモノがある。

「……悲しみ？　アリア、お前……泣いているのか？」

——アリア、泣いているのー。伊織、早く追い付くの!!　居なくなっちゃうの!!
「分かっていますけど、あのでかいのが邪魔ツス!!」

ミチアが、呆然としていた。伊織とアリスは焦っていた。

聞こえたのだ。悲しみが。何か、致命的な間違いが起きていると、予感させる何かを感じた。

通信は出来ない。けれど、感情は宇宙を伝って二人と機械の友人に教えていた。

彼女の、悲しみを。だけれど、どうすることも出来なかった。

マスターユニットを止めるはずが、彼女がなにかしらのかいきなりの襲撃に、疲弊していた彼らは大打撃を受けた。

マスターユニットの戦線離脱。及び、戦力強奪と反逆。

更には、数名混戦のなかで行方不明者と機体が喪失していた。

迎撃に回るなか、オーバーインパクトについて彼らが知るのは、後日。

もうひとつの母艦が、決戦と混戦による消耗と修理をするために拠点に戻り、大破した母艦を修復する際。

シンシアが、俯きながら重く暗い表情で語った時だった。

尚、その後の機体とマスターユニットの行方を知る者は誰もいなかった。

ただ、彼女は去り際に悲しみを感じていた。

二人とアリスは、仲間たちにそう、伝えていることですれ違いを起こしたのかもしれないと皆、理解していた。

あの思い込みを激しい子供のことだ。話を聞かないように途中で切断していたし、あり得る話だと。

その日より、新たなマスターユニットが着任。

彼女の名前と役目を引き継いだ、もう一人のアリア。

顔も性格も違う別人が、消えた彼女の後釜として仕事を始めた。

……ジェネレーションに、重要緊急任務が発令されたのも同時だった。

内容は、奪われた戦力の奪還。パイロットの生死は問わない、との事だった。

つまり、裏切り者は殺せと言う、オーナーの意思を表していた……。

「……」

「これから、どうしようか。僕は何でもいいよ。君の専属メカニックだからね」

「……………私には、必要ない……………」

「まあああ。僕は彼らとは違うんだ。転生してきた人間じゃない。オーナーの意思とは無関係だつて言ってるだろう?」

「……………Gダイバー?」

「そう。僕は特殊な人間。事情が事情だから、黙っているけど。あの場所は転生してきた人間の安住の地。僕には当てはまらない」

「……………ごめん、分かんない」

あれから、何日経過しただろうか。

木星の決戦から抜け出して、名無しの少女とメカニックは、どこかの世界の地球にいた。

たまたま、偶発的に起こった転移に巻き込まれて気がついたらここにいる。

……………寂れた、瓦礫の都市。小さなビルの一室に、ケラケラ朗らかに笑う少女と何もない人形はいた。

メカニックは汚れた作業着に、長い髪の毛をダウンポニーに纏めた、少年のような体型の少女だった。

彼女に裏切り上等でついてきた、日の浅い物好きな変人。ユーリ・ハイフと名乗った。こんなのがそう言えばいた気がした。まあ、もうどうでもいいが。

自らをGダイバーとか言っている変人。転生者の事も知っていた。どうでもいい。今は少女の知るところではないし。

「ねえ、何時までも名前ないんじや不便だよ。何かつけよ?」

「……要らない」

ずっと話しかけてくる。少女はあれ以来、無気力で他人を信用しなくなつた。

目には生氣は根刮ぎ奪われて、口調は常に弱々しい。

投げやりな状態に陥っていた。ユーリが居なければ死んでいたかもしれない。

……いいや。死ぬのは嫌だ。あの場所に戻りたくない。

死なない程度に適当に、何日も生きている。

「……じゃ、僕が勝手に呼ぶよ。アメリカス……は、名乗らないんだっけ?」

「自分で名乗る名前じゃない……」

「そっか。じゃあ、捨てたんだね。過去と決別したいのなら、形から入ろうよ。うーん

……」

ユーリは不便だから、新しい呼び名をつけようとする。

興味もないから、割りとどうでもいい。

「僕が知る限りじゃ、決別するにあたって、グラスンかけたり仮面を被るのが通例かな。

君も仮面被る?」

「……仮面で過去が隠せるの?」

「二応、別人だーって言い張るぐらいには。かの情けないロリコン仮面は、私はクワトロだ、って言い返したらしいし。そのあと偉い目にあつたつて聞いたけどね」

「……………」

ユーリが頻りに、オススメは仮面だと言うのだ。

仮面。確かにそんな事例は聞いたことがある。

まさか、自分でする事になろうとは……。

「……鉄仮面」

「へっ……………」

パツと思いついたのが、宇宙に咲いた真っ赤な花。

資料で見たことのある、大きな花を操る男のような、ああいうのならば。

「……………あ、ラフレシア? ああ、鉄仮面つてあの人か。つて、あれがいいの!?! 妖怪だよ一種の!?!」

概要を言うと、ユーリは悪趣味と指摘するが、被るなら全部を隠したい。

誰にも素顔どころか、なにも見られたくないから。

全てを覆つて隠してしまいたいのだ。

頑なにあれがいいと言うと、ユーリは渋々頷いた。

「……一応でも仮面は被るんだ。作れるかな……。つていうかあれもうマスクかヘルメットだよね……。で、名前はどするの？」

「好きにしていよいよ……。興味ないから」

仮面さえあればなにも要らない。

自分を守るものが欲しいだけ。

だから、仮面で全部消してしまおう。

ユーリは、名前を考えいい案を思い付いた。

「……ノーフェ。ノーフェって名乗ろうよ」

「ノーフェ？」

「そう。ノーフェイス。顔なしって意味さ。割りと安直だけど、いい感じでしょ？」

「……そう。じゃあ、私はノーフェ。そう、名乗るよ」

決別するための新たな名前。『ノーフェ』。

……ちようどいい。顔なしなら表情も感情もない。

これからは、そう名乗ろう。

少女改めノーフェは、無表情でそう、決めた。

翌日には何処からか作業を終えたユーリがノーフェの為マスクを用意してくれた。

フルフェイスのマスク。正に、鉄仮面。

頭から株って、意外と通気性とかも良好な感じに礼を言うノーフェ。

「……ん」

「うわあ……：我ながら怖い仕上がり。ボイスチェンジャーとかも搭載してるから、野郎の声に聞こえるよ」

「ふははは、怖かろう……」

「めっちゃ怖いわ！ 止めて、本元の鉄仮面と全く同じデザインと声で真似るの!!」

何か、久々に笑った気がする。鉄仮面、か。結構気に入った。

暑苦しくもないし視界も悪くない。つけ心地も最高。

「ありがとう、ユーリ。これで……忘れられる」

「いいよ。僕は君が一番可能性があると思うてついてきたんだ。頑張ろう、生きていくために」

接点のない彼女が、裏切ってまで期待する可能性。よく分からないが、感謝はしてる。

いく宛のない根無し草。嘗てはマスターユニットと呼ばれた彼女は、仮面をつけて生きていく。

彼らの知らない、遠い世界で……。

顔なし名無し

ノーフェ・ネームレス。それが、ユーリによって与えられた名前だった。

顔なしに名無しときたか。纏めて失った彼女からすれば、これぐらいでちょうどいい。

(……)

この世界は随分と荒廃している。

生活を始めて一ヶ月。生活の基盤は徐々に出来つつある。

この世界には、バルチャーとかいうならず者がたくさんいた。

古い大戦で地球が壊滅し、宇宙に逃げる術を失った世界で、死にかけの地球を食い荒らす秃鷹。

MSや揚陸戦艦を所持して、小規模にしては中々の戦力で好き勝手に野放しにされて

るとか。

「ま、おかげで僕らも好きに生きられる。良かったね、ノーフェ」

「……」

二人は悪党であるバルチャーを客と想定した修理専門として生きていた。忘れたい、捨てたいとは言え知識はある。

MSの改造や修理は、ノーフェやユーリのこの世界に根付くためのスキル。

互いに大抵のものは修理できるのだ。そりや、己だけでも生きていける。

「すげえなあ、嬢ちゃんたち。うちで雇いたいぐらいだよ」

陽気なパイロットが笑っていた。ここら一帯は割りと出土品としてMSの発掘が盛んな地域だと聞く。

この世界におけるMSは掘り起こすものであり、新造は稀だと聞くし、ガンダムに至っては高級品。

様々な世界の機体が発掘されるゆえか、豊富な知識がある二人は結構稼いでいた。

ガンダムは持っているだけで狙われる。故に、二人は機体を隠している。

幸い、GNドライブという便利な動力炉をもつOガンダムがいる。

エネルギーに変換する機械さえ出来れば、あとは解決できた。

ユーリと頑張つてあれこれやって、生活に必要な変換の機械も作った。

ついでに、ジャンク品をかき集めて互いに自分の機体も作り上げた。再生品にしては上出来なものだが、やはり厳しいものがある。

「これ、出来上がったけどどうするか……」

汗だくになって作り上げた機体も、盗まれたり壊れたりしたら意味がない。外で夕方、組み上げていたユーリを気だるそうにノーフェは言った。

「……売れば？」

「売るのは！」

どうしても良さそうに、ノーフェは仮面で見上げる。

表情はなく、文字通り鉄面皮。

ただ、動作はやる気に乏しく声もどこか億劫そうだった。

「……これぐらいならパーツさえあれば何度でも作れる。高値で禿鷹に売り付けられたい……」

「そうだけど。代わりの機体はどうするのさ？」

「……さつき、闇市で珍しく壊れているけどガンダム売ってた。……買えば？」

「高級品なんですけどー？」

「……お金なら、はい」

ノーフェは近くにおいてあった袋からなんと札束を無数に取り出した。

ユーリ驚愕。なんであんな大金を持っているのか。いつの間にか。

個人で稼ぐなら、好きにしたいとは言ったし、そう言えばいつも夜は居なかった。

まさか、ならず者相手に良からぬ商売まで……!?

「……殺しあうのは、得意だから。用心棒と、あと強盗の仕事で……稼いだ。全部あげる……」

自分で稼いだ大金もノーフエには必要以外は欲しくもない。

惜しみ無くユーリにあげた。

いわく、大きめのバルチャーに夜襲参加で雇われて、とある有名組織に襲撃をかけて、機体を強奪したのだという。

成功報酬として、高級品を丸ごと買える程の大金を手に入れたという経緯だが。

「何処に襲撃をしたの?」

「……………」

ふいっと、顔を反らした。無言のまま、次に進まない。

嫌な予感がした。

「ちよ、まさか……!?!」

「……………」

そのまさかだったようだ。

こいつ……自分が嘗てはいた組織の一方に躊躇いなく賊に紛れて襲撃したらしい。そう。

来て早々、運悪くもう一方の護衛の仕事をしていたジェネレーションと遭遇した彼女は、憂さ晴らしと怨念返しを込めて敵対。

機体の強奪に手を貸していたというのだ。

問い詰めると、小声で一言いった。

「……。だって、お金になるから」

金になるから平気で襲うというのか、こいつは。

割りきりが早すぎる。復讐もあるのだろうか……双方を詳しく知らないユーリには判別できない。

成功するわけがないと言っていた彼らも、大金積んで頼んだ怪しい仮面の子供と共に行ったら大成功。

七機近くの新品を奪ってきたという。ジェネレーションからしても、奪ったのは異世界の量産型。

痛手にもならないとノーフェは言うが立派な反逆である。

本人は最早未練もない様に言うが……やはり、復讐はするつもりらしい。

しかも、多分練度の低い自分の居なかった、ユーリが配属していた方だ。

新米の多い方を数の暴力で襲って、機体をいつくか掠め取ってきやがったのだ。

彼女が乗れば大抵動かせる。陽動をしているあいだに忍び込み、回収して合流したとか。

元々は所属していた組織。構造はよく知っているし、内部の人間事情も把握している。

「……ねえ、戻る気ないの？」

「ないよ。あつちから縁切りしたんだもん……。お礼参りして何がいけないの……？」

ノーフェのなかでは裏切り者は組織の人間。

同時に、オーナーには復讐する気はないが、現場の人間は……顔見知りならば殺す宣言をした。

知らない人間ならば別にいい。だって、ノーフェを見捨てたのはソイツじゃないから。

彼女が憎んでいるのは、自分を切り捨てた知り合いや同僚。

あんなに一生懸命やったのに、仇で返された。それが許せない。

「……だから、知り合いは……殺す。殺そうとしたんだ、文句は言わせない……」

そう、告げた。ノーフェは同時に言う。

自分の後釜と精々仲良くやっていると。マスターユニットは、組織における隊員のための消耗品。

彼らのために尽くすため、存在する単なる道具。自分は所詮、お人形に過ぎないと。

「……私は、人形で良かった。それで、みんなが生きていければ……。でも結局、全部台無し。あいつらが私を邪魔だから、銃を向けた。殺そうとして来た。それだけで、十分……」

(……ああ、そう言うことか。ノーフェ……アリアさんは、暴走していた記憶がないんだ。それで、止めようとしたみんなが自分を裏切ったと思い込んで……。多分、話を聞かなかつたんだろうな。僕にも分かる。致命的なスレ違い。これは、修復は無理かもね……。ノーフェはもう、温情なんて持ち合わせていない。あるのは、憎悪だけ)

これだけで、NTのユーリは気付いた。これは、悲しいスレ違いと思い込みによる悲劇だと。

彼女が暴れている記憶がないのは聞いていて理解した。

彼女は既に踏ん切りをつけている。殺すと、決めてしまっている。

今さらユーリが説明してもそんなことはないと思う。突っぱねて意味がない。

これは、直接皆に誤解を解いてもらうしかないようだ。

彼女は、クローンゆえに幼かった。完璧を強いられている人形だったから、戦闘用と

しては完成している。

然し、人間としては未成熟。幼い子供による思い込みが、憎悪に変わりここまで来ている。

ノーフェは頭が固いから、何をいつても無意味であろう。クローンという命の悲しい性。

「……そうだね。好きにすればいいと思うよ、ノーフェ。うん、思うままにやりなよ」

それしか解決方法はない。話を聞かない人間には言うだけ無駄。

分からせるには、物理でいくしかない。でもユーリにはそれが無理。

（そう。可能性を感じる理由が分かったよ、ノーフェ。君はまだ、幼い。でも……ここが分岐点だ。君が戦うだけのマシンとなるか、人間になれるかの、ね。僕が知るクローンや強化人間は大抵、死んでしまったけれど。君は死ねない。死ぬことすら許されない。君は誰よりも強すぎるんだ。だから、生きるしかない。見せてほしいな。君が選ぶ選択肢を。僕は、僕の目的の為に……君から学ばせてもらおうよ。強化人間の……新しい可能性。生きるという未来を）

強化人間の結末は大概悲惨なものであり、死ぬことが多い。

然しノーフェは強すぎる。死ぬという前提が覆っている珍しい存在。

ユーリにはユーリの目的がある。ただ、人形として生きるマスターユニットには興味

などない。

意思を持ち、己の感情を持つて、生きるクローンとして、ノーフェに目をつけたのだ。あの暴走による一件で初めて、誰かの言いなりにならずにノーフェは感情を見せた。それまでは、オーナーという存在の傀儡であり、言い方は悪いが道具だった。

それで本人も受け入れていた。然し、勘違いから始まった此度の事は、ノーフェの意思だ。

復讐か。大いに結構。その果てを見たいユーリには、ついてまでだ。

「……あいつらは全員殺す。特に……アンヌとマリーだけは……この手で……」
誰を言っているのか、よくわからないが……多分、一番憎んでいる相手だ。

ユーリは思う。今は、ありきたりのクローンによる復讐劇の一端。

これが、どんな結末を迎えるのか。今からしつかりと、学ばせてもらう。

その為に、ここに居るのだから……。

一方、ジエネレーションでは。

新しいアリアが、張り切って皆に指示を飛ばしていた。

「頑張つてやるわよ！」

落ち着いていたアリアとは違い、澆刺としてよくしゃべる。

物静かで冷静だった彼女とは違い、喧しく感情的。

ピンクの長いドリルを巻いていた子供とは逆で、真つ赤なロングヘアの大人びた少女。

冷酷で思い込みが激しいのとは対照的で、キレやすいが話はよく聞いている。

全てが真逆のアリア。皆は困惑した。

なぜ、こんなにも早く……新規のマスターユニットは現れたのか。

不信感を抱いているのは、捕虜として決戦に参加し、事情が今一つ飲み込めないスズキ。

この対応には正直言うと、嫌悪感を感じていた。

幼い少女が懸命に尽くしていたのに……呆気なく処分しろと平然と命じるオーナーに。

要するに、オーナーはアリアを道具として扱っていたのか。いくら何でも、それは酷

すぎる。

軽すぎる。アリアという存在を、なんだと思っている。

確かに接していた時間こそ少ない。然し、だからこそ思うのだ。

此度の一件、スズキ程度ですら違和感があるのに……なぜ、殺せと命じる必要がある。恐らくはオーナーとやらは気づいているのだろう。何かしらトラブルによる反逆だと。

それを直ぐ様亡き者にしろとは、極端すぎる。

ここは裏切り者は殺す。鉄則だと聞いた。しかし、マスターユニットですらそれなのか。

説得という選択肢をなぜ与えない。前例を認めると鉄則が意味をなさないからか。

オーナーを慕っていた前のアリアを簡単に切り捨てて、断罪しろと彼らに命じるぐらの価値しかない。

転生したもののたちの居場所。その心意気は立派だろう。

転生したものは居場所がないのだろう。経験で知っている。

生前の記憶と感覚が邪魔をして、戦場で何度死にそうになったか、覚えていない。生きにくいのは間違いないのだ。この居場所は確かに有難い。

転生のことを言うな。それは、オーナーも広げられたら困る。

アリアが言ったことで、黙っていても周囲は自分と同じだと思い、少しは気が楽になったのも事実。

気を使わずに済むと思うと、色々力は抜けたのだから。

その為にまるで、マスターユニットは都合のよい単なるパーツのようなぞんざいな扱いをされる。

なぜ、周囲はそれを当たり前と受け入れる。おかしいとは思わないのか。

本人もそれを疑わない。まさか、とは思う。過去、ジオンで見たことがある。

(……思考制御の類い……?)

いや、違う。思考制御するのならば、反逆などそもそも起こさない。

ならば、予感通り道具扱い？ 本人もわかった上で、生きている？

だとするならば。

これは、許される問題ではない。どうにかしたい。

嫌なものを思い出す。量産されたクローン。戦闘用の幼い少女たち。

(……よそう)

考えるだけで、頭痛がする。スズキのトラウマに近い光景を思い出す。

近い状況があるとして。スズキに何ができる。

単なる隊員である彼にはどうすることもできない。

無力さを痛感する。自分とて、死にたくはない。然し……納得もできない。

ミチア達も言っていた。悲しみを感じたと。ならばこれは、悲劇なのかもしれない。

(……。ザクを新調してくれた借りは……まだ、返し終えていない)

彼女には散々な目に遭った。ケツの穴を犠牲にされそうになるわ、散々脅されるわ。

然し、行き場のなかったスズキに生かす場所を与え、生きる力を与えたのは組織かも

しれない。

でも、結局実行したのはアリア。

ここにいるアリアではない、もう一人のアリアなのだ。

礼を言うのならば。彼女ではない。前の彼女一人。

(……。……一人じゃ何もできない。でも、他の人にも……聞けば……)

スズキは思う。アリアは何だかんだで、一定の信望は持っていた。

今、彼らが思うことはこうだと信じたい。

目の前にいるかりそめの存在ではなく。

あの思い込みの激しい、小さな少女こそがアリア・アメリカスなのだ。

説得したい。説明したい。誰も、彼女を殺そうなどと思つたことはない。

だって、スズキという新人ですら周りを見て、分かるのだ。

明らかに士気が低下している。みな、何が原因なのかを必死に考えている。

つまり、こう言うことだ。

(……その命令に……従うことはしたくない……と思っっているのかも)

彼女に戻ってきてほしい。円満に解決したい。

意気消沈する皆は各々忙しい。

自分を責めるもの。原因究明のために動くもの。

ただ、激しく落ち込むもの。現実逃避を始めるもの。酷いものは諦めてさえた。

冷静に見て、彼らの意思を統一できそうなのは捕虜だったスズキたちジオン組ぐらいなもんだった。

(……出来ること、あるかも)

チャンスがあるなら、行動したい。スズキは、借りを返したい。

新米だろうが何だろうが、アリアと話す機会はあるといい。

諦めるには少し、早い。

スズキは動き出す。まずは、話を聞いてくれそう……ミチアあたりに、接触しよう。

この動きが、次第に大きな波になることは、まだ新しいアリアは知らなかった……。

瓦礫の世界で

MSはパーツで売られていることが多いこの世界。

発掘しても壊れていたり、破損していたり当たり前。

然し、ノーフエが購入を検討し、促した機体は何と内面が少し故障してただけで、外装はほぼ無傷だった。

補給して修理すれば、簡単に動き出したのだ。

「何だろう、この機体は。僕も見たいことがない……」

ガンダム、とノーフエは言っていたが……。

見た目は宇宙世紀の機体とは異なる意匠。

然しフェイスタイプや武装はガンダムと同類というよく分からない機体である。

「……トルネード」

塗装がされていない、灰色のガンダムを見上げてノーフエは小声で言った。

彼女はこの機体を知っている。

「……………えっ?」

「トルネードガンダム。……………このガンダムは、そういう名前」

購入してきた翌日。晴天のなかを直していたユーリに告げる。

いわく。

「……………この機体はね、迷子。たまにオーバーワールドの廃棄工場とかで見つかる、型式不明の機体。大抵、稼働状態がいいから、そのまま実戦に放り込まれるけど。多分、ジェガンとかと同レベルの量産型のガンダム。……………非常に高い技術水準で製造されているけど、長持ちと空戦能力以外は、目立った長所はないよ。いつ、どの時代、どの世界で何のために製造されたかも分からない……………」

迷子と表現する彼女の言う通り、トルネードの中にはデータなどは残っていない。

最低限のOSと、最低限の武装。それだけの物であり、特色はない。

「……………成る程。オーバーワールドだからこそ、存在する機体か……………」

何処の世界から流れ着いたのかも定かではない謎の機体。

使えるなら使う。ユーリはシミュレーションを試しに動かしてみる。

一応動くが……………これさえ最低限。然し逆を言えば、新米でも扱いきれるとも言い切れる。

「これ、僕が使うよ。構わない?」

「……勝手にすれば」

トルネードを購入したユーリの愛機となった。

元々持ってきていた機体、レコードブレイカーは武装を持ってきておらず、機動性こそずば抜けて高いが戦えない。

後で自作するか購入を検討しないといけなかったのだ。

「……あ、作った機体はどうする？」

「売る」

「ですよねえ……」

不必要なら売ってしまったえがスタンスのノーフェ。

折角作ったザクとグフが、翌日には売りに出された。

然し、そこそこ纏まった金が入り、ユーリは上機嫌だった。

対してノーフェはいつも通りの無気力。

「……仕事いつてくる」

住まいの近くにある地下格納庫に入っていた彼女は、ユーリに一言告げて機体に乗った。

フェニックスのコックピットが開く。彼女はスーツに着替えて、座り込んだ。

「んあ……仕事？」

早朝の時間に、音に気付いて欠伸を噛み殺すユーリにノーフェは。

「……用心棒。雇い主があいつら見つけたらしいから、ぶっ殺してくる」
「げっ……」

あいつら。多分、ジエネレーシヨンの連中か。

またこの世界に訪れていたらしい。

ユーリは一気に眠気が吹き飛んだ。彼女はやる気になっている。

「僕も出るよ。トルネードの試運転に付き合う」

「……いいけど、邪魔しないで」

「了解、善処する」

ノーフェはそういつて、少しハッチを開いたまま待つていた。

その間に、ユーリは気になることを彼女に投げ掛ける。

「いいの？ フェニックス使って。バレルよ」

「……いいよ。どうせ、私が奴等を殺すことに違いないし。もう、設定変えたし。……私以外には、言うことを聞かなくした。後釜やもう一人が奪うこともできない。悪魔は、私のもの……」

フェニックスはアメリカスにしか従わない。

名を捨てても、フェニックスとハルファスはノーフェに従っている。

ノーフェが言うには二機には自我らしきものがあり、相応しくない相手が搭乗すると動かなくなると言う。

下手すると勝手に動いて、ソイツを殺しにくらしい。

彼女の存在がバレても、ノーフェは構わない。そう言う。

「分かった。じゃあ、行こうか」

機体の準備は整えた。発進準備は完了した。

二人は、格納庫に設置されているエレベーターに機体を乗せた。

勝手に使っているこの施設だが、埋まっていた何かの軍事施設のあとらしく、しっかりと修理すれば辛うじて生きている。

エレベーターも通電すれば、使用できた。

地上が見える。二人は、癖になっていた眩きを漏らす。

「じゃ、やろう。ユーリ・ハイフ。トルネードガンダム、出撃する！」

「……ノーフェ・ネームレス。フェニックス。出る」

この日。瓦礫の街に、竜巻と不死鳥が出現した。

うってかわって、ジェネレーションの母艦。

時間は少し、遡る。早朝と言えない早い時間。

けたたましい警報が母艦に響いていた。

ならず者、バルチャーが停泊していた母艦に襲撃してきたのだ。

先の強奪で機体をいくつかつかつかさらって、味を覚えたのか今度は実戦部隊の方を狙ってきていた。

パイロットたちは叩き起こされて、慌てて支度をしていた。

「……来たか」

「らしいですね。つたく、チンピラ風情が……」

「ぼやくな。敵に此方の事情など関係ない。やることをするだけだろう」

野郎トリオ、ヴォルフ、ヴァイス、黒仮面の三人は小言を言いながら機体に乗る。

生憎、機体は整備中に出払っている。

久々に黒仮面は陸戦ジムに、ヴァイスはハイマニューバに、ヴォルフはユニオンフ

ラッグに乗る。

汎用性を重視した結果だ。ヴァイス以外は格闘特化。いくら何でも均衡が取れない。迎撃に、新米も駆り出されている。決戦で失った損失を補充した結果、結構な新人が増えた。

中々延び筋はいい。隊長に任せて、彼らは機体に搭乗する。

この世界はかなり先の未来だと聞いている。文明の荒廃した壊れた地球。

そこで逞しく浅ましくズル賢く生きてるのがバルチャーだ。

連中は基本的に、適当な量産型に乗って戦う。パイロットの質は悪くないが機体が悪い。

それに、ジェネレーションを狙う理由は機体ほしさだ。お宝集団とも思われているのだろう。

「チツ……」

ヴァイスは荒んでいる。アリアが居なくなつて以来、ちよつとしたことで直ぐに舌打ちしている。

理由はシンプルだ。彼女が違う彼女になつたことで、正直やりにくいのだ。

今のアリアはキレやすい。それが、普段こそ温厚で真面目なヴァイスとはノリが合わない。

なんと言うか、すぐに文句を言つて難癖をつけてくる相手は嫌いだつた。

やれ回避が鈍いだの、やれ連携が取れてないだのと口うるさい。

言われずとも未熟だと自覚している。仲間に窮地を救われることも屢々ある。

それをグチグチと、横からねちっこく言ってくるのが鬱陶しい。

今のアリアはただ、余計な世話をする。断るとキレて文句を言う。

要するにウザい。だから、苛立つ。

(……あの子の方が数倍良かったのにな……)

前のアリアはあまり干渉せず、成り行きを見守つていた。

肝心なときだけ救つてくれる。お膳立てはするから、後は自分でやれと言う。

自立を促す彼女と違い、今のアリアはダメなら自分がやると言い張つて聞かない。

自立する機会を潰してくるのだ。

(はあ……。何だかんだ、俺の機体も新調してくれたし。ノリはあつちの方がずっと良かったな)

出来ることなら、戻つてきてほしい。多分状況からして、仲たがい何かだとヴァイスは思う。

彼女はやり方に口出しせず、共に歩くような存在だった。

無理矢理手を引いて歩かせる流儀ではない。世話焼きはヴァイスが忌避する相手の

やり方。

確かに話は聞くが、そこからヴァイスに与える情報を勝手に狭めて余計なことをする。

まるで、お節介な母親のよう。ウザったいことこの上ない。

ヴァイスはそんな、何から何まで世話を焼かれる腰抜けではない。

それでも、アカデミーを卒業したパイロット。仮にも一人前を要求されるハズの間。

まだまだ未熟であるのは重々承知しているが、ガキではないのだ。

自分の戦いぐらい、客観視できる。

ため息をついて、彼はハイマニューバの座席に座った。

で、ヴォルフはというと。

(……やりにくい)

あれこれ構ってくるアリアに対して、苦手意識を植え付けられていた。

以前のような此方をしつかり把握しているのは代わりない。

然しそのぶん、妙に心配性と言うか、あれだこれだとアリアが話しかけてきて困惑している。

相手は好意的に接している。邪険にあしらうと不機嫌になるし、手間がかかる。

要するに面倒くさいと思っっている節があった。もう少し、自分でやらせてくれないものか。

(俺の流儀を理解してはいるが……横槍は好きではないだがな)

機体に関しても、どうもアリアはロマンが分からないらしい。

このフラッグの空中変形も危ないから控えろと口を酸っぱくして言ってくる。

確かに危険な芸当だが、使えろと便利だしそもそもヴォルフは好んでやっていること。

今のアリアにはこういうのが足りない。以前のアリアは普通に乘ってくれたのが助かったのだが。

(……彼女は、戻ってきてはくれまいか。俺は以前の方が居心地は良いようだしなあ)

やはりヴォルフも、帰還を望んでいる一人だった。兎に角やりにくい。

口煩いアリアには手を焼くので、勘弁してほしかった。

DDはというと。

(あの女は来ないか。解放されて清々するな……)

ハッキリ言おう。嫌いだった。

あのアリアの性格は極めて最悪で、黒仮面の過去は詮索するわ、機体は勝手に弄ろうとするわ、戦い方に口出しするわ、喧しいことこの上ない。

しかも少し言い返せばすぐに不貞腐れる。

これならば、多少思い込みが激しく放置気味だったとしてもダントツ彼女の方が良かった。

必要以上に干渉せず、知らぬうちにフォローしてくれる彼女の有り難みを取り戻すことは、現在進行形で不審者と言われる彼には命題だった。

(あいつにはデリカシーという文字はないのか。鬱陶しい……。彼女を見つけ出して、何としてでも連れ戻す。これでは俺の胃が持たん)

黒仮面は、寧ろ全力で乗り気だった。

今のマスターユニットが居なくなるなら、苛立ちと不快感を消し去れるのなら、多少危険な目に遭おうとも強引に連れ帰る気であった。

彼女の方が仕事はしやすく、環境もいい。

誰がなんと言おうが、黒仮面は、前のエリアを連れ戻す。己の為に。任務に出る度を探していた黒仮面の苦勞は、この日報われた。

機体に乗って出ようとする彼らに、オペレーターから緊急の連絡が入る。

それは、バルチャーに混じって識別不明の機体と共に不死鳥、フェニックスガンダムが出現したという一報だった。

彼らは眠気を消し飛ばし、覚醒した。現れた。

彼女が、何かをするために戻ってきた。これは、好機！

話をしなければ。無理矢理にでも組み付いて、接触通信で戻ってこいと伝えてやる。

無線を切つても無駄なこと。声だけでも届けてやろうと思う。

俄然やる気になった三人は、気合いを入れて出撃した。

任務など知らない。裏切り者は始末しろ？

任務は戦力の奪還だった。生死は問わないなら、殺さず何としても彼女を……アリアをもう一度来てもらおう。

正直危険な賭けだが、実行するだけの意味はある。

彼らは主に自分の環境とストレス緩和のために。

全力で、任務に挑むのだった……。

紅き不死鳥が空を舞う

……地上を疾走する揚陸戦艦と合流したノーフェ。

様々な機体に乗せた戦艦が土埃をはねあげ疾駆する。

(……)

仕事は、ジェネレーションの母艦及び地上戦艦の襲撃、そして鹵獲。

何でも同じバルチャーの戦艦とジェネレーションの母艦が停泊しており、そこを朝方を狙って襲撃するというのだ。

別に構わない。有りがたいことに、知り合いの多い母艦が該当しているようだし、出てくるなら殺す。

出てこなくても母艦を襲ってあぶり出してでも殺す。

トルネードと共に駆け抜ける荒廃した風景は……何だか物悲しかった。

熱源を察知。停泊している母艦を二隻確認する。

(……私の気持ちを思いしれ、裏切り者)

憎い。ただ、憎い。

だから殺す。全員殺す。

理由はシンプルでいい。

ノーフェは紅き不死鳥を連れて、再び現れた。

その胸に、憎しみを抱きながら。

母艦では。

フェニックスの襲来に慌ただしく準備に入っていた。

襲ってきたのだ。敵意はある。恐らくは説得も不可能。

アリアは撃墜を命令する。裏切り者は殺せと。フェニックスはぶっ壊してもいい。

フェニックスは治癒能力を持つMS。放っておけば勝手に治す。「鉄則は絶対よ!! みんながダメならあたしがやるっ!! 同じマスターユニットだもの、勝てるわ!」

自信満々に言い張るが、周囲の視線は厳しい。

攻めてきたフェニックスにたいしての反応は区々だった。

伊織やミチアは悲壮な表情を浮かべた。

アンダーソンやリユーンは険しい顔をして考え込む。

双子に至っては、完全に目が死んでいる。特にダメージの大きい二人は魂が抜けていた。

ガルマはどこか、嫌悪を浮かべアリアを眺めている。

彼女は気付いていない。己が周囲と壁が出来ていることに。

信頼を獲得するべく、奮闘しているアリアは確かに頑張っている。

過剰に世話を焼き、死なないように手を引いて、自分の役目を全うしようと。

だが。だから、なんだ？

彼女が信頼を得ているのは決戦後に加入した新人のみ。

古参からは未だに認められてないなかつた。

彼女はマスターユニットとしての誇りがある。

自分が常に正しいと思っているから、反論されたり否定されるとキレる。

相手のやり方を聞いて、それでいて提案すると言う方法は間違つてはいない。

だが、強引すぎるのだ。提案した方法が最適と考えているし、相手にとつても良いと思う。

言つてしまえば善意の押し付け。相手の意見は聞く、受け入れる。然し採用はしない。

それ以上に自分の言つたやり方が正しく、効率良く、楽できると思うから。

自分の方法以外ではきつと失敗すると心配になり、完璧である己が常時答えを示さなければ、皆が迷つてしまうと考えていた。

周囲を子供扱いしている節は、不快感や不信感を加速させるには十分であり、士気が低下する現状では溝が深まるばかりだった。

アリアは、相手を尊重できない。するべきとも思えない。

だつて、マスターユニットは皆の道具。完璧な手本。導く指導者。

そういう役目を自負し、実行し、信頼されたい背伸びをした子供。

大人びた少女だが、中身は以前と大差などない。所詮は、未熟な子供だった。

善意の押し売りを理解せず、使命と役目を優先するから、古参から嫌われる。

その証拠が、彼だった。

「……なぜ？」

比較的日の浅いスズキですら、一方的な言い分のアリアに異を唱えた。

なぜ、アリアが相手せねばならないのか。

その問いに、アリアは胸を張って答える。完全な自滅で。

「考えてみなさいよ。相手はフェニックス。アメリアスの従者なのよ。もう、設定を変えられているから、あたしたちにも従わないのだし、あたしが行って直接やれば手間も省けるし、何よりみんな危ない目に会わずに済むでしょ？ 相手は裏切ったとはいえ、元々マスターユニット。実力が拮抗できずに死んじやうわ。それはダメ。あたしがやれば、大丈夫なもの。みんなは適当に雑魚の相手してればいいのよ」

彼女の言うことは正しい。理屈としては通っている。

だが、周囲も人間である。感情で言うなら、悪意が無くとも今の発言は傲慢そのものであった。

リーダーとして、仲間を守るとしても、言い方と言うものがある。

アリアの発言は、己の方が強い。弱いやつがイチイチ死にいくような真似は必要ない。

出る幕はないから、引っ込んでいろと言っているようなものだった。

最初からマスターユニットの自分の方が強くて当たり前と言言動が、彼らの神経を

逆撫でする。

見下していると思われるもおかしくじやないのに、アリアはそれに気付かない。こつちの気持ちを知ろうとしない。守る、という役目ばかりを優先していた。

「……話にならない。悪いけど、こつちは此方で考えて行動する。指図は受けない」
スズキはハッキリ切り捨てた。成る程、こいつには何をいつても聞く気はないと言うことだ。

最初から決定したことを告げているだけ。他の人間の意見をこの場では聞いていない。

「ちよ、ちよつとスズキ!? なんですよ!!」

「……」

分からない時点で、もう語る言葉は必要ない。時間の無駄だ。

追々、古株は散っていく。マスターユニットの決定にたいしての返答は拒否。

自分達は自分達の考えで動く。子供のように取捨選択を他人に委ねる気はない。

「なんで……? なんであたしは、あの人たちに認めて貰えないの……?」

去ってしまったブリーフィングルームに残されたアリアはずつと苦悩していた。

なぜか一部からは猛烈に反発を受けて、口論が絶えなかった。

どうして? 相手のやり方を聞いて最良の答えを出して提示する。役目は果たして

るのに。

危ないことを危ないといつて何がいけない？ 死なせないために努力してなぜ嫌われる？

「あたしの何がいけないのよ……。何も間違つてないじゃない!!」

結局分からず今回も地団駄を踏む。おかしいことは何も無い。

キレてぎゃあぎゃあ一人で騒ぐ。悔しい。ただ、悔しい。何をしても受け入れて貰えない。

うるさいとか、邪魔だとか、鬱陶しいとかウザいとか悪く言われるのだ。

一生懸命やつてるのに。何で嫌がられるのか。アリアは、鬱陶しい女なのか。

「……」

ダメだ。泣いちゃいけない。マスターユニットは手本であれ。それが使命。

子供みたいに泣いたりしない。アリアは立派なマスターユニット。先に行くものとしての意地がある。

ぐすつ、と半泣きを堪えて駆け出す。反発してでも守るべき存在である以上手抜きはしない。

「絶対見返してやるんだから……」

何がなんでも認めさせてやる。前任よりもずっと良いマスターユニットだと。

裏切ったり暴走したりしない、一人前の人間として。あいつらを見返してやる。

オーバーインパクトを起こし、敵機となったエースをぶつけて足止めさせるような汚い女には負けない。

大体、なぜオーバーインパクトの真実を知っても尚、彼らは裏切り者の肩を持つのか
アリアには理解できない。

裏切りのコードをもつマスターユニットを信用できるのか。

正解はみな、信用できる。詳細を知らなかったのは、言う必要性がなかったからだ。

シンシアは、説明しているときにこんなことを言っていた。

「……アリアは、きつと言わなくても大丈夫だから、教えなかつたんだよ。自分がこんなものを使わなくても一緒に戦えるから。秘密にしていたってことじゃないと思う。単純に言わないでも良かっただけの話」

裏切りのコードのことは、説明しなくても使う機会が無ければいいだけのこと。

率先して言う理由もなかったと、シンシアは言う。

でも、結局使ってしまった。彼女が何を感じたのかは憶測でしかないが、勘違いではないかと皆思う。

あのあと、ガデラーザ及びクロスポーンは破壊できず、双方消耗しながら捕まえた。

ガデラーザのパイロットは失神しており連邦に帰され、ガデラーザは太陽炉が壊れて

破棄されてしまい、ジェネレーションで引き取った。

クロスボーンのパイロットは機関部を破壊され停止した母艦を修理したのち、詫びとして機体を置いていった。

本人にはF91が残っているので気にしないと云っていた。

オーバーインパクトによる死人は出ていない。不幸中の幸いだった。

彼女が戦えば殺しに来る。敵には一切の情けをかけない女だ、全滅もあり得た。

悲しみを感じたまま去ってしまった彼女は、今は何を思っているのかは分からない。

然し、怒りや憎しみを思い込みで感じているとしたら。復讐を選んでいるなら。

まだ、修正は出来ると信じたい。元々、双方に敵対の意思なんて無かった。

不幸のすれ違いが生んでしまった現状ならば。皆は基本、そういう考えだ。

アリアとじゃ、考えが違いすぎるし、重ねてきた時間も違う。

後継のアリアは悪い子ではない。ただ、前を知る人間は前を選ぶ。

オーナーのやり方に要するに反発している。そう言うことだった。

ムカツときたアリアは自分も出撃する。負けてたまるか、裏切り者は自分が殺す。

確かにフェニックスやハルファスは手元にはない。でも、コピーなら存在する。

(見てなさいよ、裏切り者！)

彼女も足早に格納庫に向かった。絶対に仕留めてやると、意気込んで。

母艦を発見した。

既に防衛のために、大量の機体が待機していた。

『野郎共、狩りの時間だアーツ!! 機体はいただきだぜ、ヒヤツハーツ!!』

(世紀末……)

背後でバルチャーの生き様を眺めるノーフエ。

ハイテンションで我先にと突っ込んでいく。

襲う相手が相手なので、ノーフエ含む連合のように結構な戦艦が二隻を取り囲んでい

る。

MSも相当な数を揃えていた。ざっと50ぐらいはいる。

雇い主が知り合いを片っ端から呼んできたと言っていたのでそのためだろう。

『ヒヤツハーとはまた、酒好きの誰かを思い出すなあ。帰ったら一杯どう、ノーフェ?』

「……私は未成年。お酒飲めない……」

『冗談だよ。勝利のコーラで祝杯しようか。あ、サワーはいらないよ、不死身のあの人と違うから』

「……あいつもそう言えば相当強かった。連れでいるのはガンダムの変態だったけど……」

『ハム様の陰口はそこまで。……確かにヤバイけど、あの人のガンダム愛』

軽口を叩きながら二人も適当に発進。

現在、まだ小競り合いの最中だ。

セプテムとジェニスが銃撃戦を下で広げ、戦艦同士の撃ち合いも始まった。

ノーフェはガンダムタイプの迎撃と、エースの排除。

後ろで支援しつつ要請があったら、加勢しに行ってくれとのこと。

「……」

まだ、奴等が出てこない。

邪魔な雑魚が、下で攻撃をしてくる。

流していれば当たらない。下手くそなくせに、前に出てくる。

あまりにもしつこいので少し、遊んでやる。ノーフェは動き出した。

上空で高みの見物をしていたが急降下。トルネードも慌てて続く。

『ちよ、早い……！』

加速性が、フェニックスはトルネードよりも高い。追い付くので精一杯だった。

軽く飛ばして、下で無駄撃ちしている機体に、上空を旋回しながら両手にビームライ

フルを構える。

制空権を奪ったまま上から、的確に殺すために攻撃開始。

上昇してくる機体から撃ち落とす。

トルネードも真似して撃つが、狙いが甘く回避される。

素直すぎる狙いじゃ当たるものも当たらない。

『ごめん、ノーフェ！』

「……」

援護を、と言う前に既に撃っている。

シールドごと貫き直撃し、爆発。

啞然とするユーリ。火力が凄まじい。

まさか、シールドを貫通して破壊するとは。量産とはいえ、抜くあたりビームの収縮率が高いのだろう。

「……」

目標を感じて、指を動かす。

詰まらない作業。イチイチ操作するのも面倒になってきた。

操作系統を切り替え。フェニックスのサイコミュに脳波を接続、感性操作にチェンジ。

頭で操作した方がやはり楽チン。より先鋭化した操作は、直感によって機体を操る。動きは更に速くなった。ライフルを連射、乱射。全発命中、爆発。

彼女に仕掛けた敵が漏れなく壊滅した。

(うわあ。皆殺しか……。本当に迷いの欠片もない。しかも退屈そうにしてる)

モニターで繋がるユーリが見るのは眠そうにストレッツしてるノーフェ。

暇そうにしているが、絶賛変態機動による敵機の殲滅を行っている最中だ。

全然戦闘に集中していないのに、面白いように敵機は減っていく。

その大半がジェネレーションの機体なのに、一切の加減をしない。

邪魔するから殺しているようだ。あの仮面だと、本家鉄仮面さながらの残虐行為。

カロツゾのラフレシアプロジェクトをみている気分になる。

(そう言えばボイスチェンジャーの設定、カロツゾにしているのにノーフェ、嫌がらないよね……。何でだろ)

今頃だったがずっとノーフェの口調でカロツゾボイスになれている自分がいる。

言われた通りに仕上げたけれど、ノーフェはカロツゾに何か感じるものでもあると言うのか。

恐らく類を見ない狂人だとユーリは思うが、ノーフェにはカロツゾという人物は違う風に見えているとか？

『……スゴいでしょ、フェニックス』

不意に、ノーフェはユーリに話しかける。

ユーリはフェニックスも知らない。こんなガンダムはこの世界を探しても見当たらない。

知っているノーフェは、鉄仮面で言った。

『……強いのは当たり前なの。こいつら、悪魔だから。ハルファスも、フェニックスも、私の下僕』

「意思のあるMS……興味はあるけど、止めておくよ」

勝手すれば、殺されかねない。

ユーリはそこまで愚かではない。大人しく止めておこうと身を引いた。

ノーフェは語った。ジェネレーションには、フェニックス及びハルファスのデットコピーが存在し、他の人間にも時々貸し出していたと。

『……そのデットコピーが、どうやら私に用があるみたい。出てきた、後釜の奴と……あいつら』

ノーフェが一気に殺気立った。お求めの奴等が出てきたと告げる。

やる気になって、彼女はフェニックスを加速させる。

後ろについていくユーリに、邪魔はするなと警告した。

邪魔立てすると、ユーリも攻撃すると脅して。

『脳波コントロールしてるから、気配だけですぐわかる。邪魔しないでよ、ユーリ』

「はいはい。……僕は取り巻きの掃除でもしてるさ」

おつかないことを言うノーフェに苦笑いしてユーリは言った。

やりたいようにさせておけばいい。彼女はもう、止められない。

復讐の鬼となった彼女のやり方、学ばせてもらおう。

背後で控えるトルネードガンダム。眼前に、嘗ての仲間たちが向かってきていた……。

対立の加速化

派手にドンパチやっている戦場で。

掃討を終えた二人に、エースの集団が襲いかかる。

「……コイツら、こっちで引き付ける。ホバートラック用意して、部隊を送って」

ノーフェは、雇い主に一報を送る。

目的は無傷の機体だ。これより、陽動を開始。

母艦の外壁に穴を開けて、ホバートラックで突っ込んでいったパイロットが中で白兵戦を仕掛ける。

その隙に機体を強奪する手筈になっている。

雇い主が指揮する陸戦部隊が高速で飛び出していく。

護衛や援護をかねて、相手の足止めを行わないといけない。

『見つけたわよッ!! コンのオ、裏切り者がアッ!!』

た。ジム頭の青い機体が、ホバートラックから離れて突っ込むフェニックスに食いついた。

なんか、パイロットが激昂している。怒りを感じて、ノーフェはユーリに告げる。

「……下がって」

了解したユーリが後方に引き下がる。

こいつは例の後釜。

マスターユニットだ。怒り狂って自分一人で突っ込んでくる。

後方に仕留める相手がチラホラ見えるが、先ずこいつを始末しないといけない。

仮にもマスターユニットだったノーフェ相手に先行して単機で挑むとか愚かすぎる。

協調性もないらしい、新しいマスターユニットは。

両手のライフルを連射して、突撃してくるのを避けつつ、適当に引き剥がす。

オープンチャンネルで叫ぶアンポンタンなど、見たことがない。

周囲には目をくれず、フェニックスに狙いをつけていた。

空戦を開始する。可変でもない単なるデッドコピー。性能はオリジナルには到底及

ばない。

同じマスターユニットでも、ここまで直情な場合は本気を出すまでもない。

肩からミサイルを発射。追尾してくるのを、逃げ回って引き剥がす。

後方についたミサイルは、スラスターを兼ねるメガビームで迎撃。ライフルも同時発射。

ビームがミサイルを叩き落とす。本体は相変わらず乱射して狙っているが全部回避。流星はマスターユニット。狙い自体は上出来だ。然し反応速度を越えられない。

面倒な追いかけつこに発展した。

(フェニックス・ゼロ……。ファンネルの代用に追尾ミサイルを積んだ？ でも、意味はない)

ゼロと名付けられたデッドコピーは、確かに簡易量産型としては優秀な部類になるう。

だが、オリジナルたるフェニックスには遠く及ばない。

ナノマシン装甲と呼ばれる自己修復もつかず、ファンネルも使えずサイコミュも積んでない。

そんなオモチャで何ができる。ガンダムは伊達ではない。

『待ちなさいよ、この姑息なバカ女！ どの面下げて戻ってきたのよ、ウスラトンカチ！』

イチイチこつちを拙い罵倒で罵ってくる。

ノーフェは無視しているが、大声で戦場に己の悪口を言い触らしているこの女は鬱陶

しい。

我慢しつつ、お仕事続行。自分の復讐もそうだが、先ずは依頼を遂行する。冷静に行動していく。が……。

『逃げるなっっていつてんでしようが！ 戦いなさいよ、逃げるしか出来ないの!?!』
段々イラついてくる。今すぐ殺してやろうかこのうっさいマスターユニット。

我慢、我慢とノーフェは言い聞かせる。

冷静になろう。クールに戦うのがノーフェの流儀。

取り乱すなんてしない。余裕あつてのノーフェだし、相手は所詮デッドコピー。すぐに落とせる。今は時間稼ぎしなければ。

優先順位は、お仕事。昔からお仕事は大切。

信頼は日々の成功から、などと考え己を落ち着かせている。

正直、ムカつく。すっごい、ムカつく。歯軋りするほど腹が立つ。

ウストラトンカチとか初めて言われた。

(……)。私はノーフェ・ネームレス。アリア・アメリカスは返上した、捨てた名前。あいつの名前であつて、私じゃない。私の悪口じゃない。私の悪口じゃない……)

ノーフェは因みに、過去に周囲から罵倒された経験はない。

そこそこ、しよっちゆう思い込んでいたが、あの頃はまだ仲良くはやっていた。

辛辣な口調で口は悪かったが、覚えのない中傷はしなかった。

自分で見たことしか言わなかった。そう、心がけてきた。

周りもお説教やたしなめることはしても、悪口は言わなかった。

そんな子供じみた事をする年齢でもないのもあった。

ついでに追記すると、同じような年齢でもみま精神が大人びておりここまで子供じみた事をするやつもない。

人生で初めて、精神年齢の同類から罵られていた。

人生初の口喧嘩である。

マスターユニットほどになると明確な嫉妬などはあっても、こんなバカとかアホとかの適当な誹謗はない。

要するに。ノーフェは、相当に未だ幼く、煽られ耐性はめっちゃ低かった。

『卑怯者！ 腰抜け!! 悔しかったらかかってきなさいよバーカツ!!』

(ツ!!)

ブツツ！ と良い音をたてて、ノーフェの……いや、アリアが久々に怒った。

堪忍袋のなんとやら。阿修羅すら凌駕する女の逆鱗に触れた。安い逆鱗であったが。

この瞬間は、間違いない憎しみを忘れた。お仕事も忘れた。悲しみも忘れた。

バカって言った。顔も知らない後釜がバカって言った。指名してバカって言った！

何も知らない、赤の他人がアリアの事をバカと罵ったのだ。

(……殺すツ!!)

キレた。キレイに、確実にキレた。

何にも知らないくせに。凄く悲しかったのに。凄く辛かったのに。

こいつは、失ったアリアの居場所に滑り込んだ何も知らない他人の癖に。

偉そうに、仲間にもまれて、悠々と生きているこの女が、アリアを貶したのだ!

(私が……わたしが、どんな気持ちだったかも知らないくせにつ!! 何を偉そうに糾弾しやがりますかこいつは!)

この刹那、ノーフェはアリアに戻った。

返上した名を継ぐアリアを殺すべく、アリアは急旋回。

そのまま急加速。追ってきたゼロに突貫する。

『うええ!!』

怯んだのならちようどいい。このままぶつ殺してやる!!

急速変形。液体金属流出、機体コーティング完了。

摩擦熱で炎を吹き出し、紅蓮を纏うガンダムを死に際に焼き付けさせてやる。

これが、このガンダムの名前の由来。不死鳥の翼!!

パチモンには使えない、悪魔の力!!

そして、一瞬だけ仮面を脱いだ彼女は、そんな言葉を吐き捨てた……。

その様子を、隊員たちは。

ああ、あれは間違いなくあのアリアだ。

目の当たりにした誰もが納得していた。端から見れば、罵られてフェニックスが反撃。

我先と突っ込んでいったバカが死んだ。そんなだけのこと。

死んでも関係あるまい。マスターユニットはクローンだ。

またどうせ、復活するだろう。無視していい。

此処からが問題だった。阿呆は退場なされた。

バルチャーが母艦に向かって攻撃を仕掛け、ホバートラックが突撃しているのを一名が発見。

排除するも、数で負けている此方は圧倒的に不利。

停泊している母艦には機銃はあっても、下からの襲撃には備えない。

あくまで防空。防衛には黒仮面やヴァイスが当たる。

本当は突撃したいが、母艦のMSを狙う強盗が、整備中の自分の機体を奪っていくと
思うと前に出られない。

「ええい、ムカデかコイツらは!!」

DDは怒鳴って振り払う。

ホバートラックは、激戦の中を逃げるムカデよろしく左右に蛇行して動き回る。

機動力では圧倒的に有利だ。時間を稼いでいるらしい。

陸戦型ジムで掃射するも岩影に隠れてやり過ぎし、豆鉄砲で反撃する連中はウザった
い。

シールドで防げば、ダメージはないし、母艦に張り付く前に叩き落とさないとイケな
い。

既に数名、母艦のハッチによじ登り侵入しているようで、内部では白兵戦が起こって
いると聞く。

「ヴァイス、そつちはどうか!？」

もぐら叩きならぬトラック叩きを継続する黒仮面。

逆の側面を担当するヴァイスに問う。

「畜生、こつちもダメです!! ちよこまか逃げまくってます!」

アサルトライフルを掻い潜り、母艦の壁にへばりつく人間を仕方なくやりたくないが、手を振るって凧ぎ払う。

人間が次々吹っ飛び、しかしまだ懲りずによじ登ったり機体を取り囲んで邪魔したりする。

バズーカで外壁を削って侵入しようとしている。

逞しい害虫根性だが、MS相手に生身とかで戦うやつらがいるのがヴァイスは驚いた。

「デメエらは虫かっつての!!」

そこまでしてMSがほしいと見える。

ぺしぺし叩いて吹っ飛ばして、地団駄して追い払って。

潰すのは見たくないのに追い払うだけにしているが、本当に鬱陶しい。

こう言うとき、機体下部に対人機銃を積む機体は羨ましい。

ヴァイスは身動きが取れず、その頃ヴォルフは。

「や、止めろオツ!!」

こつちも空戦の能力があるフラッグ目当てで怒濤で襲いかかる雑魚の群れに襲撃さ

れている。

なんと、軽量の装甲を見抜かれて、防衛を終えて、低空飛行で戻ろうとした所を隠れていたホバートトラックの乗組員にスモークで視界を奪われて、あげくに四肢をワイヤーで捕縛されてしまった。

そのワイヤーをMSが掴んで引つ張っている。四肢を取られて、身動きが出来ないのだ。

振りきろうとしても、ホバートトラックとMSが結託してフラッグの推力を封殺してくる。

「離せ!! 俺のフラッグを強奪させるものか!!」

意外と強い陸戦部隊。人間の底力を垣間見た。

MSが引つ張って機体を無理矢理地面に引きずり下ろして、人間がわらわらと群がってよじ登り、ヴォルフをコックピットから追い出そうと脅してくる。

明け渡せば命は取らない、機体だけ寄せと。

「この追い剥ぎ共! 貴様らの血は何色だ!」

母艦から無線が入る。敵の増援がさらに増えた。

しかも大型揚陸戦艦がいくつか。物量で押し潰す気らしい。

「おのれ、禿鷹!! 俺の機体は絶対に渡さんぞッ!!」

彼は諦めず、必死に抵抗する。

しかし、現実は無情で非情。

何故なら、屈強なガチムチの男を乗つけたホバートトラックは……まだまだヴォルフ相手に増えたからであつた。

で。

朝焼けに散つたマスターユニットを追いかけていた皆は母艦が襲撃されて機体が幾つも奪われていると聞いて慌てて戻ってきた。

生身の侵入者が格納庫で銃撃戦を繰り広げていたのだ。

外じゃMS戦闘。中では銃撃戦。見事に混乱していた。

整備員たちには邪魔さえしなければ一切目をくれずに機体に乗り込もうとする侵入者。

母艦にも興味はない。ただ機体だけ執拗に狙つて奪おうとする。

「調子に乗ってるんじゃないやねえぞゴルアーツ！」

艦長、ブランドが活躍していた。銃撃戦を率先して行い抵抗を続け、禿鷹を射殺していく。

他にも残されたクルー、戻ってきたパイロットも参加して激しい戦いになっていた。

ノーフェエに応援の連絡が入る。

母艦の壁に大穴を開けてほしいと言われた。

現在何機か強奪して離脱しているので、その支援もかねてくれとのこと。

(……やるか)

我に帰ったノーフェエは母艦に向かう。

『僕もいくよー!』

ユーリも戻ってきた。周辺の掃除と支援をしてくれたのだ。

二機は煙の上がる母艦に向かって、疾走。

周囲では相変わらずホバートラックとMSの混成部隊による突貫と防衛の機体の接

戦が続く。

何か……見慣れた機体が捕縛されてえっちらおっちらホバートラックで牽引されている。

『ガリバー旅行記録みたい……。あんな風に奪っていくのか』

ユーリがそんな感想を抱く。巨人を引きずるトラックか。酷い光景だ。

しかもあれ、ヴォルフのフラッグじゃ……。

(……奪われたんだ。気の毒に、折角改造したのに)

改造した張本人が残念そうに見下ろし上空を過ぎ去っていく。

更に、少し行ったところではジンのハイマニューバが、ワイヤーで巻き取られて、横たわっていた。

……ヴァイスが懸命に素手でバルチャーの男たちと戦っていた。さすがコーディネーター。生身でも強い。

しかし機体はその間に引き摺られ奪われていく。

「……」

死んでないからいいや、とノーフェは見捨てた。

連中を殺すのはノーフェの手で。生きていれば別にいい。

こっちもカスタムしたのは本人だが、ヴァイス以外が使える保証はしていない。

無視して見回る。反対側でも似たような事象が起こっていた。陸戦ジムが回収される。

あれは……黒仮面の陸戦ジム。少し壊れているけど、やっぱり奪われていた。

『禿鷹っていうか、これハイエナじゃ……』

ユーリのコメントは流して、黒仮面は居ないから撤退したか何かしたんだろう。

あとは……あれは、ミチアのリゼルと伊織のガンダムか。

上で何かと戦っている。見れば、増援だとさつき言っていた連中が持ってきたギャブランだ。

こつちに気づいているようだが、余所見して一撃もらっている。

あれも、無視でいい。今は溜飲が下がってスツキリしているから、我慢できる。

少し母艦から離れた所では狙撃しているジオン組もいた。

あつちは……スナイパー同士の持久戦。バルチャーの狙撃している連中とにらみ合っているのか。

……見慣れた顔はいるが、肝心の双子は出ていない。あいつらは何があらうともぶつ殺す。

居ないなら今は諦めよう。

それよりも、フェニックスで母艦に突っ込まないと。

ユーリに周囲を任せた。

ノーフェは再度変形、母艦の格納庫辺りを狙って、雇い主たちに一言告げた。

「……離れて」

そして。

再び、火の鳥となったガンダムが、真つ直ぐ母艦の壁に頭から突っ込んで突き刺さったのだった。

派手な音がして、銃撃戦の最中に、外壁が破壊された。

爆風で煙を出しているなか、無理矢理侵入してきた機体を見て、耳を塞いだブランドは驚く。

「フェニックス!？」

そしてコックピットから、小柄な奴が姿を見せる。

緑色のパイロットスーツの、鉄の仮面を被る何かだった。

「あんた誰ツ!? アリアちゃんはどうしたのよ!？」

フェニックスにはアリアしか乗れないはずなのに、出てきたのは仮面の変人。

奴は無視して指を鳴らす。すると、フェニックスは勝手に動いて撤退していった。

ぽっかりと大穴を開けた変人は、ブランドに向き変える。表情の読めない顔で。

「……」

「あんた、何者よ!？」

再度叫び、銃口を向けた。

その人物は、興味などなさそうに、歩き出す。

その背後でバルチャーが怒濤の勢いで流れ込む。

ブランドは迎撃に戻った。仮面は無視して、違う区画に向かっていった。

銃撃戦の再開。穴から侵入するバルチャー。

迎撃の手が空かないなか、仮面はふらりと消えていった。

ブランドは、仕方無く魂の抜けている双子を呼びに行くように部下に命じる。

気の抜けた二人でも、彼女が来たと言えば、復活すると信じて。

場所は知っている。

「新型を保管している区画。」

混乱する母艦の中を人気が感じて隠れて歩き、ノーフェはたどり着いた。

妙に静かな格納庫で見上げる先には。

見たことのない、新型の……多分ガンダムだ。

それが立っていた。

配備される前に置いておかれるこの区画から、一個お土産に奪ってやろうと思っ
たのだ。

個人的に、もう少し機体が欲しい。

ノーフェは、その機体を目指して歩きだす。

動かしかたは知らなくても何とかする。

奪っていつてやろうと、進む。

その時。後ろから、走ってくる足音が聞こえた。

「……動かないで。アリア、お願いだから」

「アリアちゃん、少しでいいの。話を聞いて」

振り返る。そこには、尤も憎いと思っていた双子がいた。

双方、壮絶な決意を表した、アンヌとマリー。

パイロットスーツで拳銃を向けている。

泣きそうな表情だった。嘗ての親友が、ノーフェに……アリアに銃口を向けている。彼女はしかし、何がなんでも殺すと誓っていたのに。大人しく、していた。

なぜ、と言われたら。二人の顔が、剩りにも……悲しそうで。

仮面を被つていても、アリアと二人には分かるらしい。

NTの端くれだからか。直感的に判断し、憎しみを押し殺していた。

「……」

仮面のアリアは何も言わない。

なにもしない。ただ、眺めていた。

「……………ごめんね、アリア」

「ごめんなさい、本当に……」

何を言うかと思えば。二人は……涙を浮かべて、彼女に謝ってきた。

何に対する謝罪なのかは、理解できないが。

アリアは、一言。知りたいと思うことを、この際聞いた。

「なんで、あの時わたしを殺そうとしたんですか」

声は違う。表情は見えない。けれど、双子は分かった。

最後の問いかけだ。返答を間違えたら、二度と戻ってこない。

そう、予感させる質問だった。

「殺そうとは、してないよ。絶対言い切れる」

「……誓っていいわ。私達は誰も、アリアちゃんの敵じゃない」

「嘘。そんなのデタラメです。一番最初に敵意を向けたのは、アンヌとマリー、お二人だった。わたしは、今更そんな詭弁を言っても信じません。今も銃口を向けてるのに、何処が敵じゃないと？」

ハツキリ切り捨てるアリアに、双子はそれでも違うと訴える。

銃口は下げないくせに、敵じゃないと言い張るのだ。

その手に持っているものが、真意だと語っているくせに。

涙を浮かべて、平然と友だった者に嘘をつく。

騙そうしているとアリアは、否定する。

「……ウソツキ。友達だと思ってたのに。やっぱり、裏切った。全部嘘だった……」

「銃口を下げれば納得するの？ そんなんでいいなら、私は下げよ。ほら！」

アンヌが今ごろ下げる。遅すぎる。取り繕うだけで、何を信じろと言うのか。

マリーも銃を下げた。でも、全部手遅れだった。アリアは、俯いて……口調を変える。

「……いいよ、そんな綺麗事。誰が信じるか。何を言おうが信じる気はない。……殺すだけ。お前ら殺して、それで終わり」

二人の顔色が青くなる。アリアの纏う雰囲気が変わった。恰も、別人。

「私は……ノーフェ。ノーフェ・ネームレス。アリアという女は死んだ。私は、別人。お前らの敵」

再び背を向ける。双子が追い縋ろうとするも、聞こえないように、新しいガンダムに乗り込む。

二人の目の前で、新たな力が奪われる。ガンダムの強奪は、何時だって戦火の火種。

「ガンダム……AGE-2？」

見たことのない機体か。可変式、悪くない。

立ち尽くす双子に、ノーフェに戻った彼女は告げた。

「……次は、殺してやるウソツキ。お前らなんかもう、友達じゃない。ただの敵。戦場であったら、マスターユニットみたいにしてあげる」

ガンダムの起動をさせる。ゆっくりと動く新型。

二人が何か叫んでいる。聞こえないし、聞く気もない。

「じゃあね、OZのエース。……次は、殺しあおうね？」

壁を破壊して、穴を開ける。

そのまま、機体を操り脱出していく。

双子の目の前で、宣戦布告をして。

壁はもつと高くなった。選択肢を間違えた、双子の手により。

理由は分かった。代わりに、戻ってくる可能性は低くなってしまった。

絶望に染まる双子の視線の先に、皮肉るように朝日が照らし混んでいた……。

彼らの考え

ノーフェは奪ったガンダムを一通りチェックしながら撤退する。

雇い主が仕事は終わったから退くと命じているのが聞こえる。

向こうも結構機体を奪って逃がっている。

追撃してくる連中を相手して肩慣らしでもしようと思う。

が……。

「AGE……システム？」

妙なものがインストールされている。

AGEシステムとかいう、簡略化されているようだが、支援システムだろうか。

よくわからないが、戦闘にはあまり関係無さそう。

ノーフェは武装を確認。右手に長大なライフルを所持。

腰には出力の高いビームサーベルが二つ。シンプルな武装であった。

可変式のガンダムで、何と変形すると三倍近く速度が出る。

データ上ではあるが、こいつは使える。

(さて……見せてもらう、新型の性能のほど)

可変したまま、戻っていく彼らを手伝う。

のちに変形したのを『ストライダーフォーム』と言うのだと、ノーフェは知るのであった……。

時は流れ、翌日。

急ピッチで進められる復旧のなか。

ジェネレーションのパイロットが控え室に集まっていた。

そこには、アリアの姿もある。皆、視線は冷たい。

話を聞かずに無謀に突っ込み撃墜されて死にやがり、挙げ句にはフォローにいった連

中が手薄になっていいる隙に侵入され、機体をいくつも奪われた。

これはアリアの失態である。マスターユニットにあるまじき醜態だった。

「アリア。一体なにがしたかったんですか？ この体たらく、私も流星に呆れますよ……」

「すいませんでした……」

アンダーソンが渋い顔で腕を組み、アリアを叱る。

アリアは土下座して謝罪している。素直に反省するのはいいが、代償がでかすぎる。

ヴァルフ、ヴァイス、DDの機体を強奪され、多数の機体を奪取された。

把握しているだけでも20は越えており、行方知らずと破壊された機体も合わせれば30は下らない。

新人が何人も始末され、挙げ句には新型まで奪われた。

幸い、古参は防衛に当たってた三人以外は無事で、連中が動かせそうな機体ばかりを狙ったお陰で専用機などは大半無事であった。

オペレーターとも呼べる機体を、あの鉄仮面に奪われたのが最大の叱責であろう。

「……折角フリット君が残してくれた機体を、贋作とはいえ、システムごと奪われて。責任は、大きいですよ。自覚ありますか？」

「ごめんなさい……。あたしに出来ることなら何でもします……」

一番の失態は例の新型の奪取。

決戦の時にフリットが恩人の謝礼として、後日データを提供してくれたのだ。

……その恩人が暴走していて裏切ったことを知っている民間人の少女と彼は、悲しうだった。

追いかけるのなら、これを使ってくれと渡してくれたのが、あのAGEシステム搭載の機体だった。

いわく、フリットの工房ではオーパーツに近い材料を求められても集めきれず、結果設計図をこちらに回して貰ったのが、あのAGE-2という機体だったのだが。

あれにも、簡略化されてはいるが、同じシステムが搭載され、しかもデータさえあれば得体の知れない形状のモノまで設計図を作り出すらしい。

本体もブラックボックスなので、中身はどうなっているか不明。

ジェネレーションで建造したら出来上がったのがあれで、乗り手を決めるまで保管してこういう話になっていたのを、鉄仮面が発見して奪っていったのだ。

性能は不明。然し、試運転を兼ねていたのか追撃部隊を一人で相手取り、壊滅させた。

その様子はモニターされていたが、恐ろしいものでライフルを撃つだけで機体が易々と貫通して爆発し、凄まじい機動力で攪乱しつつ、強襲してズタズタに切り刻んでいた。

感想をいうなら、システム含めて不味いものが敵に渡ったとしか言えなかった。

アリアは、謝罪したのち、責任を感じて復旧に自分も参加するべく、最後に謝り出いった。

で、ガンダムを奪った肝心のその敵だが……。

「……ノーフエと名乗った、か。こりや完全に決別の姿勢かね。参ったもんだ」

壁に寄りかかり、ミチアは天井を見上げていた。

双子は再び精神が死んでいて、放心状態で話ができない。

何とか引きずり出してきたものの、先程から一言も発しないまま。

「昔から、仮面は過去の断ち切りの証だからな。……おい、ヴァイス。なぜ俺を見る」

「いや、黒仮面が言うのと重みが違うなと思って……」

黒仮面が機体を新調するべく、無事だったピクシーの設定を変えながらぼやくのを、ヴァイスが茶化す。

重たい空気を緩和しようとしたのだろうが、重苦しいのは変わらない。

原因は、恐らく双子の初手の対応による誤解。

二人の弁明を鑑みるに、本人は暴走の記憶はなく、こちらが突然裏切ったように感じている。

更に恐らくではあるが、本人は全員が結託して仕出かしたと思ひ込み、その場に居な

かったものはあまり気にしていない。

で、更に双子が銃を降ろさず説得したせいで怒りを見せて完全に決別。

敵対の意思を見せて去っていった、という始末。

これならば、悲しみを感じた彼女の心も理解できる。

突然殺されそうになったとも思っているんだろう。

故に、悲しさを感じている、と。

「……一応、今だから。聞きたいんですが」

黙りこくる皆に、おずおずとスズキが拳手をして、全員に聞いた。

彼は真剣な表情で、問う。

「……この中で、オーナーの……命令に、従うつもりの人はいら、いる？」

その問いに対して、真つ先に声を出したのは……ガルマだった。

「私は断る。雇われの身であるが、あのような命令には従えない」

堂々たる言動で、彼はハッキリと否定した。

「此度のことではっきりした。現在のマスターユニットは、私達を過小評価しているようだ。自分の存在を完璧なモノと思うのは、マスターユニット故なのだろう。断言するが、私はオーナーとやらの対応にも不信任はある。将校だった身として言えることは、剩りにも組織に尽くした者に対して軽んじている対応だということだ。正直、不愉快さ

しかない」

新参ですら、そう思うと言うと同時に、彼は言い切った。

「私を救うように指示したのはジエネレーションなのだろうが、私個人を救ったのは紛れもない、彼女一人だ。感謝するとすればそれは組織ではなく、行動を起こし、今に繋いでくれた以前のアリアのみ。私は恩義を仇で返す主義ではない。何があろうとも、たとえ命を賭けたとしても、彼女を連れ戻したい」

中々に熱い男だった。周囲がガルマに対して、意外そうに見ている。

義理堅く、温情には温情で返し、すれ違いを起こしても真実を語り、行動を起こすと告げた。

「……同じ考え」

スズキもまた、賛同する。彼は彼女に借りを感じており、それを返すまでは諦めたくない。

確かに死ぬのは怖い、臆病な自分であるが、それでも貫きたい志までは失うのも嫌だと。

双子は死んでいるせいで考えは読めない。ハッキリと今回の一件で方針を決めた方がいいとスズキはいう。

じゃないと、またあのバカが暴走して、殺してしまうかもしれない。

早めに、全体的な考えだけでも纏めたい。

「とはいうがな。難しいのもまた、事実だ」

「俺は保留で。少し事情が変わってきたから、様子見をしたい」

「同感だ。あいつは最早俺たちの知るあいつではない。それで死んだら意味がないからな」

野郎トリオは少し様子を見るなり、保留するなりで今は決めないと言った。

ヴォルフは冷静に判断し、ヴァイスは自分なりに考えた結論で、DDは経験上知っている。

「……私も、正直迷ってます。曖昧なまま戦って、果たして成功するのか。いいえ、それ以前に伝える具体的な方法が、悔しいのですが思い付きません」

「気楽に行こう……って訳にもいかないしな。相手は俺達が束になっても勝てるかどうかの嬢ちゃんだ。俺も考えが纏まらねえのが本音だ」

アンダーソンとリューンは、迷っている。

方法がない限り、実行できないし、何より実力の違いが大きすぎる。

マスターユニットを一撃で殺すようなパイロットとガンダムに、果たして何ができるのか。

特にアンダーソンは、例のNT抹殺用のOSを組み込んだまま。

しかもあれがないと追い付くことさえ難しい。

一度シミュレーションで経験している。あれでさえ可能性は低いのだ。
有効な手段を思い付かない。

時間がほしいと言うのが二人の意見。

「俺は……そうだな。あいつと戦うさ。あいつがスッキリするまで、ただ戦う」

ミチアは対して、明確な方法を見いだしていた。

機体を通して感じた、マスターユニットとの戦いで感じた気配。

あれは憎しみじゃない。単なる怒りだった。バカと言われて怒った怒り。

双子の話も、やはり何処か悲しみや怒りを憎しみに転嫁して憂さ晴らししているような気がする。

元々アリアは根本が子供だったのかもしれない。

過去を振り返り、あまり感情を表に出さずに大人びたというか、そのような部分は少なかった。

然し意外とノリが良かったり、ヴォルフの機体にロマンを乗つけたりと子供らしい部分は確かに存在していたのを思い出した。

つまり、だ。拗らせてややこしく、極端に考える事もない。

ただ、彼女とぶつかって、わかってもらうのだ。

ミチアには、アリアに対する感情は少なくとも温かいもの。
冷たい感情など抱いていないと。

「俺も最初は、説得しようと思って頭を悩ませていたが、気が変わった。俺はシンプルにいくよ。死ぬとか死なないとか、そんなもんは後回しだ。生きてりゃいいんだろう？
だったら、MSでの殴りあいでもマジの喧嘩でも口喧嘩でもなんだったっていい。殴ってわかってもらう。殴られてあいつの思いを知る。それだけでいい」

実にあっけらかんとした考えだった。

川原で殴りあう昔の漫画のような解決方法。しかもかなり危険で、楽観的な。

しかし、サイコフレームを搭載する機体に乗れる彼だから出来る事なのかもしれない。

それを実践するぶんは構わないと、皆了解した。

「自分は……アリスと相談して決めます。自分だけじゃ、きつとアリアさんの気持ちには、辿り着けない。本当の気持ちを知るには、アリスの力添えあつてのことなので」

伊織はアリスと話し合っただけで決めたと言った。

アリスは数少ない、アリアの友人であり、そしてアリアと戦える可能性が一番高い。
なにせ人工知能であり、同時にガンダムだ。実力は尤も近いだろう。

アリスはアリスで懸命に打開に向けて計算している。要するに悩んでいる。

アリスにとってはアリアは大切なお友だちで、お別れはしたくないし、すがれるならすがりたい。

出来ることがあるなら、自分と伊織に全力でしたいと思っっているが同時に危険性も理解しており、板挟みになって苦悩している。

「自分の気持ちでいうなら、ツダに付き合ってくれた良い人ですし。まだ、ツダりたいんですよね」

ツダの改良に真剣になってくれたアリアと、完成したツダで戦いたい。

今はアリスと共にガンダムに乗る伊織だが、もとはツダのみで戦う男だった。

ツダという大好きなものをまだ続けたい。それが伊織の気持ちだった。

大抵の面子の方針は決めた。スズキは、一応はあまり敵対しない、という方向で一致させた。

死んでいる双子に関しては、今は放っておこう。それこそ下手に追い詰めると現アリアの二の舞になる。

彼らはこうして、彼女との事を各々、考えていく。

殺しあいになっても、気持ちを伝えるまでは。

仮面、その憎悪の果てに

時は少し遡る。

……何故だ。

(……何である時、殺さなかった。私は敵を殺す、そういうやり方のはずだったのに) 敵は殺す。単純にして、一つの流儀だったはずなのに。

新型を奪ったときに追ってきた双子の言葉は、僅かであったが彼女の心に動揺を生んではいた。

帰還後、新型をユーリに検査してもらっているなか、彼女は苦悩していた。ある種の後悔とも言えた。

(なんで聞いてしまった……?　なんで知ってしまった?　あいつらは敵なんだ。私を見捨てた、裏切った人間なんだ。理由なんて、聞かないでも良かったのに……どうして?)

殺せば良かった。殺せただはずなのに。

絶好のチャンスをも、逃してしまった。最も殺したい相手を、逃がした。

あまつさえ、その真意を聞いた。涙を見た。

……敵になんてなつてないよ。

その言葉を、聞いてしまった。

(嘘だ。嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ嘘だッ!! あいつらは私を捨てたんだ! 私を裏切ったんだ! 全部偽りの感情だ!)

殺せばよかったんだ。逃がしたのは失態だった。

銃を下げずに誤解だといった言葉よりも銃口が物語っている。

あいつらは、ノーフェの敵だ。

問いかけをしたのは失敗だと思う。だが、よく考えろ。

敵が本当のことなんて、言うわけないだろう?

(騙されるな、私……。あいつらが、私を連れ戻したって、理由は単純。まだ、私を利用する気つてことですよ。惑わされるわけにはいかない。アリアはもう、私じゃない)

落ち着いていこう。絶望した顔、同じ思いをしたであろう瞳。

全部嘘だ。ノーフェをまた利用しようと同情を誘っている。

……本当に?

……本当に敵になったの？

単なる思い込みとかじゃないの？

なんて、自分の良心が聞いてくる。

チクチクと罪悪感を加熱させても、ノーフェには無意味だった。

否定してもダメなら受け入れる。その上で、壊してやる。

(……私は少し、甘かったんだ。情けをかけていた。認めるよ……少しだけ、信じようとしてた。けど、またその僅かな心も砕かれた。銃を一度でも向けた相手に……何してんだろう、私は……)

友達だった。友達に殺意を向けられた。理由は分からない。今でも知れない。

殺そうとした理由を問うても、そもそも殺そうとしていないと返答された。

つまり、そう言うことか。理由なんてないのか。殺そうとしたんじゃない、処分しようとしただけ。

要するに人間扱いさえされてなかった。マスターユニットは人形だから。

言いなりになっていいる可哀想なお人形に、遊びで付き合っていただけ。

友達だと思っていたのは……ノーフェ、いや。過去のアリアだけだった。

もつと言ええ。殺そうとしていないとは言ったけれど。

排除しようとしてはいないとは言っていない。

敵じゃない。その発言の根本は……人形風情が人間を敵と言える立場ではないから。人形の遊び相手を止めただけ。古くなつたいらぬゴミとして、捨てようとした。

ああ、そうか。ノーフェはオモチヤか。要らなくなつたオモチヤ。

燃えないゴミとしてゴミ箱にぼいッと捨てられた。

人間様の都合がそれなら、成る程。納得もできる。

あの涙は、希少価値がまだあつたから、捨てるには勿体ない事を分かつた後悔の涙！
まだ動くと分かつた可哀想なお人形！

もう少し遊んでやるから、嬉しいだろう？

手を差し伸べてやるから、いいから戻つてこいというそんな意味だつたんだ!!

(…………ふ、ぎ…………けるなアツ!!)

ノーフェは激昂した。

腹の中ではそんな事を思っていたのかあの連中は!!

あの頃の全てを否定された気分だった。思い出が、忘れない過去を通り越して黒い歴史となつていく。

憤るノーフェ。仮面で思い切り、間借りしている母艦の壁に頭突きをかました。

凄まじい金属音を響かせて、壁にクレーターが出来た。格納庫で上機嫌な禿鷹たちが何事かとノーフェを見る。

ノーフェは狂ったように頭突きを続ける。一発ごとに、凹みが大きくなる。分厚い頑丈な壁のはずなのに、猛るノーフェの怒りのまま行き場のない八つ当たり犠牲になる。

「うわ……」

コックピットから顔を出したユーリが、その様子を見下ろして引いていた。

鳥肌を立てるほどの圧倒的怒りを感じる。

（なんか……滅茶苦茶怒ってる……何事？）

完全にぶちギレのノーフェは、とうとう頭突きで壁に穴を開けた。

格納庫の一面が破壊されて、興奮した鉄仮面の子供が、今度は違う獲物を求めて彷徨く。

「……お金払うから、殴らせて」

その辺にいた、屈強な男に紙幣を支払いお願いする。気前よく請け負ったがいいが。ドゴオツ!!

「うへえ!!」

パンチ一発で格納庫の隅から隅までバウントして吹っ飛んでいった。

それでも怒りが収まらないのか、自分のガンダムに八つ当たりを始めるノーフェ。

MSの装甲がへこむ訳がないと、周囲は笑っていた……。

が。

ガツンツ!!

またしても頭突き。しかも、凹んだ。

フェニックスの装甲が、彼女の頭突きで凹んだ。

「……………えっ」

ユーリ、愕然。フェニックスの治療能力を当てにして、ノーフェは装甲によじ登り頭突きを続けていた。

おかしい。機動兵器の装甲が人間の頭突き風情で凹んでいる。

痛そうにフェニックスのメインカメラが明滅している。やめたげて、とユーリがいう前に。

「……………トルネード」

「ひっ!?!」

隣で整備中のトルネードに向かって跳躍。

機体の上から数メートルの距離を助走なしにカエル飛びして、乗り移った。

なんとという身体能力。そしてまた頭突き。

凹む装甲。響く金属音。呻くおっさん。

「止めてー! 僕のトルネードがー!!」

ユーリが慌てて降りて止める。
彼女は怒り狂い、そのまま気がすむまで八つ当たりを続けるのだった。

んで。

お仕事を終えて機体と共に戻ってくる昼頃。

「ふ……フフフフ……」

ノーフェがおかしくなっていた。

珍しく仮面を外しているが、瞳からハイライトが退場している。

口から薄気味悪い笑いが常に漏れており、完全に精神に異常をきたしていた。

「あ、あの……ノーフェ……?」

「フフフフ……アハハハハハハッ……!!」

(完全に精神病んじゃないや……。母艦で何かあったんだろうとは思ってたけど……)

昼食を共にするユーリが恐々声をかけても、狂気を孕んだ高笑いに対応する。嘲笑のようだどユーリは感じるが、誰に対するものなのかまでは分からない。

食事には一切手をつけずにただ愉快そうの笑っている。そう、笑っているのだ。

(でも……悲しいね、ノーフェ。気付かない？ 君は、悲しいって、泣いてるんだよ)

ユーリはそこまで感応能力は高くないと自負している。

然し、ノーフェの笑いを少しだけ時を同じくしたフラットな目線で見ると、ユーリにも分かつていた。

ノーフェは、泣いている。

あまりの何かを受けきれずに、涙を流すという行為すら出来ないほどにショックを受けて、笑うしか発散する方法を知らないかの如く。

泣き叫んで誰かに悲しみを表せれば良かったのに。

彼女は笑うという表現で、示した。同時に解した。

ノーフェが笑っているのは、自分だ。愚かな自分を嘲笑っている。

仮面を外しているのは、笑うのに窮屈だからか。

今の彼女に問うても、返ってくる答えは期待できまい。

「今明かされる、衝撃の真実」

などと突然言い出して、愉快そのもので勝手にユーリに語り出す。

それは、更なる思い込みによる事実の曲解。現状の悪化。

本当に手遅れになっていた。それを受けきれずに馬鹿話のように、面白がってノーフェは説明する。

(……救えない。あまりにも救いが無さすぎる。なんで彼女に銃を向けたんだ。なんで追い縋ってでも止めなかったんだ。人形だと自覚しているノーフェには……この思い込みはもう、きつと……)

無気力だった先日とは明らかに違った。

今のノーフェはもつと歪んでいる。歪んでしまった。

「人形に仮面は、ウフフ……お似合いですよね。お人形遊びだったんです、わたしの存在は。あいつらの遊び道具だったんですね。ああ、なんて不幸なのでしょう。わたしはただの遊びだったんです。アハハハ」

楽しそうに笑う。悲しそうに笑う。痛々しい彼女の変貌。

これを人は、『壊れる』と称する。

無気力なときよりも前に戻っている。

口調は同じだが、瞳は闇の色で、薄気味悪く常に半笑いをして、愉快愉快とケラケラ微笑む。

恐怖しか感じない。狂気しか感じない。強化人間ならぬ、狂化人間。

ユーリはおぞましい物になってしまった哀れな人形を見る。

「ユーリも、変わった、性癖ですね。お人形遊び、好きですか？」

自分が人形だと、道具だと自覚していた彼女にとって、周囲の便利な人形扱いは堪えられなかった。

友だといってくれた。仲間といってくれた。その優しさは、その友情は人形と遊ぶ為の言葉遊び。

おままごとだったのだ。そう。これは、おままごどのような出来事だった。

可哀想なお人形を用いて、芝居をしているかのような。

皆に受け入れて貰えていたと勘違いしていた、バカな人形の当然の結末。

つまりは、来るべき遊び道具の処分。要らないから捨てた。それだけ。

字面通り、敵でもなければ裏切りでもない。そんなものは人形の勝手な想像。

現実はそのままで至らない。思い上がりだったのだ。

マスターユニットは代返の聞く便利な存在。人形なのは知っていた。

だったら、人形として扱ってほしかった。なんで人間みたいに優しくされたのか分からない。

……違うか。それすら、彼らにとっては想定の中かで、人形を捨てるのに理由などない。

いらなくなったら捨てる。誰だってやっている、当たり前前の仕事。単純なお話だった。

彼らは。

おままごとに使う新しい人形を皆は欲しくなり、オーナーに求めた。新しいあの喧しいマスターユニットの方が、必要になったから。

ノーフェは、最早、価値はない。ノーフェは、最早、要らない子。

答えはもう、ここにあった。ノーフェ……アリアは、彼らにとつて。生きるのに必要な、お人形として接していただだけ。

アリアはもう、要らない子。要らない子は、捨ててしまえばいい。

だから、敵じゃない。敵の前に、アリアにはそんな権利すらない。

だって、お人形遊びの道具だったんですもの。

「……僕にそんな趣味はないよ」

「嘘が、お上手ですね。いいんですよ、素直に言うてください。ここには人間はユーリだけ。何をいっても聞こえませんよ」

「僕がそんな人間に見えるのなら、君はおかしいよノーフェ」

「可笑しい？ お人形相手に可笑しいって、なんですか？ 頭が可笑しい？」

「いや、心がおかしいんだ」

「心？　心がおかしいってというのはどういうモノですか？」

「……………」

「ユーリ、少し減入っていますね？　独りぼっちだからですか？」

イヤそうに言うのに、自分の定義を改めて人形にしてみましたノーフェに聞こえる言葉は全部嘘。

何をいつてもノーフェは信じなくなつた。

道具というのは、そもそも誰かの都合で動くもの。

ユーリは悲しすぎて、涙が出てきた。あまりにもその姿が悲惨過ぎて。

これが、アリアという少女の結末だったのか。命の代わりに、心が死んでしまった。

「どうして、泣くんですか？　わたしが代わりに泣きましようか？」

「ノーフェ……………君は……………」

「ふふっ。変なユーリ。独りぼっちは辛いでもものね。誰か、連れてきましようか？」

「やめてくれ……………。お願いだから、本当に……………やめて……………」

ノーフェは一段階、精神が悪化した。

無気力な心から一変。心が、壊れてしまった。

人間には、堪えられないような、自分が要らないお人形だと教えられたと思ひ込み。

歪んだ心は音を立てて崩壊し続ける。

然し根本の憎悪は激しさを増していく。

「ジェネレーションに戻りますか？ いいですよ、戻っても。大丈夫、殺すだけです。平気なのです、死ぬので済みます。お人形に殺される低俗なホラー映画の被害者になるだけ」

「……恨みで、君は戦えるの？」

「お人形にも、感情ぐらいはありますよ。生意気かもしれませんが、そう作ったのは……そう、仕向けたのは」

ノーフェは、一度言葉を切る。

薄ら笑いをやめて、仮面を被る。表情を隠すように。

そして、言った。

「仕向けたのは、あいつらですから。わたしに勝手に感情移入して泣いている連中になど、情けはかけません。わたしは、戦えるだけの道具。人間の都合には飽き飽きです。お人形の逆襲と行きましようか……ウフフフ……」

怒っているのか、憎んでいるのか、楽しんでいるのかさえ分からない声でユーリに告げた。

ノーフェは壊れた。本家、カロッゾよりも別のベクトルに。

エゴを肥大化させた人間として歪んだ彼とは違い、人形だと断じて壊れて進む。

「フッフッフッフ……」

楽しい？ 悲しい？ 恨めしい？ 憎たらしい？

全部混じって隠してしまえば同じこと。

ノーフェは己を更に歪めていく。

ユーリの思う通り、既に時は遅かったのかもしれない……。

連邦の男たち

……荒廃した世界のなかで。

お人形は、心をひずませ月を見上げていた。

「フフフフ……綺麗なお月さまですねえ。あそこに、まさか世界を壊すモノや地球に帰ろうとするものがあるとは夢にも思わないでしょう。……楽しい世界。宇宙と隔絶された死にかけの地球。滅びの箱庭のなかに入ろうとするなんて、月の民はイカれているんでしょうか。まあ、どつちにせよ……わたしには、関係ありませんが……フフ」

独り言を言うノーフエは、月光を仮面に反射させて笑っている。

一人きりの、瓦礫の街。行き場も理由も何もかも失い、とうとう心まで失った。

病んだ精神に最早言葉は届くまい。ずっと意味もなく笑っていればいい。

歪んだ精神、ひび割れた思いになど、どうせ誰も気付かない。

ノーフエは、不意に。何かを感じて遠方を見た。

時空の変動。異世界からの扉が開いたようだ。

「…………おや。珍しい。あれは…………フッフ、そうですか…………」

何処からか取り出した双眼鏡。それで、見渡しの良い廃墟から見つめる先で。

何やら男二名が、大破した機体から這いずって外に出ながら、口論しているようだった…………。

満天の星空の下。

二機のMSが無様に転がり、パイロットが這い出て口論に発展していた。

若い男。一人はオールバック、一人は目が死んでいる人物だった。

「クソツ…………。なんだここは!? おいお前、なにか知らないのか!」

「落ち着けて。互いに軍人だろう? 口の聞き方に気を付けようぜ」

オールバックがパニックを起こしていたが、もう片方が宥めて言った。

「なにっ?」

「あんた、見たところ連邦の人間だろ? 階級は?」

互いに連邦のパイロットスーツを着用していた。
見たところ、所属が違うだけと思われる。

「お前も連邦ならば話は早い。テイターンズの名を知らないわけではあるまいな？」

「テイターンズ……。ああ、確かエリート志向の特殊部隊か。噂はかねがねさ。悪名高いエリート様ってな」

「何だと……!？」

テイターンズ。悪名高い特殊部隊で、裏では色々と汚い仕事をしていると有名な組織だ。

揃いも揃って地球至上主義とやらを掲げて、スペースノイドを弾圧する危険集団と言われる。

傲慢なものが多く、時には同じ連邦にまで牙を向くらしい。

「冗談だ、そう気張るなよ。スーツ見て分かった。あんたは大尉か。俺と同じ」

「……お前も大尉か？」

訝しげに見るオールバック。

死んだ目の男は見た目に似合わず気さくに名乗る。

「ああ、アラスカ方面所属、悠二・クロスハート大尉だ」

「……俺はテイターンズ所属、ツバサ・オザワ大尉。よろしく頼もう、大尉」

クロスハートと名乗る男と、ツバサと名乗る男は取り敢えず握手で挨拶。

互いに階級は同じゆえに、クロスハートは言い出した。

「そうだな、大尉。……互いに同じだとややこしいが、宜しく頼む。堅苦しいのは無しだ」

「氣遣い、感謝する。こちらこそ突然の暴言、済まなかった。貴君も、同じアースノイドであつたな」

ツバサは己の暴言を詫びた。地球至上主義は、同じゆえにアースノイドには志は同じと言うが。

クロスハートは、苦い表情で頭をかいだ。

「あー……すまん。俺はそう言うのにあまり興味がなくてな。普段はUEを相手してるもんで」

「あの化け物を……だと!? ならば実力は折り紙つきではないか!」

アンノウンエネミーと呼ばれる侵略者を相手していると聞くと驚くツバサ。

なにせ、出所不明の高度な技術を有する化け物を相手に生き残るのは至難の技だ。

クロスハートは過大評価と訂正する。

「いや、驚きすぎだろ。テイターズだって相手してんだらう?」

「認めたくない話だが……我らテイターズもまた、苦戦を強いられている。あの侵略

者共のMSは既存のモノとは一線を画する。解析が進まなくてな」

エリートとはいえ、腕前までが一流とは言いがたい。

ツバサの発言に、噂とは違う様子だとクロスハートは思い、前置きしてから素直に告げた。

「ほー……。何だかんだティターンズも仕事してんだな。大抵ろくな話を聞かないんだが」

「まあ、そう言われても仕方無い………というか、そろそろ素のしゃべり方でいいか？」

すると、ツバサは突然しゃべり方を崩して、大きいため息をついた。

深呼吸して、改めて話す。

「最初からそれでいいって」

「助かる。ティターンズってのは、こういう見映えばかり優先するから。他の部隊に舐められないように尊大にしろって教育されるんだ」

流星はティターンズ。見栄ばかりを優先する集団なのが実情だ。

中身は筋金入りの腐れ軍人だと言うツバサに、クロスハートも一言溢す。

「すげえ新人教育してんのな」

「だろうな。悪い噂ってのは強ち間違いじゃないよ。だつて……」

二人は廃墟の影で喋っている。

背後に聳え立つ廃墟に座って様子を眺めている人影には気づかなかつた。

その人物が、微笑みながら口を挟むまでは。

「……だって、事実として。テイターズは数々の悪行を行ってきた悪党だから。でしよう?」

「!?」

「!?」

「こんばんわ。寂れた世界へようこそ、連邦軍の方々。片方はあのテイターズのド悪党とお見受けしますけど」

見下ろす形で、銀のフルフェイスの仮面を被る人物が此方を見ていた。

初夏と言えるような温かい夜。薄手のサマードレスを着ているそいつは、体つきから少女と分かる。

まだ子供と言える年齢に見えるが、夜分遅くにこんな廃墟に子供がいる。

その異常性に直ぐ様クロスハートは気付く。

威嚇するようにツバサが叫ぶ。

「貴様……いつからそこにいた!?!」

「落ち着け大尉。お嬢ちゃん、一体誰だい? ご両親は?」

穏便に済ませようとするクロスハート。

然し少女は、不自然な返答をよこす。

「フフフ……お人形に両親など居るわけないじゃないですか、ご冗談を。地球を至宝とするテイターンズには、ここは絶望の果てと存じます。お戻りになられるのなら、早めがいいですよ?」

「……何をいつている?」

笑っているのは、こっちの狼狽が面白いからか。

仮面で表情は見えませんが得体の知れない気味悪さがあった。

まるで、幽霊のような。

「異世界に単身飛ばされる不安は分かりますが……フフフ」

「異世界……。ああ、そう言うことかよ。お嬢ちゃん、なにか知っているな?」

「う、ふっ」

彼女はさらりと重要なワードを溢す。『異世界』。

それだけで、クロスハートは大体察した。

オーバーワールドではよくある話だった。

ツバサが首を傾げているなか、彼は慎重に少女に問う。

「……詳しく、教えてはくれないか?」

すると、少女はくすぐすと笑いながら条件がある、と言い出した。

「良いですよ。ただ……少し、わたしと戯れて欲しいんです」

「戯れだど？」

「ええ。またの名を、戦争……あるいは殺しあい。誰も居ない夜の世界で、わたしと……お人形遊び、致しませんか？」

少女は笑つ切り出した。

背後にあるのは互いの機体。

知りたければ、殺しにこいと挑発している。

此方も機体を持つてくるから、待っていれば直ぐに始めようと。

「バカな。子供に銃を向けろと言うか。仮にも軍人である我らに？」

「おや……ティターンズ所属がどの口でそんな寝言を言うのですか？ あなた方の横暴は知っていますよ。知らないとも思いましたか？ 所詮は温室育ちの連中。子供を撃つことを躊躇しない悪党がよくほざきますね」

嘲笑う少女に、ツバサは黙るしかなかった。その通りだった。

軍人の皮を被つた人殺し。そういう、自覚と負い目があった。

クロスハートが然し、代わりに言い返す。

「成る程。君、強化人間だね。しかも随分と強化されている。不安定な精神が良い証拠

だ」

人工NTとも言える相手だとクロスハートは知っていた。

この特有のしゃべり方。顔を隠し、素性を見せないやり方。

一部で研究されているという戦闘用の人間たち。あるいは、軍人を改造する術。

彼女はその被験者だと。

少女はその言葉に少しだけ、楽しそうに訂正を入れた。

「フフフ……。惜しい、誠に惜しいです軍人さん。わたし、クローンのお人形なんです。

もともと、道具扱いにされて生かされていた単なるお人形です。人間なんてそんな、勿体無い。一度もそんな扱いはされた事はないですよ。騙されていたことはありますが」

「……そうか。痛ましいいな……」

「痛ましい？ 同情されるほど、わたしは可哀想なお人形ですか……？」

少女は首を傾げた。本当に分かっていない様子で。

ツバサもその異変に違和感を覚えた。なんとと言うか、人間らしくないと言うか。

精神が、おかしくなっているというか。

「大尉、これは……」

「間違いないな。彼女は強化されている。過剰なレベルだ。恐らく、人格に異変をきたしている程に頭を弄られている。酷い話だが……連邦もこれぐらいのことをしている

んだ。テイターズだけじゃない。みんな、勝つためには手段など選ばない。俺達はそのういうものに所属している」

「……なんたることを」

小声で話す二人に、クスクスと面白そうに眺める少女。

名をノーフェ・ネームレスと言うと、今度はツバサも勘づいた。

「……名無し？」

名前がない、と溢すとノーフェと名乗る少女は笑う。

楽しそうに、愉しそうに。無邪気に笑う。

いわく、ノーフェはノーフェイス……つまり顔なしという意味らしい。

要約すると、顔なし名無し。そう、名乗る。

「……ノーフェ君。要するに俺達は、君に情報を貰うべく、欲しければ戦わないといけない、と言うことだね？」

「はい。お断りしても構いませんが……うふふ、困るのは軍人さんかと」

別に強要はしないとノーフェは言った。

しかし情報は欲しい。どこまでこの不安定な少女を信じるかにもよるが。

今は手段を論じる暇はない。食いつけるものがあるなら、二人は食いつこうと思う。

殺さずとも、プロが二人ならば倒せるだろうと、此のとき甘く見ていた。

そう、彼女は単純に自前でこの状態になったと知らない彼らはまだ知らない。

「……わたしが勝つたら……少し、相手をして欲しいのですよ。ええ、話し相手を……」
ノーフェは、もう一人人間がいるのだが、孤独に堪えきれずに参っているのを助けて欲しいと言われた。

その場合も情報は話すとしよう。どっちにしろ、得しかない二人は怪しむも……。

「フフフ……」

笑っているだけの少女には、何か裏があるとも思えにくい。

何より精神がおかしいと思われる相手だ。姑息なことなど思い付かないだろう。

この際、乗ってしまおうと相談して決めた。

「はい。……では、少しだけお待ちください。わたしの機体、満って参りますので……」

少女はそう告げて、ふらりと姿を消した。

去ったあとで、ツバサがクロスハートに問う。

「……信用できると思うか？」

「分からんが……今は、やるのが手っ取り早い」

二人は互いの機体に入り込み再起動。

無線のチャンネルを合わせつつ、フォーメーションや作戦を決めていた。

しばらくすると、何やら熱源が高速接近してきた。

モニターで出して、二人は絶句する。
彼らが見たものは。まごうことなき、ガンダムだったのだから……。

遙か未来で

大破した機体を何とか持ち直すツバサとクロスハート。

ツバサはハイザック、クロスハートはジェノアスであった。
が、双方消耗は激しい。

一部スラストターが死んでいたり、武装が破壊されていたりする。

目の前に着地したガンダムは、可変式なのか戦闘機に似た姿で戻ってきた。

「大破した機体で、本当に大丈夫ですか……？」

ノーフェはそうやって、サマードレスのまま機体に乗っていた。

しかも、仮面はしたままであった。

「お気遣いはありがたいが、これでもティターンズだからな。俺だって、壊れた機体でも十分にやれる」

「強がりと言う訳じゃないが、まだ戦える。宇宙ならば致命傷でも地上ならば、いける

「や」

「フフフ……。左様ですか」

コックピットから身を乗り出して応答する彼らに、ノーフェは一言告げる。「噛みつく相手を間違えてなければ、いいですね？」

余程の自信があるのか、あるいはガンダムのおかげか。

余裕を見せて挑発する。

長大なライフルを所持するガンダムは一見すると特殊な物は使っていない。

そういつて、ノーフェは機体に乗りに込んだ。

二人も、機体に乗りに込み準備を開始。

機体を立ち上げ、彼女を見る。

こっちは不調でも、二人いる。

ならば、何とでもなろうと。

そんな甘い考えを持つツバサと。

危険を察知しているクロスハート。

強化人間は自我に影響を及ぼすほどの改造となると比例して強くなる。

そう聞いたことがあった。故に警戒は怠らない。

先手をどうぞ、と少女が譲る。

ツバサが、真つ先に走り出した。

持っていたマシンガンを構え、発射。

右にズレながら、ジェノアスは左にズレてビームスプレーガンを連射する。

ガンダムは即座に動いた。

後方に引いて、回避しつつ持っていたライフルをすぐさま構えて発射。

反応速度が違いすぎて、ハイザックのマシンガンに直撃。

勢い余って、持っていた肩のシールドまでかすっていた。

「なにいつ!？」

驚くツバサ。

見た目は狙撃型と思いきや、ビームが螺旋回転して貫通力をあげていた。

しかも彼女、わざとマシンガンを狙って破壊してきた。

やろうと思えば、コックピットを狙えたはずだ。それぐらいはツバサでも分かる。

慌てて爆発するそれを投げ捨てる。巻き込まれたら誘爆する。

煙をあげて爆発したマシンガン。視界を塞ぐ目眩ましに使いつつ、接近を試みるツバ

サ。

援護を頼むと、足止めにスプレーガンを連射して、ジェノアスが助ける。

腰からビームサーベルを引き抜き、一気に肉薄するっ！

然し。足止めが意味をなさない。全部先読みされて避けられる。

ガンダムは、振り上げたハイザックのサーベルを簡単に受け止めた。

彼女もまた煙を突っ込み、左手でサーベルを構えて、防いでいたのだ。

「なんとッ……!」

怯むツバサ。この少女、出来る。

かなり修羅場をくぐっていると見た。

サーベルを捌かれもう一つ引き抜き二刀流で挑むも、ガンダムは蹴りを放ちコック

ピットに直撃させた。

「うおう!」

衝撃が走る。ダメージは大したことないが、仰け反り後退する。

間にはいるべく、駆け寄ったヒートステイクを持ったジェノアスがそれを突き刺そ

うとする。

ガンダムはその動作よりも遥かに速く、彼らの目に見えない速度で、サーベルを振

るった。

持っていた腕を切り飛ばし、ついぞと言わんばかりに足まで真横に薙いだ。

片腕と両足を失い、転倒するジェノアス。

ガンダムは余裕で、背後で立ったままそれを見下ろす。

「クソッ！」

思わず罵るほど、ノーフェの反応は桁違いだった。

更には、邪魔だと言いたそうに倒れた機体を蹴飛ばして、吹っ飛ばす。

「ぐああああっ!?!」

揺れる機体。回転する視界。

バウンドして無様に転がるジェノアスに、歩いてノーフェ操るガンダムは近寄る。

そして。

「さあ。お仕置きしないといけませんね……。相手の技量も分からないような、お馬鹿な軍人とやらを。お人形に負けてさぞ悔しいでしょう。……。アハハハハッ!!」

わざと聞こえるように外部スピーカーに切り替えて笑っていた。

足を振り上げ、勢いよく機体を踏みつけた。

起き上がれない機体を、一方的になぶり始めたのだ。

「ぐわっ!」

クロスハートが苦悶の声をあげる。

それを聞いて、何とも楽しそうにノーフェは中で微笑んでいる。

聞こえる。囁くように、呻く声を感じ取れる。

こんなに苦痛の声が甘美なモノだと知らなかった。

痛みに悶える人間の声。もつと聞きたい。聞きたいっ!!

「ほら……もつとお、痛がつて下さいよ軍人さんッ!! キヤハハハハ!」

「ぐふっ……! こ、降参だ……降参を……」

踏みつける度に、クロスハートは痛みを感じる。

ハツチを歪ませてわざと閉じ込めて、彼女は遊んでいるのだ。

そう感じて、生きている通信で降参するのに彼女は聞こえないフリをして無視する。

「はい? 聞こえませんか、何ですか?」

「ぐあああっ!!」

胴体を踏みつけ、頭部を踏み砕き、コックピットの映像が途切れる。

ハイザックが見たのは、ジエノアスをいたぶって遊ぶガンダムの姿だった。

「き、貴様……貴様アツ!!」

激昂するツバサ。聞こえてくるクロスハートの悲鳴と、愉快そうに苦しめるガンダム。

怒りを感じずにはいられない。戦場という命のやり場で、この子供は遊んでいた。

生きているスラストを全開にして突っ込む。

遊びに夢中な彼女は反応が遅れている。

許さないと怒り狂う彼は真っ直ぐ突っ込んでいった。

軍人として、いや大人として命で遊ぶ子供は許せない。

必死に戦う戦士を侮辱する行為だ。テイターンス出身の彼は、思わず叫んだ。

「戦場ではしゃぐなあ！」

構えたサーベルを突き刺して、殺してやる。

そう、強く感情を押し出して、彼は迫る。

ガンダムは、過敏だった。遅れたと思ったのは彼の油断。

彼女は遊びながら、反撃に備えていた。

攻撃を誘発させ、強い敵意を感じるためだった。

怒らせて、自分に対して強い感情を向けられることを楽しんでいた。

「アハッ！」

彼女はその手に既にライフルを構えて待っていた。

銃口をハイザックに向けて、ツバサが罨だと理解した頃には。

数回、ビームが走る。頭、足、腕、それぞれを貫き破壊。

煙をあげて、勢いを殺せずに突っ込んでくる機体を、拳を作って殴り飛ばした。

「ぐはあ?」

しかも殴ったのはコックピット付近だった。

より強い衝撃がツバサを襲う。

吹っ飛ばされて、二機が完全に壊されて、地面に転がった。

完全に戦闘不能。戦いはノーフェの勝利。これで終わる……。

「無様ですね……」

訳がなかった。

ガンダムは、歩いて近づきハイザツクのハッチを破壊して、ツバサを見下ろしていた。目をあげる彼が見たのは、此方を哀れむガンダムと少女の声。

「テイターンズが聞いて呆れる。やっぱり勉強が出来るだけのバカでしたか。アハハハハッ!!」

ノーフェの声が、敗者に刺さる。笑われていた。負けた相手を容赦なく、ノーフェは爆笑していた。

「お、のれ……!」

悔しさと怒りで見上げるツバサを、ノーフェはもつとバカにする。

「軍人さん、どんな気分ですか? 戦闘のプロが、大破した機体でも大丈夫とか豪語して起きながらの当然の結末を迎えて。だから大丈夫かと聞いたのに。忠告を聞かない阿呆が挑むからこうなるんです。バーカバーカ!」

「貴様ア……!」

子供のようにバカと罵り大笑い。さぞ愉快なものが目の前にいるんだろう。

彼女は本気で楽しんでいた。ツバサを実戦知らずの能無しと揶揄して誇る。

「相手の技量も自分の状況も分からず、油断しているような人がよくもまあ、軍人なんて出来ますよね。恥ずかしくないんですか？」

「クッ！」

「罵つても負けている現実は変わりません。お人形にも勝てない自称エリート、ティターンズさん？ フフッ」

「ち、畜生オオオツ!!」

煽りに煽つて、彼女の指摘通り油断していたと自覚するツバサは叫んだ。

心底悔しい。いつぶりであろうか。

こんな風に嘲笑を間近に受けて、咆哮するのは。

倒れた機体から出て、ガンダムを見上げて吠える。

こんな惨敗とこんな嘲りは初めて受けた。子供の稚拙さだが、的確にツバサのプライドを抉る。

（負けたのか!!? 戦場で遊ぶようなこんな子供に!!? なんだ、何を間違えた!?!）

訳が分からない。この子供は、無邪気に狂ってツバサを負かして喜んでいる。

原因を探るツバサに、止めの一言を、ノーフェは笑って告げた。

「坊やだから負けたんですよ。お人形にも勝てないほ、う、や?」

「おのれエツ!!」

子供に子供扱いされて更に怒るツバサ。

本当に舐め腐っている言動に、漸くノロノロと出てきたクロスハートは苦笑つていた。

「その辺にしておいてくれよ、お嬢ちゃん。俺も負けた一員だから、耳が痛いよ」

機体は完全に再起不能。これではもう戦えまい。

クロスハートに対しては、迂闊な事をせずに警戒をしているのを感じていたノーフェは悪くは言わなかった。

「……フフフ。ジェノアス、壊れちゃいましたか」

ガンダムから飛び降りたノーフェは、壊れた機体はこの世界では高く売れるので金の心配は要らないと言った。

そして、この世界はクロスハート達の世界の遠い未来で、地球は死んだ星となったと告げる。

それを聞いて愕然とするツバサ。

地球はどこもかしこもこんな風に瓦礫の山と説明されると裏返った悲鳴をあげる。

地球至上主義にはこの世界は辛いとノーフェが言っていたのはこれが理由と見える。

「……わたしは、バルチャーというならず者をしている人間と生活しています。軍人さ

んの真逆ですけど、この世界には軍隊っていないみたいですよ」

ノーフェは説明しながら、過去の遺物として埋まるMSなどが発掘されれば新しい機体も用意できるし最悪襲撃して奪えばいいと言うのだ。

それが、この世界で生きる術だと。

「バルチャー……禿鷹つてのはそういう意味か」

「フッフ、仰る通りです。この世界では生きる為に略奪だつてします。軍人さんにはキツイと思いますが、そのうちに慣れます。じゃ、わたしの勝ちですので……良いですよね？」

情報はある程度聞いたが、どうも機体もなしに生きていくのは無理なようだ。

ボロクソに言われて不貞腐れるツバサも、背に腹が変えられない。

渋々、条件を呑んで了承する。

「オーケー。俺たちの惨敗だ。じゃあ、その子の場所に案内してくれ。俺で良ければ何でもしよう」

「……助かります。お人形には、悩める人の気持ちなど分かりませんから。フッフ」

ずっと笑っている少女は、完全に破綻しているのは分かった。

それでも、他人を気遣う程度の余裕はまだ残っている。

まだ、完全な手遅れではないようだ。

案内する小柄な少女に、大人二人は、黙ってついていく。

クロスハートとツバサはその日から、異世界で新しい居場所に厄介になることとなるのだった……。

互いの覚醒

……人の苦しむ声って、とても心地よい。

一個ずつ、丁寧に潰していく。嫌がる声が、震える声が、宇宙や空間を通して伝わってくる。

最高。ほんと、最高ッ!!

こんなに、胸が満たされる。心が、癒される。

今まで、知らなかった。

ずっとただ、機械のように敵を殺してきた。

だから、この味を知らずにいた。なんて、勿体無い。

なんて、素晴らしき戦いの世界。

(楽しい……。戦うの、苦しめるの、とっても楽しいイツ!! 最高ですッ!!)

殺すのが楽しくなった。苦しめるのが嬉しくなった。

良かった。戦うためのお人形で。NTの本質は、他人を痛みつけ悲鳴を感じるための力だったのだ。

彼女は遂に、本質を理解した。これがNT。戦闘能力を極限まで解放した人殺しのカッ!!

(わたしは……わたしは至ったのですね、お人形でありながら、真のNTに!!)

ああ、人間だと勘違いしていた頃にはこの快感は味わったことがない。

冴える。冴えるのだ、己の感覚が。

戦闘用NTとしての本能が!

サイコミユを通じて、昂るのだ精神が!

戦いを通じて、精神を歪めて、ノーフェは更に強くなった。

戦いを愉しむ者として。人殺しを悦楽と出来る人形として。

彼女の能力は更に悦を求めて研ぎ澄まされる。

人の悲鳴。人の憎悪。人の嘆き。人の断末魔。

普通のNTならば心を痛めるような世界に、適応してしまった。

精神が病んだことで、今まで周りの為に抑えていた命令も消えた。

命じられ、本気を出すことを禁じられていた彼女は、とうとう全ての枷を解放する。

(嬉しいイ……。嬉しいイツ!! アハハハハッ!!)

自分のために自分の能力を解き放つ野獣が生まれた。

鎖を失って、全力を解除した彼女は、戦闘用NTとして、完成した形に至った。

即ち、戦いに壊れず。戦いに磨耗せず。戦いを広げ、戦いを楽しみ、戦いを好む兵器とある男が言った完成形。そう、ノーフェは邪気となった。

(でも、やっぱり憎い……。あいつらが憎い。わたしをオモチャにして楽しんでいた奴らが……。憎いイ!!)

憎しみすら糧として内包していた化け物に、嘗てのマスターユニットは変貌した。

オーナーが、何時か彼女を尤も魔女に近い本質を持つと言った。

それは、こういう意味だったのだ。

オーバーインパクトを使える理由は、今まで抑圧されていた根本。

枷を失い、狂い出す災いの魔女。

勝手な理由で世界を惑わし、勝手な理由で世界を滅ぼし楽しむ異常なるお人形。

ノーフェは間違いなく、アメリカスの魔女に迫っていた。

精神が壊れている彼女にとつて、最早ジェネレーションは憎みながら殺すに過ぎない。

殺したいから殺し、憎みたいから憎んで、人形を受け入れ人を捨てた結果この様だ。

(アハハハハッ!! 親友なんていません! 仲間なんていません! 全部嘘に塗り固

まった偽りの世界!! だから嬉しい!! あは、アハハ!! お人形! わたしは結果お人形!! 哀れ、哀れ!!)

支離滅裂となつてゐるノーフェの脳内。

能力の上限が外れてゐる代わりに精神の均衡は相も変わらず傾いて狂喜に染まる。誰にも止められないまま……。

明け方、目を覚ましていたユーリは目を点にした。

ノーフェが、知らない男を連れてきた。

連邦の人間で、何やらこの世界にさつき飛ばされてきたらしい。

路頭に迷つていたので、拾つてきた。話し相手にどうぞ、と告げてノーフェはそのまま仕事に行った。

「ええ……?」

「ふむ。君が例の人か。濟まないな、急に押し掛けてしまつて」

困惑するユーリに、ツバサとクロスハートと名乗る軍人は会釈して事情を説明。

二人はノーフェとの勝負に負けて、ここにきたと言うことを知る。

「つまり……この世界に留まるしかない?」

「そうなるな。いや、申し訳ない。少し厄介になつても構わないだろうか?」

クロスハートがユーリに言っているなか、ツバサはため息をついて言う。

「まあ、大破した機体で挑んだ俺達も悪かつたんだ。生きているだけ御の字と思うことにした……」

ガツクリと項垂れるツバサに、コーヒートを差し出すユーリ。

手痛くノーフェにやられたようだ。別にここで生活しても構わないとユーリも言つた。

根なし草はみな同じ。助け合いの精神が大切なのであると思う。

正直、あの精神の病んでいるノーフェと二人きりはいい加減辛いものがあつた。

ユーリは早速で悪いけれど、と前置きして二人に語つた。ノーフェの原因と、今に至る経緯を。

「……元々は普通の少女だったのか。それを、仲間との勘違いとすれ違いで……?」

「極端だな。全くもってその心理状態が理解できん。ある程度は見たことがあるが、然し不自然すぎる」

クロスハートは腕を組んで思案顔になり、ツバサはコーヒーのお代わりを頂く。

「ありがとう少年」

礼を言つて受けとると。

ブチツ、と何かヤバそうな音がした。

「ん……？」

香りの良いブラックを楽しんでいるツバサに、顔を真っ赤にしてふるふるユーリが震えていた。

表情は……怒り一色。しくつたと理解して、まさかと思いつつ問い返す。

外見は少年そのもの。平たい胸、若い顔つきに髪型。

何故か阿呆をみる顔でクロスハートが呆れていた。

「……ええと。すまん、もしかして……女性だったか？」

「ぼ、僕は……僕は女の子だあつ！」

明らかに胸元が悲しいと見られて、悲痛で切実な叫びをあげて、拳でツバサをぶん殴る。

直撃し吹っ飛ぶツバサ。コーヒーはクロスハートがキャッチして無事だった。

「はあ……はあ……」

半泣きで胸元を隠す少女。悲しいかな、女性には見えないらしい。

すつかり失礼をかまして、ツバサは重ねて謝罪しつつ、改めてコーヒーを頂く。

乙女の鉄拳で腫れた顔に、コーヒーの香りがなんとも言えない気分を醸し出すのだった……。

その頃。ジエネレーションでは。

彼らが訓練に励んでいた。

早朝より、機体に取り込み一番高いレベルのシミュレーションを起動して、戦っている。

今はいない、前任の忘れ物だった。彼女が設定していったレベルのもので。

アンダーソンは、爆発する己を見て、何度目かのため息をついて、一度休憩を挟む。勝てない。ダメであった。機体から降りると、同じくミチアが訓練中で、彼も休憩している。

近くには、相変わらず目が死んでいる双子が魂を昇華させている。

この所、食堂などに二人は回されている。戦えなくなってしまうているのだ。

双子はどうかやら、自分達のせいでアリアが居なくなってしまうたと思ひ、塞ぎこんでいる。

無理矢理仕事をさせているが今のアリアの風当たりが強く、仕事しないなら別の事をさせるといふ判断で食堂いりしていた。

パイロット失格とまで言われて、二人は更に自分を追い詰めている。

日に日に消耗していく双子。集中できず、戦闘にも出られないで魂が抜けている。

無様と笑うものもいた。お前のせいだと責める他の古参もいた。

以前より男嫌いで対立していた周囲からの袋叩きによって、彼女たちは逃げ場所がなかった。

光のない目で、無理矢理アリアに与えられたシミュレーションだったが、開始一秒で死んだ。

全く動かず直撃し、撃墜される始末。

最早廃人と大差なかった。

「……お疲れ様です、ミチア」

「おう、アンダーソン。結果は……その浮かない顔を見りや一目瞭然か」

「ええ。惨敗です」

アンダーソンが戦っていたのは、OSに残されていたアリアの忘れ形見。

恐ろしいほどの強さを誇り、再現だと言うのに全く勝てない。

剩りにも強すぎる。NTという事を差し引いてもなお、異常な次元だと感じる。

アンダーソンは、答えを決めていた。いいや、覚悟を決めた。

アリアを連れ戻す、そう言う考えに腹をくくったのだ。

理由は皆と大差ない。己をスカウトし、愛機に便宜をはかってくれたのは、彼女だけ。

恩人とも言える少女を、見捨てることはしたくない。その為ならば、オーナーの命令

にも背く。

此度の事で完全に不信感を抱くアンダーソン。この道具のような軽んじる流儀を知っている。

このやり方は彼の世界の、ブルーコスモスと呼ばれる組織と同じ、人間を兵器や道具とする外道な手法。

本人が知っているとは言えど、人命を弄ぶやり方には文句を言いたい。

差別を助長し、戦争を激化させた連中のような非道なオーナーは信じたくなかった。

「……アリアと備えてか」

「そうですね。恐らく、良くて達磨がいいところでしようけど」

ミチアも似たような訓練をしていた。

同じく忘れ物のシミュレーションで戦ってみた結果は大敗。

己が一方的にやられただけだった。

一番恐ろしいのはシミュレーションの彼女をいくら強くしてもオリジナルには及ばない事だった。

これはあくまで、訓練用の調整されたものであり、アリアの全力ではない。

現在のアリアは別人を名乗り、味方の時は自重していた事をしない。

手加減なしに殺しに来ると予想できるが、その実力を誰も見たことがない。

一度現在のアリアと戦ったときですら、最初は逃げ回っていた。

それでも一発で撃墜する程。初手から攻めてくれば、手も足も出ずに負ける。

「EXAM……。こいつが、私の切り札です。単なる人間の私が追い付くには、それこそ殺すつもりで行かなければ」

「そうだな。相手が上なんだ。遠慮なく行くのは正解だぜ。で、扱えるのか？」

「一応は。彼女のかけたリミッターが作動している最中は、何とか。然し、時間制限があ

ると少々キツイです」

「だよな。……然し、どんな化け物だよあいつ。敵にしたくねえ」

ミチアは笑って言う。彼も彼で、彼女の超人のようなスペックには、対応を迫られている。

アンダーソンは徐々にシステムに慣れてはきたが、今度はマシンスペックが足りなすぎる。

ダガーで相手する次元ではないが、今のエリアが頑なに機体を使うことも改造も許容しない。

前任を倒すのは自分の役目と何度説得しても譲らず、これに関しては誰の言うことも聞かない。

おかげで、気軽に乗り換えも出来ない。

彼女の事は少しは評価するが、相変わらず頑固で我が儘な少女である。

それだから、皆に邪険にあしらわれるのだ。

「……私達には、何にも出来ないよね……」

「……出来ることなんて、ないわ……」

そこで、不意に。

後悔を滲ませる双子の囁きが聞こえた。

二人が見ると、双子は虚空を見て眩いていた。

話しかけた訳ではなく、互いに責め合っていただけの様子。

それだけに、いたたまれない。

「……できることつて、そんなもん誰にもねえよ」

ミチアが、それを聞いて双子に言った。

厳しい表情で、ぐったりする双子に言いつける。

「俺だつて解決方法なんざ思い付いてねえ。そんな簡単には終わらねえからな」

「……じゃあ、どうすればいいの？ 私分かんないよ……。私のせいで、アリアが……」

答えを乞うように、アンヌがミチアに問いかける。

さっきの言葉は本音なのだろう。どうするべきかも分からず、ただ意味もなく己を責める。

何をするべきか、教えてほしいように。

「ごめんなさい……。私には……。もう、どうすることも……」

マリーに至つては諦めていた。

自分の責任と背負い込み、苦しみ、ずっと足掻いている。

痛々しい姿に、アンダーソンも何も言えない。

彼は答えに至っているが、これは出来ることではない。

己なりに考え行き着いた答えであった。

言葉にするにも、伝わるのか。迷っていたが、ミチアは断言した。

堂々と、行き場を迷う双子に。

「何をすべきかとか、どうするべきかとか、そんなもんでもいい。俺はただ、アリアともつかい飯を食ったり訓練したり駄弁りてえ。だから、あいつとぶつかる。俺が、そうしたいと思つたからな！」

彼が言つたのは、建前など捨て置いて、自分がしたい事を実行すべしと教えた。

その言葉に、瞳に光が帰ってきた。久し振りの生氣のある顔で、驚いたように見る。「お前ら、難しく考えてるな。理屈じゃねえだろ。見ろよ、アンダーソンだつて要するにあいつともう一回ここで仕事したりなんなりしたいから、今訓練に励んでいるんだ。分かるかマリー。分かるかアンヌ。俺達は、俺たちが心に命じるままに行動している。なあ、アンダーソン？」

話をフラれて、アンダーソンも迷いが晴れた。

伝わるのかそんな心配はいらない。言いたければ言えればいい。

今は言葉に出すときだった。

「ええ。私も、アリアとまだ会いたいですし、彼女のやり方は好きですから。子供みたいな女の子ですから、私達大人が支えて、一緒に行きたいと思つてます。それこそ、命懸

けでも構いませんとも。彼女が私に託したEXAMの力で、追い付いて見せます。これが殺戮のシステムでも、私が彼女に向けるのは殺意ではなく、誠意。彼女が誤解するのならば全力でその思い込みを否定しましょう。彼女が戦いを選ぶのであれば、命を賭けて応えましょう。彼女に拾われ、生きる場所と友に出会う機会をくれた彼女に出来る恩返しは、まだ終わっていませんから」

アンダーソンはただ、アリアと話足りないし、共に戦い足りない。

恩も返しきれないし、大体が誤解から始まったものだ。

ならばその思い込み、否定しても構わないのだろうか？

「……自分が、したいこと？」

「自分が、望むことでいいの……？」

アンヌとマリーは、呆然と男たちの決意を聞いていた。

止めに、ミチアが二人に聞いた。

「ご託はいい。おい、マリー。アンヌ。お前らは何をしたいんだ。どうしたいんだ。自分に聞け。そして、立ち上がれ。俺たちに言えるのはそれだけだ。後は、自分で決めな。

……戻るぜアンダーソン。訓練は終わっちゃあいない」

「了解です」

背を向け、彼らは機体に戻っていく。

見送る双子は懸命に考えた。己の中で、己のしたいことを。

正直な答えにたどり着くまで、時間はそうといらなかった。

元々、二人の中にあつたのだから。

「……待つてよ。私も、一緒にやる」

「そうね。迷っている時間は惜しいわ」

振り返ると、そこには復活したアンヌとマリーが、いつも通りの笑顔で立っていた。

ミチアとアンダーソンも、苦笑いして迎えた。

「速いですね」

「ええ。クヨクヨしている時間はないです。決めました。アリアちゃんが何をどう言おうが私はアリアちゃんの親友です。喧嘩して絶交なんて嫌なので全力でアリアちゃんを追います」

マリーの覚悟も決まった。

友達じゃないと言われようがああ思い込みの激しい子供が、勝手に勘違いしているだけのこと。

謝ると同時に、少しまたお説教をする必要があるそうだ。

「へっ……良い面構えに戻ったな」

「当然っしょ。アリアが勘違いして私達を敵視するなら、ぶん殴つてでも止めるよ。で、

私も一発殴られて終了。喧嘩するなら生身で十分！」

アンヌも腹を決めた。

規模は大きいがただの喧嘩だ。

友達同士ならば喧嘩だってするし、すれ違いだって起こる。

殴って殴られて終わればいい。細かいことなど知らない。

決意を決めたら、アンヌもマリーも一緒に鈍った腕を叩き直す。

これじゃ届くものも届かない。死ぬ気で特訓して、あの子供に思い知らせてやるのだ。

こっちの本意と本当の気持ち。言葉ではなく、行動で。

「よっしゃ。気合い入れていくぞ!!」

ミチアが先導し、皆が機体に乗る込む。

せめて、シミュレーションのアリアには勝てないと未来はない。

だから今は訓練あるのみ。ひたすらに鍛えていく。

見事に復帰した双子と男二名は、気合いを入れ直し特訓を再開する……。

（アリアは、私には使えないから使うなって言ってたけど。使うしか、ないよね。もう一回、仲直りする為だから。……これを）

（確か、ウイングの発展型に搭載されているOSだったっけ……。だったら、強化前の機体にも搭載できるよね……。よし、プライドは捨てよう。上手く言いくるめて、乗っけさせないと……！）

——ゼロシステムを。

新たな旅支度

ノーフェは仮面を外して、何やら薄笑いを浮かべて、フェニックスの中で何か弄っていた。

いや、気持ち悪い薄笑いはいつものことだが、今回は違った。

フェニックスやハルファスを行ったり来たりを繰り返して、臆てAGE―2に乗り込んで入力している様子だ。

手には情報デバイスを持ち歩き、その様子を眺めていたクロスハートが彼女に声をかけた。

「ノーフェ君、何をしているんだ？」

彼女は質問が聞こえていないのか、反応が鈍い。

数秒遅れて気がついて、此方を見下ろす。

「……ああ、クロスハートでしたか。いいえ、うふふつ……。大したことではありませんが、少し……。面白いものが出来上がりました。……見ますか？」

クスクス笑って、彼女はクロスハートに映像を映したデバイスを投げ渡す。

間借りした私服で受け取った彼が目にしたのは……MSの設計図？

然し、見たことがない機体だった。知っているどの系譜にも当てはまらない。

「……ふふ。『永遠』と名を冠するガンダム……。どの世界にも存在しない、空想の、あるいは架空のガンダムの設計図ですよ。更には、まだまだ知らない機体があるらしいです。面白いと思いませんか？」

彼女が言うには、フェニックスやハルファスが内部に蓄積させていた戦闘データをAGE-2のシステムに提供し、それを基盤に勝手にシステムが新たな設計図を作り上げた、というのがこの機体。

フェニックスもハルファスも知らない、どこで生まれて誰に愛され、何のために戦ったのかも不明なもの。

然しノーフェは飛び降りて、クロスハートから受け取って微笑んで続ける。

「ふふふふ……設計図自体の完成度は高いのですが、これではまるでプラモデルです。MSとしては未完成にも程があります。オモチャで遊ぶのなら完璧でしょうが、実際に組み立てても……意味がないかもしれませぬ」

などと評価する。

ノーフェいわく、架空の機体だからだろうが、設計図自体は素晴らしい出来だが兵器

としてはオモチャレベルの無理矢理な設計。

そもそもサイココミュもなしに、単なる初期型のガンダムの改良機にファンネルが使えるわけがない。

嘗ては伝説を作ったとされるガンダムでも、後継機が大量にいる今では単なる旧式に過ぎない。

機体性能からして、そんな無茶な改造は現段階では難しい。

そこが所詮システムであり、贋作の限界なのだろう。使えないものを想像して作れと命じるのだ。

オリジナルはもう少しマシな物だろうが、空想を形にしたらだけ良いとするとノーフェは笑う。

「まあ……早急にお二人の機体を用意せねばなりませんから。破壊したお人形の役目です。ふふふ、期待してくださいね。機体だけに……フッフッフ……」

寒いギャグを言いながら作業に戻り、大して面白くない彼はひきつった笑いで対応する。

どうも、やはり彼女の基本的な行動理念は他人がいれば他人のために、となるらしい。発狂して病んでいる割には、皆を攻撃することは一度もない。

敵でなければ彼女は大人しいとユーリは言うが、特定の相手となると攻撃性が発露し

て手に負えない状態となると言うので、今は静観しておこうとクロスハートは判断した。

一方ツバサもツバサで、渋い顔でノーフェを見上げている。

「強化人間の完成形と言えるな。あれは、一つの答えとも言えるものだと思おう」

腕をくみ、ツバサはクロスハートに話しかける。

テイターズズの一人として強化人間を間近で見た経験がある彼は言う。

「戦いに消耗しない恐ろしく強い子供か。味方に逆らわず従順で、決して攻撃しない不安定の中の安定。……発狂しているというが、彼女のあり方は、なんとというか……悲しいものだ。強化人間と言うのは、ろくな死に方をしないんだ。当然だろうが、頭がおかしくなっている場合が多いからな。後世になれば安定している者もいたと言うが、やはり感情がコントロールできず死んだらしい。大尉はどう感じる？」

ツバサの言葉に、クロスハートはノーフェの作業を眺めつつどこか達観した様になった。

「私見でいいなら、人間の愚かさを知った感じかな。ユーリ君の話を聞く限り、彼女の上の存在がしっかりと教育してから育てればよかったと思う。時間も資源もあるらしいから、できないはずはないだろうし。然し能力だけ与え、精神的に未成熟の幼い少女に激務を押し付け、のうのうとしているその存在は、許されるモノではない。だが、困っ

たことに本人が精神制御の類いを受けずに了承しているってことだ。問題なのは。子供だから分かってなかった、なんてことも無さそうだけ。変な部分で大人らしさを持つ、アンバランスな子だったと言っていたしな」

あくまで推測とはいえ、その私見は大体あっていた。

彼女の取り巻く環境はクロスハートの言う通り、やろうと思えば出来ている。

しかし、やらなかった。理由は、この場にいる誰も知らない。

ノーフェ自身、発狂している時点でそんな理由など聞いた覚えもないしどうでもいい。

「弱ったもんだな。どこの世界、どこの国でも……ああいう連中はいるのさ。MS柄みで戦争をする奴等も然り。ああいう、子供に責任を押し付ける輩も然り。本当に、人間って生き物は度しがたい。救いようがない、馬鹿者ばかりだ。嫌になるねえ……」

何かを思いだし、遠い目をしているクロスハート。

ツバサは疑問に思うが、その時だった。

哨戒に出ていたユーリから、緊急の連絡が入った。

ノーフェが対応して、暫し通信をする。

切り終わると、二人に向かって彼女は言った。

凄まじい悪い顔。子供の無邪気な、サデイスティックな笑顔だった。

「……嬉しいニュースですよ。ふふふ、どうやらバルチャーが近辺で、小競り合いをしているらしいです。使えそうな物があつたら横取りをしようと思うので、出撃しましょう。お二人は……ああ、ザクでもジムでも好きなものを使ってください。動かすぐらいは行けますよね？」

なんと、小競り合いに横槍を入れて強奪しようと言うのだ。

今格納庫にあるのはユーリのレコードブレイカー、ノーフェのガンダム三機に動力炉となつたガンダム、更には再生した作業用のザクとかジムとかの非武装タイプ。

ついてくるだけでいいという彼女に従う。新しい機体があつたらその場で奪つてやるので、という理由らしい。

「……つくづく、野蛮な世界だな……」

「仕方ないさ。死の星じゃ、共食いしないと人間も生きていけない。やるしかないだろう？」

ツバサの悪態を吐き捨てるのを、クロスハートは肩を竦めて受け入れる。

生きるために戦う。シンプルな理由だからこそ、行動しないと死んでしまう。

何時までもただ飯食らいは二人も嫌だ。

彼らは作業用の機体に乗る、ノーフェはAGE-2に乗って、颯爽と出撃していく。

全ては、生きるための力を求めて……。

先行したノーフェは、激しく興奮していた。

なんと。戦場で、不利になっている陣営に真新しい敵の母艦を発見した。真っ白な母艦。

空中に浮いている、かなり小型だが立派なモノだった。

（あれは……まさか、ホワイトアーク!? 嗚呼、なんて幸運!! 素敵な母艦があるなんて!）

名をホワイトアークという小さな母艦は、MSの運用も出来る少人数で動かせる立派な母艦である。

宇宙にも対応し、この世界では現存する方が珍しい、空飛ぶ戦艦。

(フッフッフ……!! 欲しい。欲しいです、母艦……!! 小さくても、やっぱり定住よりもわたしは根なし草の方がいい!)

大興奮で、合流したトルネードのユーリに提案する。

「ユーリ……わたし、あれが欲しいです」

『あれ? えっ、母艦?! まさか奪う気ノーフェ!?』

上空で、下を見下ろしてノーフェの言い分に驚くユーリ。

いきなり母艦を奪うとか言い出せばそれは驚く。

「はい。欲しいです、母艦。そろそろ贅沢言っても良いですよね?」

『ええ……。仮に奪っても、ノーフェが運転できるの?』

「出来るから欲しいっていつてゐるんです。ふふっ、もう隠れている必要もありません。母艦があれば移動が出来る。必要なものは買い付ければいい。ユーリも手伝ってください。最低限二人いればあの規模なら動かせますよ?」

平然とこなせると言うノーフェ。

流石は元マスターユニット。システムさえ掌握すれば自動航行モードに設定できると言った。

その設定が難しいらしいのだが、最悪手動でやると言った。

ホワイトアークの内容を、既に知識としてノーフェはもっている。

システムが優秀だから、時代の違うこの世界でも連中が動かせるのだ。

『マジかあ……。Gダイバーと言えど、母艦を動かすつてのは未経験だなあ……。いや、戦闘は無理でも移動なら出来ると思うけど僕も』

「フフフ、なら決定です。ちよつと待っててください。潰して奪ってきますから」

オーケーを貰うと、いきなり急降下。まっ逆さまに戦場に突っ込んでいく。

ドン引きのユーリ。早速片っ端から殺戮開始。次々敵機が減っていく。

狂ったように暴れまわり、双方の戦力を皆殺しにしていくノーフェ。

それに応えるあのガンダムも異常な性能だ。ライフルが敵機を紙屑のように貫いて破壊していく。

いくつか、気に入ったのかノーフェがコックピットだけを丁寧に壊して中身のパイロットを殺して撃墜している。

数分もしないうちに両方の陣営の主力が減んでいた。ユーリは上空で警戒しているだけで良かった。

野郎二人も漸く合流して、後方に待機。戦えない為、仕方ない。

今はノーフェの独壇場だ。

(すごいなあ、ノーフェとAGE-2……。流星はオーパーツだよ。あれだけ動いておいて、出力の低下が全く見えない)

外部でモニタリングしているが、消耗らしい消耗を感じない動き。

ホワイトアークに、投降を呼び掛けるノーフエ。死にたくなければ母艦を寄越せと脅している。

抵抗するため、予備の機体も出すがその前にノーフエは既に先手を打っていた。

出撃したばかりの機体を速攻で近づいて、ズタズタに刻んでしまった。

サーベル二刀流で、四肢を切り捨てて蹴り落とす。

その様を数度繰り返し、全滅させた。

さっさと片付けてしまったそれらに対して、挙げ句には逃げ出そうとするパイロットを全員、MSで追いかけて踏み潰していた。

「……………」

ユーリは思わず目を背けた。ノーフエは奇声をあげて殺戮を面白がっていた。

愉快的な笑い声をあげ、パイロット含めて皆殺しにしてからもう一度ホワイトアークに呼び掛けた。

「全員、その艦から出なさい。そして、それを寄越すんです。じゃないとみんな……アーハハハハッ!! こんな風にガンダムで潰してあげましょうかアッ!? ほらア、返答はどうしたんですかアッ!?!」

血塗れの足を見せつけて、空に向かってライフルを空撃ち。

竦み上がったのか、ホワイトアークのクルーは停戦信号を出して、慌てて逃げ出したようだ。

不時着するホワイトアーク。数名の、思った以上に少ない人数が悲鳴をあげて逃亡する。

そのまま明け渡した彼らは逃げ仰せる……。

「はい、どーん♪」

訳がなかった。楽しそうに、ノーフェはあろうことか、逃げ惑う生身の人間に向かってライフルで攻撃。

直撃し、爆発して人間たちは散っていく。

(うっ……!?)

ユーリもまたNTだからか、僅かであったが肌で感じた。

恐怖を。圧倒的な絶望を。

ノーフェはそれを見て、聞いて、感じて狂ったように笑っている。

ユーリが嫌がるその感情を何倍も濃厚に受け取って尚、喜びを感じているのだ。

「クスクス……。はあ、面白かった。楽しい時間はあつという間ですねぇ。さて、じゃあ

早速壊した機体運びましょうか。お二人とも、よろしくお願いいたしますね、フッフ」

その様子を見て絶句するクロスハートとツバサに、ノーフェは言った。

自分はまず、母艦に侵入して敵がないか、罠がないかを確認してくるといつて入っていった。

彼らは、彼女の散らかした戦場を見る。

正しく戦場跡地。死体と残骸と焼け野原と瓦礫の光景。

全部彼女の楽しみの後だった。無惨な光景に、クロスハートが呟く。

「これが……ノーフエ君の本気か。惨たらしいが……俺たちはあの時、やはり遊び相手としか見られなかったようだな。それは、幸いだったか……」

「最早何も言うまい……。あの子供は狂っている。言うだけ無駄だ」

ツバサも言葉を控えた。

これだけの残虐性を発揮しても、少なくともツバサとクロスハートの機体を用意するためにしたこともあるのだ。

恩恵に預かる以上は文句は言えない。

ユーリは、悲痛な顔をしていた。

ノーフエは歪みすぎている。生きていられるけれど人形としての生を受けるに過ぎない。

これが、ノーフエの結末なのか。可能性を潰えてしまっているのか。

今は考えない。彼女はこちらに対しては敵意はないのだ。

味方であると言った以上、見捨てることはしない。無責任なことはしない、けれど。

(母艦もあるなら……少し、離れるのも手かもしれない……)

彼女に言うだけ言ってみよう。復讐を求めているから意味はないと思うが。ジエネレーションから、離れてみようと。逃げよう、と。

追記として、ホワイトアークは無事に手に入った。

即急にノーフェが設定を切り替えて、自動航行モードを確定。

このまま、母艦を拠点にすることにした。小さいから、人数が居なくても大丈夫だった。

一週間ほどほどかけて、彼らは母艦に引っ越しをした。

格納庫は増設も施し、今までかき集めたジャンクで、いくつか予備の機体も作成した。ついでに、野郎二人の機体も新調した。

ツバサには、敵から押収したマラサイを改良して、クロスハートには何やら最初から無傷で母艦の中にあつた、GエグゼスというAGE-2の親戚みたいなものをデータを

渡して動けるようにして。

二人は微妙そうな顔をしたが、受け取ってくれた。

かくして、彼女は再び動き出した。

ホワイトアークという、新しい居場所を手に入れて……。

淀み狂って、光照らして

ホワイトアークという母艦を手にいれて、彼らは本格的に活動を開始する……訳ではなかった。

四人という僅かな人数で母艦を運用するのはやはり厳しいものがある。確かに自動航行モードがあれば、移動は簡単。しかし、戦闘はこなせない。最低限、ブリッジクルーが必要になる。さらに護衛のパイロットも欲しい。生活するのにもいるし、贅沢を言うならキリがない。

「はい。人材、集めてきますね……ウフフ」

ノーフェがワガママで手にいれたもの。

自分が責任を持って、人間を回収してくると言って、ユーリに任せて勝手に出ていった。

ハルファスに乗って、有能な人材を集めに出掛けていつてしまったのだ。

停泊しているホワイトアーク。

彼女は行く前に、ちよつとした人工知能を余った機体に組み込んで自動で戦うようなシステムを構築した。

有り合わせのもので。戦力の足しにしてくれと言付けを残して、さっさと行ってしまった。

「……自由な子供だな……」

「そうだな……。俺達は商売を頑張ろうか」

ダブル大尉は呆れたように、ノーフェを見送り、仕事を始めていく。
ホワイトアークの戦力増加計画が、始動したのだった……。

ノーフェは、戦場を彷徨っていた。

使えそうな人間を捕まえるべく、孤児など何でもよかった。

そして、離れて四日目に良さそうな子供を見つけた。

眼鏡をかけた気の弱そうな、熊のぬいぐるみを持って、廃墟の街をさ迷っていた薄汚い少女だった。

「あら、可愛いぬいぐるみですね……こんにちわ」

機体を隠して、その少女と接触。ビクビクしている女の子を、微笑を浮かべて接する。

「だ、誰……!?! 仮面の変態!?!」

「うふふふふ、怖かろう……という奴です」

「ひいつ!?!」

問答無用。腹パン一発で失神させた。

気を失う前に、彼女は眩くように、

「不幸だあ……」

と、小声で呟いて失神した。

地面に落ちる前に、ぬいぐるみを確保。

彼女とぬいぐるみをコックピットに押し込め、自分も乗る。

狭いけど、我慢して誘拐。そのまま母艦に帰艦する。

「ユーリ、お土産です。はい、人材。じゃ、また行ってきますね……ふふ」

「こ、子供を誘拐してんじゃないよ、コラーア!!」

孤児の誘拐だった。ポイ捨てしてまた出ていくノーフェ。

気がついた彼女は狼狽し、ユーリが懇切丁寧に、懸命に説得を続けた結果、違う世界から飛ばされた挙げ句に戦争で全てを失って、行く宛も生きる術もないので、お世話になると少女はなし崩しに住み込みで働くことになったのだった。

ノーフェは宇宙に出ていた。

ハルファスで大気圏突破をして、デブリを泳いでいる時だった。

なんか、変な感じの脱出ポットを発見。妙なプレッシャーを感じる。

中身はおっさんが気絶して入っていた。中年の金髪のおっさんだ。

使えそうなので回収、母艦に半日かけて持って帰ってきた。

「クロスハート。お土産です。はい、おっさん」

「中年を俺にどうしろと……!?!」

さつさと、また出ていくノーフェ。

おっさんは翌日に意識が回復して、何でも違う世界の木星で戦っていたのだが時空変動に巻き込まれてこっちに來たらしい。

帰還も無理と諦める愉快なおっさんは、寒いギャグを言いながらならばここで雇って

くれと言った。

ユーリが感じる、NTの気配。高い素質をもつおっさんは、数日して艦長に就任した。但し素人。

ホワイトアークにおっさん艦長が就任したのだった。

ノーフェは北米の端にいた。

どこもかしこも瓦礫の山で、そこで奇妙な少年と出会った。

ノーフェと似て非なる何かを感じるのだ。

見たことのない珍生物だった。

「にゃんだ!？」

変な声をあげ、対応する少年。

……猫？ ノーフェは首を傾げるが、気にしない。

戦っていたので乱入。取り敢えず敵を殺す。

少年を隔離。援護をする振りをして……。

「いやあー、危ないところを助かったよお姉さ……げふうっ!？」

油断して笑った珍生物に腹。パン。

一発で気絶。放り込む、撤収。

そのまま誘拐。

「ツバサ、お土産です。猫擬き」

「どう見ても人間だろうがア!!」

ポイ捨て。出撃。ツバサ渾身のツツコミもスルーして出ていった。

起き上がった彼に、皆で説明すると、何だか微妙そうな顔をした。

不安定な生活をしていたので、誰かと共にあるには有りがたいがなぜ誘拐？ と聞かれる。

白状。この阿呆が人集めに世界中から誘拐と拉致を繰り返して仲間に行っていると正直に

白状。少なくとも、安心安全で飯が食えると言うと、呆気なく彼も仲間になった。

いわく、飯を食えるなら何でもいいらしい。

余程餓えていたのか、その日から腹一杯食える幸せを噛み締めていた。

「詫び入れなア!!」

また、放浪する彼女が見たのは、何やら戦場において凄んでいる女性の声。

見れば、妙な機体が格闘で敵を倒しまくる無双をしているではないか。

強そう、とニヤリと笑ったノーフェもその戦いに参戦する。

突如の乱入者。その女性は不機嫌そうに叫ぶ。

「あアンツ!!」

「……フフ、見つけました……」

上空から強襲、四肢をズタズタのいつも通りの達磨に仕上げた。

驚く女性に要約すると貴様のその身をもらい受けるとノーフェが突き付け、キレた女性
性がなんと機体を捨てて生身で飛び出してきた。

「ンだとお!! わたくしに向かっていい度胸してんなゴルア!」

今までで見たことない闘志のある女性だった。怯むどころか加熱している。

これは面白い。ノーフェは更に調子にのって、こちらも生身で飛び降りて、挑発に乗った。

微笑みながらヘルメットを脱いで、事情を説明。手を貸してほしいと。

「ほう。面白いですわね、わたくしにそんな啖阿をきるとは……」

「フフフ、如何でしょうか？」

「構いませんわ。わたくし、傭兵ですもの。雇うと言うのであれば、報酬次第」

「では……」

交渉に入る。彼女は、金さえ払えば何でもやってやるといつてくれた。

金を戻らないと払えないので、なんだかんだ結局一緒にガンダムに乗り込む。

「……成る程。面白い機構をしたガンダムですわ。あなた、名前は？」

「ノーフェ。ノーフェ・ネームレスです、お嬢様」

「フツ……よろしい。では、出発なさい、ノーフェ」

内部を見ただけで珍しい機体と理解した彼女を連れて、ホワイトアークに戻る。

彼女は正式に雇った傭兵と皆に説明する。啞然とした顔でみな、黙っていた。

「わたくしはフローレンス・キリシマ。よろしくお願い致しますわね、皆様？」

名をフローレンスと名乗るお嬢様がホワイトアークの一員となった。

実はこの女性、凄まじく有能かつ過激な人だと、皆が知るまで時間はかからなかった。

こんな感じ着々と人数は増えていく。最低限の人間が揃うまで、対して時は必要な

かった……。

ホワイトアークは気がつけば、結構有名な集団となっていた。

腕利きのメカニック、ユーリと悪魔の不死鳥、ノーフェ。

素人の集まりだった彼らは、指導者フロレンスお嬢様の教育により頭角を現していた。

ヤクザのような狂暴性と教師のような丁寧さ、お嬢様よろしくの優雅さと策士顔負けの交渉能力。

フロレンスは、まさにホワイトアークという小さな母艦を導いた優秀な女性だった。

日々仕事を続けて、バルチャーとして名を馳せてきた彼らは、かなり裕福な集まりとなった。

ノーフェは雑用とお手伝いのお人形として使用人感覚でフロレンスにコキ使われているし、ユーリはドスの効いたお嬢様に疎み上がり、ツバサはテイターズの思い上

がりをお嬢様によつて矯正させられた。

結果、実力もまた向上しており、クロスハートぐらいなものだ。ムードメーカーになつてゐるのは。

「ふむ。素晴らしい出来合い。完璧ですわ」

「そりやどうも……」

ツバサは苦手意識を感じて強気には出られなかつた。

なにせ戦場でみた鬼神のごとき活躍は彼女も強化人間の類いかと疑いたくなるレベルだった。

個々に合わせて仕事を割り振るリーダーとなつたフローレンスは、おつかないが頼れる姉貴として信頼されていた。

今日もパイロットにトレーニングを命じて、こなした彼はそのまま休暇。

クロスハートは機体の整備で忙しく、艦長となつたイワンという木星帰りの男は現在徹底的に鍛えられている。

人一倍厳しい訓練に死にかけているようだが、艦長という仕事上妥協は許されない。彼も彼で、懸命にユーモアを混ぜつつ頑張つていた。

フローレンスを慕う子供組が、暇を余して遊びに来ると、優しく笑つて一緒に遊ぶ。

孤児が多いこの集団では、クロスハートやフローレンスは良い姉と兄といった感じに

なっていた。

そして。

この面子を集めてきた最古参である二名が、別室で話し合いをしている為、お嬢様がお人払いをしていることに誰も気付くことはなかった。

「直球で言うよ、ノーフェ。……ジエネレーションを追うのを止めよう」

「フッフ、嫌です。絶対嫌です」

珈琲を飲みながら別室に二人はいた。

薄い部屋着のノーフェは仮面を外して薄笑いを浮かべ、真剣な顔で同じような格好のユーリが告げた。

誰も知らない。フロレンスは、表のリーダー。

裏では、使用人のお人形が彼女と相談してあれこれ決めていると。

人形の意見とフロレンスの主張が噛み合って、この母艦は上手く機能しているの

だ。

フロレンスは言った。目論見はバレているから、好きにしろと。

元々居場所のない連中を誘拐し、仮初めとはいえ生きる場所を提供するノーフエのやり方にはケチはつけない。

ユーリ達から事情を聞いているから、復讐でも何でもやればいい。

ノーフエの帰る場所としてここはある。安心してやりたいことをしていい。

フロレンスも、長いこと傭兵稼業をやっているが、ここは居心地が良いので暫くは滞在する。

ジェネレーションを追って、殺したい相手を殺して終わったあとはここが新しい居場所になる。

もう、一人じゃないから。悲しい思いをせずとも、ここはノーフエを受け入れる。

過去を断ち切ると言うのなら、実行しろ。不敵に笑って、励ましてくれた。

久々に、少しぐらいは他人を信じる気になった気がする。

自分の背中を、こんな事でも押ししてくれる人がいた。

だから、ノーフエは少しかだけフロレンスにお礼を言った。

「……すみません。お気遣い、心より感謝いたします……フロレンス」

その瞬間だけ、薄ら笑いを消した。本当の……狂う前のアリアに戻れた。

なぜか、あれほど狂っている筈の自分が、戻れたのだ。

分かったのだ。自分のなかで、狂っている自分と……少しだけ、以前の自分が分裂した事が。

フロレンスの気遣いに触れて、ユーリが心配そうにこちらを見ていることで、それが後押しになった。

双子の時に少しでも信じようとしていた心。

俗に人がそれを、『良心』と呼ぶ部分が、潜めていた息を吹き替えて語りかける。

……はあ。黙ってずっと見ていましたが、ここまで悪化するとはもう笑えませんね。己を客観的に見てですが、何となく分かりましたよ。

どうせ、わたし自身の思い込みなんじゃないですか？

冷静に考えれば理解できたものを。我ながら馬鹿げていますね、本当に。

記憶がなければ、他人を疑って良いのですか？

そうだと決めつけ、自分では話を聞かず、違うと否定し、走り続けた結果が……新しい場所と新しい名前ですか。

何をしているんでしょうね、わたしは……。

……フッフ、何をいうのですか。

あいつらが先に裏切ったんですよ？

わたしを殺そうとしたのは向こうなのです。

わたしは悪くありません。証拠だってある。

あの時、わたしは敵意しか感じなかった。

その状態で……何を信じろと言うんですかッ!!

銃を向けて敵じゃないとほざき、お人形だからと勝手な都合で手を伸ばした!!

そんな連中に、何を信じろと!?

自分を客観的に見ている嘗ての自分が、自分のなかに甦り囁く。

明確に、自我を持って己を責める。

喚き散らして否定して、正当化する自分自身。

そうしないと、自分のやっている事がおかしくなりそうで。

居場所を自分で捨てた？ 自分で諦めた？

だったら、今までやってきたことは……!!

「……ノーフェ？」

……騒がないでくださいな。

別に、ジエネレーションに戻りたいとは言いません。

いいえ、言えないでしょう。戻りたいと思いますけれど。

然し、依然としてわたしはどのみち裏切り者。

鉄則に従い、死すべき女です。

皆様が認めても、オーナーと今のマスターユニットが決して許さない。

仮面をつけて、決別したことは今頃修正など出来ません。

わたし自身が仕出かした事。都合の良いことは筋が通りませんから……。

……な、何を……!?

……ただまあ、黙ってわたしの親友や盟友を殺られる訳には参りません。

今の関係は、『わたし』が築いたモノですから、壊しませんよ。

ですが、わたしのモノを怖そうというのなら……こちらにも、少しばかり考えがあります。

……何を、何をするんですかッ!!

わたしは、奴等に復讐を……!!

……人の好意に甘えているくせに、何言いますか。

『わたし』も所詮はわたしなんですよ。

復讐なんてさせません。ていうか、復讐だと思っているのは『わたし』だけです。

そんな相手もいませんし、きつと理由もありません。単なる思い込みの逆恨み。

少し、大人しくしてくれませんか。いい加減、我慢の限界です。

勝手に殺戮はするわ誘拐はするわ……。

発狂して話を聞かないの知ってますし。

わたしから分裂した『わたし』は、チェンジで。

ここから先は、冷静に判断できない『わたし』は、少し、眠ってください。

皆様は、離れていてもわたしの仲間です。友達です。親友です。

絶対、護ります。

……や、止めて……邪魔を、しないでください……!!

……バカは引っ込んでなさいツ!!

怪訝そうに聞いていたユーリは異変に気がついた。

俯いて急に黙った彼女は、雰囲気我突然……変化した。

やがて、顔をあげる。ゆっくりと、濁ったハイライトのない瞳ではなく、薄笑いも浮かべず。

至って冷静、知的な表情と瞳で。

「……。厄介なことになりましたねこれは」

明らかに違っていた。困ったように、眉をひそめるノーフェ。

声色も異なる。まるで、別人のように。

「の、ノーフェ……?」

ユーリが困惑して、恐々訊ねる。すると、彼女は苦笑する。

「なんだか見たことのない表情であった。」

「ああ、ジェネレーションから離れるという提案でしたか。はい、お願いします。是非、その方向で」

真逆に意見を変えて、頼み込んできたのだ。

何が起きているのか、ユーリが聞くとボサボサになった髪の毛を嫌そうに手入れするノーフェ。

見れば、こんな仕草は見たことがない。

身嗜みに気を使うような彼女ではなく、ボロボロの薄紅のロングヘアをみてため息。

そして、疲れた声で口を開く。

「混乱しますよね……。わたしも、ビックリしています。どうやら、わたし……あなたが知るノーフェという人物と、人格というかなんというかが、分裂しているようなんですよ。俗に言うのと、二重人格的な感じですかね。なんでか、入れ替わりが出来たみたいで……。どうしましょう、これ……」

自分でも途方に暮れている、ノーフェがいた。

ユーリは唾然として、コーヒーを落としそうになった。

切っ掛けがあつたとはいえ、こうも短期間で精神に異常をきたす彼女は、己でも理解不能だつた。

この日、ノーフェ・ネームレスは分裂した。

得体の知れない、二重人格となつて……。

双子の思い出

——問おう。お前の戦う理由はなんだ？

目的はなんだ？

示せ、お前の望みを。

託せ、お前の願いを。

あらゆる可能性を予測しよう。

あらゆる未来を見せてやろう。

だが、忘れるな。お前の望みは、お前の未来は多くの死の先にこそ辿り着く。

——殺せ。

——殺すのだ。

時に敵を。時に味方を。時にお前自身を。

さすればその願い、その望み、叶えてやろう。
さあ、殺すのだツ!!

「あ、ああああああああああああああアツ!!」
「ぐ、うう……」

これが、双子の欲した力。

これが、二人が求めた力。

壊れる。頭が壊れる。

脳内にビジョンが侵入してくる!

見たことのない光景が広がっている!!

姉が死んでる！ 妹が死んでる！！

味方が死んでる！！ 母艦が墜ちてる！！

何でだ。なんでこんな未来が見える！？

これが願いの果てか！？ これが望みの果てか！？

止めろ、死を強いるな！！ 殺意を押し付けるな！！

意識が吞まれる！！ 自分が消える！！ 入ってくるな、染め上げるな！！

私の身体を、支配するなアツ！！

「や……止めろおおお！！」

「認めない……私は、認めないから……！！」

ダメだ、勝てない。機械に頭が乗っ取られる。

このシステムは、欠陥品。死を強いることでしか、人を導けない。

無数に見えるは未来の欠片。膨大すぎる予測が、容赦なく二人の脳を押し流す。

壊れる。壊れる。失う。失う。消える。消える。

堪える。踏ん張る。抗う。戦う。

もう、限界。二人の意志が、奪取される。

その一歩手前で、誰かによって、二人の意識は回復した……。

「……ねえ、いい加減に止めなさいよ。本当に、意識が破壊されるかもしれないわよ……？」

大きく息を吸い込む。酸素を欲して、何度も繰り返す。

見上げれば、見たことのある無機質な天井。

二人は、カプセル型の機械に横たわり、HMDを装備していた。

私服は汗をびっしょりとかいて、濡れている。冷や汗と脂汗。

酷い吐き気と頭痛が襲う。ふらついて、外して起き上がろうとする。

が、身体に力が入らない。そのまま天井を見上げて、深呼吸。

側には、しおらしくなったマスターユニットが心配そうに見ていた。

「五月蠅いわね……死にはしないわよ」

「……ちよつと、黙ってて。頭に響く」

双子の素っ気ない態度に、然し彼女は言い返す。

「バカ言わないで。もう、何度目なの？ 精神が異常をきたすまえに止めろっていつて

んのよ。脳波がここまで乱れているのに、まだ続けるの!? 本当に死ぬつもり!?」
気丈に、純粋な心配をしてくれる。

が、頭痛で苛む二人には余計なお節介。

鬱陶しいとハッキリ言った。

「あんたとは、チーム組むつもりはないって言ってるでしょ。……何度も言わせないで。アリアはあんたじゃない。あの子だけ」

「……あなたは、新人の相手をしていて。私達は、あなたの世話をされるほど、弱くもなければ経験が浅くもない」

相変わらず、適材適所を知らないマスターユニット。

二人には、一切手出し無用だと何度言えればいいのか。

拒絶をしているのに、彼女も引かない。

「うちのパイロットが死地に向かっているのに止めないバカはいないでしょうが! 確かにそつちの意見は尊重するわ。けど、それで死んだら意味ないじゃない!! あたしと違って、あんたたちは一度の命なのよ!?!」

道理だ。死ににくく奴を止めない仲間などいない。

けれど、これは意地の問題なのだ。こつちにも退けぬ理由がある。

「だから、命懸けでやってんのよ。あんたにはわからないでしょうけど、私たちにはそれ

だけの価値と意味があるの!!」

「くどいわ。子供扱いしているなら、あっちいってて。邪魔だから」

イライラしているのもあって、普段以上にキツイ言い方になる。

横目で睨むと、怯んだように彼女は一步下がった。

本気だと嫌でも理解する。これが、人間の覚悟と言うもの。

彼女の知らない感情だった。

それは、時として理屈も道理も無視して突っ走るモノらしい。

「……そう。分かったわ。無理だけはしないでね」

何時もなら逆ギレして口論になるが、彼女は身を引いた。

他者の意見の尊重。それが、目下の彼女の課題だった。

マスターユニットは、とぼとぼと悄気て部屋を出ていった。

流石に、あの背中を見ると若干の罪悪感も感じる。

「……強く、言い過ぎたかしら?」

「丁度いいですよ。あいつ、私は認めないし」

姉の言葉に、妹は吐き捨てる。

どうも、妹は覚悟を決めて以来、彼女を毛嫌いしている様子だった。

まあ、それも仕方ない。何せ、今は古巣に帰ってきていて只でさえ居心地が悪い。

不機嫌は輪をかけて悪化しているのだから。

現在。とある世界の組織、そしてマリ―とアンヌの裏切った本来の場所。

OZの所有する資源衛星、MOVに二人は訪れていた。

元々は、あの頑固なマスターユニットが話を聞かずに却下したことだった。

マリ―とアンヌは申し出た。あの裏切り者を殺すから、例のシステムを使わせろと。

当然、彼女は却下した。命の危険があるものはダメだ、マスターユニットとして認められないと。

ああだこうだと揉めていたが、アンヌが我慢できずに彼女にこう告げたのが、始まりだった。

「あんたなんかアリアアじゃないツ!! 同じ名前の赤の他人よ!! 私達のマスターユニットはアリアだけ!! あんたじゃないのよ!!」

……手痛い失敗を自覚して、負い目を感じていた彼女には、とても傷つく言葉だった

のだろう。

然し、皆の本音でも同時にあったのだ。古参は、決して彼女を信じない。

失態を取り戻そうと、余計に過保護になっていた彼女には痛烈な威力があったようだ。

口論をしている最中、初めて彼女は逃げ出した。とうとう、アンヌが彼女を……今のアリアを言い負かした。

丸一日、部屋に引きこもって出てこなかった彼女。その間に双子はこれ幸いともう一人のもと上司に掛け合った。

ゼロシステムを、ガンダムに搭載してくれと。

最初は渋っていたが、二人の腹をくくったのを見て、漸く了承。

オーナーも、任務に前向きならば自己責任で許すと言って、搭載を許可。

当然、先ずは慣れさせないといけないので、専用の機械に入って何度もシミュレーションを繰り返した。

ゼロシステム。それは、戦場における情報分析と、状況予測による一種の未来予測。

毎秒、膨大に発生する予測結果をパイロットに直接見せて、戦闘をアシストするためのシステムである。

他にも何やら効果があるらしいが、二人は詳細など知らずともいい。

問題は、この膨大な情報にパイロットが負荷に耐えきれない場合が多いのと、基盤が『敵を殺す』ことに傾いているため、目的に応じて結果を出すのは良いけれど、剩りにも効率最優先にすることだった。

システムに打ち負けると、良くて暴走、悪ければ精神が死ぬ。

目的のためなら自爆あり、裏切り上等、寧ろ推奨と精神の弱いものならシステムに呑まれて我を失って、いつぞやの悲劇を繰り返すことになる。

二人が使っているのは、一応バージョンアップして、安全と言われている物である。一般パイロットでも使えるとは言われたが、使いこなせるとは言われなかった。

つまりは、まあそういうことだろうと思う。安全が聞いて呆れる。改良されてこれなのだ。

改良される前は、もっと酷い有り様だったのだと思うと、ゾツとする。

マスターユニットが慌てるように、酷使すると脳が壊れるリスクもそのまま。

いい加減に、耐えるぐらいは出来るまでに慣れてきたが、まだまだだった。

これでは、戦闘には投入できない。生半可に耐性があると、暴走が十中八九のオチ。さつき、ゼロシステムが見せたのは試しにやってみた、生き残ると目的。

結果が、僚機を楯にして、あるいは母艦を捨てて、あるいは敵をただ殺し尽くしてと無理ばかり。

殺すことしか出来ないシステム。それが、ゼロシステムというもの。

それでも、使いこなせればきっと彼女に追い付けると信じた。

あの規格外とやりあうには、それこそ命の一つや二つ、賭けないと話すらできず始末される。

敵には情けのない女だ。今はただ、回数を重ねていく。

マスターユニットは、アンヌの一言にかなり傷ついて、出てきたときにはすっかりしおらしくなっていた。

相手のやりたいうようにさせる方が良いと思ったのだろう。意見のごり押しは一切やめた。

お節介なのは変わらないが、警告にとどめる程度。本気で拒否すれば簡単に引っ込んだ。

随分とダメージを負ったようだが、これで反省してくれればいいのだが。

で。アンヌとマリーは、出身の世界に来ていた。

ジェネレーションの運搬の仕事。OZの資源衛星に、荷物を搬入すると聞く。

OZ。二人の脱走した古巣。しかも、辺境の衛星とはいえ、バリバリの現役。

伊達にエースとして名を通していなかった。裏切り者の双子として、やはり噂には出ているらしい。

外に出た他の面子がいつていた。

所属する派閥こそ違つたが、全体を通して双子の戦績自体は優秀の部類だつたのが仇になつた。

ジェネレーションに逃げ込んだと、OZの連中は探しているとか。主に怨念返しで。昔は周囲と軋轢が当たり前にあつた。何せ、OZの癖に総帥の意見には賛同していなかったから。

ただ、双子は双子で割りりと過去、ろくな生き方をしていなかった。

住むのも困り、食べるのも困り、服にすら困窮する幼少時に送つた。

たまたま、適正ありと判断されてOZには拾われただけ。生きるために、OZに加入しただけだつた。

要するに、ご高説や思想など全く持つてどうでもよい。

ただ、日々の生活のためにパイロットをやつていた。それだけ。

周囲の心酔する同僚には悪いが、総帥殿の言つている事に興味すら無い。

二人で一緒に生きるため、与えられたノルマをこなしたらエースと呼ばれていた。

気がつけば周囲から女という理由でセクハラとパワハラを食らつていた。

嫌気がさして、二人で逃げ出した。で、あの子に救われたのだ。

今まで知らなかつた、初めての姉妹以外の親しい友人。

それが、アリア。今はいない、すれ違いをした少女。

「はあ……。マジで憂鬱……」

「MOV……何だっけ、他の所属する人たちだったよね……?」

気分が回復しても、テンションまでは回復しない。

よろよろ起き上がった二人は、周囲を見回し人がいないのを確認してから部屋に戻った。

二人セットの自室。ごちゃごちゃ私物を散らかすアンヌ、整理整頓のマリーの部屋。

二人で一緒に写る写真を見て、アンヌはぼやく。

マリーも着替えながら、妹に問う。

「私は噂程度しか知らないけど、なんかMS開発してなかった? なんだっけ、ジエミナス?」

「ああ、そう言えば前にアリアちゃんが言ってたわ。双子座のMSだったかしら。私達と同じで双子の男がテスターやってるって聞いた気がするけど」

「どうでもいいよね。もう、私らOZじゃないし」

「そうね。今は、此処が私達の居場所だものね」

ジエネレーションこそが、二人の居場所。アリアがくれた生きる場所。

だから、アリアが居てくれないと寂しい。

「なんか、ゼロシステム使える気がしないんだけど……マリーだからこんなこと言うけど」

「でも、他に方法なんてないじゃない。アリアちゃんは殺しに来るのよ?」

「分かっているけどさ……。どうすれば上手く伝えられるかなあ……」

「私達はNTじゃないから、サイコミュは使えない。サイコフレームも、なんでか反応してくれないし」

弱気になる双子。あまりにも時間がかかりすぎる。

遅々として進まない現状。ゼロシステムに慣れない自分。

いざ使えば待っているは無様な暴走。アリアのことを言えなくなる。

NTにもなれないし、況してや強化措置など不可能であった。

OZで過酷な訓練を積みすぎたせいで、下手に強化すればそれこそ精神崩壊を起こしてしまうと事前に言われた。

他の方法だって何度も模索した。けれど、手段はもう、これしかない。

「デルタカイ乗れば私も……」

「アンヌ。死にたいの?」

アンヌが不意に溢した眩きに、マリーは低い声色で怒った。

それだけは、決して選んではいけない。元上司も、その方法は許さなかった。

「つと……ごめん、マリー。生きてないと、意味ないよね」

「言いたいことは分かるわ、アンヌ。でもね……私達が生きてなきや、意味はないの」
済まなさそうに、アンヌは謝った。禁忌の手段は選んだら最後、待つのは死ぬしかない。

マリーは望まない。姉妹も親友も、欠けることない未来しか。

「分かつてるよ。デルタカイなんて、絶対乗らない」

呪われたZの系譜。恐らく、残虐な思想のもとで建造された存在が忌まわしいMS。

それも、ジェネレーションは所有している。けれども、ゼロシステムよりも悲惨な結果にしかならない。

「……PXってのは、ダメかな？」

「ジェミナスのこと？ あれは素質の問題らしいわ。ミチアさんが、止めておけて。自爆オチしたいのかって言われたわ」

ここ、MOVのMSに搭載されるという話のシステムは、素質が絡むとマリーは人伝に耳にした。

いわく、無理に使えば普通に死ぬ危険なモノだと。

アンヌはため息をつく。結局、ゼロシステム以外には辿り着かない。

それも自我崩壊のリスクあり。どのみちも、茨の道なのは明白。

ふと、目にした荷物の中に、懐かしいものを見つけた。

昔、アリアと撮った写真だった。三人で、とある地球の公園で遊んでいた頃の記念の一枚。

無邪気に微笑むアリアが、アンヌに絡んでじやれているのを見たマリーが苦笑いしている写真。

こんな風に、また笑いたい。一緒に遊びたい。

心から、そう思う。

「……」

マリーも違うモノを抱き抱えた。

それは、アリアが作ったハ口の縫いぐるみ。

なんだか目付きが悪い、真っ黒なハ口。

目が真っ赤で表情が怖く、凄く大きな縫いぐるみ。

彼女が誕生日のプレゼントしてくれたものだ。

アンヌにも色違いの白いハ口が今でも枕の代わりを果たしている。

因みに、特定の場所を押し込むと中に入った機械が反応して音になる。

久々に聞きたくなって、押し込んだ。

『敢えて言わせてもらおう……この感情、正しく恋だッ!!』

アリアの声真似が入っているのだ。

セリフのチョイスは不明だが、パターンがいくつもある。

飽きないように、たくさん入っていた。耳の辺りを連打してみる。

アンヌも、白いハロを押し込んでいる。弱気になった心を、置き土産で奮い立たせる
為に。

『無論、ナニに決まっているだろう……ガンダムッ!!』

『やはりか、この変態仮面めッ!!』

思い出した。二人同時にやるとセリフが掛け合いに変化するんだった。

『見てろよ、俺が決めっぜッ!!』

『必殺ッ!!』

どこから覚えてきたのかわからないセリフを、暫し二人で一緒に鳴らす。

『ハロは……オモチャじゃないんだぞ!!』

『ハロ作るのが……難しいね……』

『これでタイムオーバーだ、腐れ外道オ!』

『しかも有線コントロールできる』

『遊びでやってるんだよ!』

『私の知らない必殺技が内蔵されるとでもいうのか!?!』

『だからゲームの攻略法をみんなに教えなきゃならないんだろ!!』

『ならば、今すぐ奴等に必勝法を授けて見せろ!』

『やめるんじゃねえぞ……』

『何言ってるんだよ隊長オ!』

……冷静に聞いていると、何だか妙な笑いを浮かべていた。

真面目な顔をしたアリアが頑張って声真似してこんな風に楽しませようとしてくれるような親しい間柄だったと。

クスクス笑いながら、次第に頬が緩んでいるのを気がついた。

「アリアってば、本当にしようがないなあ」

「ええ。まったく、困った親友ね」

ここにはいないけど、元気付けられた。

その為に、今は頑張っているのだから。

ハ口を押し込んで楽しんでいた二人は、互いの顔を見て笑っていた。

苦笑い。必ず、連れ戻す。そう、改めて誓いながら。

——そこに、無作法にも敵襲を知らせる、警報が鳴り響くのだった……。

二人で一人には、なり得ない

時は、少し遡る。

名を変え、仮面をかぶり、過去を捨てた筈の一人の……いや、一体の人形がいた。

常に最強であることを義務とされ、責任とされ、自身もそれを応えようと働く人形であつた。

事実、彼女は子供ながら懸命にこなして、結果を出すことは出来る。

然し、彼女はやはり子供でしかない。

精神は幼く、経験を重ねても努力は分からず、痛みにも鈍い。

彼女は彼女なりに成果を求めていたのだが、子供の感情に、半端な大人の理屈、押し込められた能力と、何もかもアンバランスで、一つ間違えば瓦解してもおかしくなかつた。

挙げ句には、己の人形という扱いを許していた。人間でないことは、自覚していた。

一種の使命。最強の能力は皆のために。最良の選択を皆のために。最高の環境を皆のために。

けれども、もうそれも叶わない。己が始めた自滅の選択。

たとえ離れたとしても、彼女の胸には常に彼らの奉仕の心があった。

戻ればきつと、全てのバランスが崩れてしまう。皆の立場が危険に晒される。

死ぬべきなのだ。この意思は、分裂した『彼女』と共に。

鉄則は遂行すべし。何事にも例外などない。敵に情けはいらない。

それがたとえ、自分だったとしても。断罪をされるべきなのだ。

裏切りの償いはする。だが、償いすら要らずに死ねというならば、是非もない。

この命、皆に……ジエネレーションに捧げよう。

此度の裏切りは、全ての責を我が身で引き受けよう。

危険な獣を世界に、世に放った罪を裁かれるのは自分のみ。

全部、自分が悪いから。

幼い自分でも分かるとも。別れた自分が至ってしまった戦闘用NTの極地。

戦いを楽しむ戦闘狂。あんな風になるつもりなどなかったのに。

いい加減に理解する。自分は、皆と違いすぎたのだ。

（わたしは、死ぬべきなんですよ。『私』は、死にたくないようですけど）

(ふぎけないで!! 私悪くない!! 裏切ったのはあいつら!!)

(じゃあ、証拠は?)

(私に銃口を向けた、これで十分でしょう!?)

分裂してからと言うもの、毎日毎日外に出せ、方針を撤回しろと内側で喧しい。

ぎやあぎやあ一人で一人芝居のように行動する様は、ユウリですら困惑する。

翌日から、彼女はがらりと様変わりして行動を始めた。

「はあ? 二重人格?」

お嬢様のフロレンスに事を伝えると、呆れた表情で聞き返された。

自分の経歴を説明すると、あっさりと納得してもらえたが。

「成る程。ジエネレーションのクローンでしたか。面白い経歴ですね。で、例のもう一人はなんと仰ってますの?」

「ジエネレーションを追い、復讐をさせろと。わたしは、逆です。復讐などさせません。追わなくて結構です。向こうが追ってくるならまだしも、私から逃げた場所にお礼参りなど許せません。鉄則は、絶対です」

「妙に律儀に道理を通すんですね……。まあ、構いませんが。今後、優先するべき人格はどちらで?」

「フロレンスは、わたしと逢うのは多分初対面と思います。元々は、本来の人格はわた

しなんです。ですので、『私』が出てきたらわたしを出すように言ってください」
ややこしいことになった。

同じ名前、同じ顔の人格が二人いる。しかも方針真逆で。

フロレンスは仮称でいいから、互いに名前をつけろと言いつ出した。

どっちがどっちか、見分けがつかないと言われる。

「……そうですね。なら、彼女はユーリから貰った名前があります。ノーフェを、彼女の名前にしてください。わたしは……うん。『アメリカス』でいいです。元の名前は返しました。ですので、今は仮称として『アメリカス』と名乗りましょう」

その名を聞いたフロレンスは不快そうに目を細める。

低い声で、聞いてきた。

「敢えて名乗るんですの、その名前を」

「ええ。裏切りの魔女。わたしには、ピツタリの名前です。というか、末裔であるわたしは言うなればアメリカスの系譜の一人。誤魔化しはしません」

オーバーワールドにおける忌避される名前を、名乗る。

嘗て世界を混沌の坩堝に陥れた災いの魔女。

彼女は、自らをその魔女として定義する。裏切り者には、ちようどいい。

アリアの名前は烏澁がましくて、名乗れない。会わせる顔のない彼女には、もうこれ

しかない。

軽く語ると、ため息をついて、フローレンスは警告する。

名乗るのは勝手だが、名乗ったことで身内を危険にさらす真似は避けると。

「分かっています。どんな状況であろうが、わたしは皆様の為に尽くすのが生きる意味です。ので、勝手は控えます。ノーフェにも、よく言っておいて下さい」

分裂した二つの人格は、互いにずっと揉めている。

仲間に対する言動は同じ。異なるのは、自分を発露するかしないか。

復讐させろ、絶対だめ。死にたくない、死ぬべきだ。

真逆な事を言って喧嘩ばかりをするお人形。

反する二つを抱きながら、元マスターユニットは、今日もバルチャーを続けていく。

ある日のホワイトアーク。

縫いぐるみが破けて、泣いている孤児がいる。

クロスハートが右往左往しながら、宥めるも無意味。

事情を皆に正直に打ち明けた面倒な子供が、泣き声を聞いてやってきた。

「……おやおや、何事ですかね？」

ピンクのロングヘアを寝癖でボサボサにした、鉄仮面が私服のクロスハートに聞いた。

寝間着姿なのだが、微妙に着崩れを起こしている。

「ああ、良かった！ 助けてくれ……ええと、ノーフェ君か？」

「ご名答。ノーフェです」

仮面被ったパジャマの変態が何事か聞く。

何でも、ある少女の縫いぐるみが他の孤児に穴を開けられてしまったとか。

とても大事な物なのに、と泣いている彼女。

「……クロスハート。ちよいと説教しておいてくださいな。私が、直しておきましょう」
鉄仮面は、抱き抱えているそれを強引にひったくった。

やめて、と叫ぶ彼女の首根っこをひつつかみ、とことこ歩いていった。

クロスハートはその背中を見て思う。

人格が分裂していると聞いたが、いつも通りのノーフェであった。

もう一人の見分けが微妙につきにくいが、外見に無頓着なのがノーフェである、と最

近気づいた。

あんなはしたない格好を、なんて言っても。

「……お人形に発情するんですか？」

と、仮面で見上げられて途方にくれた。恥じらいつてもものがない。

お小言を言うが、人形に恥じらひは必要ないといつて聞かないし、困ったものである。仕方ない。イタズラをして泣かせたほうを怒りに、クロスハートは向かうのだった。

「ふ、不幸だあ……」

「大丈夫ですよ。右手にバットトラックの変な能力でもついてない限りは。ノーフェが乱暴なやり方をしたららしいですね。ごめんなさい。本人は悪気ないんですけど、如何せん適当な奴でして」

えぐえぐ泣いている彼女、矢野聖の縫いぐるみを直している彼女は、狭いながら自分の部屋を確保している。

室内は両極端であつた。右半分が、整理されて私物もある。

左半分は、最低限の物しかない。そんな、中央で分断された不思議な部屋。右半分に設置された、ベッドの上に二人はいた。

「然し、酷い有り様ですね。すっかり手入れしないから、ボロボロ……」
断りを入れてから、真つ先に自分の髪の毛の手入れと服装の乱れを直して、彼女は仮面を外している。

左半分の壁に、仮面を引っ搔けて下げている。鉄の仮面は、現在充電中であつた。ボイスチェンジャーをしていないと、意外と普通の女の子であつた。

聖が怖々と問う。今はどつちか、と。

自分を誘拐してきた仮面の変態か、それとも分かれたもう一人か。

「ああ、わたしはアメリカスですよ。ノーフェは、今無理矢理内側に引っ込めてます。まったく、なんて雑なやり方をするのやら……」

アメリカスと名乗る彼女は、針と糸と代わりの布を使って手早く補修していく。ついでに、洗濯もすると言い出した。大切なものなら、しっかりと洗うべきだと。有りがたくその申し出は受けるとして。

「ノーフェさんは……あんまり、優しくないんだね……」

聖が、自分の眼鏡を拭きながらアメリカスに言った。

ノーフェは、基本的に余計な世話は焼かない。必要なことは率先してるが、他は適当

なやり方で済ませる。

多分、やれば完璧に出来るんだろうが、必要性を感じないから手抜きをしているのだろうと思う。

「ま、ノーフェはどちらかというところ、戦うことに特化してしまった性格ですから。よくも悪くも、鈍いんですよ。鋭敏だと、NTではいられません。壊れてしまうから、鈍く適応したんです。自分以外は」

と、アメリカスは縫いぐるみを縫いながら喋る。

待っている間暇だから、黒毛の髪の毛を櫛で流す聖。

こつちに誘拐されてきて以来、ある程度は栄養状態も改善された。

おかげで、多少は髪の毛も気遣う余裕も出てきた。

ホワイトアークでは、どんなに幼い子供でも人数がいなかったため、与えられた仕事はする。

聖とて、最近では余った機体の練習をしている。主に、運搬などを手伝うために。

ノーフェが教えてくれるのだが、戦闘技術ばかりで参考にはならなかった。

武装しないMSの意味を、本人が理解していない様子だった。

成る程、ホワイトアーク一番の稼ぎ頭は戦うことしか知らない自称お人形。

卓越した技術を持つが、他はからつきしやる気のない人物だと。

「と言うか、本人が殺しを面白がっているんです。人形以下の人間を殺すのが、さぞ楽しいのでしょうか。自分が人以下の扱いをされたと思ってますから。人形は人間に尽くすもの。それ自体は否定しませんが、だからといって虐殺していい理由にはなりません。憂さ晴らしのように、あるいは八つ当たりの様になっているだけ。大丈夫ですよ。わたしたちは、基本が身内に尽くすように作られていますので、早々は裏切りませんから。信用できないと思いますけど」

「……そんなこと、ないよ」

アメリカスは自嘲的に笑って、縫いぐるみを手早く直してくれた。

ノーフェと接して思うのは、素っ気ないと思うだけ。あと仮面が怖い。

いい加減慣れたいが、いつも野郎の音程で丁寧語を使うので正直、威圧感が半端ではない。

彼女の戦い方は野蛮そのもので、好きになれないが、生きるための方法。

そういう意味では、彼女の存在は心強いとも言えた。

聖だって、少しは感謝している。強引だったけれど、あのまま野垂れ死にするよりは今は楽園のよう。

こうして、共に生活する家族のような人たちもいる。

兄貴のようなクロスハートや、姉貴のようなフローレンス。

個性的な面子に囲まれて、賑やかに過ごすのも今は悪くないと思えてきた。少なくとも、ここでは生活には困らない。頑張る気力が沸いてくる。

「そう言えば、お礼言つてなかった。ありがとう、連れてきてくれて」

隣に座る彼女に、縫いぐるみを返してもらいながら聖は控えめに言った。

環境と、術を与えてくれた事への感謝の気持ち。あまり顔を合わせないから、言いそびれていた。

彼女は無言になるや、立ち上がる。そして、向かい側の壁にかかった仮面を外して被る。

充電終わってないのに。向き変える。

「……私は、必要なことをしたまで。お人形にイチイチ感謝するとは、変な人ですねえ」
ノーフェに変わったようだった。いつの間にか。

念のため、どうやって変わるのか聞いてみた。

「意識のせめぎあいですよ。要するに、互いにいつも表に出ようとしているので、奪い合つて隙を見て出るんです。向こうのほうが優先度は高いようですが……忌々しい」

取り合っているらしく、今は奪取して出てきたと告げる。

よくわからないが、難儀な状態のようだ。

聖も、理解できない苦労を背負っていると思いつながら、縫いぐるみの事を礼を述べて

退室した。

やることのないノーフェは、左半分の置いてある簡易ベッドに飛び乗ると、そのまま寝てしまった。

二度寝開始している頃。艦長から放送が流れた。

なんか、停泊している一帯で起きている時空変動に巻き込まれそうだから、その辺に捕まっているとの事。

ノーフェは寝てて聞いてなかった。結果、数分後。

「……………」

ベッドから振り落とされ、無様に床に転がっているのだった。

ホワイトアークのクルーは初めての転移。

眠そうに仮面の内側でアクビしつつ、ノーフェはブリッジへと向かっていった。

状況を確認するために。それが、嫌な動きとまだ知らぬまま……。

次の名を持つMS

資源衛星、MOVにて。

折角、部屋で過ごしていた二人は、急いで着替えて格納庫に向かった。

「おう、二人とも来たか!!」

そこには、パイロットスーツを着用したミチアが既に待機していた。

アンヌとマリーは何事か訊ねる。彼らが渋い顔で説明した。

「詳しくは知らないが、OZの連中がここに攻めいつて来たらしいぜ。内輪揉めみたいだが……プライズと名乗ってたな」

プライズ、と聞いた瞬間。双子は、大体の事情を察した。

「あのバカ共つてことね……」

「はあ……大体分かりました」

知っている名前だった。

OZプライズ。OZの中にある、独立戦闘部隊で、唯一単独行動を許されている連中。

しかし、その中身は戦いをハンティングと称して好き勝手やっているテロリスト。構成する人間が金持ちが多く、権力で黙らせるせいでそれが拍車をかけている、救いがたいバカの集団。

他の部隊とは折り合いが悪いことで有名であった。

それを説明すると、ミチアは頭をふった。

「呆れて物も言えねえな。なんなんだそりや……」

実際、そういう振る舞いをしておいてお咎めなしでやっているのがプライズの連中。

言うなれば、ティターンズをより悪くした感じの組織。

言うだけ無駄だ、と二人は語った。

「訓練しているところ、悪いが出てくれ。こっちで戦えるのが俺達ぐらいなもんでな」

今回は、運搬の仕事ゆえ、此方には手練れのパイロットが配属されていない。

皆、今はどこぞの世界でNT殺しの一角と壮絶な戦争をしているだろう。

新米が現在、所属のMSと懸命に抗戦している模様。

数が多く、挙げ句には連合まで来ているらしい。

「何たって連合が!?!」

「困りましたね……プライズだけでも、手を焼くのに」

プライズ手を組んで、この衛星を乗っ取るとかなんとかと言っている。

しかも、今停泊している連中まで傘下に入れとほざいているようだ。
「困ってるみたいね」

そんなとき。アリアが着替えて格納庫に顔を出していた。

三人が見ると、彼女は何だかやりにくそうに、声をかけてきた。

「あんたたちに、M O - Vから知らせが来てるわ。よくない方で」

古巣に、勘づかれていたようだ。

不機嫌にアンヌが問うと、アリアは言った。

「マリー、アンヌ。あんたら、今回ガンダム使うの禁止ね。正式な命令よ」

端末を投げて寄越す。言われたことに憤慨したアンヌが受け取り、目を通す。

ここの機関からの苦情だった。

コロニーのガンダムを使う裏切り者が出る場合、ガンダムの使用を許可できない。

戦場で確認した場合、如何なる場合も敵対と判断し撃墜する。

そう、書かれていた。

「……ああ、もう!!」

アンヌは地団駄を踏んで、悔しそうにマリーにも渡す。

同じく目を通して、二人は彼らの心情を理解した。

「やっぱり、所詮裏切り者は裏切り者、と言うことね……」

「納得できないけど、仕方無いじゃん。こればっかりはさ」

二人は、渋々感情を押し殺す。

「わかってもらえた？ ウイングもエピオンも、今回は使えないわ。ごめんなさい、一応抗議はしたけど、看過できないって言われちゃった……」

アリアは済まないように言う。

こればかりは、アリアは何にも悪くない。二人は謝る必要はない、とだけ言った。

死なせないために、苦渋の決断をしたのだ。アリアの努力は、認めなければいけない。

「ん……？ よくわからんが、何でだめなんだ？」

ミチアは別世界の出身ゆえ、事情が飲み込めない。

あまり、話しながらならない二人に代わり、アリアがそれを補足する。

「二人は、元々OZから脱走しているってのは知ってると思うけど、そもそもOZはコロニーのガンダムとは敵対してるわけ。で、散々辛酸を舐めさせられているから、嫌悪が凄まじく強いんだよ。特に現場のパイロットからは。それに加えて、二人はなまじ腕が良いから、有名なの。しかも何処から漏れたのか、ガンダムに乗ってるって知られちゃったし。で、二重の意味で我慢できない組み合わせをするなら、MO-Vの連中は許さないうって言うてるのよ。只でさえ裏切り者を内部に入れてるだけで妥協しているのに、これ以上なんかするらぶつ殺すってこと」

コロニーのガンダムとの因果関係は、ミチアは知らないが、要するに気に入らないと言理由か。

無視できない程のレベルで。

ウイングはジェネレーション所属とはいえ、元を辿ればコロニーのガンダム。

見ているだけで憎悪がたぎってもおかしくはない。況してや、脱走した人間なら殺したくもなる。

エピオンはまだしも、それもあまり良いイメージではないと言う。

総帥の志をよく思わない奴もここにはいるようだ。

「おい、じゃあ二人が出られねえってことか!? 勘弁してくれよ、この人手不足の時に!!」

ミチアが懸念するのは、この窮地にエースを腐らせる事だった。

戦って時間を稼いで貰わねば、脱出さえままならない。

この喧しく警報が鳴り響く状況で、猫の手すら借りたいと言うのに。

「あたしも出るわ。ミチアはあたしと組んで」

アリアも当然出るのだが。

彼女は、落ち込む二人に向かって告げた。

「二人にも、出てもらおうわ。行き当たりばったりで、試運転もしてないけど、出来そう?」

ガンダムが使えない。それは確かに、致命傷であった。

……だが。忘れてないだろうか？

そもそも、あのガンダムの所有者は本来、誰だった？

「はあ？ 私達の機体なんて……あつ！」

「まさか……あの機体が、仕上がったの!？」

そう。

ウイングもエピオンも、元々は前のアリアの所有物。

二人が以前、ゼロに機体を撃墜されて、繋ぎとして借り受けたものだった。

本来の、二人のために前のアリアが苦勞して仕上げていた機体は、まだ此処に残っている。

親友の残り香を纏った、専用のMSが。

「前のあたしが、かなり苦勞して建造したのを、あたしがガンダムで得たデータをフィードバックしておいたの。もう、実戦配備できるぐらいには、完成しているわ。……こればかりは、あたしの仕事じゃないからね。前の、あの裏切り者がやってた仕事を、あたしが完成させただけ。感謝なら、奴にして。あたしは、複雑だけど」

アリアは複雑そうに、視線を端末に落として言った。

二人は、今は彼女に礼を言った。最後の仕事をしてくれたのだ。

素直に、感謝しないとイケないと思った。

「……ありがとう。あとさ、少しさつきは言い過ぎた。ごめん」

「私も、ごめんなさい。キツイ言い方をしてしまったわ」

イラついた気持ちをつづけた事への、謝罪。

アリアは意外そうに二人を見る。やがて、苦笑う。

「良いのよ。あたしも、やり方が悪いんだし。でも、そうね。もう少し、勉強するわ」

互いに少し歩み寄る。二人の親友は、アリアだけ。それは彼女じゃない。

けれど、僚機としては、少しは認めてもいいかもしれない。

「さて。ミチア、リゼルの用意はいい？」

「出来てるぜー！」

「分かったわ。少し、待ってて」

アリアはフェニックス・ゼロをクルーに用意させて、二人を案内する。

格納庫の片隅。忙しくクルーがいたり来たりしているなかを通り抜ける。

二人の機体は、既に準備を終えていた。

「これが……私の新しい楯……！」

「凄い……全然違う！」

見慣れた試作型の改修と、以前親友が言っていた。

然し、見た目は赤い機体だったのが、白くペイントされ背中には大型のユニットを交差させて背負っている。

右手に円形のシールド、左手には小型のビームガンを装備。

よく見ればシールド中央にはサーベル発生装置もついている。

トライデントのような角に、翠のバイザータイプのフェイス。

これが、最高の楯。

対して、最強の矛は黒系統に塗られて、両手に大型のランチャーを装備していた。

両の肩には大きなリング状ジェネレーターがランチャーと直結している。

立派な一角に、黄色いバイザータイプのフェイス。

これが、最強の矛。

「メリクリウス・シュイヴァン。ヴァイエイト・シュイヴァン。それが、二人の新しい機体よ」

双子は、嘗ての友が残した機体を見上げていた。

シュイヴァンの名を冠するMS。双子の、アンヌとマリーの新しい力。

名の通り、『次に』向かうための希望がそこにはあった。

これがあれば。アリアが残した、シュイヴァンがあれば。

ゼロシステムを使わずとも、二人で戦えば届くかもしれない。

(アリア、ありがとう!! 大切に使うからね、このメリクリウス!)

(アリアちゃん、見ててね。ヴァイエイトで、絶対に追い付いて見せるわ!)

双子は、誓いを新たにする。次に進むためのMS。

ぶっつけ本番上等だ。やってやろうじやないか。

元より、そんな無茶は、親友のそばにいた頃は当たり前だったんだから!!

「——メリクリウス・シユイヴァン! アンヌ機、出る!」

「——ヴァイエイト・シユイヴァン、マリー機、出ます!」

二人は機体に取り込んだ。

アリアが苦労したと言うだけある。

二人の癖を徹底的に研究して、二人が扱いやすいように専用のチューンで組まれている。

コックピットのなかも、それぞれの特性を理解して、丁寧に仕上がっていた。

如何に彼女が、二人の親友のために労力を割いていたか、痛いほどよくわかる。

こんなに乗心地の良いMSは、初めてだった。

勝てる。二人なら、この機体ならアリアにだって追い付ける。

そう、確信せずにはいられない。

出撃する時に思った。

もう一度、今度はこの機体で、三人で戦える日を迎えたい。

だから、今は戦おう。生きるために。そして、彼女ともう一度出会うために!!

風神と雷神は宇宙に駆け抜けていく。それぞれの心に、思いをもう一度抱きながら。

彼女と、分かり合うために。

……何処だ、ここは？

「あれえ!! さっきまで地球にいたのに、何で今宇宙にいるの!? ってか、ここどこ!?」

ブリッジの様子を見に来たノーフェが見たのは、困惑するブリッジクルーが右往左往している様子だった。

艦長のイワンですら、慌てふためいている。

実際、さつきまで地上にいたのに、突然目の前には広大な宇宙が広がっていた。というか、デブリと小惑星が大量に流れていた。

「落ち着きなさいな!!」

そこで、女王様ことフローレンスの姉貴が一喝を入れた。

途端に、静まり返るブリッジ。呆然としている彼らに、我らがフローレンスが言う。

「オーバーワールドでは珍しくない、時空変動ですわ。恐らく、他の世界の宇宙に放り出されたのでしょうか。まずは深呼吸! で、次に操舵! お前はホワイトアークの設定を宇宙用に変更なさい! そっちは、索敵! 周囲の様子を探って! イワン、あんたはとっとと状況確認! ぼさっとしてねえで、各自は持ち場でやることやれエツ!!」

「ひいひい!? すんません!!」

情けないイワンが悲鳴をあげた。

獐猛で的確な指示のもと、宇宙になれないクルーが悲鳴をあげ仕事を開始。

本当に頼れるお姉さまである。恐ろしいが。

「ノーフェ、出番ですわ。各部署の補助をなさい」

「……はい、フローレンスお嬢様。仰せのままに」

イヤな薄笑いを浮かべて、ノーフェも行動開始。

いったり来たりを繰り返して、一時間後。

「ああん……？　衛星で戦闘してるだあ？」

座標などを調べて、一番近い衛星で激しい戦闘中だと言うことを、偵察にいったパイロットが通信で寄越す。

フロールレンスが不機嫌に聞き返す。因みに見つかったらしい。現在追跡されている。「あれほど気を付けろって言っただろうがボケエ！　帰ったらシバいてやるから、生きて帰ってこいやあッ!!」

フロールレンスの恫喝がパイロットを襲う。

良いから死ぬ前に戻れ、此方で何とかするということ意味らしい。

「つたく、半人前が……。ツバサ、クロスロード、出撃準備なさい」

格納庫で待機していた野郎二人に、命じる。

ホワイトアークでマトモに戦闘できるのは、軍人二名とあとは一部子供、そしてメインメカニックと姉貴と人形。

特に姉貴と人形は、特筆して能力が高い。

戦うから、無論出るしかない。人数が少ないゆえに。

「お嬢様、何をお使いになられますか？」

メイドのように、恭しく訊ねるノーフェに、腕を組んでお嬢様は告げる。

「仕方ありませんわね。使いたくないのですが、あれを使いましょう」

「ほう、アレですか……」

面白い。とうとう、奴が戦場で処刑をこなすときがきたか。

ノーフェはユーリに通達。あいつを出すと。

『げえ!?! ま、マジで出すのアレ!! 前よりは調整したけど相変わらず機体のバランス最悪だよ!』

「ふん、そんなもの技術でカバーします。良いから黙って準備なさいッ!」

『は、はい!』

ユーリも脅されて、泣く泣く準備をする。

フロールレンスお嬢様の愛機が、戦場に悪夢を呼び込むときが来た。

そう、AGEシステムの悪乗りとしか思えない、ザクのジャンクをかき集めて作った悪魔のMS。

あいつが余計な設計図を作るから、お嬢様が気に入って組み立ててしまった一品。

正直、見たらまず逃げる。見た目が怖い。一応、ザクなのだが。

如何せん、乗っている女が女なで……。

「ふふふ、さあノーフェ。参りますわよ、優雅に美しく!」

「……美しく?」

「ああん!」

「いえ、何でもありません……」

隙を見て、アメリカスにチェンジしている事に気付かないお嬢様は嬉々として機体に乗り込んだ。

こんな処刑専用の鈍器を持ったザクで、優雅とはこれいかに。美しいというよりは、凛々しいの間違いではないかと思う。

仮面を外して、ハルフアスに乗り込む。

お嬢様の付き添いである。また、処刑の片棒を担がされる。

コツソリと、ため息をつくアメリカス。

「——スーパーカスタムザクF2000。フロレンス、行きますわよッ！」

「ハルフアス、お供致します……はあ」

フロレンスの愛機、スーパーカスタムザクF2000は、獲物を求めてホワイトアークを出撃した。

お供に悪魔をつれているあたり、本物である。

色々頭痛を覚えそうな予感がするアメリカスだった……。

閑話休題？ シリアス逃亡

ホワイトアークを出発したフローレンスとアメリカス。

内部では騒がしくノーフェが、駄々っ子のように出せとせがむ。

(出しなさい、戦闘は私の役目!! そっちは引っ込んで！)

(はいはい。良い子にして、ノーフェちゃん。そのまま大人しくしてくださいね。まったく、油断するとすぐに表に出たがるんですから。ワガママ言うんじゃないません)

(む、ムカつく……!! バカにしてエ!!)

(分かった、分かった。イチイチ脳波を出さないで。ハルファスが混乱しているでしょう。いくらハルファスでも、脳波は一方しか受け取れないんです。同時に二人出されたら、ガンダムとて大変なんです。サイコミュが混線になっているから、感性操作がや

りにくいんですけど。自重して下さいな)

(五月蠅い、五月蠅い!! 出して!! あいつらいるんです、絶対に殺してやるッ!!)

(……ああ。成る程。やっぱり、あなたの方がわたしよりも感覚は鋭いんですか……参りましたね)

(話を聞きなさいッ! 操縦を代われって言ってるんです!)

(いやーでーすー)

相変わらずの口喧嘩ならぬ、意識喧嘩。

脳内のやり取りは聞こえない。しかし、何の弊害か、常に二名の脳波が一名から発せられていた。

計器を見ると、常時自分から知らない波長の脳波が見える。

どうやら、これがノーフェの脳波らしい。サイコミュがどつちを拾うかで迷い、鈍くなる。

仕方なく、通常の操縦でお嬢様についていく。

しかし、と思う。目の前の化け物MSを見つめる。

スーパークラスタムザク、というトチ狂った機体をまたも使うとは。

フローレンスように、有り合わせで何とか出来ないかと、データを流し込んだ結果A GEシステムが開発した、ザクのジャンクで製作されたよくわからない機体である。

基盤はザクのF型。それに過剰な装甲と無理矢理な推力強化に、武装の過剰積載。全部戦場で回収、または拾ったパーツだけで構成されている。

機体のバランスは崩壊し、スラストをアメリカスが独自判断で設置せねば、宇宙で身動きが満足に取れない始末。

挙げ句には内面はザクのまま。武器を使うOSすら搭載せずに何をどうしろと言うのか。

なので、ユーリとアメリカスが二人で徹夜して完成させた。主にフローレンス専用機。

当たり前だ。二人は扱えるが、こんなじゃじゃ馬使いたくもない。

見た目は紫のザク。然しフローレンスの趣味をシステムが組み込み、悪趣味にも程がある代物が出来上がった。

全身から出ているスパイク。腰にサブアームまで増設して、全身あますところなく武器の塊となった。

自動補正する追尾型ミサイル無数、両腕やら腰のマシンガンやら数々。

ビームを使わない辺りは良心的だが、それ以外はパイロットの事など考えていない欠陥機械。

しかも、背面には主武装であるデッドエンドジャイアントヒートホークというバカデ

カイ斧を装備していた。

この装備、要はザクのヒートホークの改良型で、柄を長くしてリーチを伸ばして、しかも質量自体で叩き潰すという、刃物なんだか鈍器なんだか分からないもの。

他のMSでは、取り回しが悪く、しかも重すぎる。

無論、刀身を赤熱化させて使える。ハルバードみたいなものとフロレンスは言うが……。

敵と邂逅。目視の範囲に無数のリーオーを確認。

OZのようだ。アメリカスは取り敢えず相手の出方を見る。
が。

『女王様とお呼びびッ!!』

ああ、フロレンスが勝手に突っ込んでいった。

黙って援護しろという意味だろうが……援護いるかこれ？

愚直なまでに前衛しか出来ないザク。しかも、システムが作ったこの世界にもない独自の改悪ザクだ。

バーニア全開。ドーバーガンの直撃をもともしない圧倒的装甲で突撃。

あまりに重厚すぎて、それこそほぼ実弾には無敵に近い防御力だった。

背面より、物騒な名前のヒートホーク展開、掴む。

で、上段で振り上げ突っ込む。モノアイが不気味に光って恐ろしい。無駄な抵抗をするリーオー。相手に気圧されて、逃げ遅れる。

そのまま、縦に真つ二つ。降り下ろされたギロチンの如く、両断され爆発四散。
(うわあ……)

アメリカスはドン引きした。

斧を振り回して暴れる姿は女王と言うよりはバーサーカーではないかと感じる。必然的に、あの悪魔ザクは接近をして戦うが、遠距離も無論できる。

まあ、ミサイルばら蒔いてマシンガン乱射して、威嚇したり牽制したりしながら突っ込みぶった斬る、という戦法だが。

一応、一緒に行動しているのだが、近寄りたくない。事実、ハルファスは小惑星の影に隠れている。

怖すぎる。諸とも始末されそうだ。

『鬼か、あいつは……』

『いいや、悪魔だろうどう見ても……』

クロスハートとツバサが、ホワイトアークを護衛しながらその惨事を見ていた。マラサイとGエグゼスが、あまつた敵を適当に撃ち落とす。

此方には誰も見向きもしない。

派手に暴れているから、敵が次々寄ってくる。

ザクは残骸を盾の代用にして銃撃を防ぎ、それを斧で弾き飛ばして武器の代わりにした。

慌てて逃げるリーオー。半壊した機体が爆発寸前で飛ばされればこうもなる。

で、逃げる先に先回した悪魔が袈裟懸けに切り捨て、撃墜。

たまたま、何機も周囲から全方位でサーベルで斬りかかるが、その前にリーチが違う。

その場で、一度大きく回転するザク。周囲を盛大に切り払った。

今度は上下に真つ二つ。爆発を背に、悪魔の単眼は妖しく光った。

(うふふ、綺麗ですねえ。良い悲鳴が聞こえますよお……)

ノーフェはうってかわって上機嫌でフローレンスの処刑を褒める。

どうやら、サイコミユが敵のパイロットの断末魔を届けているようだ。

うつとりと、恍惚の声色で満たされていた。

『無駄無駄無駄アツ!!』

弾薬を尽くしても暴れるフローレンス。

飛び道具がないなら斧で戦えばいいか思っているんだろうか。

実際、雑魚相手ならそれで十分だから怖い。

アメリアスの出る幕はなかった。

斥候だろうか、そこまで数は多くなかったが、全部フローレンスがぶつ殺してしまっ
た。

『完璧ですわ!』

斧を敵のオイルで汚した悪魔が、残骸に突き立てて勝利を謳歌している。

身震いするほど、全員背筋が凍りついたのだった……。

一度ホワイトアークに撤収。残骸を粗方回収して、しまいこむ。

「おつ……良いじゃない。これだけあれば、予備をいくつも作れそう。僕に任せて!」
ユーリが、派手に大破したジャンクを早速修理を開始。大喜びだった。

因みに補給は完了。まあ、消耗しているのは女王様だけだったが。

因みにパイロットなどの下処理はアメリカスが全部やってあるので、問題はない。

中身ごと、叩き壊したので生身のミンチを見てしまった。

彼女は嫌そうだったが、ノーフェは大興奮だった。

休憩をかねて、一度その資源衛星に近づくホワイトアーク。

ここそと、デブリに紛れて移動する。

格納庫で待機している中。

ノーフェいわく、ジェネレーションが近くにいることを伝える。

ノーフェは思い出したかのように、殺す殺すと言い出したが。

「アメリカス。少し、ノーフェを表に出して頂戴」

凄いい怖い顔で、お嬢様が要求してきた。

逆らったら命はないと、アメリカスは素直にノーフェを出した。

「何ですか、フローレンス。私は今すぐ戦いに……」

不満そうに、彼女が言い切る前に。

素早く、仮面を外したフローレンスが。

背後に回ってノーフェの首を、ヘッドロック。そして。

「確かに好きにしろつつつたが、チビ共危険晒してまでやろうとしてんじゃねえ!!」

急に男口調で、そのまま景気よく首を真横にへし折った。ヤバそうな音がした。

白目を向いて、ノーフェは失神した。お嬢様の怒りの制裁だった。

周囲の子供たちは現状についていけないで、パニック状態なのだ。

慣れていない転移でショックを受けているのに、空気を読めと言うことらしく。

アメリカスが痛みを堪えて復活。首はフロレンスが戻してくれた。

「すみません、フロレンス。言うことを聞かなくて」

「構いませんわ。……ガキのお守りも慣れてますから」

ギロつと、睨まれた。多分、ノーフェを睨んでいるだろうが同体のため正直恐怖で気絶しそう。

まだ、周囲は戦場だ。大した消耗も損傷もしてないが、元々補充する物がない状況。なるべく、出撃は控えたいのが本音だった。

ユーリも聞いていた。自分からは近寄らない。

それが一番だというアメリカスの方針の通りに、取り敢えず進むらしい。

ノーフェはフロレンスには、勝てないと思われる。ストツパーがいるだけ、まだいい。

今はやることやろうと、気合いを入れて進めるのだった。

ホワイトアークは、その襲撃されている衛星に向かって、デブリの中を進んでいく……。

時間は遡る。

MO—V 防衛戦に参加する彼ら。

新しい機体の調子は最高であつた。

シユイヴァンはもとより、対の機体と動くように設計されたもの。

揃えば、リーオーごときでは太刀打ちできる筈もなく。

二人は凄手数数のリーオーを撃墜していた。

アリアとミチア以上の速度、範囲で。

メリクリウスの背面に設置された防御システム、プラネイトデイフェンサーが全方位を囲った。

これにより、発生する電磁フィールドによって、あらゆる遠距離攻撃が弾かれる。

無論、火力が高すぎれば貫通するだろうがリーオーの手持ち武器では不可能だ。

特にビームは最早双子には意味をなさない。事実、ライフルも実弾も全部無力化され

ている。

それでいて、絶妙に彼女が攻撃するとき、一部分だけを展開して砲撃する。

サーベルで突き刺す、なども意味がない。親友のカスタムは、ビームを拡散させて流している。

出力の低いものは、刃が突き立てる前に散ってしまうようだった。

マリーがランチャーを放つ。ユニット収納、素早く攻撃に転じる。

「いいじゃん、これ最高だよ！ 流石アリア、私の癖を分かってくれてる……！」
寄ってきた相手に左手のビームガンで、牽制を行う。

ふと、気がついた。この最高の乗り心地に酔っていたが。

ビームガンの牽制のつもりで撃った一撃が想像以上に速く、鋭い。……牽制？

(……あれ?)

モニターを確認。センサーの有効範囲、凄く広い。おかしくないか？

いや待て。待ってくれ。画面の数値が全部変だった。

目を疑う。頭を振る。もう一度見る。やはり高すぎる。

なんでこんなバカみたいなジェネレーター出力の数値が検出されんだろう。

ビームガンでしょ、とアンヌが思うがああ滅茶苦茶改造を施すアリアだ。

かすただけで、リーオーの装甲が融解していた。

そう言えばこのジエネレータの数値、ウイングガンダムより高くないか？

なんか、推進材の減り方は異様に低くないか？

何が起きているんだこれは。

(ちよ、何してんのアリア!?! よく見たらこれどう見てもヤバいもん動力炉にしてない!?)

……ちよい待て。

なんか、おかしい。

ジエネレータの数値、減るところか上昇している。

なんで、プラネイトデیفエンサー使ってるのにこんな余裕あるのこの機体。

戦況の確認。優勢なので、余裕あり。試しに威嚇にビームガン乱射。

数値、全然へっちゃら。当たった機体よりも大きなデブリが蒸発した。

(あれれー? おかしいわねー? 一体なに動力炉にしてんのこのメリクリウスー?)
どこかの子供の名探偵のような声が出た。

エネルギー数字が高すぎるのに、快適そのものの操作性。

OSの調子も悪くない。悪くない、が……。

忘れていた。この機体を仕上げた少女の性格を。

なんというか……末恐ろしい。自分専用機なのに、何が起きているのか分からないこ

(冷静に考えてみればおかしくない、この改造!! え、ランチャーになんでこんなに発射のバリエーションあるの!?) というか、私のヴァイエイトの動力炉、新型GNドライヴ!?! なに、粒子を電力に変換しているのこれって!?! 逆のパターンで!?! ああ、でもトランザムは使えないのね、あくまで動力炉……いえ待って、アリアちゃんオリジナルの太陽炉まだ持ってたの!?! Oガンダムで一個持ってたのに!?!)

当然のパニツクに陥った。

マリーはパスワードを早い段階で解除して、データ確認中。

こつちに至っては、動力炉に新型GNドライヴを改造した状態で搭載されていた。

改良されたオリジナルの小型太陽炉である。

粒子を電力に変換するアリアお手製の変換器搭載。

ビームジェネレータとか、聞いたことすらないスラスタやらの名称がリストで並んでいた。

恐らくはこの機体とアヌの機体に使用されたパーツの名称だろう。が、よく見れば……。

装甲にネオ・ガンダニューム合金。

動力炉は新型GNドライヴ。ハイパワーバッテリーも一緒に。

OSにアヌはA・Rチップ? マリーはC・Aチップ?

補助に簡易OS搭載？

脚部、背部にギガ・ブースター？

しかも、なんでそう言えばコックピットにブリキの金魚が飾ってあるんだろうか？
で、エネルギーCAPとエネルギータンクも乗っけてあるらしい。

更に更に、ハイパー・スラスターつけてより滑らかに機動力と運動性確保。

エンジンにも、ネオ・クラフトだかなんだかが追加されている。

リストはまだまだ続いているが、いったん項目を閉じた。

戦闘中とはいえ、パンドラの箱を開けた気分になる。

(えっ……？ なにあれ、全然分かんない……)

名前だけ見てもさっぱり意味不明だった。マリーですら、大半の意味が理解できない。
い。

アリアは、一体双子を何と戦わせるつもりだったんだろうか……？

マリーは一度思考を放棄した。せざるをえなかった。

(……そつとしておこう)

そう、思った。

親友の悪乗り、いや此処は心意気としていこう。

そんなものを垣間見てしまった。

『ジエネレーション全軍に通達!! みんな、一旦撤退!! 補給に順次戻って行って! 今回は長丁場になりそうよ!!』

今のアリアが通信で呼び掛けていた。

なんか、敵の規模が思った以上に大きく、少人数では衛星防衛戦でも敵しいらしい。結構な数の手練れも相手にいる。しかも、何機かガンダムタイプも確認されている。

MOVが、補給ぐらいいは面倒見るから戦ってくれと緊急の依頼を正式に頼んだらしい。

(いけないっ!! 戻らなきゃ!)

アンヌに通信。彼女はなんか怒っていた。

兎に角、一度撤退する。まだまだ、戦いは続きそうだった……。

運命の交錯

一度衛星に撤退した四人。

長丁場になりそうだという、アリアの台詞に違和感を感じた双子。

一体、何が起きているのか。

敵を同時に、深追いはせずに逃げていく。

何かがありそうな予感がした。

MOVの格納庫。

皆はそこで、顔を会わせた。

アリアがジェネレーションの面子を集めて説明をすると言うので、集まる。

「全員、というか生き残った連中はこれで全員ね？　じゃ、話を始めるけど」

何名か死んだようだが、仕方ない。敵の物量に対してこっちは衛星の固定武装に少数のMSで対応しているのだ。

厳しい戦いになっていった。戦争ゆえに、こればかりは考えたら終わらないのだから。

「まずは、お疲れ様。油断した訳じゃないけど、結構な痛手を貰っているわ。輸送任務の筈が、急遽防衛任務が追加された事に関しては、まあ何時もの事だからいいんだけど。問題は、内輪揉め連合が介入して、この衛星接收しようとしているらしいのよ。OZ同士の潰しあいなら別にさっさと帰るんだけど、連中はあたしからも一緒に自分に従えって名指しでご指名が来た。なにもしないで戻ろうとして、後ろから撃たれたって、他の連中が言ってる。つまりは、合流したければ押し通れって話。継続的に奴等は、戦力を送り込んでる。特に連合が。ここの技術を奪おうと、特殊部隊を引っ提げてお出迎えなんですって。あたしらは、ここに閉じ込められたのよ。周囲には結構な数の艦隊が見張っているって事だし、籠城でしょうね。持久戦になりそうよ」

アリアが言うには、OZの独立部隊と、連合の特殊部隊が一緒になって、衛星にいる全てを掌握しようとしている。

そこには、たまたま仕事に来ていたジェネレーションも含まれ、輸送任務ゆえに少数戦力の彼らは、逃げるに逃げ出せないという状況なのだ。

その他、先ほど遠方で確認された時空変動で飛ばされてきたらしい民間の小型船も、こっちに避難しているとのこと。

多数の戦力ごと、全部を奪おうとしていると。

衛星は正式にジェネレーションに依頼を出して、防衛戦に参加してほしいと。

幸い、設備は完備しているし、その間の事はこっちで請け負うと言っている。

問題は、相手にガンダムが何機かいること。

強引に突破するには、少々部が悪い。戦力はあつちが上なのだ。

「今は、向こうが様子見しているみたい。先行してきた奴等をあたしらや、他の部隊が追い払ったからね。時間稼ぎはできた。でも、次はないわ。今度は本隊が押し掛けてくる。あたしらも、死ぬ気でやるしかない」

今回は、難易度の高い任務になるとアリアは言った。それを踏まえて、問う。

「幸い、オーナーに連絡がついたわ。何でも、シンシアの別動隊から、手の空いている奴等を送ってくれるって。ま、ピンポイントで、ここに来てくれるって話」

異世界の別動隊が、座標を定めて、こっちにすぐに飛んできてくれると伝えると、ホッとする一行。

少なくとも、孤立無援ではない。なにせ、ジェネレーションには包围程度なら簡単に突破できる。

心配はないようだ。

「それでも、制約あるから、精々六人ぐらいですって。でも何とか相談して、エースを駆けつけてくれるから、安心して。皆を生かすのがあたしの使命だもの。今回も、無事に生き残るわよ。んで、誰に喧嘩を売ったか教えてやりましょ！」

新人の多い今回は彼女は彼女は頼れるマスターユニットとしての仕事を果たしていた。

戸惑ってばかりの彼らは、頼もしいリーダーについていくと、彼女の言葉に鼓舞されていた。

こう言うことは、信頼できるのだが。これを、玄人にまで強いるから嫌われる。

最近は軟化して、態度も皆改めているようだが。

双子は聞いていた。まあ、あの新しい機体ならばなんとかなる。

いいや、何とでもできる。よくわからん内部でも使いこなして見せよう。

解散して、三々五々散っていくなか。

「やれやれ、気苦労が増えそうだ。でも、やってやるか。俺もまだ死ぬわけにはいかないぜ」

軽く腕を伸ばして、ミチアはぼやく。

顔色が悪い。少々無理をしているようにも見えるのだが、大丈夫だろうか。

マリーが聞くと、気遣っているのか大丈夫告げて、母艦に戻っていった。

その背中を、心配そうに見送る二人だった。

で、個人的に呼び出し受けた。

機体の前で待っていると、アリアが走って駆けつける。

「ごめんなさい、待たせて」

ゼーゼー言っていたが、流石マスターユニット。

すぐに回復して、本題に入る。

「単刀直入に言うわ。二人とも、ちよつと機体見せて」

双子の顔を真つ直ぐに見て、アリアは言った。

いわく、ぶつつけ本番なものにも関わらず、異常とも言える戦果を今回叩き出した。

いくらエースでも、あり得ない数値だとアリアは説明する。

「これが二人の実力ありきつてのは、分かっているの。ただ、それを踏まえても、これはおかしいわ。先の戦い、二人してまるで全盛期のアムロとかシャアみたいな状態になつたのよ。自覚ある？」

言われても、よくわからない。

互いの顔を見て、首を傾げる。

「調子は良かったけど、そこまでは行かないと思うな……」

「そうね。普通にやっていたわよ？」

違和感などない、と伝える。

要するにパイロットに異常はない。つまり、機体。

ただ、マリーがよくわからない状態で凄まじい改造を受けていた、と語った。

「ビング。当たり前みたい。多分、アンヌもマリーも自覚してないだけ。前任の奴が相当弄くつてるわ、このシユイヴァン。……ぶっちゃけ、あの状態になられるとヤバイのよ。皆との連携が取れなくなるの。孤立して戦うのは危険だって、知ってるでしょ。無双している気付かないけど、気がついたら敵陣ど真ん中、があり得るわ。今のシユイヴァンは、それを誘発する。元々高い技術のあんたたちだから、大丈夫と思うかも知れないわ。でも、それは愚行よ。数の暴力には、一騎当千は勝てないもの。二人なら大丈夫、なんて油断はしないと思うけれど。一応、念のため確認させて」

流星に、また何時もの過保護、とは言い切れなかった。

自覚があった。過剰なロマンを押し込めた専用機。知らぬ前にえらいものを渡されていた。

あの娘は、兎に角乗せるものは全部を乗せるといふ癖がある。

多分、本人の趣味か、要望に加えて黙って追加していたり平気であるのだ。だから、毎度彼女の改造はパイロットに負担を強いる。振り回される。

彼女の残したこれも、どうやらその類いのようだった。

分かっていったことなので、お願いする。

アリアは、シユイヴアンのコックピットに向かうと、何やら調べ始めた。

結果が出る前で、駄弁りながら待っていると。

数分後。げんなりした表情で、アリアが戻ってきた。

「……バカじゃないの、前任」

開口一番、アリアは苦言だった。

呆れというか、溜め息をつけてアリアは二人に説明する。

「……あんたらの機体、あたしも異常と思うぐらいめっちゃめっちゃ改造してある。っていうか、改造の次元じゃないからこれ。ごめん、真面目にNTでもイノベーターでもないアンスとマリーには危なすぎる。少しデチューンさせて頂戴。バランス崩しているのを内面どころか、基礎フレームまで弄くって支えている状態だったわ。中身別物どころか、見たことない設計図で作られているんじゃないの……？ あれ、シユイヴアンの外見装ったオーパーツよ。なんなの本当。あたしも予想外すぎて反応に困るんだけど。仮にも親友だったんでしょ？ なんであんな黒歴史に片足突っ込んだMS作らせてい

るのよ?」

ああ、やっぱりそうなのか。

あの子は本気を出すと、素人に核弾頭持たせるようなレベルの仕上がりになるんだそうだ。

確かに扱いきれぬし、安全性もバッチリだろう。

問題があるとすれば、協調性。周りとの連携を度外視している、二人だけのMS。周囲との違いを全く気にしない、高性能を突き詰めた様だった。

二人が望むがままの、友情補正マシマシでサービスされまくった結果が、あの規格外。しかも、整備性も悪く多分本人でないと整備も調整もできない。前は良かったが今はそれが致命的。

言葉を失うアンヌとマリー。予想通りの展開になった。

「なんとか、基本的な改造や整備はあたしも出来るとは思うんだけど……。ブラックボックスが所々にあって、完全には改良できないかも。っていうか、本当に何でもかんでも全部乗つけりゃ良いってもんでもないでしょうに。バカの一つ覚えよあれまでいくと。手当たり次第、使えそうなパーツ全部くっつけて、無理矢理仕上げているだけじゃない。まったく……」

アリアは怒ると同時に、必要だと思うので伝えると言った。

それは、機体のOSに記録されていた誰かの戦闘データだった。

「多分だけど、あのシユイヴァンが想定している敵は、コロニーのガンダム。それに、エピオンとトールギス。特に、ゼロシステム積んでるガンダムだと思う。中に記録から見て、前任が残っていたデータが入ってたわ。きっちり、活かされている状態だね」

そう言い出した。驚く二人に、アリアは思い出したように確認する。

以前、ガンダムを借り入れた原因はコロニーのガンダムに大敗して、撃墜されそうになつた？ と。

首肯すると、それを踏まえて推論をたてた。

「原因はそれね。前任が、二人がもし、次に……恐らく、ウイングゼロと対峙した時、絶対に帰ってこれる為にチューンアップされたのがあの様。要するに、確実に生き残るために相手をゼロシステムごと殺すためのシユイヴァンだったのよ。ゼロシステムは、知つてると思うけど使いこなせると厄介だからね……。並大抵のパイロットじゃ、一方的に蹂躪されてお仕舞い。加減なしに、殺しに来るシステムだから、逃げられないと踏んだんでしょ。勝つために、前任は過剰とも言えるパーツを押し込めた。そうでもしないと、生き残れないから。五体満足で。凄まじく理想が高いのね……。妥協せずによくもまあ、あそこまでやったもんよ。確かにあのシユイヴァンなら、二人なら勝てるでしよ。うね。つてかコロニーのガンダム全部相手したつて、逃げるくらいは余裕でできると思

う

アリアが説明する内容に、二人は目を丸くした。

そんなこと、あの子はなにも言わなかった。

ただ、二人に二度と撃墜の恐怖と悔しさを味わわせない為に、全力を尽くした結果。裏を返せば、あの子は……親友のため、妥協せず全力で労力をつぎ込んで、出来上がったのだがシユイヴァンだった。

全ては、親友が死なないために。親友が生き残るために。

前のアリアなりに、子供なりに懸命に考えて出した結論だったのだ。

ゼロシステムの脅威は知っている。未来予測を自分のものにしたパイロットならば、双子でも勝ち目は無い。

だけど、ならば機体性能で圧倒すればいい。予測すら追いつかないほど、絶対的な性能で倒す。

それが、彼女の導き出した答えなのだろう。

(……アリア、不器用だなあ)

(アリアちゃんらしいわね……)

出てきたのは、苦笑い。

相も変わらず、彼女はよくやって来てくれた。

それが、こんなところで、本人不在で知れるとは。

それを気づかず、仲違いしている現状が、改めて情けない。

頑張ってくれたのだ、応えて見せようと二人は思った。

「……………」

アリアは、黙ってその様子を見ていた。

なにか思うことはあるのだろうか、少なくとも今の二人は気付かない。

ただ、どこか仕方ないな、という苦笑を浮かべて機体を見上げていた。

二人の機体は、想定が高すぎる。ゆえに、少し性能を落ち着かせることに。尖りすぎたそれは、周囲を置いてきぼりにする。

味方と共に戦えばいい。アンヌとマリーは、アリアに機体を任せて、休息を取りに出ていく。

二人の機体は、次の戦闘までに手を加えられるのだった。

時は逆行する。

デブリに隠れて、衛星に接近を試みていた戦艦ホワイトアーク。

だが、運悪く展開している艦隊と遭遇した。

結構な数がいて、艦長は恐慌に陥った。

「落ち着けって言ってるだろうがアッ!!」

そこに颯爽と姉御参戦。

言っても聞かずにオタオタしていた情けない木星帰りの男。

「ギャー!? なにあの数!? ドウガチのあれみたいな数いるんだけどお!」

などと、その場にいたノーフェに聞くが、鉄仮面はなにも言わない。

見かねて、姉貴が慌てる艦長に怒りを込めた無言の腹パン。

「こるにぐすっ!」

意味不明な叫びを上げて、艦長はそのまま気絶した。

最早飾りですらない。混乱が素人だらけのブリッジに波及してしまう。

なので、気絶しているほうがまだいいと判断されたらしかった。

姉貴が艦長代理を勤めることになった。

今は急いで、衛星に助けを求めると指示を出す。

操舵をノーフェが変わった。小型戦艦程度、彼女も容易く操れる。

護衛に出るかと格納庫で野郎二人が問うているが、ノーフェは気にせず艦隊に突っ込んでいく。

「何処かに掴まってなさいな。酔いますわよ」

「フフフ、怖いですか……?」

優雅に座るフローレンスの言う通り、みな何処かにしがみつく。

薄笑いを浮かべて、ノーフェはこのピンチを楽しんでいた。

ホワイトアークは、前面にビームのシールドを展開できる。

最大出力で常時張り出して、そのまま最大速度で突っ切る算段であった。

回避しながら、めっちゃめっちゃな操舵で突っ込む。

砲撃が飛び交うが、致命傷はシールドに弾かれて問題ない。

「機関最大、ぶつちぎりですよ。フローレンス」

「ヨーンロー!」

小型ゆえに、MSでも近づかない限り怖くはない。

ノリノリでフローレンスが命じて、特攻でも仕掛けたように突撃してくる小型戦艦に、敵の艦隊もビビっていた。

一応、弾幕にミサイルを発射。案の定、撃ち落とされるがその煙に紛れて更に加速。

悲鳴が聞こえるが、知ったことじゃない。死ななきや安い。

煙のなかを、本能的に判断してノーフェは避ける。

戦艦の下を潜り抜けるように滑り込み、突破。

背後に回った艦隊を尻目に、嘲笑う鉄仮面。

「艦隊を無傷に抜けると言われれば、こうもなります」

「ご苦労様、ノーフェ。あとは逃げなさい」

「御意」

フルブーストで離脱する。

狂ったように後ろから砲撃してくるが、ノーフェの操舵テクは伊達じゃない。

曲芸のような動きで回避して、逃げおさせた。

艦内ではひどい目にあっている聖が、涙目で「不幸だあ……」などと言っているが、ご

愛嬌。

生きているだけ、儲けなのであった。

目視の距離で、フローレンスが通信を入れる。

取り敢えず、オープンで。直ぐ様衛星に繋がった。

時空変動に巻き込まれて、いきなりへんな連中に襲われた。

出来れば助けてほしいと言う。

ノーフェは気付いた。奴等の気配がすごく近い。

さつきは、遠めの気配しか感じなかったが、今は分かる。

あの憎たらしい双子の意思を感じるのだ。

(はーい、こっちも落ち着きましようねー? ていうか、何でもう復活してるんですか
まったく。ちよつとよそ見したら奪ってくれて)

(あつ、何を……!?)

で、興奮してきたノーフェ押し退けて、アメリカスが外に出る。

仮面を外して、本来の操舵に変わった。

何やら交渉しているフローレンスを見ながら、ため息。

またノーフェが騒ぎ出す。うるさいので、フローレンスに言いつけるとボソツと言う
と。

(ひっ!?)

小さく悲鳴を上げて、ノーフェは黙った。

そのまま、何も喋らなくなった。どうやら、フローレンス余程トラウマになったか。

(いけないんだー。フローレンスに言いつけちゃおうー)

(なにもしてませんよ!! 黙ってるのに何で言うんですか!! 鬼畜!)

(……鬼畜って、あなたがそれ言いますか。取り敢えず大人しくしてなさい。じゃない

とフローレンスが……)

(あわわわ……)

あ、これ完全に怖がっている。脅しに使おうとアメリカスは思った。

悔しいのか、呻いているノーフェ。

これはほつとくとして。フローレンスが、入港の許可を得た。

というか、早く入れと急かされる。民間も保護してくれると言う。

意外と話の分かる衛星であった。

無事に保護された。

フローレンスが、詳しい事情を伝えて、一時外に出た。待機しているクルーたちを待たせること一時間。

戻ってきたフローレンスが、防衛戦に手を貸してくれと言われたと説明。

そうすれば、衛星の施設はつかつてもいいと言われたし、補充もしてくれると言った。乗らない手はないので、喜んで手伝うことになった。

久々に、風呂に入れると喜ぶ女子たち。野郎共も、汗くさいのは嫌だとさっさと案内されて出ていった。

今は緊迫した時間らしいが、民間人にはあまり関係ない。

襲ってきたら、追いつくまでだ。ユーリなど、メンテクルーは、格納庫で整備している。

アメリカスは、自分の内部でふて寝しているノーフエに、ホツとして自分も出ていく。ホワイトアークから降りて、近くの女性に道を訊ねる。

取り敢えずまず、お風呂入りたい。色々あつて、しんどくなってきた。

まさかパイロットと思わない女性は、笑顔で連れて行ってくれた。

着替えは既に持っている。私服に着替えて、案内してもらった。

大きめな更衣室。ロッカーがならぶ簡素なもの。

衛星といえ、宇宙にも風呂があるのは有難い。

なんでも、ここはOZの一派らしいが、今となれば知ったことじゃない。目の前のお風呂が優先である。

上機嫌に、彼女は服を脱いで、速く久しぶりの湯船に突撃しようとしていた。その時だった。

「……ねえ、本当に使っているの?」

「いいんじゃないかしら、向こうから言ってきたんだし」

遠くから、懐かしい聞き覚えのある声があった。

途端、ビクツと反応したアメリカス。

(えっ……まさか、この感じは!?)

慌てて、隠れる。足音が近づいてくるのだ。

知っている気配。知っている感覚。

まさか、そんな事はない。

偶然にしては、間が悪すぎる。

幸い、備え付けのトイレに隠れた。施錠して、息を殺して。

胸騒ぎがする。嫌な予感とも言えた。

動悸が激しくなる。呼吸が荒い。感情が昂ってきた。

これは……恐怖感。待避したその先で。

誰かが、更衣室に入ってきた。

「はあ……。また会えないかな、アリア……」

「その気持ちは分かるけど、今は一刻も早く戦いを乗り越えましょ」
二人の、女性の声。知っている、いつも聞いていた親しい人の。

「……!!」

アメリカスは、竦み上がった。

ドアの向こう。開ければすぐに出会える距離に、あの二人がいる。

足が震えた。視界が揺らぐ。歯が鳴りそうになった。

気合いで止める。なんで、なんで。運命は、残酷なんだ。

どうして、こんな場所で。こんな場所で、二人がいる。

裏切ったはずの古巣に、この双子が。

(アヌ……マリー……!? どうして、此処に……!?)

それは、幼い彼女に対する、更なる仕打ち。

無慈悲な追撃。運命のイタズラ。

ドア一枚隔てた空間に。

嘗ての親友同士が、再会を果たすのだった……。

運命の悪戯

……どうして、どうして二人がこんなところに？

幼い頭は混乱する。けれど、身体は勝手に判断する。

息を殺せ、気配を消せ。音を立てるな、呼吸を整えろ。

勝手に指示して勝手に落ち着く。

だが。内面では。途端、殺気が漏れ出した。

『彼女』が、目を覚ましていた。

(……見つけた、見つけたアツ!! こんのオ、裏切り者がアツ!!)

不味い、ノーフェエが覚醒しているツ!!

また身体が奪われてしまう!!

(や、止めなさい……止めなさいノーフェツ!! 勝手に、わたしの身体は使わせませんツ

!!)

(ぐっ……!? 邪魔を……するなアツ!!)

意識のせめぎあいが始まった。

表に出て、二人を殺そうとするノーフェ。凄まじい怒気が伝わってくる。アメリカスは懸命に抗った。内に秘する猛獣を解き放つ訳にはいかない。

大丈夫、暴れるだけなら、押さえつけられれば……!!

(嘘つき! なにが、なにがもう一度逢いたいだ!! なら思い通りにしてやる、殺してやるツ!!)

(させないと……言っているでしょう、裏切り者!!)

(違う! 裏切ったのは向こうだ、私じゃない!!)

(それこそ違いますよ!! あなたが仕出かした連鎖でしょうが!!)

身体から、力が抜ける。主導権が激しく移り変わるせいで、脱力してしまっている。平気だ。服などはロッカーに放り込んである。

このまま時が過ぎればバレない。二人は励まし合いながら、お風呂に入るようだった。

浴室に向かうんだろう。ここで堪えて、一度戻ろう。そうすれば、鉢合わせなどしない方がいい。

気づいていない。気づかないで、お願いだから。そう、切に願ってしまおう。

(くそ、出せッ……出せエ!!)

(嫌ですッ!! 絶対に、二人は……わたしが、守りますッ! たとえ、離れたとしても!! 戻れないとしても!! わたしが、親友であったとい現実は、変えようのない事実なんですから!!)

そうだ。もう、ジェネレーションには戻れない。戻れやしない。

居場所なんて、アメリカスには何処にもない。ノーフェはフロレンスたちに場所がある。

けど、元々の人格である彼女には、止まり木はない。

捨てたのは分裂した自分だった。勘違いした自分だった。

逆恨みして、殺して、取り返しのない事だけは、したくない。

抗え。立ち向かえ。繋がりが無かったとしても、過去は決して変わらない。

自分と戦え。この猛獣の鎖を、決して離すな。

(だったら、ガンダムで無理矢理……!!)

(!?)

アメリカスは正気を疑った。ノーフェは遠距離で、悪魔たちに命じる気だった。

ここにいる二人を殺せ、と。ここは資源衛星、コロニーのなかなのに。自分だって下

手すれば死ぬのに。

いや、仲間が……自分で募った仲間を殺してでも、復讐を果たそうとしている。

(仲間を、他の人を巻き込んで……このクソガキがツ!! フェニックス、ハルファス!! 聞こえますか!?)

脳波が二機に届けば、彼らは命じられたままに、動き出すだろう。

主が二人いる。どちらかが命じれば、本当に実行してしまう。

脳波はノーフェのほうがずっと強い。だけど、今はアメリカスの所有権だったのが幸いした。

先に繋がれたのは、アメリカスだった。

(アメリカスの……裏切りの魔女の名において命じます!! 帰りなさい、ジエネレーシオンに!! わたしの全ての機体を共に連れて!! そして後釜のわたしに、伝えなさい!! わたしのなかにいる人形の事を! わたしごと殺せと!!)

ノーフェとアメリカス。同時に受ける二つの、異なる命令。

格納庫で、カメラアイが光を灯す。整備員たちが、不思議そうに見上げるなか。

不死鳥は目覚め、動き出す。ユーリがまた動き出したと驚くなか。

ガンダムは、整備中の設備を破壊しながら、OガンダムとAGE-2を整備員を無視し回収。

そのまま、格納庫のなかを歩き出す。腕をつかみ、ガンダムを引きずって。

命令は、アメリカスを優先した。先祖の、裏切りの魔女の名を継ぐ、幼い少女の命令を。

(そ、そんな……!?!? どうして!?!?)

ノーフェは愕然としていた。外では、風呂に向かって二人が消えている。

油断して勢いが抜けた彼女を、好機と上から封殺する。

(しまっ……!?!?)

ノーフェの意識を押さえ込み、酷い頭痛を覚えながらアメリカスは外に出た。

服を慌ててきた。荷物を纏める。そして、脱衣所から脱出する。

顔色は血の気を失い、目は死んでいる。マトモに歩けないほど具合が悪そうだった。

それでも、今は逃げる。どのみち、これでここにいると、彼女にもバレた。

あとは……後釜が、うまくやってくれる。彼女に託そう。この猛獣は、躰など出来やしない。

最悪、このまま死んでいい。そう、思いながら。

一方、格納庫では。

「……へえ。所有権を返還するわけね……」

母艦で仕事をしていたアリアはなんとも言えない気分で眺めていた。

なんと、奪われていた機体が全部自分で帰ってきたのだ。

しかも、同じコロニーの内部に裏切り者はいる。

何せ、何処から来たのかは不明だが、不死鳥たちは所有権をアリアに譲渡している。

更に伝言。どうやら、裏切り者は内部分裂を起こして、殺そうとしている人格と、阻

止する人格がある。

で、阻止する方はアメリアスと名乗り、諸とも殺せと言ってきている。鉄則は、絶対

だと。

現在、周囲を破壊して戻ってきた悪魔たちとガンダムたちは、再整備を受けている。

あまりよろしい環境で受けてはいなかったようだ。結構消耗している。

(奪ったものは返した。その上で自分を殺せ、か……)

なんで裏切ったかは知らないが、一度戦場で戦い負けている。

ゼロではなく、フェニックスなら勝てるだろうか？ いいや、その前に。

オーナーの命じた機体の奪還は既に成功。一応無傷で帰ってきている。

ならば、本人はどうするべきか。MSなしの人殺しなど、アリアはしたことがない。生まれて時間も長くはないし、慣れていない。それに。

(あの二人は、連れ戻す気満々よね)

問題はそこだ。古参は連れ戻す気が多少いる。

本人は死ぬ気があるようだが、それを果たして連中が許すのか？

多分、許さないだろう。生死は問わないといったオーナー。一応連絡して、知らせた。「近くにいるわよ、そいつ。どうするの?」

オーナーは言う。機体に戻ったのなら、殺したければ殺せばいいと。

随分と適当な事をいう。流星に進言する。身内に、連れ戻す気のあるやつらがいると。

すると、今度はそれはダメだという。理由は、例外を作れば次ができる。裏切り者は連れ戻す気なら、殺せと。

つまりは、優先順位は機体で、連れ戻すことは認めない。放逐はまあ、許すとして。相手が強すぎるから、勝てないなら無視しろと。余計な被害は出すなど。無視できないなら殺せ。

選べということか。殺すか、そのままにしておくか。

「……所詮、あたしたちは人形。消耗品だもんね。いくらオーナーに尽くそうが、代返の
できる道具だもの。当然の処置ってことよね」

アリアは笑う。そう、マスターユニットはただの人形。クローンに過ぎない。

何回死んでも何度でも使用できる便利な存在。尽くすだけに生きる肉のロボット。

誰がなんと言おうが、彼女たちの意義は人間に尽くす機械と同じ。

壊れれば修理する。それもダメなら捨てる。暴走したら破棄する。手をつけられな
いなら放置。

その程度の価値しかない。イチイチ、愛着などないだろう。

「はいはい。じゃあ……あいつらを止めないとね」

そう言つて、通信を切った。

そう、止める。……直々にダメ出しを受けたのだ。

また、嫌われる。また、衝突する。

けど、それが彼女の意思ならば、実行するだけ。

万が一、彼らが敵対した場合は、殺そう。オーナーの意志が全てだ。

マスターユニットとして、代理を勤める以上、反乱分子は処分する。

ジェネレーションの絶対の意思を反するものは、カウンターに殺される。

元々の役目に戻るだけだ。

(前任。あんたの意思は、分かったわ。その役目、きつちりと遂行するから)

殺そう。彼女を。マスターユニットの役目を、彼女は望んでいるのだ。

託された。裏切り者の始末を、本人に。

ならば後任として、するべきことはするだけだ。

誰が何を言おうが、殺す。絶対に、この手で決着をつけよう。

それが、こちらの身内に気をつかっているらしい、そいつの意思だと尊重して。

その頃。真っ裸の野郎が押し込まれた男の風呂。

湯気が立ち上る、むき苦しい空間では。

「風呂は……いいな、大尉」

「全くだな……。風呂はいい」

軍人どもが湯船につかって、至福の時を過ごしていた。

貸し出しのタオルを頭に乗つけたクロスハートとツバサの二名。

更に久々の風呂とはしゃやく子供たちが騒ぎながら入っていた。

そこに、顔色の悪い男が風呂の扉を開ける。

「……混んでるじゃねえか」

何やらタオルで股間を隠したガタイの良い屈強な男はかけ湯で身体を流して、疲れたように湯船に倒れた。

そう、まさに倒れた。顔から派手にお湯に沈む。周りに飛散するお湯。

「おい、大丈夫かあんた?!」

クロスハートが立ち上がって駆け寄った。

水死体のように、浮かび上がる男。

なんとか起き上がり、詫びを入れてから改めて入る。

「……」

ツバサはそれを眺めていた。

頭痛がするのか、頻りに頭や目頭を押さえる男。

ツバサは、それを見て聞いた。

「おい、貴様。……失礼で申し訳ないがその様子、かなり脳を行使しているのでは？ た

だの疲弊ではないな。よもや、サイコミュの使いすぎか？」

「……ん？　なんだ、あんた。分かるのか？」

男は疲れた顔で、風呂の壁に寄りかかっていた。

そのまま、ツバサに問う。

「一応な。なに、先の戦闘には俺も参加していてな。貴様もそうなのだろう？」

「ああ。流石に、数の不利を覆すつてのは……キツイ。かなり、吐き気と頭痛が酷いんだ」

男はミチアと名乗り、風呂に入れば改善すると思っていたらしい。

「改善か……。ただの疲労なら、するかもしれないが。サイコミュって言っても、色々あるんだが。あんたのマシンは何を積んでいるんだ？」

クロスハートが汗を拭いながら、聞いた。

ミチアもふう、と息を吐き出して説明する。

「詳しいことは、俺もあんまり知らない。俺が使えるように、かなり無理矢理なカスタムしている可変なんだがな。フルサイコフレームに、バイオコンピュータつてのを挟んでいるんだ。あ、俺はオールドタイプって言って、通じるか？」

彼が語ったその装備に、首を傾げるツバサ。クロスハートは知っている。

前にノーフェが気紛れに話していた、思考だけでMSの操縦を可能とする技術、だったか。

まさか、単なる人間でそれを可能とするとは。それは、負荷がかかるだろう。

「なんだそれは？」

「大尉。ノーフェ君が前に言っていたんだが、その技術はな……」

小声でツバサに説明するクロスハート。

ボーツとしていたミチア。だが、ある名前が聞こえた。

(……ノーフェ?)

その名前は、まさか。

「おい、今お前、何て言った!？」

突然立ち上がったミチア。強烈な立ち眩みが襲う。

目眩を感じるも、踏ん張って堪えた。

「な、何か？」

「ノーフェって言ったか!? それってまさか、ピンク色の髪の毛をドリルみたいな髪型にしている、ちっこい女の子じゃないよな!？」

容姿を聞くと、クロスハートは訝しげに見上げて肯定する。

つまりは、彼らは。ミチア不調を忘れるほどの感覚に陥った。

(アリアか!? アリアが今ここにいてるか!?)

居なくなったあとの、彼女の関係者。

今このコロニーに、アリアがいる。

「どうして、ノーフェ君を知っている?」

「あいつはこっちの知り合いなんだよ!! あんたら、何も聞いてないのか!」

落ち着くようにクロスハートは宥める。

一度座つて、湯槽に沈む。興奮すると身体に悪いと言われる。

「悪いが、俺たちも彼女に關して、信用できない人物には言えない。そちらの所属を教えてください」

間違いない。アリアだ。ミチアは詳しく経緯を説目した。

二人は次第に納得する。ジエネレーション、その悪名は知っていたから。

「成る程……。では、あなたは」

「ああ。あいつの知り合いだ。様子がおかしいと思つたら、分裂してるのか人格が」

クロスハートとツバサは思案する。連れていくべきか。

何やら危険な感じはするが、ミチアは納得しそうにない。

一応、話し合つて決めた。風呂上がりに少しつれていく。立ち会いのもとで。

ミチアも今はゆっくりと休むことにした。誤解を解くために。

彼女の知らないところで、またも運命の悪戯が、交差する……。

繋ぎ止める鎖

身体が、重たい。思うように動かない。

押し込めた意志が、内側から食い破ろうとする。

殺意が、弱る彼女を更に追い詰める。

(……閉ざしていても尚、感情が脳波になって周囲に漏れ出しているんですか。これが、もう一人のわたしの極地、戦うNTの辿り着く果て。わたしは……自分にすら、追い越されているんですね)

……本当に何をしていたんだろうか。

コロニーの廊下を歩く。時々職員に体調を聞かれるが、痩せ我慢して通りすぎる。

母艦に帰ろう。帰って、眠ろう。

眠りたい。休みたい。

——死にたい。

(殺して……誰か、わたしを殺して……)

このまま永遠に目を覚ましたくない。

このまま悠久に意識を沈めてしまいたい。

裁きがほしい。許しがほしい。もう、嫌だ。

死んでもいい？　もう、死んでもいいよね？

そう、誰かに聞きたかった。

自分で死のうとしても、必ずノーフェに邪魔をされる。

彼女は自分が死ぬのを極度に嫌がる。確実に阻止しに来るだろう。

だから、死ねない。死にたいのに、生き続ける。

(これが……罰、なんでしようね。皆様を裏切った、愚かなわたしへの……)

これは、戒めだ。

己の存在理由を自らの手で破壊した、否定した道具の結末。

生きたまま、永劫の苦しみを受け続け、強さが仇となり死すら望めない。

この時ほど、自分の強さを恨んだことはない。

内側の枷に、外側の枷。どうすれば楽になれる？

(裏切りの魔女……。繋がりを断ち切ったバカには、お似合いの現実ですよね……)

死ぬことが救済に感じることもあるのかと、身をもって知った。

これから先は、この猛獣を繋ぎ止める鎖にならなければいけない。

制御できる気がしない。自分のはずなのに、他人のように感じとる彼女。根っこから、既に別人として分裂しているようだ。

彼女の意志がアメリカスを侵食すれば、この身体が奪われて猛獣が復讐の怪物となる。

抑えるにしても、辛い。消耗が激しい。これが、本気を出した彼女の真髓か。

上から今も暴れる殺意を潰しているが、油断すれば多分今すぐに乗っ取られる。意識が、周囲にいかない。廊下にぶつかると、通り過ぎる人にもぶつかると。

謝って、戻る。脂汗が流れる。呼吸は乱れ、視界が狭窄状態になっている。

(……生半可頑丈な身体をしているから、動けてしまう。強すぎるつても、考えもの) 諦めの色を見せて、彼女は格納庫に到着する。

クルーたちが何やら大騒ぎしている。勝手に動いた、とか叫んでいた。

「……」

横目に、彼女は気にせずに戻るが。

「ちよつと、大変だよ!?!」

ユーリが、慌てて駆け寄ってきた。

そして、彼女の具合の悪そうな様子に驚く。

アメリカスだと分かると、小声で事情を聞いてきた。

「……ノーフェエが、駄々をこねましてね。機体を、ジェネレーションに戻るように命じました。無視できない内容を命令したので」

仲間諸とも復讐をする気だった、と説明した。

青ざめるユーリ。ジェネレーションに機体に戻した時点で、居場所がバレた。

仕掛けてこないかと問われると。

「大丈夫だと思えますよ。今は、ですけど。状況が状況なので、内輪揉めしている余裕はないです。こっちのバカが言うことを聞かないのは、どうにかしますし」

籠城をしているのに、自滅してどうするのか。

向こうのマスターユニットとてバカではあるまい。

ユーリはホツとしていた。

「僕も裏切り者だからね。見つければ、殺されるのは分かっているし」

「いいえ。ユーリは恐らく、脱走扱いでしょう。行方知れずであるなら、死にませんよ。

基準があるんです」

ジェネレーションには、一応の基準がある。裏切りは、まず敵対行為。

これは間違いない殺されるパターン。

次に、不利益を講じた場合。これはいくつかあるが、何れも被害が出れば消される。

ユーリの場合はまだ、ついてきているだけだ。直接の被害は出してない。

哑然とするユーリ。自分もてつきり殺られるかと思っていたように。

「どさくさに紛れて逃げ出した場合は、被害によります。機体を、持つて逃げたぐらいなら、まあ無視されるでしょうね。持ち逃げしたモノによりますけど」

「レコードブレイカーは……」

「ああ、大丈夫です。あれ、パーツは大体量産品と同じです。エンジンだって量産体制整つてますんで、別段問題ないかと」

あつけらかんと語るアメリカス。呆然とユーリはしていた。

見つければ流石に只では済まないだろうが、行方知れずならば被害はない。

「隠れてろつてことか……」

「大体、Gダイバーが何をいつているんです？ ……例外を通り越した論外なら、いくらでも対処はあるでしょうに。ユーリ自身に」

彼女は例外を越えた埒外だ。話がそもそも違っている。

彼女は苦笑いしていた。やはり、隠していることはあるんだろう。

ため息をついて、彼女は自室に戻ろうとする。

が、ユーリが止める。

「機体全部返しちやっただみたいだけど、これからどうするの？」

「……いつそ、マシンなどないほうがよい気がします。あれば、ノーフエが操りますか

ら」

「……そう。対抗策ってことか」

機体があれば、襲いにいく。だから、戦力の低下を招いても、暴走を止めるためには取っ払う方がいい。

フローレンスに謝罪しに行こうと思う。

理由があるとはいえ、ガンダムを四機も失った。

彼女の怒りも、しっかりと受け止めるつもりであった。

「……騒がしいと思ってきてみれば。そう言うことでしたのね、アメリカス」

……で。いつの間にか背後に肝っ玉の冷える声で、姉貴が立っていた。

腕には入浴の道具を抱えていたが。

途端にアメリカスは竦み上がって振り返る。

狂暴な笑みを浮かべた淑女が、にこやかに背後にいた。

「よく抑えてくれました。上出来ですよ、アメリカス。話は聞きましたわ。さあ、お仕置きです。あのバカ娘を出今すぐにしなさい」

頼もしい姉貴の言葉に、素直に従うしかないアメリカス。

内部ではうってかわって面白いように動揺したノーフェエが、外に出されるのを必死に抗っていた。

が、アメリカスの奮闘により引き摺り出された。

「ひい!？」

ノーフェは出てくるや、直ぐ様逃走の体勢に入る。

が。

「ノーフェ、テメエはッ!!　そこまで痛い思いをしたのか、ゴラアッ!!」

逃げられる訳もなく。

姉貴によるお仕置き物理が発動する。

関節を決める姉貴による矯正プログラムが、格納庫で始まった。

声にならない声をあげて、涙目でノーフェは絶叫していた。

ユーリは思わず足早に去っていく。見てられない。

二度とバカなことをしないと徹底させて誓うまで、フローレンスの体罰は続く……。

一方、野郎は。

「……」

その様子を、遠目で見ていた。

仮面を外した、幼い少女が若い女性に締め上げられている。

抵抗しているが、首が明後日の方向に向いている。

……死んでいないだろうか？

「合っているか？」

「ああ。間違いない。だが……」

クロスハートの問いに、頷くミチアだった。

どうやら、今の知り合いに教育されているようであった。

すぐに会いにくいこうとも思ったが、ツバサたちに制止された。

「止めておけ。……殺されるぞ？」

聞けば、あの女性は二人の乗る母艦の実質的リーダーであり、ノーフェに関してなにかいっても決して語らない。

彼女は身内には敵しいが、同時に優しさももつ人間。売るような真似は絶対にしない。

「寧ろ事情を知っているだろうから話しても無駄だろうな。彼女が敵になる。オススメはしないな」

ひきつった表情でクロスハートも言う。軍人二人が制止するのは、あれも一種の野獣

だから。

何かしようものなら、その場で骨を砕かれ倒される。腕つぶしもヤバイらしい。

「……教育か」

ミチアは様子を見ていて思う。

教育。それは、ジェネレーションでは決してなかった環境だ。

皆、彼女を既に一人前として扱っていたから、切磋琢磨はしても教えることなどない。聞いていれば、彼女はやはり子供であり、大人が教えるべき事は教えないと不味いと。

アンバランスなまま生きてきたから、こうなったのだから。

「……隙を見て、話すぐらいなら俺たちも手伝おう。大尉、構わないか？」

「只では割りにあわないな。そうだ、ならばこうしよう。何か風呂上がりに奢って貰おう。それで手をうつ」

「決まりだな」

クロスハートがツバサに話をつけてくれた。

にやツと笑って、子供たちを先に行かせて野郎たちは移動を開始する。

色々考えることもあり、有りがたいが同時にミチアは浮かない顔だった。

「……首が痛いです」

「痛くしましたから」

それから。フローレンスに続いて、もう一度風呂に向かう。

姉貴に調べてもらい、双子は既に退出していた。

鉢合わせを避けるべく、今度は二人で風呂に入っていた。

「ノーフェはなんと?」

「死にたくない……と言ってますね」

湯槽に浸かる姉貴は怖い笑顔で迫ってくる。

怯えて視線を外すアメリカス。

先ほど、ノーフェは叩きのめされ、心が折れた。

現在、完全に活動は沈黙している。死にたくないとは呟いているようだ。

物理で上下関係を教え込まれたせいかな、復讐心より服従心のほうが強くなってきた。
る。

暴走しない、アメリカスの負担にならない。約束させた。

いわく、次にやったら肩の関節と首の関節と顎の関節を同時に外して放置してやる
と。

(死なないだけで凄く痛いんですけど……)

出てきたアメリカスが悲鳴をあげるほど、激痛に苛まれる。

直撃コースのノーフェは、虐待でもされたかのように大人しくなった。

これで、一安心。姉貴はやはり頼りになる。

「まったく、世話の焼けるガキですわねあいつは」

「すいません……」

フロレンスのぼやきに謝りつつ、共に風呂にはいった。

……子供扱いされて、髪の毛を洗われたりしたのは、忘れようと思う。

何だかんだ、世話焼きのよい人だと思わないのであった。

風呂上がり。慎重に戻る二人に魔の手がかかる。

「……!?!」

一瞬の隙だ。

フロレンスが、先に見に行つていた時に野郎たちにあつたのか、話をしているとき。前方に気をはつて隠れていたアメリカスに、足音と気配を忍ばせて近寄つた謎の影に、背後から口元に手を被せられて、連れていかれた。

振り返ろうとしても、首を押さえられて抱き抱えられた。

じたばた暴れるアメリカス。幼女の誘拐事案であつた。

(誘拐!? 誘拐ですか!! 誰か、誰か助けて……!!)

未知の恐怖に泣きそうになりながら必死に抵抗する。

大柄な男だろうか。変態に捕まつて餌にされると思い込むアメリカス。

むーむー言いながら暴れているも、廊下の影に連れてこられてしまう。

解放されると、直ぐ様逃げようとする。相手の顔などどうでもいい。

怖いから逃げよう。だが。

「落ち着けつてアリア。俺だよ俺」

肩を捕まれた。ビクツと硬直する。

なんか聞いたことあるような声だった。

然し。アメリカス、体験したことのない恐怖で余裕はなかつた。

ノーフェの暴走に、二人との不意打ちの出会い。

彼女の精神的キャパは、完全にオーバーしていた。

（嘘だろおい!! やり方が悪かったのは認めるけど待て!! 俺こいつの知り合い!! 知り合いだからね!!）

ガタガタ震えている少女を、周りが保護して匿っていく。

不味いと判断したミチア、たまらず逃げる。逃げ出すしかなかった。

「変態が逃げたぞ、追いかける!! 逃がすな!!」

ガチムチのおっさんたちが追いかけてくる。

風呂上がりのおっさんのマツチヨは……色々、辛い。キツイ。

病み上がりだつてのに、散々な目に遭うミチア。

で、更に。彼を不幸が襲う。

「変態が、逃がすかッてんだよ!!」

フロールンス登場。羅刹モードだった。

なんと騒ぎに気がついて、怪しい言動の軍人二名を軽くその場で血祭りにしてから白状させて、事情を聴いてぶちギレしていた。

先回りして颯爽と躍り出て、道を塞ぐ。

「げっ!?!」

「テメエ、うちの子供に何してくれてんだオラアッ!?!」

ミチアが咄嗟に迂回しようとするのを、凄まじい機動力で圧倒して接近。

そして。

「あたしのこの手が真紅に染まる、変態砕けと轟き怒るッ!!」

聞いたことのあるフレーズを叫ぶ。そして、彼の顔面をひつ掴む。

「ぬお!」

彼ですら見えない速度。残像が見える!?

動きが終えぬまま、ミチア終了のお知らせ。

主に彼の命と人生の。

「変態は……光に還れえ!!」

それはどこぞの小隊長に似た勇者の台詞である。

ともかく、掴んだ顔をそのまま壁に叩きつけた。凄まじい衝撃と激痛が彼を襲う。

壁、金属製なのに大きくへこんだ。クレーターが出来上がった。

白目を向いて、ミチア終了。意識が飛んでいる。

「変態が……一度とうちに近づくんじゃねえ!!」

吐き捨てる姉貴は、ぼいッと豪快にミチアを投げ捨てた。

床に転がる男の亡骸。死んではいけないが社会的に死んだ。

追跡者がくるまえに、責任者が慌てて回収したので、大事にならずに……いや、広がらずに済んだ。

折角の出会いだったが、残念だが彼女の余裕を見るべきであった。
……合掌。

交錯する事情

……アリアは疲れた。

一体このバカは何を仕出かしたんだ。

「ねえ、変態を差し出せってコロニーから言われたんだけど。あんた何したの？」

「……」

ミチアは酷い状況であった。

回収したとき、気絶していたのだ。

いわく、風呂上がり帰る道を子供に聞いたら泣かれて人を呼ばれた、と。

そう説明する。が……。

（ふうん。……前任に会いにでも行ったのかしら？）

嘘であるとアリアは気付いた。酷い怪我をしているのだ。

ミチアは知らない。機体が返上されていることを。

彼女が前の彼女の意思を理解して、尊重していることも。決して、戻れないと言うことも。

余計な情報を入手して、実行して失敗したか。

そう、推察する。

「まあ、いいわ。適当にごまかしていくから。……余計なことを、あの双子に言うんじゃないわよ？ 警告は、したからね？ じゃあ、しつかり休んで。あとで、話もあるからおやすみ」

「!!」

ミチアは通り過ぎる彼女が残した不穏な単語に驚く。気付いている。

アリアがいることを、気付いていながら……流している？ どういう事なのか。

相変わらず、現場と上で意志の解離が発生している。然し、釘を刺された。

(次はない、か。……チツ、方法を選べば良かったぜ)

双子には告げるな。間違いなく騒ぎになるし、反乱が起きる。

この現状でそうなれば、最早手が見つけれない。

見逃すから、誰にも言うなという警告。

内心、舌打ちする。まさかあそこまで余裕のない状態であるとは誤算だった。

無理矢理接近すればいいかと思つた見通しの甘さ。それが原因だろうか。

取り敢えずは従おう。二人に言えば、今度は二人が裏切るだけ。

今は休息を取ろう。まだ、籠城は始まったばかりだ。

彼は自室に戻った。途中、双子と出くわし外の話になって、嫌な汗を流した。

「気の毒にねえ。ま、気にしないで」

「今はこんな状況だから、仕方ないわ」

双子は嘘を信じてしまった。思うことは、普段の行いは大切である。

男嫌いの双子に殺されずに良かったと安堵するミチアであった。

……で。同時刻、こっちでは。

「おい、言い訳がそれだけか?」

女王様が軍人達を母艦のブリッジで正座させて、説教をしていた。

ツバサもクロスハートも、現在顔面がジャガイモ状態である。

要はフローレンスにタコ殴りにされて凹凸が出来ている。

折角の精悍な顔が台無しであった。

「面目ない……」

「すいませんでした……」

軽く死にかけているが大丈夫だろうか？

フローレンスは渋い表情で思案する。

(厄介な事になりましたわね)

彼女は当事者からより多くの情報を一人で握っていた。

まず、この二名の情報。向こうの面子との出会い。経緯。そして、結果。

更に、本人からの自白。統合すると、先方に居場所がばれた。

一部は連れ戻す気が満々だが、本人と向こうの代理は恐らく現状を鑑みるに死ぬことを実行する。

この時点で致命的な差がある。連れ戻すことは、ほぼ無理であること。

分裂した片方も、受け入れる気がないこと。互いにそれを知らないこと。

見事にすれ違う事情のせいで、どういう風に転がるか予想がつかない。

(一番は、戦争になる。強引に決着をつけるまで、戦うだけ。ノーフェならば、やりませわ)

あのクソガキなら、戦い続けるだろう。あつちが死ぬまで、何度でも。

しかし。

(二つ目は、アメリカスによる自害。そして、向こうのマスターユニットによる殺害。二

名の意志が噛み合えば、あり得る)

わざと撃墜されて、始末させること。

現状、最も確率に高い結末。最悪の末路。

そうなれば、彼女を取り戻す人間と、こっちの人間が同時に互いを恨み会うかもしれない。

戦争の切っ掛けには、十分だ。

アメリカスはそれなりに好かれているし、ノーフェは……まあ、感謝ぐらいはされている。

どう足掻いても、戦争は回避できそうにない。

今仕掛けてこないのは、籠城という状態を維持する為か。

迂闊に自滅するのを防ぐからかもしれない。

「本当に……厄介なことを、してくれましたわね」

広い目線で見れば、泥沼になっただろう。

上下の意志が合わないのに、何でつれていった。

はつきり言えば、余計なことをした。

おかげで見えたものは、大きな真つ暗闇であった。

まさに、手遅れであった。既に彼女が知らないだけで、取り巻く周囲は、彼女の決死

の決意すら覆す。

一体、どうすればいいのか。どれが正解なのか。

多分、本人にも分からないだろう。フロレンスにだって、分からない。

「おい、テメェら。絶対にあの子に余計なことを言うなよ？ 見ただろ、あんなに弱っている原因の一端は、お前らだからな」

出来ることは、口封じだけ。余計なことは、知らない方が今は幸せ。

知ってしまえば、今度こそノーフェに身体を奪われて、暴走する。

体罰と恐怖で制御しているが、フロレンスも分かっている。

ノーフェの弱点は己の死ぬこと。それは要するに、フロレンスが彼女に殺意を向けないといけない。

仲間の癖に、殺意を向ける。そんな矛盾したことでもしない限り、あの狂った人形は言うことを聞かない。

痛みでわかるうちにはいい。その内慣れてきて、歯向かうようになれば。

(次は濃厚な殺意を向けて、それも慣れれば……わたくしもお仕舞いですわ)

上から押さえるにも限界がある。

彼女は強すぎる。能力だけが極地に至ったせいで、精神的な脆さすら物理で越えてくる。

逆上して、最後には殺しに来るだろう。積もったストレスの暴走。彼女はそれ以外、聞く耳を持たないから尚更悪い。

知恵をつけただけの野獣か、あるいは喋っているように見える壊れた機械。

人殺しの人形。要約するなら、彼女は人にはなれないのであった。

アメリカスの内面的な抑圧も、現在のように本人のメンタルが限界の場合は期待できない。

彼女も子供だ。知らないことへの恐怖は、ノーフェよりも強い。

皮肉なものだ。災いの名を継ぐ少女のほうが、余程人間らしい。

生きること執着する人形と、死を望んでいる人間。

今の彼女は、そういうアンバランスで危うい可能性を内包していた。

その均衡を壊したら、待っているのは殺戮人形の血祭り。

凶刃をこっちに向ける未来だってあり得る。阻止しないと、皆が危ない。

(迂闊なこととは出来ない。薄氷の上でスケートでもしている気分ですわ……)

氷が割れれば冷水のなかにドボン。そしてお陀仏。

なんという報酬に見合わない仕事か。でも、やってやる。

居心地はいいし、それぐらいの価値は既に受け取った。

干からびた傭兵の生活に、一時の潤いを与えてくれた子供。

金は当然だが、金以外も十分受け取っている。
姉貴はやれやれと首をふる。見上げる軍人二名。

「よし。じゃあ最後に一発殴らせろや」

「!?」

景気よく、バカ共の汚い絶叫で今夜は眠るとするか。

ゴキゴキと指を鳴らして近づくフローレンス。

青ざめる二名。まだやるらしい。

数秒後。男の裏返った絶叫が響くのだった……。

翌日。ジエネレーションにて。

「おい、俺の相棒は何処だ!?!」

病み上がりのミチアがアリアに掴みかかった。

一室にて、待っていた彼女に向かって怒鳴る。

話があると言うので、翌朝にしてみたら。

格納庫にある筈の彼の機体が消えていた。

激怒するミチアに、アリアは冷静に告げる。

「メデイカルチェックは終わつたみたいね。結論からいうと、あんたからサイコミュを取り上げる」

アリアは突然、そんな事を言い出した。

一通り検査はした。結果はまだ知らないが。

アリアは胸ぐらを掴まれても、真顔のまま。

「自覚がないのねミチア。あんたの脳は、サイコミュの蓄積されたダメージが深刻なの。このまま行けば、頭が焼き切れるけど、いいの？」

そういつて、突き飛ばして解放させる。

よろける彼に、端末を投げて結果を見せた。

画面を見た彼は絶句する。脳波の異常あり。

更には今は偏頭痛や耳鳴りで済んでいるが、次第に人格にも影響があると書かれていた。

「本来、ただの人間にサイコミュは使えない。けど、あんたの機体を前任は反則的な方法

で改造してた。そのツケがきたの。まあ、ここまで長期的にする予定でもなかったんでしょ。直ぐに違う機体へ乗り換えるのを、先伸ばしにした事もある。あたしも、半分は原因。ごめんなさい、気がつかないで」

彼に珍しく、素直に謝罪した。

呆然とするミチア。つまりは、もう戦えないと言うことか。

冗談ではない。まだ、彼には戦う理由があるのに。

絶望しかける。目の前が真っ暗になる。

「嘘だろ……!?!」

「嘘じゃないわ。あんたの才能は、Gの耐性だけじゃない。並のNTをも越える、脳のタフさもあつた。逆を言えば、耐えきれてしまった。昨日の具合の悪さは、無理をした最後の通告みたいなもの。サイココミュを酷使すれば、頭が負荷に耐えきれずに死ぬ。悪いけど、それは認めないわ」

彼女が言うには、普通の人間ならばとうに死んでいる。

彼の規格外の脳の頑丈さが、バイオコンピューターありきとはいえ、耐え続けた。

木星の決戦の時から始まったであろう、疑似NTの負荷。リミッターを外したこと、大きな原因だと語る。

単なる人間には、既に有り得ないレベルだと言う。

「でも、それもここまで。あんたは普通の人間なのよ。これ以上、変なシステムに頼れば死ぬ。だから、あたしはあんたからサイコミュを取り上げる」

「……………」

がつくりと、膝から崩れるミチア。

自分でも知らない才能に救われていた。

しかし、奇跡は続かない。許容範囲のうちに引かねば、本当に取り返しがつかない。諦めるしかないのか。戦えないのか。自分は、もう。

「で、あんたの新しい機体だけどね」

「はっ!?!」

待て。アリアは何を言っている。

立ち上がるミチアに、首をかしげるアリア。

「どうかした？ この戦力不足の時に、あんたを腐らせるわけじゃないでしょ？ サイコミュ使わない機体なら普通に扱えるでしょうに」

「……………マジで？」

戦えないと思っただけ、ただの早とちりであった。

頭が限界なのであって、ミチア自身は健康体。続行には何ら問題はないと。

「じゃ、ドーベンウルフ使っただけ。最低限の準備はしてあるし、インコムなら問題ない

わ」

「……おい、待て。あんなややこしい機体を俺に使えるのか!」

ドーベンウルフ。量産型にしては過剰な武装を搭載した玄人向けのMS。

確かに数の不利を覆すにはもってこいだが、いきなり使えと言うのか。

「ああ、大丈夫。バイオコンピューターは引き続き乗っけてあるから。移植しているし、今までのデータも移してあるわ。いきなり実戦でも、多分いける。あんた、慣れてるっ
て言うし」

サポートも万全と言うが、さすがに言葉を失う。

本当に、事前通告を覚えてほしい。なんでこう、毎回突然なのか。

「シミュレーションは?」

「準備万端。何時でもどうぞ」

「……了解。ちよいと練習してくるわ」

さっさと行かないと、時間がない。

彼は背を向ける。アリアは気になる情報を見せてくれた。

「敵の規模、凄まじいわよ。プライズに連合に、このコロニーにジオンが潜伏していたらしくてね。連邦も沸いてきて共同戦線張ってるせいで、こっちのざっと40倍の戦力があるらしいの」

……嘘だろ、と思うが。

実際、周囲はまさに四面楚歌。

あとで援軍が来ると言うが、雀の涙ほどしかない。

「思った以上に最低最悪。死んでもおかしくないから、少しでも多く練習しておいて」

「……ああ、分かった」

それでも、やるしかない。

生き残るのだ。でなければ、彼女とは会えなくなる。

死ぬもの狂いで、練習でも何でもするとミチアは決めた。

「……あと。これは、どうでもいいと思うけど、一応あなたには言っておく」

出ていこうとしたミチアに、端末を弄ってアリアは視線を落とすつつ、言い出した。

「……あなたのサイコミュ、前任に届けておいた」

それは、意外すぎる台詞であった。

振り返るミチアに、彼女は続ける。

「……ここまで差があると、正直言えば勝率は限りなく低い。だから、あいつを逃しておくのも勿体ないと思ってね。泳がせる代わりに、どうせ廃棄するならあいつに改造して渡したほうが都合がいい。丁度、あなたの感情が籠っているであろうサイコミュが余ったから、コロニーの連中にあれ使って、即興で建造させてるわ。武器も踏まえて、使わない

手はない。ジオンの奴等の武器も、交渉して貰ってきた。全部乗っければ、戦力の数会わせにはなると思う」

淡々と、冷静に悪化した状況打破の為に、敵に塩を送ったのだ。

あくまで、打破のため。そこに他意はない。

「……そうかい」

「言わないでね。そうしないと、あの二人が言うことを聞かなくなるから」

彼女はそれだけ告げて、黙った。

速くいけと雰囲気と言っている。

礼は言わない。どうせ、こっちの意思を汲んだわけではない。

事務的な理由に過ぎない。だから、去っていく。

……アリアも言わない。これは、独断。

彼女の判断で、勝手に行ったこと。

主には知らせない。権限に基づき、実行した。

(……さて。どう出るのかしら、前任さん。あたしは、あんたの意思を貫くわ。でも、今あんたは戦えない。それは、許せないのよ。戦場で殺さないとあたしが満足できないし、情けない機体じゃ勝っても意味がない。あたしが納得したいから、あいつの思いごとあげるわ、そのサイコミュを。見せてみなさい。最後かもしれない共闘なのだから)

彼女の勝手な感情が、初めて行動に移させた。

それは、彼女に巡りめぐって、新しい力を与えることになる。
なんの因果か、彼女は手にすることになる。

赤い破滅と、優しき導きの、MS。

可能性を表す、ガンダムを。

援軍到着

……時は、一刻と迫っていた。

一日休み、辛うじて精神が安定したアメリカスは、現場に復帰する。

その頃には、更に現状は悪化していた。

「……悪い知らせが入ってきました」

母艦のメンテをしているコロニーのクルーが、フローレンスたちに最悪な知らせを持ってきた。

いわく、周囲を囲っている共同戦線に、遂には連邦までも加担してきた。

要求をするべく、交渉をしていると言うが。

ここにはジオンが潜伏していたらしい。それを突き止めた連中は、明け渡せば退散す

ると言っではいる。

然し、匿うのならば敵対と判断して、メガ粒子砲をここにぶちこむと脅しているようだ。

「民間人もいるつてのに、何を考えているんですか!？」

思わずアメリカスが連絡をして来たクルーに叫ぶ。

クルーも混乱しているようで、わからないと言われてしまう。

民間人。一応、アメリカスたちやジェネレーションのことを言う。

ジェネレーションは最悪テロリストなので分かるが、こっちは完全にとぼっちりだ。

指定時刻までに差し出せば、民間の連中は逃がすと、連邦は説明している。

「……有り得ないな」

「全くだ。連合がいる限り、それはない」

軍人たちがその交渉は嘘だと断言する。

腕を組んで、苦い顔で分かかっていない艦長たちや子供たちに説明しようとして。

ブリッジの壁に寄りかかって、ため息をついたアメリカスが語り出す。

「知らない人もいるんでしょう。……連合は、自分達の都合で動きます。腐敗した組織の典型的なパターンでしょ。ここに来ているのは、特殊部隊の面々だそうです。尚更、有り得ません。目撃者は皆殺しにするでしょう。要は、掌握したいプライズとかい

うバカに合わせて邪魔な奴等を消すような集団、挙げ句には仕事のために関係のない衛星に仕掛けてくる連邦という、こつちからすれば救いようのないタッグと言う意味です。戦力の差を見ても、歴然でしょう。連邦が認めても、他が降伏を許しません。徹底的に抗うしか、生き残る手段はないと思つてください。時間制限、つけられましたかね」

鉄仮面をつけない彼女のこんな表情は、初めて見るクルーたち。
ノーフエはどうしている、とツバサに問われる。

「……ヤル気満々ですよ。戦闘になれば、いくらでも殺せると大喜びです。今回だけは、無駄に頼もしいですけど」

アメリカスの曇る表情を見て、一応味方はしてくるようだ。

彼女がいれば。そう、彼らに匂わせるが。

しかし、機体はない。彼女の無理に応じる機体が、手元には。

普通の機体に乗ると、処理が追い付かずに機体が逆に悲鳴をあげる。

ノーフエに追従できる機体など、そうはない。

唯一出られそうなあれは、元々は盗難品。

持ち主がいるので迂闊に使えばまた面倒なことになってしまう。

こつちは、コロニーに対応を任せるしかない。

頑張っているらしいが、それももう時間の問題か。

期限は、明日の正午。それまでに、せめてジオンを差し出せば。

でも、多少危険が減るだけで結局は逃げ切れない。

「ジオンを探せば……」

一人が、そんな事を言う。が、アメリカスは否定する。

「何人いると思ってます？ 引き渡しと言うのは人員だけじゃないんです。MS、運用している母艦。全部引つくるめて。……わたしたちが、人海戦術に参加しても、抵抗するジオンの連中と中で殺しあうだけ。現状の好転はません。何も変わらない。変わらないんです……」

出来ることは、来るべきに戦い、突破するしかない。

全員に、フローレンスは現状を鑑みて告げた。

「わたくしたちも全力で抗いましょう。バックアップはここの方々に任せます。戦えるものは、全員で戦いなさい。死にたくないなら、やるしかないですわ。どのみち死ぬのなら、一矢報いるほうがマシだと思いませんか？」

厳しい命令だった。特攻覚悟で抗えと。

痩せ我慢しているようにしか、見えない。フローレンスですら、気圧されている。

不安を覆い隠しているだけ。NTだからか、何となくアメリカスは分かった。

(……不安ですか?)

内面で、ノーフェが語りかけてきた。

珍しく、落ち着いた状態で。

アメリカスは答えない。どうせ、感情は向こうに伝わっている。

(ふうん。そつちも不安とかあるんですね。自分に対する不安じゃなくて、ここにいる連中の方が心配だなんて、余裕ありますね。誰のせいで戦えないと思つてやがりますか畜生が)

(五月蠅い。ノーフェが悪いんでしょう。大体、魔女の名前を継いだわたしの言うことを聞くのは当然です。オマケが偉そうに命令するなど、烏滸がましい)

皮肉を言ったり、文句を言ったり。鬱陶しい奴。

アメリカスは不機嫌な顔で、黙っていた。

(いつそ、ジエネレーションからまた機体でも奪いましょうか？ そうすれば、少しはこいつらの生存率も上がりますよ?)

(そうやって、ただ近寄つて殺したいだけの癖に。自分勝手な女、つくづくそう思います)

(他人のためにチャンスを不意にするのは嫌ですからね。普段ならばまだしも、今は絶好の機会ですし?)

(本当に、クズですねあなたという女は……)

(魔女にクズと呼ばれるとは、人形から随分と出世しましたね私も)

互いに罵り、敵意を剥き出しにしていた。

ブリッジでは絶望して諦めている子供が多い。

例外なのは……。

「戦うしか、ないんなら……!」

聖を始めとする一部のみ。

彼女は作業用のジムで最後まで戦って見せると言っていた。

一方的にやられる怖さを知っている聖は、一種の自棄になっていた。

それでも、案山子になるよりはずっといい。

聖に戦闘は、ノーフェが適当とはいえ仕込んでいた。

後方支援ぐらいなら、彼女も出来るだろう。

「……そう言えば、お伝えすることがあります」

クルーが去り際、何故か野郎二名に向かってそう言い出した。

いわく、ジェネレーションから二人宛に伝言だとか。

「向こうの代表の方から、『マシンは第七区画で整備させておいた。今は見逃してやるから、あんたも戦え裏切り者』、と伝えろと……」

困惑するクルー。それは、二人も同じだった。

何の話か、さっぱり見えない。多分、これを宛てた相手は……。

「……第七区画ですか？ 案内してください、お願いします」

きつと、この少女宛だろうか。

壁から背中を離して、傍に置いてあつた仮面を被る。

銀色のフルフェイスの仮面が、クルーを見上げた。

「えっ？ えと、いいんですか？」

「その伝言は恐らくわたしに對してのモノです。互いに顔を知りませんから」

どういう風の吹き回しか知らないが、向こうはこの状況の打開のために、アメリカスを利用するようだ。

思惑通りでもこの際いい。戦えるなら、戦つてやる。

「……いいんですの、アメリカス？」

フローレンスが一度止めて、聞いた。

それは向こうの思い通りに戦うことになるが、という確認だった。

顔だけ振り返り、彼女は言った。

「今は非常時です。腐っているよりは、わたしにも出番があるなら戦いましょう。道具

は、主を守るものです」

「……それは、どちらの本音ですか？」

「わたしです。彼女は、気に入らないようですが、賛同はしています」

「結構。行きなさい」

クルーが少女の名前を聞いて何やら嫌そうにしているが、無視。

取り敢えず連れていけと、フローレンスが凄む。

慌てて、二人は出ていった。

「そうか。ノーフェ君も戦ってくれるのか。いつも恐ろしいが、味方であるなら、これ以上頼もしい事はない」

「殺せれば何でもいいからな。ノーフェにとっては、ただの遊び場だろうよ」

クロスハートの言葉に、ツバサは肩を竦める。

その他、戦える面子は待機しているとフローレンスは命じた。

今はまだ、その時ではない。

休めるときに休んでおくと、冷静に下して本人も少し休憩を取ることにした……。

一方、その頃。

「規模の差が絶望的すぎない!？」

アンヌが現状に叫んでいた。

40倍の戦力に耳を疑った。流石に、なんでそこまでしてここを潰そうとする。

マリーに至っては真つ青になって絶句した。頭が完全にフリーズしている。

「悪化したのよ。ひとつ消えても、他の二つが襲ってくる。結局、戦うしか選択肢はないわ」

連合の目的は、どうやら衛生の研究するMSで、プライズはただの遊び。

連邦はジオン狩り。目的の一致だろうとアリアは告げる。

「一応、さつき応援は来たわ。けど、焼け石に水ね。ぶっちゃけ、死んでくれて、来てくれた奴に言ってるようなもんだし」

とエースと言えど、ここは地獄だ。

先ほど連絡が来た。いくはずの数名が辞退したと。

代わりに来た数名と変わったらしい。

トラブル発生が、事態を更に追い詰めた。

「そりゃそうだな。死にに来たんだぜ、要するに」

ミチアの言う通りだった。こんな場所に好き好んでくるバカなどいない。

それでも、譲れないモノがあると、信じてもしない限りは。会議をする個室で話していたが、そこで不意に扉が開いた。

若い、というよりも少年と少女が、声をかけて入室してきた。

「確かに、確認した状況は悪いようです。でも、おかげで来ることが出来ました」
「代わりになれるか、分かりませんが……よろしくお願いいたします」

その二人に、アンヌとマリーは顔を覚えていた。

「ふ、フリット君!?!」

「ユリン!? 何しているの(こ)で!?!」

そこには、木星の決戦時に一時的に保護していた民間人の二名がいた。

フリット・アスノ。ユリン・ルシエル。

ヴェイガンに巻き添えを受けた少女と、それを救うべく奮闘していたガンダムのパイロット。

二人とは、少しだけその時面識があった。

「……少し、僕にも考えがあったんで代わりに来ました。丁度、こつちの世界にくる前にジェネレーションにUE関連で依頼を出しに行っていたら、この話を聞いたんです。それで、僕自身の事も含め、ユリンを二度と助けてもらったお礼を、しようと思ひまして。ガンダムの設計図だけじゃ、僕の気が済まないのもあったんですけど」

そういつて、その都度はお世話になったとアリアに礼をいうフリット。

彼とて、この集団がどういう連中かは知っている。

「ジェネレーションは文字通りなんでもするんですよ？　そこに、正義も悪も関係なく。それじゃあ、この場所は語れないって、知りました。納得できない部分も、正直言えばありますよ。でも、それ以上に……僕の力が足りなくて守れなかつたかもしれないユリンを救ってもらったことも、歴とした事実ですから」

どこか達観したように、彼は言った。

対して、そのご本人は。

「わたしは、結局助けてもらって、何もできずに立ち去りました。フリットみたいに、M Sの事でお礼ができる訳じゃない。だからせめて、出来ることをしたいんです!!」

ユリンはユリンで、感じる必要があるようだ。

一緒に戦うと言っている、が。

「ユリン、だつたなお嬢さん？　あんた、MSに生体パーツ扱いされて乗つてただろ？　戦えるのか？　言つとくが、素人じゃこれから先は死ぬだけだ。無理はするな。折角拾つた命だ。義理を通すのに、その方法は良くねえ。気持ちだけ、受け取つとくぜ」

ミチアの言うことも尤もで、足を引つ張る素人が来ても死ぬだけ。

前回はただ、振り回されていただけの単なる民間人。無理はするなと警告する。

「だ、大丈夫です！ フリットと一緒なら！」

「ユリンもあれから、訓練は受けてます。それに、僕達はXラウンダーです。一緒にいた方が、都合がいいんですよ」

Xラウンダー？ という単語にミチアは訝しげに聞き返す。

アリアが代わりに説明した。簡単に言えばNTと似たようなもので、違うのは同質の存在が近くにいと飛躍的にその能力は高まる性質があるらしい。

いかんせん、珍しい体質でそうそういないのだが、二人はそのXラウンダーという特殊な人間なのだそうだ。

「……。この二人に関しては大丈夫よ。フリット。例のガンダムを使うんでしょ？ わざわざ向こうから持ってきたんだし」

「はい。そのつもりです」

ちらりと横目で、アリアは二人を見た。

アリアもNTだ。似たような人間には、言葉を出さずともなぜか通じた。

(余計なことは、言わないように。それが約束でしょ)

(……分かってます。秘密裏かつ、迅速に行動しますので)

トラブル発生時に近くにいた二人に話を振って誘ったのはアリアだ。

その条件を満たすために、目配せで示した。

ユリンも了解をしている。問題はなきそうだ。

「例のガンダム？」

「うちで再現したAGE―2よ。向こうでも再現したから、こいつが自分で持ってきたの」

持っていかれたと三人が思っている新型のガンダムのことだった。

データはあるから、もう一機建造していたらしい。それを、フリットはわざわざ持ってきたのだ。

そもそも、それがフリットが訪ねてきた理由である。

「わたしは、フリットのAGE―1に乗ります。慣れてるんで、大丈夫ですー！」

ユリンもなぜか必死に大丈夫と言っていた。ここから離れたくないように。

三人は決定事項ゆえに口出しせず、死なないようにフォローはすると言って、了解した。

作戦と待機を命じて、解散となる。

二人は直ぐ様言われた場所に向かった。そこに、恩人がいるかもしれないと言われる。

二人の目的。それは、直接恩人に向かって、お礼を言うこと。

時間も少ない。余裕のあるうちに、駆け出していく二人であった……。

災いを告げる紅

第七区画と呼ばれた場所は、別名を第七格納庫と呼ぶと、道中クルーが説明した。何でも、本来は使われていない区画で、普段は使わないMSの倉庫と化している。

そこで、資材持ち込みでジェネレーションがある機体の建造を命じてきたのだそう
で。

「正直、どういうマシンなのか現場の人間にも分かりません。異界のMSであることは設計図で分かりました。しかし、内容は全くの未知数です。……一応、急ピッチでやれとの指示ですし、武装も一部持ち込まれたのを流用しています。カラーリングも、余っていた塗装を塗っただけです。ですので、推進材などは元々とは異なると思うてください。あくまで、このコロニーで使われている共用のもので、規格は恐らくあっていません。不都合があっても、目を瞑って下さると助かります」

指令書記された通りに建造はしたが、武装などは完全に再現できていないらしい。

この状況では無理は言えない。乗れる機体があるだけマジ。

アメリカスは廊下を案内され、聴て高い天井の格納庫へとやってきた。

……彼女に託された機体は、そこに悠然と待っていた。

(……これが、わたしに渡したいという、機体?)

アメリカスは言葉を失った。

嘘だろう。こんな、こんな大ピンチにまさかの展開。

この期に及んで、完全なる嫌がらせに等しい外見なのだが……。

(よし、もう一度あの女を殺しましょう。これは確定です。今度あったらマジで殺す)

ノーフェもご立腹だった。確かに、こんなことのために、わざわざ中途半端に希望を抱かせたと言うのか。

向こうは結局、利用するのかもしれないのか。戦力として期待してない証拠だろう。

「……大丈夫ですか?」

クルーに聞かれる。大丈夫なわけがない。

こんな機体で、一体何をどうやってこの不利な状況を戦い抜けと言うのか。

(い、いや……。もしかしたら、上物かもしれません。諦めてはダメです)

(それはないと思いますけど? どう見たって、これは)

(内面を見ましよう。ほら、方が一でもあいつの可能性だってあります。こんなカラーリング見たことないですが)

(……ああ、あれですか。あれなら確かに見た目は関係ないですが)

(見た目が全てじゃないとわたしは思います。ほら、いるじゃないですか。こんな顔した遺跡から出てきた神様が)

(動揺してますよね？ 取り敢えず銀河越えた泥沼大戦争になった神様は違う機体です)

(……顔は似てるのに)

(あんな稲妻見たいな角はありませんよ)

アメリカスは、礼だけ言って早速機体の中に入っていく。

兎に角時間がないのだ。外見だけ出来上がっても、内面のOSが死んでいると使えない。

プログラミングはこっちでやると言って、あとは任される。

立ち去るクルーをコックピットのなかで、モニター越しに見つめる。

「お願いですから、どうか神様の方を……！ 量産型は勘弁してください……！」

祈るような思いで、中身を探っていく。

人生で初めて、神様に願ったかもしれない。

乗った機体は、残念ながら異界の全滅エンドで終わった神様ではなかったが。……数分後。安堵するのを、ノーフェもアメリカスもまだ知らない。

……フリットとユリンは第七格納庫に来ていた。

二人で同時に探すのが、人気がそもそももない。

ここにあるのは、使っていないMSだけだと道を教えてくれた職員が言っていた。

確かに並んでいるMSは、あまり上質なものとは言えないとフリットは思う。

明らかに量産前提の機体ばかりだ。これでは今の状況にはついてこれまい。

目の前には、何やら専用の武装を積んだであろう、カスタムされている黒いジムが立っているが、これもどうせ役目を終えた試作機か何かだろう。

恩人である少女の顔は一度だけ見ているので知っているが、人がないなら、意味がない。

あと会えそうなチャンスは、戦うときだけ。余裕などないから、余程の幸運ならば会

えるぐらいの確率か。

「いないね、フリット……」

「うん……。アリアさん、いると思ったんだけどな……」

二人はもう暫く周囲を探して、いないのを確認してから違う場所を探しにいった。

その後、昨晩のうちに変態に誘拐された少女が彼女の外見に似ていたので、ここにいることは確実だという成果があったのが、幸いであった。

……二人が気づくはずもない。

その人物は、MSのなかで首を傾げながら脳波の認証と、設定を弄って来訪者がいたこと自体、知らないのだ。

彼女は結局、数時間も籠ってひたすら内部の調整を行っていた。

そういうしている間に、時間はどんどん迫っていた。

——そして。

時は来た。

引き渡しの時刻を過ぎた。無論、渡せるものなどない。

最後までジオンの連中はコロニーのなかに隠れている気らしい。

攻撃の時間を告げるように、相手の艦隊は動き出す。

連邦はまだ、良心のある方なのだろう。移住区域には、手を出そうとはしない。

そつちの手を出そうとするのはOZのバカと連合の非常識集団であった。

母艦で待機しているフローレンスさんは、苦い顔で出迎えを準備している。

『あの……フローレンスさん、このジムは……』

「聖、あなたには後方支援をユーリと担当して頂きます。安全策になるか分かりませんが、追加装甲もつけてありますけど、無理だと思ったら素直に退きなさい。あと、機体のバランスは最悪だと思いなさい。咄嗟の回避をするのは無茶な注文と言うやつです。接近される前に誰かを呼ぶこと。出来ないその時は機体を捨てること。いいですわね？」

『は、はい……頑張ります！』

聖にまで、実戦投入しなければならぬほど、人員は不足していた。

幸い、ジャンクで再生したジムローをロングレンジライフルと追加装甲を施した即興の機体ぐらいいは時間の間で作り上げた。

ユーリが死に物狂いで仕上げた。そのわりには最低限の機能のみで作ったので出来映えは上々だど。

『寝不足がキツいかな……。まあ、四の五の言ってられないか!』

「ユーリ、聖の面倒は任せます。トルネード、破壊してないでくださいね。生きて帰ってきたら、取って置ききのコーヒーでも奢って差し上げますわ」

『そりゃ、気合い入れていけないといけないね』

ユーリも引きずり出されて、支援に当たる。

彼女はトルネードを使うが、主に接近する敵機を追い払う役目である。

聖射撃の腕前は妥協点にまで成長している。

機動関連は素人だが、固定砲台ならば問題はないという結論になった。

野郎二名も、マラサイとGエグゼスに既に乗っていた。

こっちは、主に遊撃と迎撃を担当する。他の部隊のサポートになる予定。

神妙な顔つきで、二人は黙っていた。

「……わたくしも出ますわ。艦長、あとは任せます。もしも、帰ってこなかったら……皆

さんを、頼みますわよ」

「縁起でもないこと言わないでよボス!! あんたなら帰ってくるよ、ワシが保証する!!」

イワンが弱気になっているフロールを珍しく励ましていた。

普段なら怒鳴られている情けない木星帰りの男は今日は、頼もしく見える。

苦笑いして、颯爽と去っていくフローレンス。彼女は一番危険な艦隊の殲滅をする。矢面になって、相手に突撃するのだ。

その役目は譲れないと豪語していた裏には、なんだか強がりがあった気がする。不器用な優しさの現れなのだろうか？

「ふふふふ……さあ、素敵なパーティーの始まりです。殺し尽くしてやる!!」

こっちの猛獣は既に違い場所にいた。例の格納庫のなかだった。

色々と最終設定に手間取りながら、ギリギリで間に合った。

ノーフェは好き勝手にやれと言われている。個人の方が、彼女は強いと判断された結果。

人気がない格納庫の近くには、閉鎖されたMSの出撃ハッチがある。

そこをぶち壊して、裏手の方から連中に不意打ちをかけてやりたいと思うノーフェ。(うまくいくといいんですけど)

アメリカスがぼやいている。任せるのに不安しかないようだ。

「一応同じ陣営以外なら、殺しまくっていいんですよ？　なら、片っ端から殺るだけ」
(血に飢えたケダモノが……)

軽蔑されても知ったことか。

ケラケラ笑って、ノーフェはその時を待つ。

……事態は急展開を迎えた。

慌ただしく、皆は出撃したり修理をしたりと動き出す。

なんと、脅しと思っていた連邦の母艦が本当にコロニーに向かって、メガ粒子砲を叩き込んできたのだ。

幸い、被害は甚大でもなかった。港を破壊されただけ。

然し、それを狼煙に一気に全方位から攻めてきた。

凄まじい数の敵の数。数えるのもバカらしくなってくる。

「あわわわわ……!?!」

聖は目を回す。レーダーに表示される数は分からない程に多かった。

コロニーの壁の一角を陣取り、片方の膝について、ライフルを構えている。誰を狙えばいい？ 敵はどこだ？ 優先順位は？

聖は当たり前だが、実戦の経験はない。簡単にパニックに陥った。

『落ち着いて。近づくとやつから撃ち落とせばいいよ』

レンジに既に何機か、敵の影が見える。

近くで飛び回るユーリがアドバイスをする。

人を殺すのか。そんな思いは、最初からない。

襲ってくるから戦うのだ。殺されるから殺すのだ。

襲ってこなければ戦わないし、死ななければなにもしない。

聖は理不尽を、恐怖を知っている。ゆえに、忌避するためなら迷わない。

(私は死にたくないんだ……！ 絶対に、生きてやるんだ!!)

コックピットには、あの人が直してくれたくまのぬいぐるみが一緒にいる。

ちゃんと洗濯もしてもらえた。綺麗になったぬいぐるみと、一緒に安心して眠りたい。

だから今は戦う。理不尽を振り撒く悪意から、生きるために。

……ロックをした。トリガーを引く。

宇宙を走る、ビームの軌跡。はるか遠くで、直撃した。

敵機の胴体を貫通。爆発して消えた。

この辺は見通しのよい区域だ。多少左右に動いても、練習通り先に行きそうな部分を狙って撃てばいい。

反対側のデブリの多い場所よりはずっとやりやすい。

(当たって！)

もう一度引く。今度は避けられた。でも、腕の武器は破壊した。

動きは鈍い。連射がきかないのは難点だが、次で仕留める。

慌てないこと。彼女に戦いを叩き込んだ仮面の少女は、そう言った。

スナイパーは位置を悟られたらお仕舞いだ。攻撃の度にそのリスクは高まる。

数度撃ったら場所を迅速に移動する。予めポイントをユーリに貰ってある。

そこに移動して、一度隠れる。様子を伺う。……気づかれていない。

今は前衛と小競り合いをしている。援護のために、構える。

応援の要請。少し待て、と送ってから覗く。

サーベルでつばぜり合いをしていた。動きが鈍い。チャンス。

よく狙う。また止まった、下がれと送りつつ撃つ。

止めていた方は慌てたように下がったが、敵には間一髪当たった。撃墜、次にいく。

聖はまだ余裕がある。ユーリも迎撃しつつ、足止めをして彼女に任せて移動する。

この二人は、まだ大丈夫そうだった。寧ろ問題は……。

「ちよ、出られないんですけど!？」

(冗談でしょう!?! 何ですか!?!)

「知りませんよそんなこと!! なんか瓦礫が多すぎるんです!!」

ノーフエ達だった。ハッチから出ようとしたら、殺気を感じて一度退避していた。

件の砲撃に巻き込まれそうになったのを、寸前で避けたノーフエ。

然し、港の近くにあった格納庫のハッチと一緒に破壊されて、立ち往生。

武器で破壊しようにも、貫通力が足りない。というか、広範囲にぶちまけてしまう。

「まどろっこしい! 削ってやる!」

ビームで撃つても瓦礫が崩れて出られない。

壁となった瓦礫を、ガリガリと地道に削るノーフエ。

外では戦闘が始まっていた。出遅れていた。

しかし、分厚すぎてなかなか外にでない。

「……なんか、ムカついてきました」

ノーフェはなんだか、腹が立ってきた。

折角のお祭りに出遅れる。それだけでムカつくのに、目処がないのも。

いつそ、最大出力でぶっぱなすか、と思うが。

(……好きにしてください)

アメリカスは今回、なにも言わない。

好きにさせる。壊したければ壊させるのが一番速い。

ニヤツ犬歯を出して笑うノーフェ。まあ、仮面しているが。

持っていた武器をバックバックに背負い込み、右腕のフィン型の武装を展開。

取り敢えず最大で、喧しい方向に向かって、構えた。

「そんじゃあ、景気よく行きますよ!!」

(どうぞお好きに)

みるみるうちにチャージされるエネルギー。

それが、強い光になって、壁に放たれる。

「ドーン♪」

うってかわって上機嫌になったノーフェが、適当に破壊した壁の先。

派手にぶっ壊して、機体は歩いて宇宙に出る。

『……撃たれたかと思った……』

で。少し離れた上の方に、聖がライフルを構えたままこつちを見ていた。宇宙に飛び出すノーフェは、聖に気がついた。蚊帳の外だったので気にしてなかった。

スナイパータイプのジム。追加装甲のカスタムをされている地味な茶色のジム。

「聖もいたんですね。ああ、ユーリも」

更に上空でトルネードが敵機と応戦していた。

能天気に見えるノーフェに、聖が聞いた。

『ノーフェさんは、真っ黒な……ジム?』

そう。彼女が乗っているのは、外見上は黒いジム。

但し、特殊な条件と特殊なパイロットがいる場合、話が変わる。

「ユーリ、見つけた。ちょうどいいので、使いますかねー」

ノーフェはユーリがNTだと知っている。

自分でも使えるが、今回はユーリを囿に使うことにした。

(……………!?)

ユーリは感じる。下方で、凄まじい悪寒を。

敵意とは違う。濃厚な……殺気だった。

でも、近くには味方しかない。レーダーには、何やら見覚えのない型式が。識別は味方なのだが。

(RX—0……?)

なんだか、強烈に嫌な予感がした。

恐々、下を見る。そこには、こつちを見上げる黒いジム。

いいや……あれは。ユーリは、知っていた。

あの機体。なんで、あんなのがここにある。

なんで、ノーフェにあれを与えた。

「ぎゃあああああああああ——————!!」

思わず絶叫した。意図が読めたのだ。

ノーフェの奴、ユーリをデコイに使いやがったのだツ!!

一方。ジムのコックピット。

ここでは、コンソールが変化する。

コックピット自体も形を変えて、操縦に使うものが全部無くなった。

目の前に立ち上がったモニター。そこには、こう……文字が紅い画面と共に浮かび上

がった。

——NT—D。

「ユーリ、ご協力ありがとうございます(ぎいいます)」

『僕を殺すつもりなの!?!』

味方をダシに、機体がどんどん変化する。

装甲に亀裂が入る。そのままスライドし、内部の素材がむき出しになった。

同時に全身の隙間から漏れる素材が、真っ赤に輝きラインが走る。

黒いボディに紅いライン。更にジムの顔から、ヘッドは変形してガンダムに似た面構えに。

角も稲妻から縦に割れて、金色の角を表した。

全身が変わった。それは一瞬の出来事であり、恰も変身のようにであった。

『ジムがガンダムになった!?!』

聖が叫ぶ。その通り。ジムがガンダムになった。

その名前は、死に泣く妖精。彼女の場合は、死を楽しむ悪魔。

その機体の本性を、表したのだった。

「さあ、行きましょう……バンシイ!!」

名を、バンシイ。

ユニコーンと呼ばれるガンダム。その一つ。

同時に、NTを抹殺するシステム、NT-Dを内包する危険な機体。

それを、大喜びしながら使う、壊れた人形がいた。

戦場に猛獣が、鎖をちぎって飛び出していく。

もう、殺戮は止まらない。紅い悪魔は、漆黒を纏い宇宙を疾走する。

牙と鬣を持つ、百獣の王は、今ここに降臨したのだった……。

それぞれ戦い

……仕掛けてきたか。

外では戦闘が始まっていた。かなり騒がしい。

まさか、コロニーにメガ粒子砲を被害の少ない港とはいえ、本当に撃ち込んでくるとは予想外だった。

本気を示すための牽制のつもりと見るのが妥当か。

「どうするんだ、ジンネマン。連邦は俺達に本気を見せたぞ」

それは、コロニーに潜むジオンのお話。

貨物船に偽装して入港して、息を殺していた残党の一派。

首を隠すほどの白髪に深紅の瞳で、男は貨物船の船長に問う。

「……なに？　彼女を出すのか？」

男は、あるカリスマの総帥がいた時代のジオンの軍服を纏っていた。

のちに、アクシズ・シヨックと呼ばれた奇跡のなかで、満足に散っていった記憶を胸に、今……異なる世界の数年後の未来にいる。

「そうか。出るのか、お前も。……なら、止めはしない。だが、これだけは言っておくぞ」男には目的があった。その為に、彼女に目をつけた。

けれど、違う。彼女の瞳には、彼の求める刹那の時は存在しない。

真逆だった。彼女は、生きるべき人間である。生きなければいけない命だと理解した。

「ジンネマンも言ったが、死ぬなよマリィダ。お前は死んではならん」

そう。彼女は、自分以外の誰かを背負っているのだ。

それは彼の求めた目的ではない。

「意味が分からないのか。だったら、いい。ただ、いつも通りに戦って勝て。俺も出る」愚かな娘だ。どうして彼に言われるのか理解しないで突っぱねる。

本当に、彼女は違っている。

「僚機としての嫌味が軽口とでも思ったか？ バカを言うな。俺はその手は好かない」彼に言われる筋合いなどない、と彼女は言い返した。

なぜか、彼は彼女に嫌われていた。理由は……きつと、彼の目的を見抜いているから

だろうか。

「そう、睨むな。悪かった。だが、ジンネマンを残して逝くなよ。ジンネマンにも、言つたがな」

互いを大切に思っているのは知っている。

彼とは見える世界が異なりすぎている。

「……………」

ああ、まだ死ねない。今回の仕事は、綱渡りをしなければ。

機体を乗りながら、彼は思った。まだ、満足できる死に様ではない。

居ないものか。嘗ての彼女を越える、好敵手。まだ見ぬ強敵。

(居ないものだな。そうそう、この混沌たる世界でも)

死して尚、脳裏に刻まれた鮮烈な記憶。

何度でも甦るあの一瞬を、忘れない。

——も、もう機体が持たない……!!

——なら、やることは決まっている。

——ちよ、ちよつと何をする気!?

——お前は生きろよ、地球にはお前の父と弟の墓があるんだろう?

——…………お前まで死なれたら、お前の身内が悲しむ。俺が言えた口じゃないがな

……。

——そんな言い出したら、私だって！ あんたの恋人に何て言えばいいの!?

——喚くな。もう時間はないんだ、言い出しつぺの俺が支える。お前はもう、退け。

——止めなさい、止めなさいよ!! 地球を守る礎なんて、私許さないわよ!?

——違うな。俺は、地球を守るために身体を張るんじゃない。

——……え。

——これは、俺のエゴだよ。せめて。せめて、お前はこれからの未来に生きてくれ。

我ながら振り返れば、何をしていたんだと本当に思う。

一年戦争から始まった戦いの日々。

そして出会い、始まる悲劇の連鎖。十年以上、殺しあつてきた連邦の女性。

彼女には恋人を殺された。彼は彼女の父と弟を殺した。戦争だ、よくある話。

互いに憎んで何度も何度も殺しあつた。互いに顔を知り、銃を使って生身でも殺しあつた。

何時しか気付いた。一体、何のために戦っているんだと。

個人の憎しみのためか。互いに軍人、命令に従い殺してしまった。

彼女は毒ガス攻撃で彼の家族を。彼はコロニー落としで彼女の家族を。軍人は逆らえない。殺意があった訳じゃない。

しかし、戦争だからという理由で納得できるほど大人じゃない。

結果、当たり前前恨んで当たり前前憎んで、当たり前前に殺しあった。

気がつけば、戦争によって出来上がった憎悪の輪に巻き込まれていた。

だか。あの奇跡の瞬間、彼は見た。

隕石を地球には落とすなどという愚行をした総帥に従って、戦場で再び出会った好敵手。

互いに殺すことに拘って、そして地球にアクシズは落ちた。

ガンダムが跳ね返そうと躍起になった。彼は気がつけば、その輪に加わっていた。

理由か。強いていうなら、彼女がいたから、か。

地球を守るために彼女は懸命に抗った。それを見て、彼も動いた。

彼は数少ない、あの瞬間さえも利己的な理由で助力した男だろう。

彼女を死なせる訳にはいかない。そんな個人的理由に過ぎなかった。

(生きろよ、俺の生涯の好敵手。お前は死んでいい女じゃない)

彼の全てを奪った女。最期には、不思議と憎しみは消えていた。

いい加減、疲れたのかもしれない。憎悪だけで戦うには、人間は沢山の気持ちを使う

から。

許す訳じゃない。そして、許されたい訳じゃない。ただ、現実を見た。

諦めたと言ってもいい。戦争は、そういうものだ。

けど、受け入れられそうにない。憎しみは消えても、悲しみは消えない。

ここで消えるのが、自分の運命。それなりに、満足していた。

……気がつけば、彼は死んでいたのに生きていた。

遠い星。自分ではない自分の記憶を持ちながら。

自分は、誰だったか。ああ、ここは酷く寒い。

夜だというのに、何であんなに空が明るい。

この現象の名前は。

(ここ)は、北歐か……？ ああ、だから白夜なのか……。……俺の名も、ビヤクヤだったな)

思い出す。自分は、あの奇跡の光のなかで果てたこと。

そして、得体の知れない何かに導かれて、ここに来た。

悪魔の手引きか。神の示しか。そんなものは、どうでもいい。

この混沌たる世界に、彼は自覚をする。

ジオンの亡霊。死ぬために生きる、漆黒の幻影。

今は、袖付きと呼ばれるジオンの残党と行動を共にする、生きる屍が戦場にふらりと、現れる……。

ジエネレーションでは、慌ただしく出撃をしていた。

アンヌとマリーが、先に出て迎撃をしている。

やはり同じ陣営の機体だからか、袋叩きにされているようだ。

援護はしたいが距離が離れすぎている。援軍を出す方が速い。

「数が多いが……格好の的だな!!」

衛星からエネルギーを間借りして、ミチアのドーベンは凄まじい火力で敵を風ぎ払った。

流星量産型にしては破格の火力。エネルギーさえどうにかすれば、自慢の火力を存分

に發揮できる。

ライフルを腹部の粒子砲と直結してランチャーに変形。

両手で構えて、外壁に鎮座する。豊富な火器を用いた援護射撃。

それが彼の担当する役割であった。

エネルギー伝達のチューブがなんだか焼き切れているのか警報が喧しい。

だが、敵の数が多すぎる。多少の無茶は承知の上。

「いくぜ相棒！　これが俺達の最大火力だアツ!!」

目標、有象無象。イチイチ気にしていられない。片っ端から落とすしかない。

ぶっぱなす極太のビーム攻撃。直線上の敵を貫通して一掃する。

道は開いた。彼は通信越しに仲間を叫ぶ。

「行きな、一人とも!!　アンヌたちを頼んだ!」

ハッチを狙う邪魔は排除した。

ガンダムたちが、好機と出撃を開始。

「了解です！　フリット、AGE―2行きます!!」

「ユリン、AGE―1、出撃します!!」

二機のガンダムが、飛び出して、早速支援に向かっていく。

対になって動くXラウンダーは、通常の間では叶わない。

素人であるユリンですら、殺さないようにしつつ倒すぐらいの芸当はしていた。アリアはとつづくに戦っている。不利を少しでも補うべく、MAまで持ち出した。旧式と言えど、流石はアリア。撃墜する数が大幅に多い。

周囲は混戦状態に陥っている。

ジオンの残党は今しがた、現れた。

距離はあるが、近場であつた。向こうに向かつていく。

貨物船も一緒に出て、ふんとうしているようだが。

何やら聞けば、そこには随伴しているピーマンが戦っているらしい。

ファンネル積んでるピーマン。そう、真面目に援護に来たパイロットが目撃し、言われた。

(ファンネル積んだピーマンって何だ……?)

ミチアはそんな奇つ怪な機体は聞いたことがない。

野菜みたいなマシンを持ち出すジオンって何だ。そもそもジオンに野菜の概念はあるのか？

ピーマンは地球原産の筈では、と少々雑念を交えて正確に援護をしていた。

一方。双子はと言うと。

「……まで憎いの、私たちが!？」

「そつちが先に仕掛けてきたくせに!!」

シユイヴァンが周囲に囲まれて、集中砲火を浴びていた。

現在、リーオーの囲まれて実弾とビームの洗札を受けている。

マリィが懸命に反撃するが、撃墜しても次から次へと現れて滅りやしない。

幸い、プラネイトディフェンサーは柔な火器では倒せない。

二人で固まり防御に専念してぎりぎり持ちこたえている、が。

レーダーに反応。識別は味方。

周囲に現れた、ジオンもなぜか助けにくれるようだ。

『そのランチャー持ちの機体、援護する!! 隣のお前はそのままフィールドを維持し

ていろ!!』

アンヌが見上げると、ファンネルが何機も通りすぎる。

敵機を的確に撃ち抜いて、破壊していく。

……遠くに縦四つに切ったピーマンがいた。

一言で言うならピーマンであった。

「ありがとうピーマンの人!!」

アンヌが礼を言って、次の区域に向かう。

ユニットを背負い込み、マリィと共に移動を開始する。

『なんでこの連中はクシャトリヤを。ヒーマンと呼ぶのだ……?!』

パイロットの女性は苦悩しているようだった。

非常に有難い、ジオンの援軍。このときばかりは、互いの陣営を忘れて助け合う。地獄のような戦場でも、確かに救いはあった。……あくまで、ここには。

では、此方は？

目にも無惨な大惨事の殺戮ショーの開催中。

「死んじゃえ、死んじゃえ、死んじゃえッ!!」

地獄そのものであった。派手にバンシイが暴走していた。

決して殺す。潰して殺す。裂いて殺す。

ノーフェが大興奮で暴れ放題暴れていた。

黒いボデイに紅いライン、黄金の鬣にケダモノの爪。

野獣を放った一画では、魔物と言えるマシンの独壇場。

援護なんてなかった。彼女は本当に個人で戦っていた。

妖しい紅い煌めきは光度を増して宇宙を照らす。

敵機が食い止めるべく集中する。結果、彼女の周りには無数の機体の残骸が浮かんでいる。

(気が狂いそうだ……)

ユーリは休憩を取るほど、余裕ができていいる。いや、とらないと目を背けたくなる。聞こえるのだ。断末魔が。怒りが。憎しみが。NTの端くれであるユーリには。

この頭がおかしくなりそうな声を、ノーフェは直に受けてはしゃいでいた。

あの光景は恰も飛んで火に入る夏の虫。紅い軌跡に寄り付く虫は、全員が焼き尽くされる運命を辿る。

数の不利など彼女にはハンデにすらならないのか。

紅い光は敵を八つ裂きにして、わざと爆発させずに残骸を残している。

どうやらあの左手の爪は、機体のコックピットのみを破壊したり、四肢を引き裂いてバラバラにするだけで、破裂はさせない武器らしい。

だから殺している感触が濃厚で、ノーフェ一段と喜びを感じていると見る。

(悪魔だ。……死を囁く妖精なんかじゃない。そんな無害な優しい存在じゃないんだ、彼女は)

白い悪魔ならぬ、紅い悪魔。まるで鮮血を眺めている気分になる。

吐き気がする。頭が痛い。ノーフェは何故喜べる。こんな悲しい声を、辛い苦しみを。

なんで、これを愉悦とできるんだ。理解できないユーリ。

(……あつ、パスが来た)

聖は、対してなにも感じていない。

元より、自分を狙ってくる相手には生きるために戦い、相手が悪いで正当化しているからか。

ケダモノが暴れて、虐殺をしていますが、対して気分は悪くならない。なぜなら、彼女は味方だから。

決して、牙や爪を向けることはない、信じているから。事実、ノーフェもそれには気付いていた。

だから、わざと半壊させた敵を捕まえて、こちらに放る。酷いときは蹴り飛ばして寄越す。

それを、聖は淡々と処理していく。要は、これで練習しろという意味合いだ。

新人である聖に、安全に経験を積ませるべく、ノーフェは楽しんだあとのオモチャを的にして寄越してくる。

聖はパスを受けて、それを黙って撃ち落とす。時々外れるが、その都度ノーフェがサ

ポートしてくれる。

彼女は気にしない。ノーフエが頭がおかしいのは今に始まった事でもない。

こつちにいってくれる限り、頼もしい頼れる味方なのだ。彼女に敵が集まればこつちも安全に援護したりできる。

必要かどうかは、別として。

(……………)

アメリカスはずっと違和感を感じていた。

何だろう。このマシン、どこかで感じたことのあるにおいがした。

感覚的な話だ。抽象的に言えば、においがする。懐かしいにおい。嗅いだことのあるにおい。

どこか、罪悪感を感じるこの感覚は、なに？　なんでか、とても悲しい気持ちになる。

戦闘はあのケダモノにさせておけばいい。好きにさせているので、任せておく。それに。この戦場、あちこちにそのにおいが分散している。

何だろう。マリーやアンヌがいるのは知ってるけど、戦っているんだろうか？

(大丈夫ですかね……………?)

ピンチになってないか。危ないことになってないか。

心配になる。少し、様子を見に行きたい。

ノーフェに提案。気が済んだら交代。休んでいろと。

(良いですよ！ もうちよつと殺して、満足したらお好きにしてください!! あと百人は最低でも仕留めますけどね!!)

自分が満たされたらそのまま、寝ると言っている。

分かりやすい奴である。だが、それで決定だ。

念入りに、起きるんじゃないぞと言いつける。

彼女は疲れたら寝るからいいと言うので、大丈夫だと信じたい。

また下手に暴れないようにしないと。約束をして、今は遊ばせる。

そんな、色々な人間たちの、戦いは、まだ始まったばかりであった……。

匂いが追い付くとき

時間は幾ばくかは過ぎていくはず。

なのに、敵の減る気配は全くない。

次第に疲労が溜まっていく一行。

平気なのは、身体の作りが違う二名のみ。

持久戦すら、機体さえ維持できればこの二名は問題がない。

戦場では覆ることがないと言われる数の暴力を、理論上の一騎当千で跳ね返す化け物。

それが、かなりの数を葬っていた。

「……さて、約束ですし。私は少し寝てますので、どうぞお好きに」

ある程度、ノルマをやって一度補給に戻る。

応援に、遊撃の軍人二名が駆けつけた。

『ここは俺達が引き受ける。任せてくれ』

『連邦同士か……。まったく、あの部隊は本当にバカ真面目だな』

クロスハートが安心させるように言って、ツバサはどこか呆れていた。

彼ら他にも、一段と激戦区であるこの場所には応援が来ると言っていた。

撤退して、生きている方面に移動する。

主にノーフェが殺戮を楽しんでいたのは、連邦軍の面々であった。

ガンダムを見て、躍起になったのか集団で倒そうとして、その業火に飲み込まれた。

拡張していたフレームが収まる。もとの黒いジムに戻り、彼女はアメリカスに変化した。

周囲は酷い有り様であった。無惨な機体の残骸がデブリになって漂っている。

生体反応は皆無。皆殺しだ。数えきれないほど、ノーフェが殺った。

パイロットスーツのまま宇宙に放り出されて、そのまま握り潰して殺すなんてことまでしていた。

ユーリは吐き気を我慢するのも限界であった。速攻で戻り、そのまま降りて走っていった。

野獣が餌を食い散らかした挙げ句、死体を殴って遊んでいたのだ。

死にかけの虫を執拗に追い詰めて、憎悪や苦痛をあげさせてから、遠慮なく殺す。そういう惨たらしい事を、年端もいかない子供が遊びのように行っていた。

「……………」

本人は満足して、一度眠ってしまったようだ。深い眠りなのか、気配を感じない。アメリカスは、敵の惨状などどうでもいい。それよりも、ずっと感じるこの感覚が気になった。

戻り、補給をお願いしていると。整備員たちは、彼女を見て悲鳴をあげた。

降りてきた少女に、血の気が失せた顔で、ビクビクと怯えている。

彼女が破壊した左腕の装備は、オイルと血液らしき液体で汚れている。

その惨事を、画面越しにでも見ていたんだろう。

ここのために戦うとはいえ、限界がある。彼女はその限界すら越えて暴れていた。

「……………」

怖いんだろう。周囲から、恐怖しか伝わってこない。

整備はするから速く消えてくれ、という表情。

殺させるかもしれないと思っっているんだろうか。

(…………裏切りの魔女に味方はいない)

分かっている態度とはいえ、周囲との隔絶は、アメリカスの心に陰りを生む。

やっぱり、野獣を秘するアメリカスは、理解されない。いや、誰も寄ってこない。裏切るから、誰も隣にはこないし、そもそもこつちから寄っていけば悲鳴をあげられる。

仕方無い。この手は、戦うたびに血に汚れる。顔も、肌も、髪も。

気がつけば、血塗れになるんだと改めて思った。

足元に血の池を作って、そこに突っ立ち笑って、血を垂らす生首を持つ子供。

それが、ノーフェ・ネームレス。自分の中にいる、辿り着いた一つの可能性。

振り返り、見上げる。嫌悪感を丸出しにしているクルーが補充をしているあのマシン。

(RX-0……ユニコーン。宇宙に適応した人類を否定するマシン。ノーフェの感情を素直に発露できるマシン……ですか)

アメリカスが知っているユニコーンは、全身がサイコフレームの塊だ。

高すぎるノーフェの感応波に呼応して、戦闘力を跳ね上げて何らおかしくなどない。

何せ、一部分だけでもオカルトを起こす素材だ。全身ともなれば、規模が違う。

あのよくわからない発光も、彼女の殺意を表している気がして。

鮮やかな紅。三倍速いのではない。三倍殺す悪魔の光。

そして、敵を引き寄せる魔性の光。死を呼ぶ光。

(……そして。わたしを、孤独にする光)

現状を見る。平気なのは聖ぐらいなもので、後は例外なく彼女を畏怖している。

化け物を見る目で、自分を見つめているのだ。敵意なんてない。なにもしないと言つて、誰が信じる？

(……あの子は楽しんでた。それは、否定しません。けど……)

理屈じゃ理解する。納得しないといけない。だけど。

やっぱり、周りと違いすぎるからか。アメリカスにも、居場所はない。

ノーフェは気にしない。彼女は自分を人形と定義付けている。

別に、周囲が離れていこうが人形は人じゃないと割りきっている。

アメリカスはどうか？ ……わからない。それは、自分もそうだし。

(わたし、皆様のために戦おうと思っっているんです。でも、結局……化け物扱いなんですね)

意味のない仮定の話だが、一つ推論を立てる。

先程の戦闘において。仮に、アメリカスが戦ったと仮定しよう。

その場合、方法は変わっても結論は皆殺しだ。遊ぶか、ただ殺すかの違いこそあれ。

ノーフェは期待されているんだろう。この状況でも平然としているから。

けど、期待に応える結果を出せばこれだ。アメリカスがやっても、大差なかったような気がする。

沢山殺すだろう。アメリカスは敵には一切躊躇いはない。

それは、自分が守ると決めた人を守るために殺すのだ。

迷いなどないし、襲ってくるなら理由も必要ない。

けれど。それを、後ろで見えていた人たちはどう思うだろうか？

(化け物、人殺し……。沢山殺せばそのぶん、安全は確保できるとしても、代わりにわたしが恐れられる……。避けられる)

ああ、分かった。

戦えない人間にとっては、方法もそうだろうが結果が全てなんだ。

ノーフェの殺しが残酷だから、怯える。アメリカスなら、もつと沢山殺すから、怯える。

応えようとしても、期待には添えない。裏切る、アメリカスが。

化け物だから。アメリカスは、裏切りの魔女だから。誰の期待も、叶えられない。

(……。わたしが、いけないんです。わたしが、こんな方法しか知らないから……。わたし
がもつと、上手に出来ないから。わたしが、ノーフェを抑えられないから。周りの人が、
こんなに、怖がって……。全部、わたしのせい……。)

……もう、アメリカスには精神の余裕がない。

支えてくれる人が自分のせいで居なくなり、本当のことを言えば帰りたと思う場所には戻れず、逢えず。

それもこれも、全部自分のせい。自覚していたからこそ、アメリカスは自責を始めていた。

ノーフエが周囲を巻き込み復讐を果たそうとするのも、それを制御できない自分のせい。

ジエネレーションに戻れないのも、嘗ての親友をケダモノに狙われそうになるのも、自分のせい。

誰にも応えようとしても失敗するのも、裏切りの魔女である自分のせい。
全部。全部、アメリカスの招いた結果。アメリカスが引き起こした結末。

(わたしのせいだ。わたしのせい……わたしのせいで、みんなが辛い目に……)
彼女の瞳から、光がゆっくりと、色を失っていく。

数秒後には、生氣その物が欠落した。

彼女は生きるべきじゃない。やっぱり死ぬべきなのだ。

頑張っても、余計な被害を広げるだけ。

俯いて歩き出す。次にいくときは、もつと頑張ろう。

せめて、少しでも皆が安心できるように。もっと上手に出来るように。自分を責めながら、彼女は少し、休憩を取る……。

化け物だとコロニーの人々から言われる。

余裕が剥がれ落ちた幼い子供には、堪えられない地獄があつた。

いく先々で、彼女を見ると大人たちが逃げ出していく。悲鳴を上げて、一目散に。今まで、こんなことなかつた。それはきつと、フローレンスたちが助けてくれた。最大の違いは、それだろうか。

(……………)

ノーフェの行つた虐殺のツケが、何の関係もないアメリカスに全て降り注ぐ。

本人も己の不甲斐なさが原因と思うせいで、更に悪化する精神の均衡。

話せる親しい者はいない。心情を吐露できる人間は、誰もいない。

彼女の心配する人間は知らぬまま、いままさに戦っている。

遠くで、こんな幻聴が聞こえた。

——命は、オモチャじゃないんだぞツ!!

先程までいた、区画の方だろうか。

憤慨した、若い男性の声だった気がする。

宇宙に、そんな怒りの声が響いていた。

(……わたしのせいで、また……誰かに、ご迷惑を……)

一人きりの休憩室。俯いて、座り込んで壁に寄りかかる。

やっぱり、アメリカスが悪いのだ。大本の人格である自分が、そもそもの元凶であった。

ノーフェを責めるなんて、出来やしない。全部、アメリカスが悪い。

(わたしが、悪いんだ。わたしが、下手くそだから。上手に出来ないから。自分の力を、使えなくなってきたから……)

高い能力を、殺戮に使えばどうなるかぐらい、知ってたのに。

あの子を好きにさせてしまった責任は、アメリカスにある。

今までの事を振り返り、簡潔に纏めてみよう。

一言で言うなら。

——全部、お前が悪い。

(……)

精神のバランスは既に崩壊していた。

ここ最近の目まぐるしい環境の変化に、彼女の心は軋みをあげていた。

本音を話せる相手が、あの面子に果たしていただろうか？

ユーリは吐き気を催して一一番に去っていった。

軍人二名は、ノーフェの事を諦めている。

聖はそもそも、そんなに親しくない。

フロールレンスには、罪悪感しかない。

(……………)

歩み寄る親友を罵倒して、鉄の仮面をかぶって去っていったのは紛れもない自分で。

自分から捨てていったくせに、何を甘えているんだらうか。

アメリカスは、生きていてだけで災いを招く魔女だったのだ。

そう。魔女の名を名乗る時点で、分かりきっていた。

(裏切りの魔女。災いの魔女。わたしは、生きていてだけで皆様不幸を招く……)

感情が混濁しすぎて、自分でも今何を思っているのか理解できなくなってきた。

取り敢えず、今すべきことは。

——死ななきや。

(死ななきや。わたしは、死ななきや)

ふらりと立ち上がり、幽霊のように動き出す。

いく先は、自分の母艦。

ふらふらと歩いていく。クルーが補給を終えたと呼びにきたが、その雰囲気逃げ出してしまった。

もとより声などかけたくもない化け物。本能的に避けてしまった。

結果、止まらずに母艦に戻る。

ブリッジに行く。非常時に備えて、拳銃を配備しているのを思い出した。

(死ななきや)

頭の中で、繰り返し言葉。死ななきや。

これ以上、自分が生きていると更に被害が拡散する。死ななきや。

限界を越え、冷静さを失って、彼女は後先を考える余裕すら見失っていた。

現状すら見えていなかった。ノーフェは寝ている。今しかない。

口を開いて、銃口を突っ込む。このまま脳天をぶち抜けば、死ぬる。

どうでもいい。今がどんな状況でも、アメリカスが生きているよりはまだ希望があるだろう。

引き金を引いた。……弾が出ない。安全装置もはずしているのに。

一度抜いて弾を探した。発見、充填。もう一度。

……また、弾が出ない。今度はなんだ。弾が詰まっていた。手際よく解決していく。

今度こそ。と、思ったら。

外が凄いいぢしい。どたどたと足音が迫ってくる。

どうでもいい。関係ない。

(死ななきや)

いいから、死のう。速く死ななきや。

口に突っ込む。で、銃口を……。

「アリア、ダメエツ!!」

「止めて、アリアちゃんツ!!」

……何が、起きた。

「……死ななきや……」

「死なないで、死なないでいいんだよアリア!! アリアは裏切ってなんてない!!」

「責めないで! これ以上自分を追い詰めないで!! 私達が一緒にいるわ!!」

……なんで。

なんで、ここに……。

「死ななきゃ……………」

「大丈夫、大丈夫だよアリア……。泣かないで、独りじゃないから」
「死んじやだめ。まだ、私達はアリアちゃんに生きてほしい……」

どうして、ここで抱き締められるの？

幻影？ これは、幻影？

あつたかい。懐かしい匂いがする。

「……………わたし、は……………」

——なぜ、親友がここにいるの？

少しだけ、時を戻そう。

激戦区に援軍に来た、双子。

派手に連邦と争い、より過激になった区域を助けに来た。

ここでは、既にMSが戦っており、更にフリットたちも駆けつけ、本格的に戦闘を開始。

だが、そこで後から来た先程のピーマンが気になることを通信で溢していた。

『なんだ、このまとわりつくような感覚は……。ここで、何があつた？』

すぐ前まで、黒いジムが変形してガンダムになって、敵を虐殺して遊んでいたらしい。

ガンダム、と聞いて苛立つピーマンのパイロット。

衛星のオペレーターが、その時の画像を送ってきた。

戦闘の合間に、少しだけ確認する。それぐらいの余裕はあつた。

他の陣営も集まって混戦となっているが、練度は低いのか動きは鈍い。

迎撃して、叩き落とす。

そこには、遊ぶように戦う赤いラインの走る金のアンテナを広げた黒いガンダムが

写っていた。

思わず、フリットが怒鳴った。

『命は、オモチャじゃないんだぞッ!!』

彼の言う通り、オモチャにして遊んでいた散らかしのあとが、このデブリの数々。

残骸に死骸まで混ざって、一方的な蹂躪の跡地になっている。

更にオペレーターは、聞いてもいないのに告げた。

それは、ピンク色の髪の毛をした幼い少女で、今は休憩しているがその内戻ってくる。巻き込まれない内に避難した方がいい、と。

「!!」

双子は、それでピンときた。

まさか、とは思った。こんなやり方、あの子はしない。

けど、髪型を聞いたら案の定特徴的なドリルだと言うのだ。

(アリアがいるの!?)

(アリアちゃん!?)

その子は違う名を名乗っているらしいが、ノーフェと言うのは聞き覚えがある。

核心に至った。双子は、思わずフリットたちにワガママを言った。

少しだけ、ここを任せたいと。最強の助っ人を連れてくるから、待っててと。

意味がわからないが、取り敢えず了承した彼らに託して、直ぐ様戻った。

格納庫に侵入して、飛び降りる。

先程の映像の機体を整備しているクルーに食いかかるように聞く。

パイロットは、向こうに歩いていったと。

その情報を頼りに追いかける二人。聴て、自分の母艦に戻ったようだ聞いて侵入した。

慌ててついていき、道なりに突っ走った。道中すれ違った人は言っていた。彼女は、死ななきやと、ずっと眩いていたと。

訳がわからないまま、ドアを開く。

すると、今にも自殺しそうな親友の背中があつた。

仮面は被っていない。素の彼女が、ぶつぶつと同じことを繰り返して。

思わず書けよって、二人して抱き締めた。

「ダメだよアリア……死んじやダメ」

「私達、もうアリアちゃんを傷つけないって、約束する」

だから、死なないで。

涙を一人で流していた幼い少女に、漸く。

漸く、ずっと追ってきた光が、差し込んだ……。

邂逅、そして。

なぜ、ここに。

交わることを、避けていたのに。

「もう、離さないから……離れないから。泣かないでアリア
なぜ、アヌが。」

「アリアちゃんは死なないでいいの。苦しまないでいいの……」
なぜ、マリーが。

ここにいて？

「……なんで、ここに？」

後ろから抱き締められた。

ここは、自分の母艦だ。

二人がいるべき、場所じゃない。

「……………いいえ。きつとこれはわたしが見てる幻。とうとう、頭がおかしくなっちゃいました……………」

いるはずがない。ここには、親友はいない。どうせ、都合のいい幻覚だ。首をふる。気づかない間に流していた涙も乱暴に拭った。

あり得ない。あり得てたまるか。

否定する。死に際の足掻き。見苦しい現世に留まる未練だろうか。

「違う、違うよ!! 私達は偽者じゃない!」

「……………ここにちゃんと居るわ。ほら」

でも。この温もり。この匂いは。

間違はなく、本物で……………現実だった。

彼女は驚いた。幻覚ではない。本物の親友たちが、ここにいる。

理由がわからない。避けていた相手が、向こうから来てしまった。

本音を言えば、一番会いたかった二人が。けど。

自分の意思は、決して変えてはいけない。

「……………」

分かる。分かったとも。どういう理由かは、見えない。

間違いないくマリーとアンヌがここにいる。

だからこそ、言わなければ。示さなければ。

「何のようですか。次に会えば殺す。そう、言ったはずです」

俯く。表情を見せない。二人して、愕然としていた。

いきなり、彼女は態度を変えた。敵意を込めた声で、威嚇してくる。

「ここはお二人のいる場所じゃない。不法侵入で、始末しますよ。出ていってください。敵対している人間に忍び込まれては、わたしの沽券に関わりますので」

「……」

「……」

ダメだ。二人に弱味を見せては。

いけない。戻りたくなくなってしまふ。

二人がかりで戻してしまふ。それは、ダメなのだ。

鉄則を守りたい。死にたいのに、二人は絶対に止める。

秘めている獣の恐ろしさを知らないから。

この獣が目覚める前に。お願いだから、出て行って。

そう、切に願った。死なせるわけにはいかない。

死に物狂いで守ると決めた。故に、追い出す。

「…………どうして?」

アンヌが訊ねる。遠ざける理由をか。

何も言わない。黙して語らず、ただ、繰り返す。

「出ていってください」

「……………出来ない、と言ったら?」

今度はマリイが聞いてくる。それが返答。

出ていく気はない、と。

「出来ないなら、ここで殺すだけです」

銃口を、向けた。

顔をあげる。表情を凍らせる。

暴れて拘束を免れて、振り返る。

銃口を、今度はこつちから向けた。

「ホワイトアークから、出ていきなさい。最終警告です。人の居場所に、部外者が土足で入ってこないで」

わざと酷いことを言う。言わないと、この二人は諦めない。

連れ戻そうとするのは目に見えていた。

だから、言われる前に拒絶する。何を言っても無駄だ、と。

「……………」

「……………」

二人は、どこか様子を見るように黙っていた。

再三、脅す。

それでも、動かない。

「撃たないと……思っているんですか？ 撃ちますよ、わたしだって……」

……動揺しているのがバレバレなのは自覚している。

意志が揺らぐ。感情が昂つて言うことを聞かない。声が震える。

銃口がこんなに上下に揺れている。

大丈夫。引き金を引いて、威嚇すれば多分驚いて逃げるはず。

あと一步。あと一步で、追い返せる。

「もう、放つておいてください……。わたしに、構わないで……」

追いかけないで。もう、全部最後に失うんだから。

願うように、顔が崩れる。懇願だった。

これ以上、心が悲鳴をあげるのを堪えるのはいや。

放つておいてくれれば、勝手に死ぬから。殺されるから。

もう、許して。彼女は苦痛を浮かべていた。

対して。双子も、どこか辛そうにしていた。

いいや、辛かった。分かったのだ。

彼女が、強がっているのが。ひた隠しにしようとする虚勢を張っているのが。

そのぐらい、何か事情があるんだろうと。もつと事態は、ややこしい方向に転がっている。

下手に踏み込めば、きつとこの子を更に苦しめる。

そして何より、前回の態度と激変しているこの弱気な言動。

こちらに危害を加える何かを防ごうとしている気がした。

彼女の根本は他者への献身。自分よりも、他人を優先する性格だ。

「……事情が、あるのね？」

マリーが問う。知られたと言わんばかりに更に動揺された。

震える声で続ける。出ていけ、と。近寄るな、と。

青ざめて身体まで震えている。血の気を失せた彼女は、初めて見た。

質問には答えない。然し、返答は貰った。

何も言えない事情がある。そして、同時に。

(……これは、本人も連れ戻される事は本気で望んでないかもしれない)

アンヌは言外に悟った。マリーに横目で見ると、顎を僅かに引いた。

了解している。気付いたんだろう。

あの場所には、彼女は戻りたくないと言っているようだ。

これ以上続けるのもきつと不毛な争いになる。

「……」

では、どうするべきか。

一応、現状は非常時。彼女をここで腐らせる気はない。

そのぶん、危険が迫っている。私情は後回しにして、アンヌは切り出した。

それは、建前と呼ばれる、この現状では一種の助け船と言えた。

「……そう。じゃあ、必要なことを言うけど。休憩の時間を過ぎているんだけど。自分の船に戻って腐っている暇があるなら戦つてよ。私達は、この状況で一人でサボるズルい奴を連れ出しに来ただけ。ね、マリー？」

アンヌに言われて、マリーも苦笑いして首肯。彼女が今度は驚愕していた。

「悪いけど、一緒に来てくれないかしら？ 過去の因縁はあるけど、今は周囲は敵しかないのよ。前の事は水に流して、今は共闘して」

……二人は、立場を変えた。

彼女……アメリアスが、母艦でサボっているのを強引に連れ出すために来たと、目的を変更したのだ。

茶番劇にも程があるが、それは要は今はその話題には触れないで、必要なことだけしよという妥協だった。

その意図を、アメリカスは理解した。こちらも、その仕様に変更する。

「……それは、大変失礼いたしました。わざわざご足労して頂いたのに、とんだご無礼を」

知らない。アメリカスは、この二人のことなど知らない。

赤の他人が来ただけだ。こつちが悪いのだから、謝罪してすぐに向かわないといけな
い。

……無事で良かった。今さら、そう思った。

二人の目的はもう達成した。呼びに来て、彼女を連れ出した。

「すぐに向かいます。先にいってください」

「一応待つてるよ。外でね」

「ちゃんと来てね？」

名を、呼ばない。最低限の会話だけで成り立たせる。

他人行儀を維持しないと、余計な感傷が邪魔をする。

知っていても、今は他人として接すると決めたのだ。

アメリカスは感情を封じる。よく似た知らない人に過ぎない。

あれは、親友じゃない。問題ない。

支度を整えて、仮面を被った。鉄の仮面。心を隠す鎧。

これさえあれば、今はアメリカスとして振る舞える。

アリアに、戻らないで済む。邪悪な魔女を、装えるのだから。

「……お待たせしました」

ホワイトアークから出てきた彼女は、仮面を被り、過去を隠して二人と接する。

二人は速くしてとわざとらしい悪態をついた。

……顔は、どこか分かられてしまったような。

そんな、微妙な顔であったが。

兎に角。今は、戦おう。

そうしないと、守れるものも守れない。

幾分、冷静さを取り戻したアメリカスは、先に走り出す二人の後を追った……。

戦場では。

敵の全軍エースが一ヶ所に集まるという過酷な状況に迫られていた。

更には減らした数も戦線復帰のせいでまた集まってくる。

連合のガンダムが二機、プライズのカスタムが三機、挙げ句には連邦の可変まで集まってくる始末。

それもこれも、雑魚を虐殺しまくったガンダムのような黒いジムがいると知れてしまったからだった。

防戦で手一杯の彼らが知るよしもない。

「……流石に、不味い」

ある男は、流れを感じていた。

防衛の戦力を連中がかなり削ってくれた。

しかも三名ほど狩りと称して遊んでいるようにも見える。

死期が近いか、と脳裏を過る。

連邦はクシャトリヤの挑んで足止めをしている。

加勢したいが、狙撃をしてくるガンダムがいて、進めない。

奴等は即興のチームと云えど、互いの特性をよくわかっていた。

足並みが揃わないこちらとは大違いだ。

焦りすぎているのか、こちらの軍人二名ほど、少し前に出すぎている。

「おい、そののマラサイ。前に出過ぎだ、叩かれるぞ」

警告をしておく。我に返ったの、慌てて引っ込んだ。

その横を白い機体が助けに入る。

あとは……ガンダムがこちらにもいるが、子供が乗っているようだ。

少女と思われる機体は殺気が薄い。仕留め損ねて何度か危ない橋を渡っている。

こちらの可変も、フォローしているが限界もあるう。

先ほど、フィールド持ちとランチャー持ちが抜けた穴は大きい。

最強の助っ人と言っていたが……それは如何程か。

果たして、本当にこの不利を覆せる程の存在なのか。

疑問符が残るが、今は戦おう。こんな場所で死ぬ気はない。

男は再び、音もなく彼らのなかに紛れていく。

(……………これは)

アメリカスは現状を見て不利を察した。

見たことのある機体がいくつかあるが、今はどうでもいい。

それぞれに、敵のエースがくつついて連携を崩している。

こっちはバラバラ。向こうは統率が取れている。

この瓦解した状況では、多分全滅もあり得る。

『みんな、お待たせ！ 連れてきたよ!!』

『待たせたぶんは、私たちも戦うから!』

参戦する双子の機体。あれは見て驚いた。

シユイヴァン。いた頃には完成してなかったのに。

二人は、アメリカスの設計したマシンを完全に乗りこなしている。

建て直すべく、突撃していった。

こっちも、自分の知り合いに復帰を知らせた。一同、どこか安堵していた。

それほどに、今自分の肩には責任がのし掛かっている。

(シユイヴァンなら、いける)

あれは二人のために、専用の設計を施した。

だから、今は自分がどう、動くか。

一応サウンドオンリーとはいえ、通信は繋がった。

向こうの様子は、聞こえる。

アメリカスもバンシィで援護を始めた。

雑魚を蹴散らし、少しでも応戦していく。

が……。

エースらしき機影に発見されるや途端に、彼女に攻撃が集中する。

四方八方、ビームと実弾が襲ってくる。

全部何とか回避していくが、量産型まで群がってきた。

皆の方は手薄になるのはいいが、捌ききれない。

『見つけたぞ、黒いジム擬きが！』

カスタムした機体の一機に接近を許した。

リーオーのカスタムタイプ。アーマーとパワーが高いようだ。

叫び声が聞こえた気がする。真正面に突っ込んできた。

対応が遅れる。諸にショルダータックルを受けて、仰け反った。

直撃してしまった。防御できずに食らってしまう。

「きやあつ……!!?」

かなり強い衝撃に悲鳴をあげる。

しかも、両方の腕を組み着かれた。

至近距離で胸部バルカンを受ける。

負けじと頭部バルカンを連射して応戦する。

互いの堅牢な装甲にはダメージはないが、動きが取れない。

『あいつ……その子に触るな変態がッ!!』

激昂したアンヌの怒声が聞こえる。

狂ったようにビームガンを連射するが、他の機体に阻害される。

『黙れ裏切り者！ 貴様らのような女が我らに何を言うー!』

若い男の声。見れば、マントついた変な機体がアンヌと撃ち合っている。

『プライズに言われる筋合いはないわ!! 何が狩りよ、金持ちの道楽と一緒にしないで

!』

『よく吼えますねえ……。守るしか脳のない小娘が生意気に!!』

マリーは青いランスを持って、いる機体に接近されて、迎撃している。

『ぬう……!!? 無駄に固いな貴様!!』

接触通信で相手の顔が画面に映る。

画面がノイズが荒い。よく見えないが。

ボヤけたあの輪郭は、どこかで見覚えが……。

「!？」

アメリカスは絶句する。この男、以前見たことがあった。

いや、不味い。本格的にまずいことになった。プライズというのは、こんな男まで仲間にいる。

危険すぎる。皆が危機が、益々悪化していく。思わず声に出していた。

「アルゴ・ガルスキー!?!」　　なんで、OZにガンダムファイターが!?!」

『誰だそれは!?!　そんな名前、聞いたことが……!!』

無理矢理推力をあげて押し返して、隙を見て蹴り飛ばす。

離れていたのを、素早く離脱。慌てる。流星にアメリカスでも焦った。

(た、確かにそう……。画像は荒かったですがあの顔、間違いない……。ガンダムファイター!)

冗談ではない。あんな生身でMSを破壊するような連中の一味までいるとは聞いてない。

誇張抜きで生身の方が強いのだ。宇宙で良かった。陸上だったらこの時点でアメリカスは死んでいた。

(どうしよう……。!?!　ガンダムファイターとか冗談抜きで圧倒的に不利。だから接近を意識したカスタムをしている。今度近寄られたら金色になって、機体を砕かれる……。!)

知っている。気合いと根性でなぜか光って意味不明な理屈で強くなる。それがガンダムファイターという人種。

対策を考える。高速化した思考は目まぐるしい流れで、戦いながら思案する。

袋叩きももう、どうでもいい。一番まずいのは確認した。あの野郎をどうにかしないと。

不意に。金色で、思い出す。

(……わたしは、仮にもNTの端くれ。そして、この機体はユニコーン。……だったら、一か八か!!)

向こうが金ぴかになるなら、此方だって金ぴかになればいい。

その為のシステムは、確か積んでる。

サイコミュを通じて、機体に脳波をありったけ流し込む。

(お願いですから、土壇場で沈黙とかしないで下さいね……ユニコーン!!)

外部に感知したNTでリミットが外れるのを、内部から無理矢理介入して、強引に解除する。

機体が何やら不調を訴えるが無視。良いから動けと更に続ける。

「いいから……わたしの言うことを聞きなさい、ユニコーンッ!!」

あの子は自分でも自在出来る。けど、アメリカスには出来ない。

ならば、今ここで出来るようにするだけだ。

思い切りマシンに怒鳴る。出来るじゃない、やるのだ！

「わたしに応えなさい、ガンダムツ！！

彼女の想いが、溢れ出す。

突然、バンシイの機体から光が漏れだした。

それは、先程の光とは違う、赤ではなかった。

宇宙のように、見るものを落ち着かせる、鮮やかなブルー。

スライドする装甲。露出するサイコフレーム。拡張されていく身体。

『姿を見せるか、角割れ！』

敵が叫ぶ、その先で。

ジムは異なる姿に進化する。

青い光を全身に走らせる黒いガンダム。

変身を一瞬で遂げたそのマシンが、ガンダムが、再び戦場に……降臨するのだった。

N T | D

この、感覚は。

(分かる……分かります。このにおいは……ミチアのサイコフレーム！)

機体が自分と一体化する。コックピットが変形して、がらりと変わった。

操縦に必要なものなどない。これは、自分の身体。自分を動かすのは、自分の感覚。

ユニコーン……いや、ガンダムは今、彼女となった。

アメリカスは気がついた。この身体に染み付いていた懐かしいにおい。

これは嘗て、ミチアの機体に使っていたサイコフレーム。

彼の感情、心の残り香が微かに残っている。

でも。

(これは……葛藤？ 迷い？ わたしに対する……心配？)

感じとる感情の大半はアメリカスに対する感情であった。

残っていたこの気持ちは……きつと、心から漏れだした彼の知らない機微なのだろう。

(……わたしは)

こんなに、愚かな行為をしているのに。

皆は、心配してくれている。

やっぱり、思い込みだったのだ。全部、彼女の思い違い。

たった一つのすれ違いが、致命傷に至っている。改めて感じた。

そして、決して帰るわけにはいかない。今さら、合わせる顔もない。

きつと、近くにいる。サイコフレームは教えてくれる。

ここには、たくさんの知り合いがいた。

アンヌ、マリー、遠くでは単身戦っているミチア、それに向こうでは……一番危険な

矢面に立っているフローレンス。

ユーリに聖、ツバサにクロスハート。沢山沢山、知っている人が戦っていた。

それに。

(……これは)

彼女は気付いた。懐かしい感覚を。

いつか、コロニーで出会ったあの少女か？

それに、この優しさと強さを感じる流れは、フリット少年？
なんで、こんな場所に？

今は、気にしない。思った以上に、顔を知る人たちがいただけ。
何より、それを奪おうとする存在を、アメリカスは許さない。

『また変わったか……！　だが、色が変わったところで!!』

聞こえる。見える。サイコフレームはこれ以上ないほど、敵をハッキリと示す。
敵意を。殺気を。威圧を。教えてくれる。

背後、七時の方向。さっきのガンダムファイター。

振り向く必要もない。突撃してくるのは、目で見るよりも确实。

危ない、と誰かがいった。棒立ちしている彼女。

(……迷うことなんてないんです。わたしは、わたし。裏切りの魔女。周囲から理解な
どされない。されなくてもいい)

どうせ愚かな選択肢を繰り返した特大の馬鹿者だ。

氣遣いを受けても、彼らに対して尽くすしか出来ない。

裏切るだろう。見損なわれるだろう。ならば、何度でも尽くそう。

我が身は周囲の為に。我が心は人間のために。我が力は……。

(仲間、なんて鳥澁がましくて言えないでしょう。ですから、せめて。主の為と、思った

い)

尽くすしか、償いの方法はないだろう。死のうとしていた先程の自分を殴りたい。最後に死ぬのは確定だ。然し、死ぬ前に精一杯の懺悔と贖罪をせねばなるまい。アメリカスは戦うことしか出来ない子供。戦う以外にきつと、役には立てない。だから。戦えるときは、どんな扱いを受けてでも戦おう。

化け物でいい。事実だ。魔女でいい。真実だ。

自分のあり方は変えられない。きつと、変えられない。

出来ることを、この命続くまでやっていく。

(心を尽くして、言葉を尽くして。何れは、わたしそのもので尽くしましょう)

アメリカス——いいや、アリアの根本は人に尽くす人形である。

人を模しただけの道具ならば、壊れるまで働こうと思う。

今、求められるのは……現状の打破。敵の排除。

彼女が戦い、敵を葬る。そして、皆を守るのだ。

(……ユニコーン。ノーフェの感情を表現するなら、わたしの想いも表して下さい)

ガンダムに、その力があるなら。ガンダムが、それを許してくれるなら。

アメリカスは、何度でも戦う。戦って倒して、購おう。

この存在が許されないからこそ、求められれば努力しよう。

(行きますよ、ユニコーン。わたしたちは、乙女を守る獣となりましょう!!)

聖なる獣にはなれなくても。誰かを庇える、獣になりたい。

そう、アメリカスは誓い、もう一度抵抗を再開した。

青い光を放つ漆黒のガンダム。

一人が果敢に背後から飛びかかっていく。

更には続くように、全方位から量産型を含めて一ヶ所に突撃していく。

銃撃をぶちこみ、動きを牽制しながらサーベルで串刺しにしようとする。

棒立ちしていた機体は、明らかに後手に反応していた。

「危ないッ!!」

誰かが叫ぶ。叫ぶと同時に、目を疑った。

——彼女は、どこに消えた？

「!？」

おかしい。モニターから、ガンダムが消えている。

突っ込んでいった筈の場所には、黒い宇宙が広がるだけ。

いない。もう、その場所には彼女はいない。

「消えた……!?!」

アンヌは見る。何度も探す。モニターから、彼女が……アリアが消えていた。キザなマント野郎を相手しながら、懸命に探す。

何処に行つたのだ？ レーダーも見ると……いた。

一番最初、彼女に襲いかかった男の背後に回っていた。

『なっ……!?!』

急停止するMS。

然し、既にビームマグナムを構えていたガンダムは冷酷にオープンチャンネルで告げた。

「出なさい。さもないと、殺します」

機体から降りろ、とだけ告げて、本当に遠慮なく撃とうとしていた。

増大するエネルギー。死ぬと直感した男は慌てて、機体から脱出した。

直後、強大なエネルギーをもった極太のビームが機体を貫いた。

融解するマシンは、大爆発。

綺麗な花火をあげて、背後にいたであろう量産型を巻き込んで複数撃墜した。

「次」

小声で呟くと、今度は停止して、何処かを見つめていた。

当然、遠慮なく周囲からは雑魚が群がるが。

マグナムをバックパックに戻して右手のフィンを展開、チャージ。

軽い動作で、周囲を風ぎ払う。歪曲するビームが、複雑な軌道を描いて機体を抉り、爆

殺。

背後も、振り返りそのまま同じ動作で撃破した。

微動だにせず、倒しきる。

「デブリの巣穴に隠れて、見つめるだけ？ でも、顔を出しすぎていますね」

何かに向かって語りかけて、マグナムを再び構える。

……誰を狙っている？ 周囲の味方のリーダーにはなにも写らない。

なのに、彼女は検討違いの方向に、マグナムを撃った。

二回ほど、連続して。そっちはデブリーや小惑星の漂う区域。なにもいない、と思った

のだが。

……遠くで、小さな爆発の光が見えた。

『バカな……!? この距離を肉眼で発見したのか!?』

敵の接触通信で、愕然とする声が聞こえた。

その方角で戦う味方より通信。

なんか、随分と遠距離からビームが飛来して、デブリに隠れていたスナイパーをデブリごと落としてしまった。

ガンダムが一機撃墜されたが何事だ、というものだった。

「嘘……。私には全然見えないのに、アリアちゃん……狙撃したの!?!」

マリーも目を丸くした。

狙撃も出来るシユイヴァンを差し置いて、あのガンダムと彼女は、正確に特定して、正確に貫いた。

圧倒的な距離を、完全なアウトレンジをあの手で、撃ち落とす。

「次」

黒と青のガンダムは移動を始めた。

その行く手を、マントとランスを持つプライズ二人が阻んだ。

『おのれ、角割れ!! 舐めた真似を!!』

マントつきが激昂してサーベルで切りかかる。

ガンダムは左手の爪を展開した。

それで先程のように引き裂くのかと思いきや。

そこから同じくサーベルを発生させて、受け止める。

スパークして激しくぶつかり合う。

「邪魔です」

空いている右手で、相手の機体を殴り飛ばした。

青い煌めきが一段と輝く。

MSでの殴打。通常なら、せいぜい装甲が凹むか破壊される程度だが。

ガンダムが殴ると、なんと機体そのものに拳が貫通した。

殴られたライフルを持つ腕が、そのまま無理矢理破壊されたように貫かれた。

『なにっ!?!』

腕のパーツがフレームごと崩壊する。

慌てて逃げようとする。だが。

「逃がしません」

サーベルをしまいこみ、爪を豪快に振り上げ、追撃。

コックピットを器用に避けて、上から四肢を刻むように、降り下ろす。

四つの凶悪な爪は、相手の装甲をバターののように易々と切り裂いて、バラバラにした。

『ぐあああ!!』

悲鳴が聞こえた。一応生きていた。

彼女は今、エースを殺さなければ周囲の有象無象がきつと回収して、持ち帰ると踏ん

でいた。

殺すのは簡単だが、今は時間稼ぎをしたい。兎に角、周囲に余裕を作らないと建て直しにもならない。

最後にジャンクになったそれを、もう一度細かく破碎する。

威嚇にしたつもりだ。速く失せろと。

気にせず背を向けて、次に移動する。

駆け寄るように、パイロットを無視できない連中が護衛と回収に入る。

次だ。ランス持ちは、マリーと合流したアヌが圧倒しているので、任せることにした。

『いい加減にしろ、忌々しいガンダムがアツ!!』

で、この一段とこっちに憎悪と怒りを向けるこの連邦の可変MSは何なんだ。

クシャトリヤ相手に奮戦はしていたようだが、既に半壊していた。

近寄ればこちらに切り替えて、ライフルを撃ちまくるし。

『ガンダム……なんだ、この苛立ちは!』

「止めてくださいクシャトリヤの人。わたしがあなたに何をしたんですか」

苛立つのか、理不尽にキレル女性にアメリカスはぼやく。

乱射を軽い動作で避けて合流。

互いにピリピリした二名の加勢に入るが、なんと言うか……やりにくい。クシャトリヤのほうの援軍に来たと言うが、

『うるさい！ 私の邪魔をするなガンダム!!』

躍起になって、無視して戦おうとする。

が、向こうの可変はアメリカスを狙ってくる。

……面倒なことになった。

ため息をついて、どうするかと思う。

『お前さえ……ユニコーンさえ居なければ！ お前もそうだ、黒いユニコーン!!』

「八つ当たりですか、鬱陶しい」

次に行こうとすると、追撃してきてうるさい。

うんざりしてきたアメリカス。で、クシャトリヤのほうもなんかうるさい。

邪魔しないって言っているのに、相手がこつちを狙ってくる。

「……クシャトリヤの人。ちよつとご相談が」

仕方無い。鬱陶しいのでさっさと倒そう。

向こうに釘付けになってもらうべく、切りかかるそれを軽くないなして彼女に話しかける。
る。

『黙れ！ 私に気安く話しかけるな!!』

なんか、不安定になつてきている気がするこの人。

凄い勢いで殺気をこっちに向けていた。

一応味方だろうに、とアメリカスと思う。向こうから裏切りそうだ。

「はいはい。じゃあ、決定事項にしますね。あなたが聞かないから、いけないんですよ。」

『何だと……!?!』

彼女が怒つて聞かないので、無理矢理やる。

こつちごと、彼女はファンネルの餌食にしようときつきから周囲を飛び回っているのだが。

ちよつと気がついた。今の彼女なら、クシャトリヤのパイロットよりも多分強い感応波が出ていると思う。

要は、サイコフレームの使用量がユニコーンのほうが上なのだ。

元々外部に脳波をどうこうできるシステムがあるなら。

応用とかできる気がした。試しにやってみる。

「いくつか、ファンネルをお借りしますね」

『!?!』

意味不明な事をいいたしたように、女性は絶句していた。

前代未聞だ。無線攻撃端末であるファンネルを借り受けるなど。サイコミュで操作しているものを、どうやって……。

「ちよつと、操作を切り離してください。あとでお返ししますから」

『……お前は、なにをいつているんだ?』

「良いから。邪魔しないでほしいんでしよう? お借りして、このうるさいカトンボを叩き落としたら戻ります」

背後で執拗にサーベルで接近してくる可変を回避、蹴り飛ばし応戦。

それだけで腕が変形して、もげた。

何やら憎悪が加熱しているようで、更にぶちギレていた。

クシャトリヤのパイロットは、何度も言ってくるので渋々、四つほど切り離して放置した。

途端に動かなくなるファンネル。

「ヤッ……」

完全に感性操作になっているユニコーン。

あの放置されて動かないファンネルは、まだ外部を受け付けるだろう。

つまりは、サイコミュの塊であるサイコフレームならば、無理矢理動かすぐらいは出来るだろうと思うのだ。

まだ切りかかって食い下がる可変を今度は手刀で切り払う。
余った腕までやり過ぎて切断してしまう。

なんでこのガンダムはこんなに頑丈なんだろうか。アメリカスには分からない。

『クソツ!! お前も……俺を笑うのか!?!』

聞こえてくる声は、なんの話をしているのか見えない。

然し、憎んでくるのなら倒すだけであつた。

「鬱陶しい。速く沈んで」

集中する。四つのファンネルを意識に接続。

モニターにFの文字が浮かぶ。ファンネルと接続がうまくいった。

機体にはこういうやり方も想定しているようだ。

動き出すファンネル。本来、持たないはずの機体がファンネルを扱うのに啞然とする貸し出し主の彼女。

円滑に滑り、踊り、移動するのを追いかける半壊を通り越して死にかけの機体を、更に殺す。

左右上下、取り敢えず死なない程度にビームを発射。

適当でいいや、とアメリカスは雑に扱っていた。

『何だと……?!?! 四枚羽根のファンネルを何であいつが!?!』

やっぱり想定外らしい扱いのようだ。頭とスラスト、あとは足もついでに破壊しておく。

出力は低めに。爆発しないよう、ジェネレータは避けておいた。

「気が済みましたか？ 先を急ぐので、ナンパなら他所でやってください」

わざわざ一度近づいて、聞こえるように手をつけて中の人に言った。

『こ、子供!? コイツ……ふざけるな!! 俺に情けをかけたって言うのか!?!』

まだ吠えるのか喧しい。ファンネルを丁寧にクシャトリヤにお返ししつつ、彼女は呆れる。

「情けとは違いますよ。単なる時短です。あとは、その人に任せます。わたしについて来ないでください。ロリコンですか、軍人の癖に……最悪ですね」

『誰がロリコンだ!! 謂れのない誹謗は止める!』

違うわりには、やってることはロリコンと大差ない。

アメリカスは付き合ってもらえないと、クシャトリヤに礼を言って飛び去る。

『待て、訂正しろお前!! これ他の奴にも聞こえて……おい!! 待てって言うてるだろうがッ!!』

喚く彼を無視して、去っていくガンダム。

別の意味で恨みが増加した。とうとう謂れのない変態扱いと来た。

本当に、彼の人生にはろくなことがない。

歯軋りをさせる彼にクシャトリヤのパイロットも、軽蔑したように睨んで去っていく。

その場には、達磨にされてキレる若い男性が一人、宇宙にガンダムの恨みを叫ぶのであつた……。

戦いの終わりへ

……あの光は。

宇宙を照らしている、あの輝きは。

嘗ての死期に見えた、あの光か!?

(まさか、これは……アクシズ・ショック!?)

いや、違う。

例の殺戮をしていたマシンが放っている、青い光。

先程は鮮血の赤だったと聞いたが、今は……静寂の青。

(おお……あの光は……!)

パイロットは幼い少女と聞いていた。

男は、興奮を隠せない。見つけた。終生の好敵手をも越える、自分を満たす光を。

(あれだ……。嘗て奇跡を起こしたと言うガンダムの光!! 俺が求めていた光が、目の

前にツ!!)

人を信じた光ではないだろう。あれは、危険な輝きだった。

なのに、どうしてこんなにも惹かれる。どうしてこんなにも胸が踊る。

嗚呼、とうとう見つけてしまった。出会えてしまった。

男は直感した。当事者として、死を越えて尚覚える記憶が囁いた。

彼女は、お前の願いを満たしてくれる。

(ガンダム……！ おお、サイコミュの導きが見えるぞ!! お前だ、お前だぞ!! 俺はお

前を待ちわびた!! この瞬間を、輪廻を越えて待っていたのだ、名も知らぬ少女!! お

前こそ、我が好敵手を越える俺の敵!!)

あの煌めきだ。あの輝きだ。

彼はずっと、あの青を求めていたのだ!!

逃がさない。彼は彼女を追いかけることにした。

とうとう出会えた最高の相手。求めていた答えが今、あの場所にいる。

(逃がさん……お前は俺を殺す相手だ!! 共に命を削りあおう!! 俺と戦え、ガンダムツ!!)

凄まじい執念を見せる。当然、全身サイコフレームの塊である彼女が気付かない訳がない。

(……ひいつ!?)

凄まじい悪寒を感じたアメリアス。

身の危険と言えばいいか、また誘拐されそうな気配を変な機体から感じ取った。

気配を辿る。識別は、味方……味方？

なんか怖いのに。やらしい感情に似た何かを、あのギラ・ドーガが放っていた。

ガタガタ彼女は震え出す。思い出される先日の恐怖。

いる。戦場に自分の幼い身を付け狙う変態が……背後に。ジオンに。

怖い。でも、味方。一応、味方。我慢。我慢しなきゃいけない。

(怖い……変態怖い……)

なんでロリコンがまだいる。

さつきは敵だったから倒せた。でも今度は味方だった。

どうしよう。変態がいる。誰か助けて。

気にしない、気にしないで今は戦おうと、幼い彼女は再び変態の影に怯えて次に向かう。

一番離れた場所に、向かっている途中。

『アリアさん、お久しぶりです』

『ど、どうも……』

後を追ってきていた二名が通信を入れる。フリットとユリンの二人だった。彼女が敵を倒して余裕ができたので、応急処置して追いかけてきたと言う。

懐かしい顔触れ。通信に応じる仮面のパイロットにも、二人は怯まない。

その奥にある本質を感じ取っていたから。顔を隠した程度じゃ、欺けない。

「……ああ、フリットさんお久しぶりです。ユリンさんも、お元気そうで何よりです」
一度仮面を外して、喋る。

二人は今回の一連の流れを知っているようで、どこかぎこちない様子で聞いてきた。

二人は、無関係の人間。巻き込むわけにもいかない。

いわく、木星の時に暴走していた彼女が、道具にされていたユリンを救ったのだと説明される。

全然覚えてない。やっぱり、あの戦いの記憶は自分から抜け落ちていると改めて自覚した。

『……結果的に、色々あるようですが、これだけは言わせてください。ユリンを助けてくれて、本当にありがとうございました』

『わたしからも……助けて貰ってありがとうございました！』

二人は頭を下げて礼を言った。正直、覚えていないのでなんとも言えない。

でも、下手すれば死んでいたかもしれない命が救えていたなら、それでいい。

「いいえ。お見苦しい醜態を晒していたわたしですけど、お二人のお役に立てたら、幸いです。どうか、お幸せに」

サイコミュが教えてくれた。二人はどうやら、互いに惹かれている。

軽く微笑み祝福すると、頬を真っ赤にしたユリンが自爆してなんか言い訳を始める。

照れ臭そうにフリットは頭をかいていた。微笑ましい光景を見て、心が安らぐ。

フリットは聞いた。失礼を承知で。戻る気はないかと。

「ごめんなさい。事情があるので、差し控えて貰います」

やんわりと、何も言えないと断った。

申し訳ないが、ノーフェの復讐やアメリカスの懺悔に彼女たちを巻き添えに出来ない。
い。

折角拾った命なのだ。どうか、幸せに……平穩に過ごしてほしい。

先の虐殺も、何かしらあると分かってくれたんだろう。

二人は、沈黙して了解してくれた。言葉が無くても通じるのは有りがたかった。

二人は目的を果たしたと言って、戻っていく。わざわざ礼を言うためにこちらに来たと聞く。

律儀だと思うが、そのまま見送った。

アメリカスはその後も進んでいく。雑魚はいるが、適当に殺して前に出る。

周囲は沈静化している。物量で攻めてきたのに、今は敵の影が少ない。

衛星に通信。何事か聞くと、連邦の部隊が全滅したらしい。

他の連合もOZも、撤退を開始していると。

斧もったザクが戦艦を何隻か破壊して、現在戻って補給と休憩をしていると言う。

(……フローレンスは人間ですか?)

ザクで、連邦の戦艦を……落とした? 全滅?

何で? と疑問符が浮かんだ。あんな悪のりと勢いだけのじゃじゃ馬で出来るのか。

無事だったのは安堵した。が、多分アメリカスでも困難な任務を帰ってきたらしいあ

の女王様。

流石に正気を疑った。で、彼女に通信が変わる。

『ほう、ユニコーンですか……。然し、武装が違いますわね。ま、雑魚を一手に引き受けて根絶やしにしてくれたおかげで、手薄になったので楽が出来ましたわ。ご苦労様、ア

メリアス』

汗をかいているが、顔色は良さそうだ。

フローレンスが言うには、派手にノーフェが暴れたのでそつちに敵が集中して、護衛の少なくなつた母艦を叩き落とせたと。

予備戦力まで投入していたらしく、それすらノーフェが殺し尽くした。

戦場にやり過ぎはないと、誰かが言つたが……彼女は本当に沢山殺していたようだ。更には、エースまで撃墜していたおかげで、敵は撤退を始めていると言われた。

数の暴力を一騎当千で撃退し、笑つて帰つてきた化け物。甚大な被害を被つた彼らは逃げていった。

余程、このガンダムが恐ろしいと見える。絶望を与えた悪魔は、衛星に恐怖と安寧をもたらしただ。

『撃墜スコアはぶつちぎりであなたが一番ですわ。今回は、礼を言わせてください、メリアス。……寝ているノーフェにも。ありがとう』

久々に柔くフローレンスは笑つた。

そう言えば、礼を言われるのはいつぶりか。

なぜか、妙に嬉しく感じた。守りきれた。そう、安心できたからか。

敵は消えていく。獲物を求めて徘徊する彼女から逃げていく。

……防衛戦も無事に終了。彼女は、哨戒を兼ねて少し見回りをして、衛星に帰還した。何とか、守れた。そう、ホッと胸を撫で下ろして。

衛星に無事に戻ってきた。

絶望的な戦いは、彼女の周囲は全員が無事に帰ってきていた。

ユーリも、聖も、フローレンスも、クロスハートも、ツバサも。

衛星のクルーに聞いた。ジエネレーションの人間も無事に戻ってきたと。

彼らは、直ぐに自分達の世界に帰っていった。もう、ここにはいない。

(そう……。結局、ミチアには逢えませんでした。機体と思いは、確かに継ぎました。だから、今回は……)

彼女は知らない。誘拐した変態が彼であると。知ったら失望間違いなし。

なので、皆さん誰も言いません。これ以上変態の気配を与えては良くないので。

ジオンは、そのまま出港していったと聞く。連中も、居なくなつた。

ブリッジに集まつた。疲労困憊の彼らは、どこか安心して気が緩んでいる。

「……なんとか、全員無事に生き残れました。ジェネレーションの連中やこの防衛をした全ての人々の活躍により、わたくしたちは、生き残ることが出来ましたわ。ありがとう、そして……ご苦労様」

フロールレンスがお疲れ様、と全員に言った。みな、疲れながらも達成感に満たされていた。

このあと、祝賀会というか労い衛屋から受けるらしい。整備と補充もお礼として万全にしてくれると。

彼らは防衛をした英雄として、招かれている。ただ、一名の例外を除いて。

「……」

アメリカスは、拒否されていた。彼女は頷いて、留守番をしていると自分から言い出した。

彼女は明らかに殺しすぎた。たとえ、一番の功労者だとしても。

彼女は、背中にいる人間にまで恐怖を与えてしまった。この緊張から解放された空気を再び凍らせる。

だから、彼女は出向かない。ここで、待っている。孤独に、独りで。

誰にも祝われず、誰にも感謝されず、ただただ恐れを抱かれたまま。

「……仕方ない。こればかりはな」

「アメリカス、ノーフェ。お前らは本当に頑張った。俺達が代わりにいいなら、労おう」
クロスハートとツバサが代わりに労ってくれた。

「……そうだね。やり方はどうであれ、ノーフェは僕らを守ってくれたんだ。悪かったよ、途中で退席してしまっ」

ユーリが、彼女に謝罪をした。彼女は当たり前前の反応をしただけ。

だから、悪くないとアメリカスは返答した。

「ありがとう」

聖はシンプルに、だがこれ以上ないほど感謝してくれた。

簡素故に、思いはよくわかった。

別に、感謝なんてしなくても構わない。

アメリカスも納得はしている。

普通の人間には、英雄や戦争ではノーフェは正当化できない。

どう頑張っても、人殺しの枠を越えられない。虐殺を楽しんでいた悪魔は彼女であるのも事実。

獣には、また鎖が必要になる。アメリカスがそうだった以上、留守番は当然の処遇。

待ってればいい。格納庫のなかは、好きに歩いていいとフロレンスが妥協してもらった。

なので、お土産話でも期待して待つていよう。

休憩をとってから、彼らはまた向かい出す。アメリカスは案内される彼らの背中を黙って見送っていた。

なのだが、やはり暇なのはどうしようもない。

時間を潰すべく、格納庫の端で、ジャンク回収で連れてこられた生きているパイロットでも苛めて待つている。

使えそうなパーツを衛星の人間が回収して、救難信号を出している敵を捕虜として、縛って今は格納庫で尋問をしてから、現在放置を受けているようだ。

人気のない格納庫の片隅。壁に手錠で繋がれ、監視カメラと警備のロボットに囲まれる数名のパイロット。

そのなかに、奴はいた。

「クソッ……！ 連邦の兵士を捕まえていいと思ってるのか!？」

金髪の短い髪型。連邦のパイロットスーツの男。

一番喚いて、騒がしい。

「……さ、さっきのロリコン!？」

様子を見に行つたアメリカスは見つけた。

咄嗟に身構える。一際喧しいその男も、当然彼女を発見する。

「さっきのロリコン……? お前、黒いユニコーンのパイロットか!!」

途端に吠える変態の連邦の兵士がいた。

なんでここに、と思うが……捕らえられてるようだ。

「最低です、死んでください変態」

「事情も知らずに死ねと言うのかお前は!？」

軽蔑を浮かべて、罵るアメリカス。

男は怒鳴り返す。あの機体は何処で手に入れたとか、お前は何者だとか。

一番言いたいことは、

「よくも俺をロリコン扱いしてくれたな!! おかげで居心地が最悪だ!!」

周囲の捕虜も屑を見る目で彼を睨んでいた。

なんか、あの会話は他の陣営にも流れていたらしく。

しかもこのロリコン、名家のご子息だったとか。

名を、リディ。リディ・マーセナス。連邦の中では有名な家柄の息子。

「益々最低です。何考えてるんですかこのケダモノ」

「止めるオ!! 俺をそうやって呼ぶな! 誤解だ!! 俺はお前の乗る機体がユニコーンだったから……!」

「嘘です。絶対嘘です。わたしを狙っていたに違いありません」

聞かない。この手の変態の話など聞かない。

少尉と意外に出世しているくせに、幼女趣味なんて極めて悪質な変態だ。どうせこいつもNTか何かなんだろう。それで感じ取ったに違いない。

かの有名な赤いロリコンのように。

「ふざけるな! 俺は単なる人間だ! NTなんかと一緒にするな!」

随分とハッキリと怒りを表すリディと名乗る変態。

こいつが何者であろうがどうでもいい。

一つ言えることは。

「くたばれ変態」

「黙れエツ!!」

アメリカスはこいつが気に入らない。

誘拐されたせいで警戒心が強くなった彼女は自分を追いかけてきていたしつこい連邦軍人にずっと暇潰しを兼ねて罵倒していた。

「変態」

「違うって言ってるだろ!!」

「後でここのみんなに言いふらしてやります」

「喋るなアツ!!」

奇妙な関係だが、こんな感じの出会いが、またもや彼らの運命を変えていく……。

望みを叶えるために

……それは、衛星の仕事を終えたジェネレーションの母艦にて。

帰ってきたマスターユニットが、何やら新人を採用したらしい。

ジオンの所属だったが、彼は強制的に連れてこられた。

時を同じくして、三人も久々に仲間と顔を合わせた。

そして、彼女と……アリアと出会ったことを皆に説明した。

気がつかない間にマスターユニットの知らぬところで勝手に勝手に情報を共有してるのが気に入らないが、それ以上にこの新人が喧しいのでそっちの相手に時間を奪われる。

今日も今日で喧嘩を始めていた。

三人が彼女に聞いても認知していないで話を聞かないでいるので、今は放置。

それよりも、事態は多少改善していた。

ミチアいわく、彼女の人格は二重化しており、凶暴化している方と大人しい方の二つに分かれています。

凶暴化した方は最早トチ狂っている状態で、化け物じみた戦闘能力を有する。

ノーフェと名乗った方はこの人格。もう一つはアメリカスと名乗り、生きている。

で、双子の方は。多分、それを知っていると知らずに彼女はノーフェの人格を押さええている。

故に、戻ってくる事をどうやら望んでいないと思われる。

彼女なりに、あとあるとすれば鉄則を殉じようとしている節がある。

つまりは、下手すれば死ぬ覚悟すらしているかもしれない。真面目な性格が分離しているならあり得る。

「面倒なことになった……」

スズキは、その話を聞いて頭を抱える。

話を通じる相手と通じない相手に分かれて、片方に触れれば恐らくは即死すると思われる。

一歩間違えれば、地雷踏んで爆死するだろう。難易度は高まっていた。

「なんとという健気さ。なんとという生真面目さ。経営主の言いつけを、己すら遵守すると

は……。彼女の覚悟を尊重したい所だが。然し、だからこそ私はそのような結末は認めない」

ガルマは余計に連れて帰ると腹をくくっていた。

筋を通すのは正直言えば尊敬に値する。命の事なら尚更だ。

だが、理不尽を領く必要などない。そんな道理は世界には通じないことを、彼女に教えるべきなのだ。

ミチアは言うまでもなく今までと同じ。双子も然り。

が……。

「ミチア？　ねえ、アリアに何てことしてるの？　じゃああの誘拐事件、事を起こしたのはミチアだったんだよね？」

「ちよつと許せないかな。無理矢理口を封じて連れ去った挙げ句に人気のない場所に連れ込むなんて……。アリアちゃんがどれだけ怖かったか、ミチアさんは分かってないわ」

詳細を話した際に、全部白状したら案の定双子がキレた。

二人して、怖い笑顔でミチアに迫ってくる。

「い、いや……。方法は悪かったのは自覚してるし！　向こうのおつかない姉ちゃんにも叩きのめされたし!!　お前らまでシバくのは勘弁してくれ!!　反省してる、してるから

!!

冷や汗流して青ざめるミチアは必死に弁明をするが、無論親友に通じるわけがない。二人に首根っこを捕まれ、一度退室。

「止めてくれ、死にたくねえー!」

無駄な抵抗をしても無駄だった。

自動ドアが閉まった。隣の部屋にでも連れ込まれたんだろう。

数秒後。

「——ぎゃああああああ!!」

という、ミチアの絶叫が聞こえてきた。

折檻の始まりらしい。取り敢えず残された野郎たちは、それぞれ対応と方針を勝手に分かれて話し合う。

ジオンの二名は方針を固めている。

ゆえに、今回の新人である同じジオンサイドの彼を少し様子見をする。

場所を移動。会議室で揉めている二人を発見し、コッソリとドアを手動で開けた。

相変わらずあの男は何をいつているんだろうか。

ビヤクヤと名乗った白い髪の青年は、何が不満なのかアリアに吠えていた。

「違う。……違う、違う違う違うッ!! お前は本当に分からないのかマスターユニット

!! なぜ分からない!? ここまで嘔み碎いて説明していると言うのに!!」

「ああ、もう!! 一体何なのよあんたは!? 何がしたいの!? 全然理解できないんだけど!」

ビヤクヤが求めるものが、どうやら彼女にはさっぱりなもののように。

熱く語る彼の言葉を、彼女は全くもって頭で処理できていない。

因みに二人もさっぱり分からない。

いわく、

「いいか!! 人間というのは、意思で……心で生きている。感情で生きているのだ。そこは分かるな?」

「……まあ」

熱弁するビヤクヤの語り部が今日も始まった。

二人も一応同じジオンとして聞いてみる。

「サイコミュはお前も知っている通り、人間の意思に反応する。そして、不可解な現象が多々発生しているのも、知っているな?」

「一応」

で。

「僅かなサイコミュでも、乗る人間の素質、所謂NTと呼ばれる存在には一段と強い反応

を示す」

「常識ね」

そこは割りと知られている一般的な認識である。

ここからが問題らしい。

「マスターユニット。お前の反応は見せてもらった。確かに並のNTを越える反応をお前が乗れば、サイコミュは示すだろう。サイコフリームならば余計にな」

「ふふんつ。当然でしょ。あたしはマスターユニットだからね」

得意気に胸を張るアリア。呆れる二名に、ピヤクヤは指を指して彼女に怒鳴った。

「だからに決まっているだろうがッ!! なぜだ!! なぜ、お前の反応はただ、強いだけなのだ!? どうして他人に対しての影響が全くない!? おかしいだろう!! お前のレベルなら、後の歴史に『奇跡』と呼ばれる事象さえも可能とするのだぞ!? なのに現実はこの様だ!! なにも起きない、何も変化しないではないか!!」

「そ、その何が悪いのよ!?!」

……ああ、なんとなく理解できた。

ガルマはコツソリとスズキに聞いた。

「スズキ、分かったか?」

「なんとか……」

要は、今のアリアには他者に対する影響力が全くないのだ。

得てして、歴史に名を刻んだ高名なNTたちは、何かしらで他人に影響を与えている。それが報われた試しなど一度もないだろうが、それでも確実に小さな何かを変えてきた。

なのに、それ以上の反応を見せるアリアは、全く周囲に変化をもたらしさない。

ずっと同じ。ずっと平坦。高いレベルを維持するだけで、意味がない。

それがビヤクヤの言いたいこと。

アリアは継続を自覚して変化を求めない。だから、分からない。

「もつと直球に言うなら、マスターユニット!! お前の『光』には、熱がないのだ!!」
ビヤクヤの言いぐさに更に怒るアリア。然し、分かりやすい例えがガルマとスズキに飛んできた。

熱がない。それは言い換えれば感情が、心がサイコミュに伝わってない。

ただ、機械的に動かしただけ。ただ、化学反応を起こして作動しているのみ。

数式のように、答えと式が繋がっている。

人間特有の、不可思議な現象が、アリアには起こらない。起こり得ない。

「一度見たから分かるぞ。お前の『光』は、蛍光灯と同じだ。スイッチを入れれば光る。それと同類か……いいや、それ以下だ」

「何ですってえ!？」

酷い侮辱を言われて激昂する。当然だ。彼女の事を否定する単語に等しい。

だが、彼は怯まない。まだ、彼女に対して辛辣に評価する。

「熱がない光が分からないか？ 光とは通常、必ず熱を発するだろう。なのにお前はそれが無い。それほど不気味なものがあるとは、俺も知らなかった。お前は逆に貴重だよ、マスターユニット。強いて言うならお前は肉のついたロボットと同じだろうな。有機物を纏えば無機物でもサイコミュに介入できる。逆転の発想をお前は証明してくれた。大したものだと褒めてやろう」

物凄い言葉が飛び出した。ここまで酷な評価を二人は聞いたことはない。

アリアは凄く悲しそうに、こっちに向かって走り出す。

ヤバイ、バレル。慌てて二人は適当に隠れた。

ドアを開いて、アリアは泣きべそをかきながら走っていった。

(なんだ、あれは。いじめか?)

(流石に言い過ぎ……)

要するにお前は人間じゃない、ただのロボットだと目の前で指摘している。

それは、誰だって傷つく。二人は、呆れて室内に入った。

「むっ……? ああ、親衛隊の青年と狙撃の少年か。どうした?」

彼は同じジオンには話は振ってくれる。

他の陣営には、何やら値踏みするような視線を向けているが。

あとは、いい加減名前を覚えてほしい。

「ビヤクヤとか言ったな。まったく、言葉に気を付けろ。事実だとしても眼前で言うな。仕事をしなくなるだろうが」

「マスターユニットをロボット扱いしても否定はしないのは、お前が大佐を知っているからか？」

こっちの苦情を無視していきなり核心についできた。

表情を厳しいモノにするガルマ。スズキも警戒している。

この狂気を感じる言動は、一体何を周囲に求めている？

熱心に、サイコミュに対しての熱弁するが、その本意が見えない。

あの態度、アリアに何かを期待していたが外れて八つ当たりをしているようにしか見え
ない。

この男は、誰に何をしてほしいのだろうか？

「貴様も大佐を知っているのか」

「……一応な。尊敬もしちゃいないし、従つてもいない。あの男は虚無が服を着て歩くだけの肉の器さ」

何と目的を射た評価であった。中身のないと、彼も知っているようだった。

仮にも同じ袖付きとして活動していたと聞いたが、しかしこの悪態。

スズキが聞いた。

「一体、何を探しているんだ……？」

「敵だよ。俺の、俺が求めるのは、俺の敵になってくれる人間」

あつさりとして、彼は語った。自分の欲求を満たす人間を探していると。

敷居が高く、彼が欲するスペックを満たさないと満足できない。

「俺は見たんだ。地球に落ちてくる隕石を、ただ一人の男がガンダムで押し返す光景を知っているんだ。人間の意思に勝る熱はないと。俺が求めているのは、純粹に強い人間だ。そう……強い『人間』を俺はほしいんだ」

(……コイツ、狂っている!?　なんだ、薄気味悪いこの鳥肌は!?)

(目が淀んでいる?　……違う!　綺麗すぎて逆に淀んでいるように見えているんだ!!)

狂氣的に彼は顎に手を当てて前歯を見せ、口を歪めて笑った。

何を見たのか、二人には知れない。

然し、言い切れる。コイツは既に破綻している。

純粹な何かを達成するべく、ジエネレーションに来ていろいろらしい。

だが、今のアリアはそれを満たさない。だから、次に餌を探していた。澄んだ感情は、それはそれは綺麗だろう。だが、透明度の高すぎる水は、川底を映し出す。

彼の中にある根本は、汚泥その物であった。

何かを拗らせて、淀ませて、重なった感情が、そのガンダムという存在に昇華された有り様がこれか。

二人には見える。ビヤクヤは危険な人物だと。

一番戦場に出してはいけない、自分のために手段を選別しない分類の狂人。

「貴様……何を企んでいる!？」

「誰かに手を出せば、容赦はしない!」

顔がいつていた。ビヤクヤは近々絶対に何かをしようとしている。

企みを考える悪い笑顔で、彼は突然狂氣的に爆笑を始めた。

余程愉快なのだろうか。二人が威嚇しているのを、腹を抱えて笑った。

「大したものだよ、お二人さん。流石にあの仮面を知るだけあるな、青年。ご明察だとも。いやはや、少年はフロントルをあまり知らないと聞いたが、なかなかどうして鋭いじゃないか」

「……………」

肯定した。案の定、誰かに手を出すつもりらしい。

「お前……！」

「まあ、待て。俺はこの人間には興味はないよ。それよりも、美しい光を見つけたのだ。追うならば、そちらだろうな」

彼はニヤリと二人に微笑みかける。

済みすぎた邪気を肌で感じて、二人は気圧されていた。

真つ直ぐな欲望が過度を通りすぎると、想像以上に気持ちが悪い。

彼の放つ威圧感。そして、身体を舐め回すかのごとき視線。

(吐き気がする……！ おのれ、本当にジオンの人間なのかコイツは!?)

(見たことのない人種……。何だか凄く、醜悪だと思う……)

こいつに倫理は恐らく通用しない。

自分のために方法を探さず、最短で達成する気満々だと、激しい自己主張を放っているのだ。

他者からすれば狂っている。醜いと思われる。

が、本人には最早関係などない。

「……は、なんというか……生きるべき人間が多くて、困っていたんだ。俺の求めているのは生憎と、そういうった人間ではないのにな」

彼は楽しそうだ。よつほど、その追うべき相手とやらが恋しいんだろうか。

手を出すのは、暗にあのマスターユニットだと、二人は言われていると気付いた。

「……奴に勝てるのか？」

「勝てるさ。あんな人を見下す高慢なマシン擬きは、俺の敵じゃあない。なに、思い込みを利用するだけであの程度、簡単に仕留められる」

化け物じみたスペックのマスターユニット相手に余裕綽々のビヤクヤ。

何か秘策があるらしい。とりあえず、ここの人間ではないと本人も断言したので放置。

別にマスターユニットは死んでも生き返るので、問題はないと薄情にも二人は不信感もあつてあつて黙認した。

数日後。本当にビヤクヤは実行してしまった。

(思い込みを利用するだけって、こういう意味か!!)

(……成る程。言うだけの事はあるか)

大騒ぎになるジエネレーション。

なんと、ビヤクヤはアリアを呼び出して騙し討ちをかけて、頭を銃で撃ち抜いて射殺していた。

で、本人は脱走……いいや、普通に清々しいほど正直に裏切つて逃げ出したのだ。

こんな殺しをすと思うてなかったアリアは簡単に死んでしまった。

するわけがないという思い込みを利用する。ビヤクヤの秘策は騙し討ちだったのだ。

自分の機体を奪って堂々と裏切ったビヤクヤは後日、復活したアリアがぶちギレて絶対に殺してやると言いながら彼のほうが優先的に排除するという事になっていった。

二人は危ない男が居なくなつたことに、先ずは安心感を感じていた……。

身の振り方

亡霊は裏切りの汚名をかぶり、闇へと消えていった。

その頃、残されていた彼らは。

身の振り方を考えていた。

元々、偶然にも時空変動に巻き込まれて現れた異邦人。

遠い未来から人が宇宙に生きている時代に戻ってこれたのはいい。

が、いく宛はない。

ホワイトアークという小型ながら立派な母艦を持ち、民間というには過剰な戦力を従える。

これでは軍が黙っていない。

連邦も、ジオンも、あるいは違う組織が目をつけてくるかもしれない。

第一、連邦の特殊任務に当たっていた集団を潰しているのは彼らだ。

母艦を破壊したフローレンス、連邦を虐殺したノーフェ。

この二名は、現在連邦に既に手配されているらしい。

「ふふふ……襲ってきたのはそつちでしょうに。つくづく、この世界の連邦は腐ってますね。ねえ、ロリコン少尉さん？ 自分の部隊、 Rond・ベルが壊滅した気分はどうです？」

「その前にまず止めろ!! 俺をその呼び名で名指しするなア!!」

コロニーの会議室。事情を聞いていたノーフェが、未だに捕虜扱いされる彼……リデイをつついて遊んでいた。

余程この拒絶の反応が面白いようで、ことあることにロリコン少尉と言ってからかっている。

実際、破壊された彼の機体は既に回収され、データを解析されていた。

で、ガンダムを追い回していた事実を周囲に知られて彼は立場が危機的である。

連邦が何やら喚いていたらしいが、母体のOZが連邦に対してキレたようで、上で揉めているとか。

まあ、リデイのいた部隊は大半が壊滅しており、挙げ句には彼もMIA扱いされていたのか、死人として軍を除籍されていると知らされた。

彼も現在、いく宛がない。なので捕虜としてここに留まっていた。

「クソツ……。どうしてこう、俺は毎回ガンダムに振り回されるんだ……。もう、あの子を追うことすら出来ないなんて……」

何やら落ち込んでいるようで、後ろの方で手錠をされたまま、椅子に座って壁に寄りかかり途方に暮れていた。

ノーフェはニヤニヤして、更に追撃する。

「……ああ、ユニコーンの一号機に乗ってる人ですか？　残念ですねえ、『箱』を追えなくなってる」

「!!」

途端に、顔をあげる。驚愕の表情であった。

なぜ知って、というリディにノーフェは答えた。

「……まあ、あくまで違う世界のお話ですけど、参考程度にお教えしましょうロリコン少尉。一応、私は以前あの器野郎と戦ったことがあります。何やら、ラプラスの箱とかいうものを巡って、小規模な小競り合いをしているらしいですね。少尉もあれに巻き込まれているんですか？」

「……そうか。お前はそれで知っているのか。別世界の話だとしても、事情は同じか……」

自分とは違う自分の話。オーバーワールドではさして珍しいこともない。

彼女が異なる世界の、要はリディの知る人物とは別の赤い彗星の再来と戦っている、驚くことじゃない。

別世界でも、事情に違いはないんだろう。彼は大体察して、天井を見上げた。

「質問に対しては、その通りさ。今となってはもう、連邦もジオンも関係ないしな。俺は死んだ扱いになって、あの子はバナージに奪われて……。……お前確か、ノーフェとか言ったな。あと、別の人格なんだっけ？ アメリアスとかいうあの子は」

「そうですね。忌々しい私を封じようとする私の分裂した奴です」

割りりと冷静になって、リディは彼女に話しかける。

何かストレスでも抱え込んでいたのか、疲れた表情であった。

前の方では、フローレンスがこれからどうするか、周囲と話している。

ノーフェは今回、口出しはしない。宛がないなら、彼女に任せようが交渉はうまくいくだろう。

「……何だろうな。なんだか、背負っていたものが全部無くなると、急に虚しくなるよ」
天井を見上げたリディは、遠い目をして呟いた。

「へえ。マーセナスと言えば、連邦では有名な家柄じゃないですか。関係あるんですか？」

ノーフェの不躰な質問にも、投げ遣りに彼は答えた。

「色々あつたんだ。箱の中身をみんなで知ろうとする。けど、あれは明かされるべきじゃないと俺は思う。けどさ、みんなして知ろうとするんだ。そこに詰まったものを」
「壮絶な生活をしていたのを簡単に彷彿できる、そんな声だった。」

ノーフェは、軽く知る程度だが、如何に彼が重荷を背負っていたか少しだけ想像できる。

だから提案した。全部教えてほしいと。

どうせ死んだ扱いになって、もう帰る場所もない。

だったら、全部吐き出しても問題などない。

ここに居る人間は、箱などという得体の知れないものには興味すらないから、と説得して。

興味があつたから。彼は呆れたように彼女を見上げるが、聴て軽く頷いた。

「少尉は知っているんですね。中身」

「……まあな。だからこそ、やめてほしかった。何度も言つたけど、誰にも理解されなかった。次第に孤立していつて、俺を理解してくれる人が居なくなつて……」

「よく、気が狂いませんでしたね？」

「正直、あのまま行けば狂つていたと思う。その頃、俺のメンタルもボロボロだったから

な。バナージ……いいや、お前に言っても分からないか。ユニコーンの一号機に乗っている奴と揉めたりして余裕がなかったから、いつか取り返しのつかないことをしていたかもしれない」

相当不満やら何やらが溜まっていたのか、愚痴るように彼女に打ち明けるリディの心情。

「理解されない、ですか？」

「ああ。お前に言っても多分、お前も理解できないと思う。お前、今思えば強化人間か何かだと思うけど、あつてるか？」

NT-Dを使いこなしているから、やはり分かる。

リディの質問に、首肯。但し、と詳細を教えるべく。

「……そうか。戦闘用のクローンか。誰かと似ている気がするな」

寡れた顔で彼はノーフェに言った。

随分と色々、一人で背負っていたようだが、堪えたのはリディの性格の真面目さゆえか。

少し話しただけでも、根は真面目でそれなりに正義感の強い人物だとノーフェも分かっていた。

「でも、そんな責務ももう、関係ないんじゃないですか？ あなたは今、死人ですものね

「？」

「お前が落としたんだろうが……ロリコン扱いしたあげくに」

「暗に、気負いすぎると死ぬから止めておけ、とノーフェは言ったのを理解したらしい。」

「深い深いため息をついて、また天井を見上げる。」

「俺からも一つ、いいかな？」

「暫くして、彼はノーフェに妙な質問をして来た。」

「いわく、未来も知っているなら教えて欲しいと。」

「世界は、平和になったか？」

「なつてませんよ。ずっと同じです。戦争、戦争、戦争。そのエンドレスです」

「何が聞きたいのか分からないが、軽く歴史を教える。」

「ユニコーンよりも、あとの時代ならある程度知ってます。確か、十年ぐらしたあとに、

「テロリストが暴れてました。マフティー、とか名乗ってましたよ。シャアのような過激

「な思想で、アムロのようなガンダムに乗って」

「……それから？」

「更にあとになると、今度は暫く大人しくなります。けど、今度は木星が暴れだすんです。宇宙海賊がコロニーに、バグという無差別殺戮兵器を投入して、虐殺を行いました」

「ジオンは一応滅び、今度は宇宙で小競り合いが増える。」

木星から地球に狙撃する阿呆がいたり、核弾頭を叩き込もうとするジジイがいたり。割りど地球のピンチは多かった。因みに軍縮の動きで連邦はクソの役にもたつてない。

その都度、部外者が立ち向かって瀬戸際で頑張っていた。でも。

「随分とあとになるんですけど……最終的に、地球をバイクが爆走するんですよ。そこにいる人間もろとも」

「……正気の沙汰じゃないな」

「あと、天使の輪というえげつないもん作りましてね。全人類洗脳しちやる、みたいなことやってます」

「……………」

リディは頭を抱えていた。

なんというか、想像以上に救いのない歴史に絶望している様子だった。

「その世界は、俺達の戦いを経ているんだよな？ 本当に何も変わってないのか？」

「後世には『ラプラス事変』とか言われていたようですけど。ええ、全くもって変化なしでしたね」

「……救いは、ないんだな」

再三の問いにも、ノーフェはありのままを教えた。

彼が願ったはずの未来は血塗れで結局平和と言えるのはごく一部だけという、凄惨な世界だった。

呆気なく、彼の希望は潰えていた。

補足すると、箱は一応開示されたが変化なしと最早フォローしようがない。

「はあ……」

ため息をついて、何だかバカらしくなってきた、と彼は言った。

「何のために俺は戦ってきたんだ……。何にも変わらないなんて……」

「証拠、ありますよ？ たとえば、ほら」

彼女はある端末を見せた。

そこには、今までの戦いのデータを入れてあり、悪魔たちが去る前にコピーしておいたデータもある。

彼に見せると、更に絶望していた。

「……………そうか。みんな、無駄だったんだな。あの戦い自体が無駄になる未来しかないのか……」

「結構沢山の時代巡ってますけど、以降の時系列で平和な世界は見たことないです」

止めの一言で、彼からハイライトが消えた。

リデイは己の全てを否定された気分だった。よりによつて、未来という先の人々にあれほど苦悩していたのが、全部水の泡。あの器の言うことが、正しかったと証明されていった。

「もう、いい。……箱を開こうが、開くまいが……人類に、革新なんてなかったんだ」
リデイは、大きく息を吸つて、全部吐き出した。

「未来は未定、なんてまやかしに騙されて……俺は、何であんなことしてたんだ」

「知らないのは救いです。でも知れば、選べますよ？ 自分のこれからぐらいなら」
「そうだな……」

誰かのために戦つても、どうせ最後は裏切られる。

人は賢い生き物じゃないし、纏まれる生き物でもない。

彼女は言った。好きに生きればいいと思うと。

「人類の未来なんて、個人で考えても集団で実行しても、時間には勝てません。忘却がある限り、人はどうせ革新なんてしないんですから。歴史を知るから言いましょう。時間の無駄をするよりは、自分の時間を生きたほうが懸命です。人間には、世界は背負えませんが。壊すのは個人でも簡単なんですけど、修復とか改善は無理です。諦めてください」

バツサリと切り捨てる。

どんな風に人間を信じてても、世界はいつも応えない。気負うだけ辛くなる。考えるだけ悲しくなる。

「身の丈をリデイ少尉、あなたも自覚したほうがいいんじゃないでしょうか？ 家なんて関係ないんでしょう？ 器を肯定はしませんけど、なるようにしかありませんでした。人類という種族は生きてます。地球も存命です。それ以上望むと、嫌気がするだけですよ？」

考えるから、嫌になつて自棄になる。

じゃあもう、受け入れればいい。

ノーフェは、リデイにも身の振り方を考えておけと言つた。

「未来に期待しても、無意味ですよ。……そんな世界は、きつと片手で数えるぐらいです。希望なんて甘い毒に騙されて、自分の人生を捨てないほうが良いですよ」

地味に生きるなりすればいい。

リデイは、何やら黙つて考え込んでいた。

ノーフェも、その様子を笑顔で眺めながら、決定するまでただ待つていた……。

三章 アロウズ編

新しい行き先

「……話がある？」

数日経過した頃だった。

コロニーに、どこかの組織のお偉いさんが、彼らを尋ねてわざわざ出向いていたらしい。

フローレンスと同時に、彼女も呼び出しを受けた。

他のモノは待機している。別室に呼び出しを受けた彼女は、奇妙な人物と邂逅する。

職員に案内されて、彼女が通された部屋。

室内には……若い男性が座って待っていた。

「やあ。初めまして。待っていたよ、お嬢さん」

綺麗な緑色の短い髪に、黒いスーツ。

涼やかな微笑を浮かべて、その男性は彼女を部屋に招いた。

「……」

誰だこいつ、と彼女は警戒した。

何やら、身震いを感じた。

微笑みで何か、値踏みするような不快な視線でこつちを見ていた。

「おやおや。随分と怖がっているようだね？　大丈夫、僕は連邦の人間ではないよ」

「……」

苦笑する男性に、一切声を出さずに彼女は距離を離していた。

何故だろうか。彼には、近づきたくない。恐怖とは違う。強いていうなら、嫌悪。

なんだか、嫌なやつに見えて仕方ないのだ。

「……言葉もなしに、僕を感じるのかい？　元ジェネレーションマスターユニットの
ノーフエ・ネームレス。……そして、アメリカス」

「!？」

突然だった。

彼は、こちらの名前を言い当てた。しかも、外部にはあまり知られてない筈の、二人の名前を。

同じ中に、二つの人格があると見抜いた。

「……何者ですか。名乗るなら、己から名乗りなさい」

威嚇するように、彼女……アメリカスは、彼を睨んだ。

(……アメリカス。今回は私も手を貸しましょう)

何より。普段は犬猿のノーフェエが自分から、アメリカスに休戦を切り出した。

今まで黙って様子見をしたようだが、ノーフェエも不愉快そうに尖る感情を見せる。

(不愉快極まりない。……私を上から見下して、情けをかけるかのような視線。あいつらよりも、遥かに憎たらしい！)

ノーフェエの憎悪が、ジエネレーションよりもこいつが嫌だと言い切るほど、この人物は得体の知れない不快感が強い。

「おっと、失礼。自己紹介が遅れてしまったね」

そんな二人の威嚇など何処吹く風。彼は動じずに、冷静に対応する。

穏やかな空気を纏っているように見えるが、ただこっちの動きを観察しているだけだ。

兎に角、感情が逆撫でされる。

「僕は、リボンズ。リボンズ・アルマーク。君達を僕たちの組織、アロウズに勧誘するために足を運んできた」

「……リボンズ？」

その名前を聞いたときに、彼女は直ぐ様思い出す。

昔の記憶だ。リボンズという人物を、彼女は知っていた。

「……自称、救世主様がわたしのごときに何のご用ですか？」

「ほう。やはり知っていたか。僕のことを。但し、訂正してほしいな。自称、ではない。

僕は救世主だ」

自信過剰で、尊大な傲慢な男。リボンズ・アルマーク。

ある世界で、人類を自分だけで管理しようと戦争を裏で操っていたイノベイド。

人類の進化した人類、イノベィターの模造品。

ある意味では、ジェネレーションのマスターユニットと同じ、何度でも甦り強大な力を持つ存在。

唯一違うのは、マスターユニットは人類に尽くす道具。

イノベイドは人類を支配する支配者になろうとする。

そんな奴が、今日の前にいる。

「イノベイド風情が……！ お得意の情報収集ですか。道理で知っている訳ですよ。今度はどこにネズミを潜らせているのやら」

「風情とは失礼だな。だが、許そう。何せ、それを言ったのは君だからねアメリカス。他

の者ならば直ぐに消しているんだ。感謝してほしいかな」

「感謝なんてしませんよ。わたしと似たような存在の癖に!!」

マスターユニットとしての記憶だろうか。

通りで、腹が立つ訳だ。マスターユニットと根源を同じにししながら、真逆のことをしている類似品。

自分達の価値に満足しているマスターユニットとは、相容れないのは当たり前。

不満しか持たず、不相应な自意識過剰なクローンの集団。

人間に産み出されて起きながら反逆をする。存在が裏切り者。

「似たような存在、か。残念だがそれも違うな。君たちは既に、人間を超越している存在だろうか?」

「……は?」

何を言い出すかと思えばリボンズは、苦笑して彼女に席を進めた。

「まあ、取り敢えず座りたまえ。決して、ここで事を荒立てるような真似はしないと約束しよう」

「……信じるに値しませんね」

彼女はこんな奴の言うことは信じない。

ノーフェも然り。敵意を剥き出しにして、怒り狂っている。

「心外だな。僕は同じ立場の君達との約束を反故にするほど、落ちぶれてはいないつもりだけれど？」

意外そうに、リボンズは驚いていた。

そこに、確かに気配は穏やかなままだ。敵意らしきものは感じないとノーフェは言った。

（取り敢えず従ってください。こっちは二人です。私が警戒しているので、アメリカスは話し合いに）

（……ええ。任せますよ、ノーフェ）

（こう言うときは私だって空気は読みます。いいえ、私のためにこいつは信用できないので）

ノーフェは随分と彼を毛嫌いしている。余程不愉快な態度をされているようで。

落ち着いて、彼女は着席する。にこやかに、リボンズは話を切り出す。

「さて。何から聞きたいかな？ 君の質問には全て誠心誠意でお答えしよう」

「……では」

高慢な態度はそのままだが、質問を投げる。

先ずはここに来た理由。

リボンズいわく、連邦から手配されてしまった彼女達を、所謂匿うためにわざわざこ

こに來た。

何でも、凄まじい戦果を叩き出したノーフェに興味を抱いて調べていたら、元ジェネレーションのマスターユニットだったことが判明し、勧誘するべく現れたのだ。

「僕はね、ノーフェ……いいや、今はアメリカスだったか。君のような優れた能力を持ちながら、下等な人間なんぞに使役されているのを見るのは、我慢ならないんだ。君は本来、愚民に尽くすような命ではない。僕達イノベーター同じく、君の命には人間の尺度では計りきれない価値があると僕は思う」

「……」

熱く語るリボンズには、それなりの自負があるのか。

今は黙ってたただ、聞いていく。それから判断しようと考えた。

「ジェネレーションの事は、僕でも完全には調べきれなかった。君を作った人間は何者なのかは知れないけれど、君はもう……マスターユニットとしての呪縛から解放されるべきだ。君は僕達と同じ、イノベーターに匹敵する、次なる人類なんだよアメリカス。何時までも自分を道具、人形と卑下して言うのはよしたまえ。君もまた、救世主だ。愚かな旧人類を越えた、僕らと対等の、新しい命なのだよ！」

「……わたしを、どうしたいんですか？」

結局は、こいつは何を言いたいのか。何をしたいのか。

端的に言えと言うと。

「意外とせっかちなんだね、アメリカス。ならば結論から言おう。アロウズに來たまえ。君の理解者は、旧人類などには到底無理だ。僕が君の理解者になろう」

傲慢に、彼女をいぎなうリボンズ。

アメリカスは、それを考える。

「あなたの思惑などはどうでもいいです。理解者など結構。この身は元より、孤独をもつてして律するもの。イノベイドにとやかく言われる筋合いはありません」

バツサリと切り捨てて、同時に。

内面ではノーフェが興味を示していた。

（へえ……。人形である私やアメリカスを、人間よりも上と嘯きますか）

自分等が道具で、人形であることを受け入れているマスターユニットに対して、そんなことを言う男。

それはそれで、ノーフェは面白そうだと言いつけているのだ。

（まあ、信用はしないし気に入らないし、憎たらしいし、ムカつくんですけど。……然し、気付いています？ こいつ、もうこつちを笑っていたり値踏みするような真似、してませんよ？）

彼女は、彼から見下しの念が消えていると報告する。

要は、本気で言っている。そう言うことか。

「相談は出来たかな？」

微笑み、彼は待っている。

なんでそんなに、彼女を過大評価しているのか。

調べていたなら、アメリカスの根幹を知っているだろうに。

「……リボンズ。あなたはイノベーターではないんですよ。分かってますか？」

「理解はしているとも。だが、それも所詮は奴等の都合による判別だろう？ 残念だけ

ど、今のこのオーバーワールドには、イノベーターなんてものは片手で数えるぐらいしかない。そして、その全てのイノベーターは、僕の仲間さ。人間にモルモット扱いされて、辟易しているからね。彼らは自分達こそ、人類を導く新しい人類だと信じて疑わない」

「……なんて愚かな」

「愚かなのは人間たちだよ。管理されなければ何もできない。戦つてばかりいる獰猛なケダモノと同じだ。まったく、首輪をつけて鎖で繋がないと種族そのものは滅びかねない。挙げ句には地球を食い物にする、宇宙にゴミは撒き散らす……。御し互い生き物だとは思わないか？ 君は、そんな戯けに尽くすつもりかな？」

イノベーターが、もうアロウズにはいるのか。嘘は言わないだろう。

こういう奴は見栄をきらない。堂々と自慢するやつだ。数少ないイノベーターにすら、既に見限りをつけられる。

イノベイドが調子に乗るのも、分からなくはない。

彼の言うことは間違いではないし、人間が阿呆なのはアメリカスもノーフェも知っている。

救いがたい連中だとしても。それでも、アメリカスは人間に尽くす。

……いや、語弊があつたか。

「わたしは、人間に尽くす気なんてないです。ただ……知っている人のために、わたしの力は存在する。それだけです」

「……ほう」

訂正するなら、そこだ。

彼女が働くのは自分が知る人物のためだけ。

他の連中が死のうが滅ぼうがなんでもいい。

極論、顔見知りが生きていられのなら、他人なんて消えればいい。

彼女の奉仕は人間と言うゲシユタルトではない。

あくまで個人。顔を知る人のために彼女は働いていた。

「成る程。僕は君の覚悟を侮っていたようだね。謝罪しよう。済まなかつた」

なんと、あのリボンズが。ストレートに頭を下げて詫びを入れた。

己の非を認めない男が、いとも簡単に頭を下げると思わなかった彼女は絶句する。

同時に、彼が本気で勧誘していると誠意はあると、感じていた。

嘘を言えば、見張っているノーフェが気付く。

本気だと言うことらしい。

「ならば、論点を変えよう。君が今、共にいる人間達を僕達が保護する。無論、連邦やジオンには一切手出しはさせない。協力者として、僕達の施設も貸し出そう。代わりに少し、仕事を手伝ってほしい。なに、簡単な話さ。アロウズ来なくとも、アロウズの協力者としてこちらに来てほしい。まあ、君はアロウズに所属してほしいのが本音だけど。どうする、アメリカス。悪い話ではないだろうし、裏はないよ。僕が出し抜くのは愚かな人間だけだ。君は同じ救世主として接しよう。イノベイターと共に人類を管理しなくともいい。ただ、君は君の望むように、人間と接すればいいさ。少なくとも、君と接している人間は君という限りはバカなこととはしてないと、調べで分かっている。僕はね、バカなことをしない人間にも寛容なのさ。……孤児が主な面子である君たちは、強いて言うなら犠牲者が多い。戦争によって歪められた世界に嫌でも適応して生きてきた。そんな彼らには、導きが必要になる。僕も覚えがあるからね。神のように僕を見上げる一人の少年の視線は、今でも忘れられない」

「すみません、話が長いです」

概要は分かったが、後半が何やら恍惚として語り出すリボンスに釘を指す。ナルシストよろしくキザに語る彼は少し気持ち悪かった。

答えは決まった。アロウズが、悪党の代名詞になっているのは知っている。だが、このままでは居場所がないのも事実。さ迷うには危険が伴う。

仮にも組織にいれば、後ろ楯があるだけマシだろう。

どんな悪行でも、協力者としてなら、逃げられる。

傭兵と同じだ。金さえ貰えればなんだってする。

このままよりはずつといい。そう、判断した。

ノーフェも、まあ別に自分が好き勝手出来るならなんでもいいと言ったので、アメリカスの独断で決めた。

「おっと、失礼。脱線してしまったね」

「分かりました。アロウズにわたしが入りましょう。その代わり、約束は遵守でお願いします」

「おお、そうか!! 分かった、宜しく頼もうアメリカス！」

彼は嬉しそうに握手を求めてきた。

渋々、アメリカスも応じる。ガツチリ交わされた握手。

更にリボンズは、とんでもないことを言い出した。

「ああ、そうそう。アメリカスもノーフェも、一つの身体に二人は窮屈だろう？ 何なら、予備の肉体を此方で用意する。欲しければ、言ってくれ。なに、クローンの肉体を君達に贈るだけだ。こんなものでも良ければ、何時でも言えば準備しよう」

なんとリボンズ、新しい肉体をくれると言い出した。

二人いた方が便利なので、イノバイド特性の量産した肉体に意識を送って、今の彼女の肉体からどちらかの意識を取り出そうと。

技術的には簡単らしい。すると。

「だったら、この邪魔なアメリカスを追い出してください!!」

ノーフェが突然表に出た。嬉々として、リボンズに迫る。

アメリカスが鬱陶しいので、新しい身体に追いやって自由を謳歌したいと。

止めろと慌てて押し込められたアメリカスが抵抗するが……。

「そうかい？ なら、早速やる方がいいかな？」

「早速で!!」

(い、いやぁー……!!)

二人して、早速実行。

ノーフェの不意打ちに、アメリカスは抗っても無駄だった。

持っていられる身体。とうとう、元々の肉体を奪われる時は来た。

(止めてください!! わたしの身体なのに!!)

聞いてない。ノーフェに食らった最大の嫌がらせ。

ついていくノーフェは、ざまあみろと笑いながら自由を楽しみに待っていた。

そして。次の日。アメリカスとノーフェは、別々の身体に……増えてしまったのだ
た。

アロウズとして

それは、唐突に訪れた。

「我が世の春が来たアツ!! 今までの怨念返しをさせて頂くツ!!」
何を血迷ったのか、ノーフェが颯爽と現れて。

母艦の一室にいたであろう、フロレンスに突撃していったのだ。

「よくも今まで散々苛めてくれましたねこの悪魔!! 万死に値する! 私の痛みを思いしれエ!!」

「あん!? 調子に乗ってるんじゃないぞ、このクソガキが!!」
食堂の隣の部屋で壮絶な戦いでも始めたんだろう。

最近宛が見つかっただらしい皆はまったりと食事を楽しんでいた。
激しい口喧嘩と戦いの音が響く。聴て。

「ヴェアアアアアアアアツ!!」

なんか女の子があげたらいけない絶叫が聞こえた。
ノーフェエがノックアウトされたようだった。

丁度暇潰しにコロニーの娯楽室で見た女子高生が出てくるアニメで聞いたような雄叫びだった。

聖はうるさそうにしながら、優雅にココアを飲んでいた。

お菓子もセット。うさぎのクツキーを貰ったので食べている。

然し、本当に喧しい。壁は薄くないはずなのに、ノーフェエが何か恨み言を言っている。

「我が魂生まれ変わろうとも、恨み果たしますから……」

「まだ懲りませんのね。ならば、ユニバースッ!!」

「ぎゃあああああ!!」

また地雷を踏んだようだった。

遊んでいる訳でもあるまいに、フローレンスに勝てる人間などここにはいない。

酷い音がする。ため息をついて、目の前をアメリカスがコーヒー片手に雑誌を読みながら歩いて……。

「はいっ!!」

突然のことで驚いた聖。ココアを吹き出した。

霧になったココアは振り返ったアメリカスの顔面に吹きかかった。

「……」

彼女は何やら死んだような目で聖を見ていた。

ハイライトが消えている。というか、こいつ誰。

「えっ……!? 誰!?!」

「そのリアクション飽きました」

アメリカスは疲れた表情で、とりあえず顔をタオルで拭き取る。

彼女は、事情を知らない聖にゆつくりと語り出す。なんだか、徹夜明けみたいな顔をして。

要は、彼らを保護するアロウズとかいう組織の人間にアメリカスはなつたらしい。

軍と言えは聞こえはいいが、実際は独立部隊であり、指揮の系統も違う。

連中の言うことは基本的に無視して良いらしい。そういう特別階級だそうで。

「因みに階級もらいました。大尉だそうです。クロスハートたちと同じですが、アロウズはどうやら同じ階級でもアロウズの方が優先されるようなので、実際はもつと偉いか

と」

ワンマンアーミー、一人の軍隊というライセンスもすごい偉い人から賜ったらしい。つまりは、彼女は好き勝手にできる。通常の連邦は、階級が上でも彼女に口出しできない。

但し、自分と同じ組織の指示はしっかりと聞け、という。

が、アメリカスの場合は母艦にいても構わないという許しを得ている上に、上司は同じ外部協力者の傭兵。

一応仲間だが、雇われに近いというややこしい立場だった。

「……なんで分裂してるの?」

「嫌がらせです」

誘いを受けて、保護された彼らはもう、連邦の手出しできる範囲の外にいる。

既に自由の身なのだが、ノーフェが調子にのって、あの身体からアメリカスを追い出した。

これは簡単に言うとノーフェから作られたクローンの一体で、彼女と全く同じスペースの肉体。

クローンから出来たクローンという、これまたややこしい生き物にアメリカスの意識は取り出されて移植された。

なので、無事に二重人格も回復。二人が増えた。もつと事態は面倒な方向に流れているが。

戦闘能力も以前と同じ。なので、別の人間として、彼女は今ここにいる。

「じゃあ、ノーフェさんは……?」

「今そこで、喫茶店の店員よろしくの絶叫してますよ。名目上、わたしが姉らしいんですけど」

戸籍は偽造され、アメリカスが姉でノーフェが妹、ということになっている。

元々人格は同一人物なのに、意味不明な行程を経て、彼女には妹が出来たのだ。

「ええ……」

「ため息しか出てきません。自由になった途端に、フロレンスに逆襲の時間だとか言い出して、喧嘩を売りに行きましたし」

彼女も苦勞しているようだ。

コーヒーを飲みながら、騒ぎを聞いている。

「まだです……まだ終わりません!!」

「しつこいですわね、ノーフェ。まだ格の違いを理解できませんか?」

「いいえ、わかりませんね! 倒します!」

「ホントにおバカな子ですわ……。さあ、かかつてらっしゃいおバカさん。少し頭を、冷

やましようか」

「それでも、守りたい自由があるんだー！」

何やら自分の自由のために、そして仕返しのために勝てない戦いを続けるノーフェ。

無駄なことをしているものだ。アメリカスも聖も黙ってお菓子を食べていた。

道中、アメリカスが別人になった事を知らない仲間が幽霊が出たと騒いでいたとか。

似たようなリアクションをされていたようである。

数分後。

音が止んで、食堂に怒髪のプロールレンズが白目を向いて痙攣するノーフェを猫掴みして持ってきた。

「まったく、わたくしに復讐など百年早いですわこのアンポンタン！」

頭に大きなコブが出来て湯気が出ていた。拳骨でもされたのだろう。

ぼいツと捨てられる。彼女は左指で何かのボタンを押すような姿でうつ伏せに倒れた。

「や……やめるんじゃ……ねえぞ……」

最後に理解できない台詞を残して気を失った。

「なにやってんですかノーフェ……」

アメリカスが呆れて助け起こす。

「またも教育というか、折檻というか……痛い思いをしていた。何をやるものではないのかわからないが。」

「ふう……。事情はそのおバカさんから聞きましたわ。アロウズに行くんですってね？」

「ええ。ノーフェも一緒ですが、普段はここにいます」

軽く彼女にも報告。フローレンスは母艦のボスなので、アロウズにはいかない。

ただ、協力者の傭兵の代表みたいなものはやると聞いていた。

「……思っていた以上に、ノーフェが調子に乗っているようですが、言うことは聞いてますか？」

「いいえ、全然。自由になった途端に、謳歌するかの如く、遊び回ってます」

「よし、殺しましょう」

「お願いします」

「お願いしないで!」

二人しておつかないことを言うので聖が止めた。

痙攣するノーフェ。辛うじて生きているようだが……余程、抑圧されていたのか。

それから数日経過して。

ボチボチ、仕事といって出掛けていく二名を見送るのはいい。

コロニーを離れて、地球に降下したのち、ある国の施設をお借りして定住できたのもいい。

なのだが。

「ロリコン少尉を駆除してきます」

「待ちなさい。わたしも行きます」

「止めて!? リディ少尉にもしてないよ!？」

最近行く宛がなくて、結局住み着いたというかなし崩しに入居しているリディを倒しにしよっちゅう行く。

その場合、ストツパーのアメリアスも一緒になって倒そうとするので毎回リディ少尉の胃痛が加速していた。

聖はなんだかんだ良くして貰って、面倒を見てくれる兄貴分が、倒されるのを阻止しないといけないので、彼女も胃痛がひどくなった気がする。

因みに阻止できなかった場合。

「止める、話せば分かる! なんだその仮面は!?! 俺に何をしようとしている!?!」

「この仮面を被りなさい、ロリコン少尉。そして番長になるのです少尉」

「フロントルよろしく、仮面で己を隠すのです。ロリコンを隠したくば仮面を被りなさい」

い」

変な仮面をわざわざ用意して、二人はリディに迫っていた。

狼狽えるリディ。何を言われているか分からないものの、あの仮面は不味いと本能が言っている。

施設のなかを追い回して、とうとう行き止まりに追い詰められてしまった。

「番長!? 番長つてなんだ! 俺はもう成人してるぞ!」

「鋼のロリコン番長になるのですリディ少尉」

「止めるお!! 本当に取り返しのことにならないことなるだろ!!」

「ことあることにロリコンと強調されたせいで、リディ||ロリコンの認識が広まりつつある。」

割りと既に手遅れになりつつある。ノーフェがロリコンを認めると追い詰めるがまだ抵抗するリディ。

当然である。誰が認めるか。

「己の本当の姿を去らすのです次男坊」

「違う!! たまに声似てるって言われるけど俺はガンダムマイスターじゃない!!」

「アイドルな妹がいるのをまだ認めませんか!」

「それはあつちだ……あつちか? まあいいか、兎に角濡れ衣をこれ以上着せようとするな!!」

二人して、戦場で追い回されたのを根に持っていて、リディをその方面方々につき出したらしい。

ノーフェが追い詰め、逃げ先をアメリカスが封じる。

「若さ故の過ちだと言うなら、泣く泣くわたしも許しましょう。さあ、過ちを認めなさいリディ少尉！」

「フロンタルみたいな事を言うな!! 誤解だつて言っているだろ!!」

「じゃあどんな女性が好みなんですか？」

ロリコンじゃないなら理想の女性像を言ってみるとアメリカスが挑発する。
すると。

「俺の好みなんて聞いてどうする!! お前は明らかミネバと違……」

「……ミネバ？」

「……あつ」

口走ったのを自覚して、青ざめるリディ。

ミネバで二人には通じる。顔ぐらいなら知っているので。

……名前をあげた少女は確か、彼よりもかなり若い。下手すれば子供だ。

つまり？

「やっぱりロリコンじゃないですか!!」

「違う!! いや、違わないけど違うんだ!!」

二人して完全にドン引きしていた。

慌てて否定するが、既に時は遅い。

「おのれロリコン!! やはりリディ少尉、あなたはここで排除します!!」

「ええ、行きますよノーフェ!!」

「言われずとも!! ノーフエ・ネームレス……目標を駆逐するツ!!」

「アメリカス、目標を破壊するツ!!」

二人は仮面をブーメランのように構えた。

リディ少尉、物理的終了のお知らせであった。

「待て、こればかりは本当に違うんだ!! 話を聞いて……!!」

聞くわけがない。二人は本気でリディをロリコンだと思っている。

慌てるリディ。投擲、迫る銀の仮面。デザインは一年戦争のシヤアの仮面であった。

……うわあああああああ………。

施設のなかに、リディの悲しい悲鳴が聞こえるのだった。

で。

「お嬢さんらは、今まで一体何してたんだ？」

二人の部隊の隊長に、酷く疲れた二名は語る。

「ロリコンと戦争してました」

「ロリコンを駆除する任務をしてました」

「はあ？」

意味がわからん、みたいな顔をされる。

怪訝そうに隊長は二人を見ていた。

「お前ら、マジで意味わからんガキだな……」

「隊長は経験ありません？ 変態との戦争って」

「そうですね、興味あります。戦争屋なんですから、何か秘策はないですか？」

「んなもん、あるわけねえだろ!! 戦争の意味が違うだろうがッ!!」

アロウズに所属してから、配属された部隊の隊長は二人に拳骨を振るった。

直撃二回。二人は涙目で頭を抱えていた。

「まったく、最近のガキは……。まあいい。お前さんらは教育は必要ないしな。實力は十分だ。俺に合わせるし、こっちの言うこともちゃんと聞く。筋はいいが、問題があるとすれば……」

タンクトップに、無精髭。厳つい顔の赤い長い髪の中年にしては、若く見える。

左腕に刺青をいれているおっさんは、ノーフェにまじった。

「ノーフェの嬢ちゃんは、まず冷静になれ。いいか、戦争を楽しむつてのはただ殺せばいいんじゃない。念入りの下準備と、それを自制できる心構えを身に付けろ。分かったか？」

「……はい？」

「分かってねえじゃねえか!!」

もう一発拳骨。指摘されていることノーフェが理解していない。

首を傾げるので、隊長は怒る。

「はあ……。なんで實力は問題ないのに中身はこうなんだお前さんは。いいか、手本が欲しいなら俺を見習え。獣じゃないんだ。いい加減人の流儀を覚えろ」

「はーい……」

狂っているノーフェも、素直に隊長の言うことは聞く。

いわく、尊敬できる人なので、言うことは聞きたいと殊勝なことを言っていた。

ただの戦争屋だと本人は言っているが……。

「アメリカス嬢ちゃんは、そうだな……。もう少し戦いに出ろ。イチイチ俺に譲るな。お膳立てはいらねえ。礼儀があるが、お前さんはお利口さんのやり方が目立つな。殺すのならもつと周りにあわなくていい。野郎どもにはお前さんは空気の読める新人だとか言われているが、俺からすれば本気を出せ。もつと貪欲になるんだ」

「はい。精進します」

的確なアドバイスを貰える。隊長はならない、と頷く。

なんと言うか、怖い人だが……アメリカスも、少なくとも共に戦うと安心できる。負ける気がしない。何より、隊長は強いのだ。

一緒にいれば、多少不利でも必ず勝てる。ダメなときは必ず逃げる。

指示に従えば、絶対に勝てるのだ。流石隊長、とアメリカスも尊敬はしていた。

「よし！ テメエら、今日も稼ぎに行くぞオ!!」
号令をかける隊長に、雄叫びで応える。

今日も頑張ろう。二人も、機体に乗込み、隊長の指示を思い出しながら、戦場へと出ていった……。

アロウズの仕事

ジエネレーションに、新しい依頼が舞い込んでいた。

それは、世界の敵と言われる組織の人間であった。

(連中が、うちになんの仕事を持ってきたっての……?)

アリアは不穏な空気を感じつつ、対応に当たる。

その依頼内容を聞いて、珍しく少し時間をくれと保留することになるとは、まだ誰も知らない。

今日も平和にアロウズでお仕事を開始。

したはいいが……。

『た、隊長……ぐあああああ!!』

なんか本日は厄日か何かのようだ。

砂漠でレジスタンスの排除に取りかかっていたら、激しい抵抗にあつて、次々仲間が殺されていく。

また一人、ハイザツクの男が撃墜された。

相手の規模はかなり大きい。下手すれば、こつちよりもMSの数が多いのではないかと思われる。

流石の隊長も一度撤退を視野にいれた。何せ、こつちは出張で、相手は近くに地下の基地がある。

戻つて十分とは言えないが補給して、持久戦に持ち込まれているせいでもかなり不利であつた。

『畜生、なんだコイツらは……!!? 嬢ちゃんたち、時間稼ぎ出来るか!?!』

隊長の命令。時間を稼げ。無論、やる。

「隊長、全部殺しても良いですか!?!」

『おうよ、好きなかだけ殺せ!! 今回は許す、暴れちまいな!!』

「さっすが隊長!! 話が分かりますね!!」

旧式の機体の分際で、頑張りすぎた。

背後で大人しく自制していた獣が、解放される。

アルケーガンダムに乗っている隊長は太陽炉の粒子残量がヤバイので撤退すると説明した。

『アメリカスの嬢ちゃんも、適当に潰したら逃げてきな！　今回は割りにあわねえ！

無理だと思つたら直ぐに切り上げろよ！』

隊長が退いているのに、逃がさないように連中が集中砲火を浴びせていた。

これには流石の隊長も難しい。どこから出てきたのか、ジャンク寸前の機体まで参加している始末。

物量が違いすぎる。隊長を庇うように、彼女の機体が前に出る。

「了解しました。ノーフェと敵を全滅させたのち、帰還します」

冷静に勤めて、隊長の狙うしつこい敵を撃ち殺す。

彼や半殺しの味方は撤退していった。

時間を稼げと言われた。機体が軽症なのは、二人と隊長のみ。

隊長のはガス欠でこれ以上は無理と判断したまでだ。隊長はこんな雑魚には負けない。
いない。

浮かびながら、敵の規模を計算する。

後で基地を破壊してから、持ってきたオートマトンでも投下して、適当に殺そう。

「ノーフェ。殺しちゃって良いですよ。全員です」

『きやはははは!! 言われなくても全部ぶち殺し確定ですよッ!!』

本当にこう言うときは楽しそうなんだから、と呆れて指定した空域の奴等は殺すなど言いつける。

『なんで!?!』

「フローレンス」

『ひい!?!』

なんか文句を言おうとしたのでボスにチクると言う大人しくなった。

アロウズの任務で、テロリストが街の人間を人質にしているとタレコミがあったって隊長が言っていただろうに。

その空域まで放っておくと爆撃するんで、釘をさしておく。

アメリカスは保護。ノーフェは虐殺。

二人は互いの役目を確認しつつ、分断した。

敵に情けは必要ない。全て殺して、任務も終えるのだから。

機体を降りて、区画に到着。

大きな格納庫だろうか？ MSで閉鎖されていたハッチは破壊したので、中に入る。そう言えば、リボンスが事前にこの辺にはレジスタンスの隠した大型格納庫が存在していると言っていた。

ここに人質がいるんだろうか。情報ではここであつたが。

見上げれば、無数の新旧様々な世界や陣営の機体が並んでいる。

薄暗い中を、差し込む陽の光が照らしているが、人質はない。

手入れはされているようで、そこそこ状態は良さそうだ。

(指定されたポイントはここなのですが……)

様子を伺う。人質はないが……ああ、どうやら人は隠れているようだ。

視線をそこらじゅうから感じる。デマを掴まされたか。

敵意混じりの視線に、丸腰の彼女は無線に連絡を取る。

すると。

上方より、銃弾が飛来した。

狙いは腹。動きを封じる気だろうか。

が、アメリカスには通じない。

その前に先読みして、感じ取った殺意の軸から身体を下げる。身体もちゃんと感覚についてきて、銃弾よりも速く的確に動いて難なく回避。

鋭い音がして、床に弾痕が残る。

薄い闇が広がる奥の方から、恐らくはライフルで狙撃された。

「やってくれますねえ……」

人質保護にきた人間を狙い撃ちして殺そうと言う魂胆か。

流石にアメリカスも腹が立った。不意討ちとは良い度胸だ。

「言っときますけど、そっちが先にやったんですからね！ 後で虐殺とか何とかと言っても、わたしにそうさせたのはあなた方ですので!!」

もういい。

抗うなら勝手にしていれば。

あんまりこういうのは好きじゃないし、オートマトンなんて使いたくないけど。

然し、騙しておいて暗殺しようなどと考える奴等には情けも要らない。

機体が、背後で勝手に立ち上がる。起動し、不気味に瞳を光らせる。

「死んでください。わたしを狙う奴に、容赦なんてしません」

膝立ちのまま、背後のコンテナから次々にオートマトンを投下していく。

改良された、対人機銃を装備したドラム缶よろしくのシルエットから、下方で足が分

裂して自立起動。

のそのそ動いて、アメリカスを追い抜いて戦闘開始。いいや、蹂躪開始。

狙撃してきた奴が慌ててアメリカスを狙うが、目の前にオートマトンが一機待機して、盾になる。

これが戦争のやり方だ。

残虐？ 外道？

人質がいると言つて保護しにきた敵意のない相手を殺すのは違うと言うのか。

綺麗事を言う前に、自分達のやっていることも自覚しろとアメリカスは言いたい。

正義などと嘯く気もないが、少なくとも同類に言われる筋合いなんてない。

「オートマトン、目標……この格納庫の敵対勢力!! 皆殺しにしなさい!!」

命令すると、一斉に攻撃を開始するオートマトン。

機体は放置しておく。どうせ、中に誰か隠れているようだ。

人質はいなかった。情報はデマ。蹂躪するのに変更。

勝手に死ぬ。お前らが悪いと、アメリカスは機体に戻った。

そして。

格納庫から、何機かMSが顔を出す。

ジムキャノンの……カスタムタイプ？ 見慣れない装備を追加でくつつけていた。

プロペラントを背中に増設して、更にはブースターも各所に追加したモデルのよう
だ。

更にはジムスナイパー。あんな一年戦争時のマシンまで引つ張り出してきてまだ戦
うつもりなのか。

他にも、珍しいMSがいた。

(ラゴウ……？ でも、随分と派手に壊れてる)

四つ足の機体、ラゴウだった。

然し背負っているキャノンが破損してへし折れ、モノアイが鈍く点滅している。

挙げ句には脚部のモーターもイカれているのか、かなりふらついている。

恰も、足を怪我をした狼のような動きであった。

しかもだ。ある意味レアな機体まで稼働している。

(リック・ドム……あんな旧式でどうやって戦うんですかね……？)

こつちも一年戦争時に広く普及していたリック・ドムであった。

外見は特別弄っていないようだが、バズーカを担いで背後から狙ってくる。

軽く回避、しかしこれでは戦争にすらならない。

歩く戦争博物館でもあるまいに。

こちらを警戒してはいるが、オートマトンを踏み潰して排除しているあたり、なんか変だ。

普通なら、アメリカスを狙ってくるはずなのに。司令塔は彼女なのは見ればわかる。威嚇しているのかドムの攻撃も狙いが甘い。

本当にあれば、レジスタンスか……？

「……オートマトン、攻撃停止」

遠隔で攻撃を停止する。大人しく止まるオートマトン。

一応、今頃呼び掛けをしてみる。停止したオートマトンには、やはり攻撃をやめた。

益々おかしい。何だろうか、この機体は。

「……ここに捕まっていたって話の、人質の方ですか？」

間抜けな質問をしていると思うが、聞いてみた。

外部音声で問うと、途端にぎやあぎやあ騒ぐような声が通信が飛んでくる。

何してくれてんだとか、殺すつもりかふぎけるなとか、なんかキレているっぽい。

だが、彼らは揃って捕まっていた捕虜の方々であった。危うく、オートマトンで皆殺

しにするとところだった。

「……」

ミスをしていたようだ。少し、事情を聴かないといけない。

アメリカスは降下して、詳しい話を聞きに行く。

そして知ったのだが、彼らは先ほどまで奥の部屋に閉じ込められており、中に潜んでいた敵を全滅したのを見計らい、機体を奪取。

しかし、見境なくオートマトンが攻撃してくるので、慌てて迎撃していたと言う。

要は出迎いはレジスタンス。奥にいた彼らの脱出をオートマトンが阻害していたと。

兎に角、皆様なんとか無事に保護できた。

ついでに隊長に連絡。格納庫発見、敵を全滅した。

人質も確保したので応援求むと送る。

ノーフェの大虐殺はまだ終わってないので、暫く待つことにした。
そんなこんなで任務終了。

ギリギリだったが、皆さん一応無事であった。

仕事を終える。

保護した彼らは他の部隊に引き継いで、二人は隊長の元に帰った。

結構、皆がやられてしまったが、隊長は機嫌が良かった。

普段より、シビアな人だ。死人ぐらいでは、動じないのだろう。

「ご苦労さん。おかげでポーナスは弾んでくれたぜ！ お前さんたちのお陰だな！」

隊長……名をサーシエスという髭面のおっさんは、上機嫌で酒をあおっていた。

アルケーの整備は終わっていた。夕方の基地で、外でハンモックに横たわる彼に報

告。

「いやいや、お前さんらはよく働くなまったく。たまには俺も弾んでやらねえとな！」

二人にお土産だと、近くの街で売っている高級なチョコレートを投げ渡した。

……度数の高すぎる酒が入っているが。

「美味しそうですね、ありがとうございます」

「早速頂きます!!」

それに気付かずノーフェが口に放り込む。

アメリカスは直ぐに気づいて、食べるのを躊躇った。

ノーフェが気にせず全部頬張っていた。

酒臭いの、なんで気にしないのか……。

「つてかお前らガキだったな！ 悪い、それ酒入ってんだったわ」

今頃言わないで欲しかった。

ノーフェが全部食べ終えていた。

あまり気にならないのか、礼を言って戻っていった。

アメリカスは折角の好意なのであとで頂くとして、今は施設に戻ることにする。

サーシエスの気遣いは嬉しいが、それでも子供なので、大人と同じ扱いは少し困ると
いうか。

アメリカスは貰ったお菓子を手に、今日もお仕事を終えていく……。

新たな予感

隊長が言うには、保護した彼らはもしかしたらここちに来るかもしれないと言われた。

「奴さん、居場所がないらしくてな。うちの大將が、戦力になりそうだし、お前さんここで引き取ってくれないかってよ。そっちの大將は受け入れたらしいから、その内に会うかもな」

なんて、後日二人に話していた。
で、本日のお仕事は。

「さて、毎度の如く邪魔してくれやがるテロリストのガンダムの相手だ。気合い入れて
けよ嬢ちゃんたち。じゃないと、死ぬぞ」

脅すように、二人に怖い顔で笑うサーシエス隊長。

なんか因縁があるようで、以前の交戦データを受け取った。

二人して、別に拝見。成る程、記憶にあるあの組織か。

機体が変わってない。所詮、精鋭で世界に喧嘩を売ったテロリストにすぎない。

アロウズの敵ではない事を、何度でも教えてやろう。

「言つとくが、奴等は並大抵じゃないぜ。覚悟しておけ。嬢ちゃんは強いし、何より面白いからなあ。新しい戦争の種をバンバン量産してくれるもんで、俺としても満足してんだ。死なずにや惜しい。キツチリ生き残れ。命あつての物種だからな？」

隊長には隊長の思惑があるようだが、関係ない。

背中を任されているのと同じく、背中を任せている相手なのだ。

全力をもって、応えるのみ。

やはりここは同一人物で、人間に尽くせるなら二人とも尽くすことを選ぶ。

如何に狂おうが、ノーフェとて本能的に判断しているせいで、サーシエスの小隊の戦力はおかしくなっていた。

「因みに、なんて組織でしたっけ？」

アメリカスが名前を思い出せずに彼に聞くと。

パイロットスーツ着替えて、出撃前に話し合っていた彼はしばし黙った。

「……ああ？ 無駄に長い名前で咄嗟に出てこねえな」

「確か、ソレスタルブーイングですよ」

全部は思い出せないらしい。

ノーフェが言ったのはたぶん違う。

「それしたらブーイング……?」

「違うだろ。まあ、似たかよったかだろうが」

確かにやっていることは武力介入による戦争根絶とか言う脳内お花畑の妄言だが。

実際それで仕掛けてきているのが困る。ブーイング入れて黙るなら誰でもそうする。

「あ、ソレスタルブーイングでしたっけ?」

「ソレスタルってーのは多分あつてるだろうが、まあなんでもいいか」

今度はブーイングときたか。豆がなんだって? とアメリカスは眉をひそめる。

面倒なのでソレスタルなんたらで決定。相手の組織など関係ない。

ただ、暴れるなら駆除するだけだ。三人はそのソレスタルなんたらとやらの戦いに出掛けていく。

予想通り、味方陣営に凄まじい被害が出たが、割りと普通に勝てた。

四機程度のガンダム風情で何ができる。

こつちにはスペシナルな隊長のアルケーと、猛獣の一角、そして二人を援護する蒼い煌めきがあるのだ。

更には味方もたくさんいる。現実にはゲームではない。性能の差がないなら、最後に勝つのは物量だ。

ノーフェのやったように、性能の差が圧倒的なら物量にも勝てるが、今回はそれはない。

つまりは、勝てつこなかったのである。リボonzに途中で任された不意のお願い叶えておいたし。

追加のボーナスと、皆への設備投資に個人的に出してくれると、見たことないほど上機嫌だったリボonzが全部やってくれると言っていた。

というか、しばらくあれこれしてくれるのでワガママあれば言ってもいいと言われる始末。

一体、何がそこまで嬉しかったんだらうか。二人には分からなかった。

そして。

こちらは、重苦しい空気のジエネレーションの会議室。

久々に集まった彼らを、アリアが纏めていた。

ガルマ、スズキ、マリィ、アンヌ、ミチア、ヴァイス、伊織、ヴォルフ、そしてアリア。

手が空いている面々を全員集めていた。

「……ヤバい仕事が舞い込んできたわ」

アリアはそういつて、皆に切り出した。

表情はかなり厳しい。余程、余裕がないと見た。

流石にいがみ合う程でもない。大人しく聞こうと、黙る。

「今回の依頼主は、ソレスタルビーイング。……あいつら、プライド捨てて頭下げてきたわ」

ソレスタルビーイング。オーバーワールドに戦争根絶の為に、あらゆる世界に武力介入している世界の敵。

命知らずな理想を掲げて、全方位の組織からタコ殴りにされているのに懲りてない集団である。

ジェネレーションと違って規模も小さい。そのわりに尊大な態度を取るから、一度派手に潰されている。

にも関わらず、しつこく復活してはまだ繰り返す。要は、認識としては頭の悪いテロリスト。

彼らは途端に、呆れた表情になる。当然だ。

困ったときだけ頼りにくる都合のいい連中扱いされても仕方ない。

「元々は単なる護衛だったんだけど……少し、厄介な話を持ってきてね」

ソレスタルビーイングは、致命的なミスを犯して、そのカバーにジェネレーションに頼りに来たらしい。

と言うものも。

「アロウズに太陽炉を奪われたらしいわ。しかも、二つも。ダブルオーが、アロウズのガンドラムに撃墜寸前にまで追い込まれて、隙を見て僚機に破壊されて奪取されたんですって」

アロウズ。連邦の上位組織。ティターンズを拗らせたような悪党組織か。

ヤバイ連中を相手している。相変わらずの身の程知らず。

アロウズと言えば、構成する大半がイノベーターとイノベイドの集団という類を見ない怪物組織だ。

数こそ少ないが、ジエネレーションレベルの異世界に影響を持つ、軍のなかでは悪行と権力が段違いの集まり。

問題は、ここからだという。

「……連中を締め上げたら、白状したわ。はつきり言う。裏切り者が、アロウズにいるわ。黒いユニコーンが、アルケーと一緒に目撃されてる。で、ダブルオーを破壊したのは奴よ」

皆、驚きの表情になった。あの子が、アロウズにいる。

なんで、あんな組織に。遊び半分で人間を殺しているような、高慢な奴等と。いつの間にか、奪われた機体は取り戻しているし、一体何が起きているのか。

彼らには、アリアはなにも説明しない。事実と、決定事項だけを何時も言う。

「あたしだって、なんで奴がアロウズにいるかなんて知らないわ。でも、厄介なことには変わらない。アロウズには、オーナーも手を出すなど、伝言を預かったの。あいつらとやり合えば、全面戦争になりかねない。双方が消滅するまで、戦うことになる。規模の大きなもの同士が争えば、泥沼化するだけなの。……仕方無いわ。この時点で、優先順位を下げる。あたしを殺したあの変態野郎を優先しておいて。迂闊に、前任には見つけても手出しはしないように、ですって」

これは、不味い。

一応彼女の状態は分かっていたが、アロウズがバックにいるとなると話は別だ。それこそ、アリアの懸念が現実になる。

ジェネレーションをよく思つてなくとも、互いに黙認しあつている今の均衡は崩壊するだろう。

そうなれば、オーバーワールドを巻き込んだ大戦争になり得る未来だつてある。

「……了解。今回ばかりは、あんたの指示に従うよ」

「ああ。アロウズか……気に入くないが、率先して敵にするにはリスクが多すぎるな」
ヴァイスとヴォルフは、真つ先に頷いた。

現状を把握しているだけでも、そこそこ前進はしている。

その結果を台無しにするような真似は控えるべきと、冷静に判断する。

「分かりました……」

伊織も苦い顔で了承する。

流石にアリスに言えばダメ出しをされるのは見えている。

あの子だつて、会いたいのは変わらないだろうけど、多分その前に伊織を守ろうとする。

下手なこととはできない。

「アロウズとききたか。これまた、面倒なもんに従つてゐないも……」

ミチアも頭を抱えた。権力の対策を考えてなかった。まさに寝耳に水。

物理だけでも相当な壁だと言うのに、今度は組織ときた。

悪化したと見て良いだろう。一度は共闘した身だ。

最後の出会いが誘拐とか真面目に笑えないので、何とかしてみよう。

(マリー……アロウズって)

(ええ。OZの敵よ。でも、まさかここでも出てくるなんて)

双子は小声でため息をついていた。

以前の組織とも敵対していた大組織。

折り合いが悪く、小競り合いの武力衝突も何度もあった。

下手すると連中はコロニーのガンダム諸ともこちらを殺しに来た。

宇宙にいる人間は生きる価値もないと言われたときは殺意を抱いたのを覚えている。

なんで、そんなのにアリアが言うことを聞いているのか。騙されてでもしているのか。

「おのれアロウズ……！ ジオンの仇敵めエ!!」

「奴等だけは絶対に許さない……ッ!!」

スズキとガルマに至っては、個人的な恨みがあるので激怒していた。

ジオンは、アロウズの度重なる悪行の犠牲になっていた。

彼らなにもしない一般人のジオンを、一方的に蹂躪し、殺戮し、破壊した事がある。勧告もなしに襲撃して、無意味に殺して去っていたのが、アロウズのやり方だ。

二人とも、当事者であり生き残りでもある。他の面子よりも、遥かに抱いている憎悪は大きい。

「おい、アロウズに仕掛けるなどは言うが、仕事の邪魔をすれば倒しても良いのだろう!?」

「それなら良いわ。互いに利益の邪魔をすれば戦いあうのは必然だし。そこまでは、承知の上。彼奴を追うなって事よ」

「今は、今だけはそれでもいい!! 初めて貴様には感謝するぞ! 名目があるなら、一切の加減などしない!」

噛みつくようにガルマはアリアに詰め寄った。

あくまで、逃げた彼女の事で荒立てるな、という話。

単に邪魔をしにくるなら落としてもそれは互いにわかっていること。

お題目があるなら、ガルマはアロウズを許しはしない。

スズキも、過去に散々辛酸を舐めさせられている。

彼にしては珍しい、ハッキリとした怒りを見せていた。

ジオンにとって、連邦と同等に憎悪する相手。

それが、アロウズなのだから。

「こんなんでも感謝されたかないんだけど……」

引きぎみのアリアに、温厚なガルマが怒り狂っている。

これがアロウズの実情。戦争にやり方を選ばない、腐敗した軍の成れの果て。

一番性質の悪いのが、連中がそれを正義のためだと思い込んでいることだろうか。

何やら情報統制されているらしく、一切の行動に疑いを持たないのだ。

如何に非道でも正義のためだと思えば苦しくない。

洗脳の可能性すら否定できなかった。

兎に角。舞い込んだ依頼は欠損した太陽炉の貸し出し、または譲渡。

そして、奪われた本来の太陽炉の奪還。

どのみち、アロウズを相手取る。ヤバい仕事であるのに変わりはない。

「ま、矢面にはあいつらをつけるけどね。うちは連中の後ろで、アロウズの取り巻きでも落とせばいいのよ。派手にしない程度にしておけば、きつと大丈夫だとは思うわ」

報酬は因みにリスクも入れて、嘗てないほど法外な高額を請求しておいた。

全部支払えば奴等の組織の金が枯渇する金額をだ。

渋々、ローンはダメかと交渉しているが受け付けない。

一括で強制だ。払えない場合は組織のガンダムを全部無理矢理没収する。

彼らにしてみれば、現状ではどうしようもないので泣く泣く言う事を聞いている。

(そう言えば……どつかで聞いたことあるのよね、あのオペレーターの子の声……。誰かしら?)

あの組織にいる、整備士の娘の声は自分に似ていた気がする。

で、オペレーターの女の子の声は、どこかで聞いたことがあるような気がするの、気のせいだろうか。

割りと身近に……。まさか、顔を知らない裏切り者か？

(いや、あたしそいつの声すら知らないし……)

バカらしい事を言っている場合でもないか。

次の任務も中々にハードなものになる。

今回は、ここにいる面子で挑もうと、アリアは準備を開始する……。

蒼い焔と変態の来襲

ある男の軌跡を辿ろう。

世界有数の厄介なテロリストから追われる男は、地球のあるPMCに流れ着いた。

理由として、彼はそれなりに腕の立つ人物で、死人が多い傭兵稼業の補充には丁度良かったこと。

何より、彼が誰かを探すべく、戦場を渡り歩くための止まり木の一つに選んで居座ったことが大きい。

お陰で、その組織の連中と共に同じ釜の飯を食いながら、彼らに傭兵稼業に勤しんでいた。

そんなとき、舞い降りる情報。

アロウズにいる、黒いジムの情報と、そこにいる見慣れないガンダムの噂であった

……。

今日は、皆で警備任務についていた。

ノーフェは隊長と遊撃部隊を結成し、遠方に出掛けている。

何でも国を一つ滅ぼしに行くとかなんとか。嬉々として、隊長と出掛けていった。

ツバサ、クロスハート、ロリコン少尉、聖、ユーリと暇なように見回りをしている。

暇なもので、警備をしているのはアロウズの整備工場。

流石に軍の設備に近づく阿呆は早々いないので、正直やることがない。

なので、聖は隅っこで許可をもらって模擬戦闘をツバサとクロスハートで見て、ユーリはリデイとしている。

「暇ですねぇ……」

あくびをしながらアメリカスは呟く。

分離した日に、新しい機体をリボンズがくれた。

ユニコーンは、ノーフェが使っているので、代わりに寄越してくれた。

「丁度、格納庫に壊れたデルタプラスのパーツがあったからね。改造して、ガンダムに仕上げたよ。どうかな？」

「……………」

映像を見せられて絶句したのを覚えている。

……何でデルタカイが建造されているのか。

しかもこれ、元々はリデイのデルタプラスじゃ……。

「時間が惜しいから、こんな出来損ないで悪いとは思う。違うマシンが欲しいなら遠慮せずに言ってくれたまえ」

突っ立つデルタカイ。これは確か、かなり危険なシステムを内蔵されているはずなのだが。

リボンスは笑って言った。

「ああ、あのナイトロとかいう余計なおもちやのことかい？ 大丈夫、そんな野暮なシス

テムは無論カットしてある。代わりに、コックピット周辺と全身の関節に純度の良いサイコフレームを入れてあるから、ファンネルも問題なく稼働する。僕達救世主に、あんな人間の浅知恵など相応しくない。人の分際で、僕達の領域に足を踏み入れるなど、烏澁がましいにも程があるとは思わないかい？」

と、さらつと言ったが……。

因みにリデイが後でキレていた。

「誰だ、俺のデルタプラスを勝手に持つていった奴は!?! 折角好意で修理してもらったのに!!」

戦力になると思われて直されていた機体はアロウズによって接收、改造されてアメリカのデルタカイに生まれ変わっている。

リデイは知らないのです、言わないでおいてある。言うとは面倒になりそうなので。格納庫で憤る彼に心の中で謝りながら、今に至る。

「ふ、不幸だよ……」

不幸と言いながら、模擬の弾薬が直撃し、審判のクロスハートが判定を出した。

聖のジムーは、追加装甲はそのままライフルを通常品に戻していた。

軽い煙をあげて、尻餅をついたジムの前に、ツバサのマラサイが立っている。

「聖、追加装甲はあくまで保険なんだ。接近されたらさっさと機体を諦めた方がいい。加重で機動力を削がれているから、ジムの推力じゃ運動性能は宛にできない。素人から抜け出せないお前じゃ、咄嗟の回避は難しいだろう」

サーベルをしまいこみ、ツバサがコックピットを開いて顔を出した。

「そうだな……聖君は、及び腰になっているから、接近はしない方がいいな。根本的に向

いてない。射撃に徹するといひ。幸ひ、そつちは妥協点に達しているから、任せても大丈夫だと俺は思う」

クロスハートも、機体の上から苦笑いし、説明する。

「……やつぱり、そうかな？」

くまの縫いぐるみを抱き締めて出てきた聖に、二人はあれこれレクチャーしていた。

一方。

「まだまだ!!」

「遅いッ!!」

空戦をしているユーリとリディ。

ユーリが放つビームを、可変を用いた機動で華麗に避けるリディ。

リディは、リボンズがアメリカスが罪悪感ゆえにお願いして、お情けで何処からか持ってきたデルタガンダムに乗っていた。

派手な金色のビームコーティングを全身に施された、嘗ては存在しないと言われているガンダム。

リボンズがデータあるから適当に有り合わせで作っておくよ、的なノリで持ってきた。

雑な扱いのわりにガンダムをくれるとは、流石は救世主。寛大な心持ちであった。

本人はバカにしたような笑顔で持ってきたようだ。

「直撃！……してるのにビームが効かない!? 弾かれてる!? ラミネートでもあるまいに、なんで!？」

「俺に聞くな！俺だつてデルタの使い方なんてまだ分からないんだよ!! と言うか、ラミネートつてなんだ!？」

ユーリも、デルタなんて架空の機体までは知らないらしく、ビームが弾かれるのを困惑していた。

シールドで防御したりデイも分かってない。

敵機として仮想データで戦ったことはあるが、実際乗るのは初めてだと言っていた。

機体の概要はデルタプラスと同じらしいが、やっぱり大変なようで。

ユーリは相変わらず、すっかり愛着のあるトルネード。

仮にもガンダムだからか、慣れると結構強くなっている。

そんな暇な時間を過ごす中で。それは、突然起きた。

けたたましい警報の音。皆、驚いて周囲を見回す。

司令部より伝令。遠方にこちらに向かう敵機を複数確認。

近場で暴れていた傭兵部隊と思われる。目視次第、排除せよ。

(バカな連中も居たもんですねえ)

こんな真つ昼間に軍事施設に手を出そうとは、余程アロウズが憎いのか。
あるいは、仕事か。まあいい。

他の警備員と連携して、慌てて実戦装備に入れ換える彼らを尻目に、アメリカスは先に迎撃態勢に入った。

敵機を確認。ジオン、連邦の一部に……何でもありの混成部隊。

ジエガンやドムなど、年代もバラバラな連中のお出まじだった。

空にはダガーもいる。105だと思うが正式採用の機体をよく持っているものだ。

アメリカスは片っ端から狙撃して落としていく。

構えて、軌道を先読みして、アウトレンジより撃ち落とす。

デルタカイは、複数の装備を切り替えて戦える攻撃型試作機だ。

普段は遠距離支援に徹しており、メインにロングメガバスター、サブにハイメガキャノンを選んでいる。

射程が長く、火力が高い装備で、近距離寄りの中距離の隊長に、完全近距離のノーフェ

に合わせている。

他にも継続戦闘を意識してサブにビームガトリングガンやマシンキャノン、炸裂ボルトやメインも通常のビームライフルに、切り札のビームマグナムまで幅広い装備ができるのが嬉しい。

今回は遠距離装備。遠方より、先手で叩いて数を減らす。

見れば、隣で大型狙撃ライフルを持ち出してきた聖が、膝立ちで構えて狙っている。

「当たりますか？」

『そい(そい)……』

結果は上々のようだ。データを共有しつつ、上空の方をアメリカスは警戒する。

一応、ファンネルも二つ積んでいるが大気圏では重力の関係上、あの手の兵器は使えない。

代わりの装備がないため、渋々乗つけたままでやっている次第なのだ。

うち漏らしは、マラサイとGエグゼスで白兵戦に入る野郎二名が取り押さえている。流石は軍人。同世代のネモやどこから来たのか、ゲゼまでいたのを切り捨てていた。ツバサに至っては空振りした一撃を下がって回避、懐に飛び込み、上下に真つ二つに

した。

クロスハートはライフルを威嚇で連射して逃げ道を塞ぎつつ接近、動けない相手を抜

き放つ一閃で両断。

共に派手に爆発した。

空戦では、トルネードが奮戦しており、上から拡散ビームの爆撃をお見舞いし、広範に攻撃。

デルタガンダムも、変形からの急降下で滅多切りにして、相手をバラバラにしていた。これは余裕か、とアメリカスは思っていた。……その時まで。

『——ふははははは!! 漸く見つけたぞ、蒼い可変のガンダムウツ!!』

……全方位に通信で叫んでいるソイツが、颯爽と現れるまでは。

「……!?!」

同時に感じる、サイコフレームが感じ取った嫌な気配。

これは……知っている。あの時の……コロニーの時の味方!?

『俺は貴様をオ、心より求めていたのだアツ!! 俺と戦えエ、蒼い可変のガンダムツ!!』
レーダーに反応。すごい早さでこっちに突っ込んでくる。

アメリカスが見る先には。漆黒のギラドーガが、こっちに向かってきていた。

案の定であった。以前知らぬ前に怖い感情を向けていたあの機体。

袖付きのエンブレムを刻んだ漆黒のギラドーガだった。

途端にフラッシュバックする、コロニーでの記憶。

知らない誰かに首を押さえられ、口を塞がれて成す術もなく連れていかれて、人気のない場所に連れ込まれ。

もう少しで、変態の獣欲の餌食にされて、幼いまま凌辱されていたかもしれない、誘拐の記憶。

……彼女は自覚がないが、実はこれ、相当トラウマになっていた。

現状ですら、余裕がなく錯乱状態に陥っていた。

幼いアメリカスには、無論堪えられる思い出ではなく。

呆気なく、彼女はサイコミュが教える、発情した男の生の感情を受けるはめになった。で。

「……きゃあああああああああああつ!!」

絹を裂くような痛々しい悲鳴をあげた。

記憶が何度も何度も脳裏を繰り返す。連れ去る大きな手のひらの感触。

感じていた恐怖、逃げ切れない絶望。硬直し、竦み上がった心。

全てを濃厚に思いだして、彼女は再び取り乱してた。

ヘルメットを押さえて、悲鳴をあげて震え出した。

当然、機体も動かなくなる。棒立ちになるデルタカイ。

「……アメリカス!」

幸いだったのが、NTの端くれであるユーリが傍にいたこと。

強烈な彼女の恐怖は、いち速くユーリに伝播した。

見れば、敵機が向かっているのに動かないガンダムに、通信で聞こえるアメリカスの悲鳴。

完全に恐慌状態であることは、NTであるユーリには言葉もなく伝わった。

「くっ………！ 止めろお!!」

割つて入るべく、彼女を狙うギラドーガに向かってライフルを連射。

上から撃っているのに、奴は全部回避した。

「嘘でしょ!?!」

『なんだ貴様は………!! 俺の邪魔をする気か、小僧!!』

通信で聞いていたのか、怒り狂う敵機のパイロットの声。男か。

しかも、ユーリを小僧と抜かした。で、キレるユーリ。

「誰が男だつて!! 僕は歴とした女の子だあー!!」

向きかえったギラドーガに、サーベルを抜いて突つ込むトルネード。

それを見て、応援にきたリデイが制止した。

『黒いギラドーガ………!! 止めろユーリ!! そいつはジオンのブラックファントムだ!!

殺されちまうぞ!』

知っているのか、然し教えるのが遅かった。
上空からの襲撃にも、奴は機敏に反応する。

「甘いわ、小僧オ！」

上からきた一撃を、飛翔して空中で迎撃。

交わる刹那に、振るわれたサーベルを二刀流で構えたビームアックスで受け止め、もうひとつのビームを先端に刃として出して、突き刺す。

（ヤバい、死ぬ!?!）

ユーリの虫の知らせが、死期を悟り、寸前で脱出装置を起動させる。

画面一杯のビームの煌めきを見る前に、何とか脱出した。

直後、胴体に直撃。派手に爆発し、トルネードが破壊された。

本人はパラシユートで、空中を漂っている。

（あつぶな……。し、死ぬところだったよ……。）

冷静になれて良かった、と安堵するが。

下では、近くにいた聖がその敵を倒そうと離れながら撃ちまくっていた。

「来るな、来るな、来ないでよお!!」

空中で振り返り、此方を見る黒いギラドーガ。

次の狙いはどう見ても、聖であった。

「クソツ!! こっちちを見ろ、ブラックファントム!! ガンダムがここにいますぞ!!」

リデイが彼女を守るべく、ギラドーガに連射して気を引く。

急速変形、そして向かう前に割り込んだ。

一機墜落されて、リデイにも焦りがあった。

知っている。ブラックファントム。またの名を、漆黒の亡霊。

ジオンの、袖付きの一派の中では有名な、黒いギラドーガの事だ。

マシンガンとライフルの機能を持ち合わせる射撃と、アックス、サーベル、スパイクの混合ビーム兵器を使い分ける、宇宙ではその漆黒が紛れて発見する頃には殺されていると名高いエースだ。

なんでか、こんな傭兵部隊に居るのか知らないが、こいつは危険だと分かる。

『ほう、貴様もガンダムか……面白い!! ならば俺を殺してみるがいい!!』

サーベルで切り払うと、アックスで受け止める。

接触通信で、楽しそうな男の声が聞こえてきた。

「ふざけるな貴様は!! 戦場で遊んでるんじゃない!!」

リデイがその態度に激怒して怒鳴ると、音声の男は言い返す。

『遊び? いいや、違うな金のガンダムよ!! この戦いこそ俺の命……俺の在り方その

物だツ!! これが俺と言う存在の証なんだよツ!!』

「何っ!？」

リデイが怯む。

慌ててツバサとクロスハートも駆けつけた。

加勢する彼らに、誇るように黒い亡霊は高らかに叫ぶ。

『俺は、死しても尚忘れられない!! ガンダムが放つ、命の光を!! 意志の煌めきを!! 脳裏が……否、この魂が覚えているんだツ!! ガンダムは魂を光として表すマシンなんだと!! 俺は求める、欲している!! 戦いのなかで、輝きを増していく命の光を!! それを力に変えるガンダムを!! その為に今、俺はここにいるツ!!』

狂っている程、清々しい雄叫びだった。

頭がイカれている。要は自分を満たすためにここにいると言っていた。

「異常者が!! ならば、俺達軍人が貴様を満たしてやるツ!!」

「同感だな!! 軍人の本懐、果たさせて頂こうか!!」

「あいつの台詞じゃないが……亡霊は暗黒に帰れツ!!」

ツバサ、クロスハート、リデイの軍人トリオが一斉に襲いかかる。

マラサイで果敢にツバサが剣を抜き、背後から切りかかった。

右方からGエグゼスが、左方からデルタがサーベルを構えて突撃する。

完全なる死角。周囲には三角形を保って三機が囲んでいる。

……が。

「心意気は良いな!! 気概もいい! 次は貴様らも覚えておこう!! だが、今は邪魔をするなツ!!」

ブラックファントムは、困ったにも関わらず難なく回避した。

順を追うと、先ずリデイのデルタに実弾の爆弾を放った。

サーベルの切っ先に当たるように調節。着弾し、破裂する。

爆風で近くに来ていたエグゼスの視界が奪われ、その間に手早く横合いに入り、エグゼスを横に蹴り飛ばす。

機体を操り再び接近、今度は真正面からマラサイの一撃を自分のサーベルで受け止め、そのまま真横に反らした。

逸れたマラサイのサーベルが、近くに吹っ飛ばされて体勢を立て直すエグゼスの脚部に貫通。

そして、エグゼスの動きが止まる。マラサイの武器が刺さり、隙が出来たマラサイの頭を残った斧で叩き割った。

二機をさっさと撃破。余ったデルタは、足元にライフルで撃って爆発で土煙で動きを封じた。

三人は、対応の速さに度肝を抜かれた。

一瞬、ツバサに至っては何が起きたか理解できてない。

「邪魔をするな、素人が!!」

で、接近するのを後退しながら撃っていたジムは呆気なく突進を受けて倒れる。

「きゃあ……ッ!!」

悲鳴をあげて、倒れたショックで聖はコックピットのなかで気を失ってしまう。

ジムも、打ち所が悪かったのか、黒煙をあげて沈黙した。

追加した装甲が仇になり、転ぶと起き上がるのに時間がかかる。

ギラードは、棒立ちしているデルタカイに接近していた。

「逃げろアメリカス!!」

リデイがデルタで駆け寄りながら叫ぶが、彼女は聞いてない。

「いやああああああ!!」

恐怖に支配されて、我を失っている。

泣き叫ぶアメリカス。そこに迫る変態のブラックファントム。

「どうした!? 戦え、ガンダムよッ!! 貴様の意志はその程度か!?!」

吼える亡霊のパイロット。

彼は気付かない。あまりにも、彼女を追い詰めすぎた。

とうとう、サイコミュがアメリカスに伝える彼の衝動、正直すぎる一種の変態と大し

て変わらない感情のせいで。

まあ、要は。

……逆上してしまったわけである。

「きやあああああああ!!」

変態が近くにいることに気付いて、更にパニックになるアメリカス。

意思として具現化する前の、殆ど防衛本能に近いモノまで、サイコフレイムは拾っていた。

変態から身を守りたいアメリカス。

反射的に、戦うことを選んだ。身の危険をダイレクトにサイコフレイムが伝えた結果。

意図せぬ形で、彼女の光は発現する。

「い、いやああああああああ!!」

突然、デルタカイの関節という関節から、蒼い炎が吹き出した。

そう、それは燃え盛る蒼い焔としか言いようがない謎の煌めき。

本来、違う形で燃えるはずのそれが、サイコフレイムが彼女の恐怖に耐えきれずオーバーフローを起こした。

伝わりすぎた防衛本能が、原理が見えない現象を起こしていた。

彼らは知る。これは、新たなサイコミユの暴走とも言える美しくも儚く、痛々しい少女の光。

変態から逃げるべく、幼い少女が怖い変態をぶつ殺すために見せた、奇跡の光であるのだと。

蒼い燐光

ジオンでは漆黒の幻影、連邦では漆黒の亡霊と呼ばれる男は見た。

(おお……おおッ!! これだ!! あの時に輝いていたのはやはりお前か、名も知らぬ少女よ!!)

関節から燃え盛る蒼い焰。

見える、見えるのだ。

あの圧倒的な熱量!! 命が輝いている!!

彼が求めていた、魂が焦がれていたあの光が、目の前に!!

(静寂の蒼!! 今黒いジムに乗っているのは、ならば殺戮の紅か!? ふふふ……昂るッ!! 昂るぞオツ!!)

彼は本当に充実していた。

彼が欲しいのは、戦いの時に熱を帯びる強い感情であった。

強ければその本質は何でもいい。殺戮だろうが、静寂だろうが、輝きを放ち、それと戦えるのなら。

情報を集めていた甲斐があった。

何やらジムは居ないが、知らないガンダムの話を聞いてすつ飛んできた価値があった。

あの時の少女だろう。それは、合っているだろうが……。

(満たされる……だが、少々違うな。ふむ?)

然し、ふと気付く。なんだか、あの煌めきは様子がおかしい。

確かに、命を焦がして放つ光であることには間違いはない。

だが、これは……。

(コロニーの時とは違うな。これは……怯えか?)

彼は蒼い焰を見て、直ぐ込められた感情を見抜く。

これは、怯えだ。恐怖だ。あの時の……見ているものを安心させる輝きではない。

もつと儚く、もつと脆く、もつと弱く、痛々しい灯火。

(まるで、弱い。見ているものを不安にさせる、悲しい光……)

凄まじい威圧感こそある。圧倒されるのは違いない。

けれど、それは小動物が精一杯身体を大きくして威嚇しているかのような、虚勢に等しい。

足が竦み上がっているのを、懸命に隠している小さな動物。

(ぬう……!! ……これは……!!)

彼は、初めて躊躇いを覚えた。

なんだ。この、自分よりも弱いものを、武力で潰そうとしている感覚は!?

自分に呵責があるとは思わなかったが、目の前の機体を見ると、妙に戦うのを躊躇する。

必死になって抵抗しようとしているか弱いモノを、彼はこれから踏み潰そうとしているのか。

簡単に言えば、彼にも美学と言うものがあつたが、躊躇いは感動によって、塗り潰されたのだつた。

「うおおおおおおお!!」

突然、ブラックファントムは雄叫びをあげた。

ビクツと反応するデルタカイ。また追い詰められて、彼女の余裕が削られる。

「違うッ!! 違う違う違う違う違う違う、違うのだアッ!!」

彼は戦場その物に向かつて、相手などいなくとも叫びたかった。

コックピットの中で、彼は操縦席を拳で思い切り殴っていた。

「貴様!! 貴様は、痛々しいッ!! その輝きや良しッ!! だが、僂すぎるッ!! 戦場の風で吹き飛ばような、刹那の光は、戦いの光ではないッ!! 今の貴様は、ただただ痛ましいぞオツ!!」

条件は満たしている。けれど、種類が違いすぎた。

彼は、オープンチャンネルで全ての人々に叫んでいた。

「だが、敢えて言おうッ!! 今の貴様は、とても僂い!! 故に美しい!! なんと美しい光か!! 俺の拙い語彙では言い表せない程に、純粹なる蒼を貴様は、俺の求める光を放っている!!」

彼がある種の感動さえしていた。

死期の際に来た、虹色を思い出す、僂くも、だからこそ価値のある輝きを、目に焼き付けたと思う。

「素晴らしい!! さあ、刮目して見ろ!! 分かるか、これが命の輝き!! 純粋な意志がサイコミュを通じて発現する、人間の可能性と云うものだ!!」

変態が叫ぶたび、中で悲鳴をあげる彼女は泣き叫ぶ。

注目される。こんな変態にオモチャにされて、晒し者にされている恥辱。

結局、身体目的じゃなくて、心を凌辱する気だったか!!

「いやああああああああ!!」

怖い。変態怖い!! なんでこんなのがここにいる。

ひたすら泣き叫ぶ。殺さないで。こいつは今すぐ殺さないで。

心が堪えられない。死んでしまう。

「この狂人がツ!! 調子に乗るんじゃない!!」

リディが居たたまれない気分になり、乱入。

再び斬りかかるのを、難なくアックスで防御。

『金のガンダム、貴様はこの光景を見て、心を突き動かされないか!?』

「ああ、そうだな!! 動かされたとも、貴様のような変態が子供を弄ぶのを止めさせる為にな!!」

何度めかの応答。亡霊は恍惚とした声色で問いかける。

この男が、救いがたい変態であるのは理解できた。

アメリカスを弄び、反応を見て悦に浸るただの変態だ。軍人として、何より大人として。許せない悪が目の前にいる。

「貴様はもう、喋るなッ!!」

『出来ぬ相談だな、ガンダムッ!!』

蹴り飛ばされて、仰け反る。その間に、デルタカイに奴は迫っていた。

またも、彼女を苦しめるのか。近づく変態。

クロスハートとツバサも立ち上がろうとするが、頭部を破壊されたマラサイではマトモに立てない。

エグゼスは、関節を破壊されて、脚部のスラストーまで死んでいる。これでは間に合わない。

「美しい輝きの少女よ!! さあ、存分に戦おうぞ!! ふはは、ふはははははははっ!!」

大興奮の変態ファントム。感情が更に昂る。

戦う前に、彼に感動するような餌を与えたせいで、加熱する欲望。

で、サイコミュは律儀に全部拾う、伝える。

「……っ」

喉が渇くほど悲鳴をあげていたアメリカス。

叫び疲れて、俯いた。

頭の中がぐちゃぐちゃする。

気持ち悪い。頭が痛い。

……でも、するべきことは、分かっていた。

警告するマシン。いわないでいい。分かっているから。

近づいてくるんだろう？ 誰が自分の身体に、機体に触れさせるものか。

世の中では、幼い少女に対するお触りはどこの世界でも犯罪なのだ。

それを分からぬ、変態の大人は……。

「……死ねええええええええええええええええ!!」

ぶち殺し、確定であった。

デルタカイ、再起動。

と言うか、漸くアメリカスが戦える状態に戻った。

「この、この変態がッ!! 死ね、死んでください今すぐにイッ!!」

目と顔を真っ赤にして、泣きべそをかいた状態で応戦開始。

シールドからサーベルを引き抜く。バルカン掃射で足を止める。

因みに今でも混乱している。サイコミユが拾う欲望の塊を迎撃する。

なので、マトモな判断は出来ない。暴走している。

回避するギラドローガ。後ろにいたデルタを巻き込む。

『うお!?!』

「お前も、ロリコンですかッ!?!」

プツツンしているアメリカス、何故かデルタにも突然切りかかった。

驚愕のリデイ、慌てて防戦。振るわれた一撃を受け止める。

「おおい!?! 何すんだ、俺は味方……!!」

『死ねロリコン!!』

画面に写ったアメリカスは泣き叫び、リデイを殺そうとする。

血迷ったか、とリデイが怒鳴り返す。完全に血迷っていた。

なんとか弾き飛ばして、飛翔。反撃できないので、変形して空に逃げるリデイ。

で、背後から近寄ったギラドローガにも対応する。

「ふはは、激しいなガンダムッ!! いいぞ、もつと命を燃やせエ!!」

調子に乗る変態。更に銃撃を浴びせるがシールドで防ぐ。ある程度の耐久性はあるので、難なく防御した方がいいが。

興奮がやまない彼に、逆上するアメリカス。

「死んじやえ!! ロリコン死んじやえ!!」

冷静な判断ができておらず、本来の実力を発揮できてない。

燃え盛る蒼い焰は激化する一方で、彼女の精神も燃え付きそうだった。

隅つこで、脱出したユーリが、聖をジムの中から助け起こして、ついでに侵入。

通信を使って、彼女の状況を困惑するツバサたちに伝える。

NTの感応なのか、あるいは同性だからか。痛いほどよくわかった。

「リディ少尉、取り敢えず逃げて!! 今のアメリカスは、見分けがついてない!! 同じ口

リコン扱いで、敵だと思って襲ってくるよ!!」

碎いて説明すると、逆上する彼女は頭が変態を追い払う事で一杯。

で、変態のカテゴリーにリディも入っている。ロリコン少尉と呼ぶだけあって。

なので、裏切りではなくリディも変態。以上。

『ふざけるな!! 誤解だつて言ってるだろ!! まだ根に持ってたのかあいつは!』

キレるリディ。やはり姉妹共々、リディはロリコンの扱いに収まっているらしい。

あの変態と同類と思っているアメリカスは、身を守るべく必死になっているだけ。

落ち着けば、多分大丈夫。

聖が何とか意識を取り戻し、リディロリコン疑惑の部分だけ聞いていた。

「……リディさん……」

非常時にアメリカスにロリコン判定を受けていて、聖もちよつぱり疑った。

疑惑の声で呟くと。

『違う、違うんだ聖!! あれは何かの間違いなんだ!! お前まで俺をロリコン扱いしな

いでくれ!!』

味方が居なくなりそうで怖いリディは懸命に否定する。

そうこうしている間に、他の襲撃者は警備隊の抵抗あつて、撤退し始めた。

然し、変態フアントムは退いていかない。戦いを、アメリカスへの付きまといを止め

ない。

「甘い、甘いぞガンダムツ!! もっと輝け!! 俺を導く光となれ!!」

大喜びで殺しあつた。

よく見れば、何で頭が吹っ飛んでいるのにあそこまで激しく動けるんだろう。

デルタカイは無傷。ギラドーガは頭部を欠損、武器の損失が著しい。

サーベル一本で切り結んでいる。

「いやああああ!! 触らないで、近寄らないで変態ツ!!」

再び泣き叫ぶアメリカスが、蹴り飛ばして踏みつけて殴り飛ばして追い払う。ぼこぼこになっていくギラドローガ、しかしまだ動く。

最早アメリカスは武器を使うことすらしなくなった。

余裕が究極的に無くなって、焰が機体のシルエツトすら包むほど激しく燃え盛る。オカルトの度合いにまでいつていた。

「楽しい、楽しいなあガンダムよ!! お前の美しさは戦場でこそ洗練される!!」
「うるさいバカ!! 死んじやえ!!」

外部スピーカーに切り替えてまで罵り、変態は喜びを噛み締めている。
MSでの殴りあいになっている二機だが、とうとう終わりが見えた。

「もう、嫌ああああああああ!!」

一際アメリカスが叫んで、デルタカイに異変が起きる。

なんと、蒼い焰は背面のファンネルに燃え移った。

挙げ句には、そのファンネルが突然外れて、宙に浮かび上がったのだ。

「……まさか!?!」

二つの大型ファンネルは、そのまま地上だというのに宙を舞って、動き出す。

宇宙でしか使えないはずのファンネルを、何でかアメリカスは追い詰められて使っていた。

重力で浮かぶわけがないのに。見ていた多くの人間が愕然とする。

思い当たる節が分かったのは、上空で見守っていたリディ。

そして、様々な知識のあるユーリだけだった。

(サイコ・フィールド!? 凄い、アメリカス……一人であの現象を起こしてる!!)

(あいつと似たような現象が起きてるのか!? 大丈夫なのか、あれは!?)

サイコ・フィールド。

宇宙世紀で何度か目撃されるサイコフレームやサイココミュのオーバーロードで発生すると言われる、謎の現象だ。

詳しい原理は不明。ただ、並外れたNTの強い感情に反応して、サイココミュが起こすと言われている。

少なくとも、同じレベルのNTが揃わないと発生するのが難しい筈なのに。

彼女とデルタカイが、今それを引き起こしていた。

「何の光!?!」

ツバサが思わず叫ぶ。本当に何の光だろうか。

燃え盛るを通り越して、機体本体が炎上しているようにすら見える蒼い焰。

ただの焰の塊になっていた。

「ふはははははははっ!! この瞬間を待っていたのだアッ!!」

で、変態のテンションもてっぺんを突き抜けた。

意味不明な宇宙海賊の台詞を叫んで、真っ直ぐ突っ込んでくる。

斧を振り上げて、切り殺そうと。相手は絶賛綺麗な蒼で炎上中。

で、ファンネルは？

「だから、俺は誤解だつて……うわああ!？」

空戦していた。彼を燃えたファンネルがデルタを追い回して、大空を駆け回っている金色と蒼の軌跡。

拡散ビームがリディを襲う。装甲のおかげで、まだ何とか生きている。

そして、決着はついた。

突っ込むギラドーガ。それを、思い出したようにサーベルを抜き放ち。

大きく振り上げたアックスが落ちる前に。

「変態なんか、消えてなくなれエツ!!」

アメリカスの悲痛な叫びが木霊する。

剣を兎に角めちやくちやに振り回す。

機体を達磨に仕上げて、拳げ句に胴体に打突出来るシールドを突き刺し。

「ロリコン死ねエツ!!」

渾身の、ハイメガキャノンゼロ距離発射。

フルパワーでぶちこんだ。

よく晴れた青空に、ハイメガキャノンが疾走する。

「ぐあああああああー……!!」

変態の断末魔。爆発するギラドローガ。

敵は、死んだ。悪は、滅びた。

漆黒の幻影、あるいは漆黒の亡霊、いやロリコンファントムは汚い花火となって散った。

「はあ……はあ……」

荒い呼吸で、彼女はコックピットを開いた。

上の方で、俺は誤解だー！ という誰かの悲鳴と爆発が聞こえたが気のせいだろう。焰はすぐに収まった。デルタカイは無傷のまま、パイロットは飛び降りる。

「アメリカス、大丈夫!」

「無事……?」

ユーリと聖が駆け寄る。

すると、途端に。

「うええ……」

ベソをかき始めるアメリカス。相当怖かったらしい。

二人に、初めて大きな声で泣き出した。

抱きついて泣きじやくる彼女を、ユーリと聖が慰める。

彼女を狙う変態はもういないと、二人は懸命に話しながら、保護していく。

こうして、甚大な被害を受けた警備任務。

機体の損傷が激しいので、なんとか生きてたりデイと爆発したのに何故か故障で済んだデルタ以外の機体を、新しくするのであった……。

……追記として。

「俺は死なぬ。何度でも甦るさ。何故なら俺は満たされていないからだ!!」

こいつも生きてた。なんで? どうして? それは、誰にも分からない……。

雪崩れる剣、新しい仲間

アリアは、見慣れない船に乗っていた。

そこでは、何やらおっさんの整備士がガンダムの整備に明け暮れている。

一応、奪われた太陽炉の代わりに、ジェネレーション所有の太陽炉を一つ、緊急として貸し出した。

その搭載と調整をしているのに立ち会っている。

「然し……今さらエクシア？ バカじゃないの？」

隣に立っているガンダムのマイスター、刹那という青年に向かって毒を吐く。

彼は、渋い表情で沈黙する。これは、苦肉の策なのだ。

本来の乗機であるダブルオーは、太陽炉一つでは動かない。

貸し出しは一つまでだ。それ以上は面倒を見切れない。

で、そもそもが彼のミスでこんな大事になっているのだ。

いわく、昔の旧知の戦争屋に襲われて、抵抗空しく袋叩きにされた。任務中にアロウズが襲ってきたという。

「勝ち目がないならなんで素直に逃げないのよ。あのね、今の世界情勢分かってるでしょ？ 太陽炉の優位性なんてとつくに消えてるから。それをマイスターに失敗は許されないからとか抜かして無視して戦って……。結局負けて破壊された挙げ句に奪われた？ 許されないのはどつちかしらね？ おかげでうちはいい迷惑被ってるわ。何の指示でやつてるか知らないけど、柔軟な対応できないぐらいなら今すぐこんなバカは止めることね。身の程知らずも大概にしなさい」

かなり辛辣に酷評するのを、ソレスタルビーイングのクルーたちは不愉快そうに聞いていた。

が、一部事実であるために言い返せない。ジェネレーションに泣きついたのは実際の通り。

詳しくは互いの事情は知らないが、得体の知れない謎の組織から太陽炉を借り受けている時点で、彼らは感謝しなければいけないのだ。

根本を破壊されるような真似をしたのも、そのとぼつちりをジェネレーションが負担しているのも、彼らだって分かっている。

「あんた、実力の差は分かっていたのに勝てると思ったの？ 機体に救われているのに

「？」

「……」

聞けば当時、他のマイスターもその場にいたというが、敵の戦力が圧倒的すぎて倒しきれずに各自かなりの損害が出ていた。

惨敗、と言うのが有り体な評価だろう。

「少数精鋭が聞いて呆れる。うちみたいに、規模が段違いならまだしも、小規模でアロウズとやりあうって正気の沙汰と思えない。うちだって、連中とは出来れば戦いは避けたいの、あんたら潰す気なんでしょう？ 逆に潰されるわよ。たかだか、太陽炉奪われただぐらいで、悲鳴あげているようじゃね」

対極的に見れば、アリアの言うことは尤もで、機体の性能が高かったから精鋭で戦えた。

だが、質が同じになれば勝つのは物量だ。故に、彼らは今苦境に立たされている。敵と定めたアロウズには勝てず、敗戦続き。

「ねえ、戦術予報士のお姉さんもさ、冷静になった方がいいわ。マジで、あらゆる世界から潰されるわよ、この組織」

振り返り、腕を組んで眉間にシワを寄せる女性にアリアは言うが。

「ご忠告ありがとう。でも、私達も目的があるから……止められないし、逃げ出す気もな

いわ」

耳が痛い指摘にも、そういつて返した。

アリアは益々呆れた。最早酔狂の類いである。

支援もなしに、財政事情が厳しいと言いなながらこの態度。

もう、救いようがない。

「あつそ。でも、うちは慈善事業じゃないわ。きつちり、報酬は頂くよろしくね」

「ええ。で、その報酬のお話なんだけど……ローンつて、やつぱりダメ？」

「絶対ダメ。あんたら甘い顔したら踏み倒すでしょ」

ほら、こーうやってまた甘えてくる。

残念そうに項垂れる女性。

アリアはもう一人のマイスターに警告する。

「次負けたら、うちで修理の肩代わりして出すけど、代わりにあなたのガンダムから太陽炉押収するからね、ヘタレ」

「えっ？　なんで僕!？」

「あんたが現状、一番本気にほど遠いから。それが嫌なら、とつととソイツを目覚めさせなさいな」

「そんな理不尽な……」

この取っ捕まっていたマイスターは二重人格で、片方が今起きてこないので、本領発揮できないと聞いていた。

だったら、起き上がる環境でも作れば起きるだろう。無理やり。

「ふんっ……。残念だけど、そんな彼女といちやついているようなスケベ野郎に与える太陽炉はないわ。ミスったら無理矢理報酬で搔っ払うんだから。代わりにうちで余っている疑似太陽炉でもくつつけてなさい。どうせ腐るほどあるから、タダであげる」

「あつ、そっちはタダでくれるんだ……。じゃあこの際、在庫処分つて形で横流しは……」

「ダメ。あくまで、報酬で低下するのを面倒見てあげるだけ。甘えてんじやないわよへタレ」

「そのへタレつてのはやめてくれないかな……。自覚あるから……」

「じゃありア獣」

「リア充!？」

「リアル獣」

「リアル充実よりもっと悪いじやないか!! 君の悪意が見えるようだよ!!」

へタレが怒った。肩を竦めるリアに、もっと怒る。

恐らくは、こいつも相当な実力者だろうが、このへタレの性格のせいで出しきれない

部分があると思う。

優しすぎるのだ。こんな風に軽口に付き合ってくれるし。

因みにアリアが気に入っている数少ないソレスタルビーイングの美点だ。

良い奴がいる。なので、これでも多少サービスはしている方だ。

「……アリア。本当に、すまない。今回は、感謝する」

で、刹那が突然詫びと礼を言ってくる。寡黙な男だが、こいつも根は嫌いじゃない。

「ん、別にいいよ。個人的にあんたは気に入っているしね。で、アヴァランチのパーツは

……まあ、請求しないでおくわ。ご鼻屑に、とは言わないけど少しは頑張つてよね」

「助かる。懷事情は……俺にはよくわからないから」

「あんたのとき、あんたが思ってる以上に金がないのよ。世界の敵つてのは、そう言うこと。この前、支援してた組織もアロウズに潰されたんでしょ？」

女性に向き直つてきくと、頷かれる。

支援していたソレスタルビーイングの関連組織が、アロウズに潰された。

そこに保管してあった予備のパーツも全部強奪されたらしい。

挙げ句には、丁度前日に別世界から流れ着いた壊れたオリジナルの太陽炉もいくつつか

保管してあったそうで。

直すのに手間こそかかるが、最悪それで今回はどうにか出来ると思ったらこの様だ。

刹那が奪われた太陽炉の前に、入れておいた予備が丸ごと消えた。故に、泣きつくしかなかったのだ。

なので今は、ジェネレーションにある関連のパーツを買い取って使用している。報酬額が膨れ上がるので、労働で現在支払っている。

「こっちのオペレーターの子、凄く嫌そうな顔してるけど頑張ってるわ」「フェルトに何をさせているんだ……!?!」

労働に駆り出されたフェルトというオペレーターは、今はジェネレーションでオペレーターとして雇われている。

別口でキチンと給料も支払っている。本人は、不服そうな顔をしているが。

「意外とマトモだった!?!」

「ヘタレ、あんたの彼女も回収してくわよ?」

どんな悪党だと思われているのか。

ヘタレの反応に脅すと、勘弁してくれと嫌がるヘタレ。

で、他のマイスターも戦力扱いで雇われた。

堅物のメガネは小言が多いが金がないから我慢しているようだ。

キザな優男の素人はあまり他の機体に乗せてもやり方を分かってないので、とりあえず雑務。

双子が凄まじい拒絶反応を起こして先日殴り飛ばしていたが、仕方ない。

言い寄ったあいつが悪い。彼女いるくせに。

「ロックオン何をしているんだ……」

「浮気って事で報告したら、しばらく口を聞いて貰えなかつたんですって」

「だろぅね……」

作業が終わるまで暇なので、寡黙な刹那に変わって話し相手にヘタレを呼んだ。

昔、派手に破壊された彼の嘗ての愛機、エクシア。

その強化パーツをつけたのがこのアヴァランチエクシアだ。

各所にパーツで補強して、アロウズの機体とも戦えるようにしているらしい。

元々は既に旧式。然し、刹那も愛着があつて、近代化改修を重ねた結果、いけるだろうと思われる。

なので、今は彼は徐々にエクシアで戦場をかける。

「エクシアが、生まれ変わるのか……」

「二応、色々改造して短期決戦しかできない短所もカバーしておいたわ。あと、うちで改良した小型の疑似太陽炉もくつついているし」

「!?!」

聞いてない、と刹那は感慨深そうに見上げていたが此方を見た。

アリアはあっけらかんと言った。

「強化プランと言えど、あんな欠陥だらけのフルアーマー、実戦に投入できると思っているの？ コンデンサーじゃ賄えない分を補助するとなると、こうでもしないと戦えないわよっ。」

「俺のガンダムに……何をした!?!」

途端にキレル刹那。このガンダムバカ、ちよつとでも黙って改造するとすぐ怒る。

だから説明しているし、整備士のおっさんにも許可はもらってあるのに。

「貴様は歪んでいるツ!!」

「喧しいガンダムバカ!! 歪んでいるのはあのヘタレの根性だけだつての!!」

「なんで僕を巻き込むのさ!?!」

ぎやあぎやあ言いながら、刹那の旧友が、相棒が、生まれ変わる。

ガンダムアヴァランチエクシア。それが、何年も前に彼が駆け抜けたガンダム。

そして、失われた太陽炉を取り戻すための、雪崩を名乗る剣であった……。

彼らがこんなやり取りをしている数日経過した頃。

知らぬ間に、彼らは交わっていた。

アロウズが管轄する大きな都市にアメリカスは出掛けていた。

ノーフェも暇そうにしていたので、新人との交流に出すために引きずってきた。

新たに来た人たちと、用事を済ませるためであつたが。

然し、仇になる判断。何故なら……。

「デメエ、やろうつてののか!？」

「あははははははっ!!」

通りすがりの若い前髪で片方の目を隠す男と、ぶつかって揉め事を起こした。

相手がよそ見をしていたので向こうが悪いのだが、ノーフェが怒って蹴り飛ばした。

クローンであるため、凄まじいパワーを有するノーフェの蹴りで吹っ飛ばす男性。

路肩に止まっていたバスに背中をぶつけて、失神してしまつたのか、一度沈黙。

仮にも軍人がなにやっつてんだ、とアメリカスが顔面蒼白になつて駆け寄ると……。

「このガキ……やりやがつたな!？」

突然復活。しかもなんかキレているというか、凶暴化している。

何事か、と驚くアメリカス。

「あらら……中身が変わってます？　ま、良いです。かかってこいや、ですよー？」
起き上がって殴りかかろうとするのを、笑ってノーフェが挑発する。

「上等じゃねえか、テメエも似たようなもんらしいなあ!？」

「あれ、分かりますか？　……じゃあ、こうなったらもう決着は拳しかありませんね？」
何やら意味不明なやり取りをして、構える双方。

頭を抱えるアメリカス。もういやだ。なんでストリートファイトしてるのこの妹は
!?

「穏やかじゃありませんね……」

連れの一名が、ひきつった笑みでぼやく。

中肉に平均的な背丈、黒髪に黒い目の地味な顔立ちの青年。

この間の人質たちの一人のハヤブサ・イツセンという人物だった。
服装も至って地味な普通の好青年である。

「イツセン、すいません……アロウズの人呼んできて下さい」

「はいはい。了解ですよ、アメリカスさん」

年下にも敬語で、人だかりが集まりつつある歩道の通行人を掻き分けて、イツセンは

警備のアロウズを呼びに行く。

「行くぜエ!! 覚悟しやがれよガキイツ!!」

「きやはははははは!!」

ファイト開始。人間離れた男と笑っている子供の喧嘩が始まってしまう。

「……………」

連れの少女も顔色が悪い。

そう言えば、医者が彼女を男性恐怖症の可能性があると saying していた。

記憶喪失らしく、今日もさつきまで軍医に見てもらっていた。

大きなジャンパーをきて、下にはスカートをはいて、長い銀髪を一つにあいて下ろしている。

右目に眼帯をする彼女はオリビア・オルコット。アメリカスが面倒を見ている、訳ありの友人とも言える存在であった。

早くも、最近男に対する警戒心が上がってきているアメリカスとは意気投合して、お友だちになりつつあった。

「アリー……ノーフェが」

「今は無視です、オリビア。気にしちゃいけません」

アメリカスをアリーと愛称で呼ぶ彼女は、自分よりも小さいアメリカスの背中に隠れ

た。

「というか、アメリカスは遠くにいるのに、人だかりがどんどん大きくなる。

「どうする、アメリカス。……止めるか？」

「え、出来るんですか？」

「一応。この通り、コルク銃なら常備してる。狙い打てばいけるが」

「コルク銃って……」

トレンチコートをきた、紺の色をしたボサボサの短めな髪の毛に、同色の三白眼の目付きの悪いやせ形ながら、筋肉質な男が本当にコルク銃を取り出していた。

捕まらないギリギリの範囲らしい。

名を、イムヤ・セーレン。彼も最近加入した新人であるが、狙撃が得意な男である。かなり距離が離れているが、少し高い場所に避難している彼ら。

一応頼むと、承知と直ぐ様コルク銃を構えて、狙撃した。

「……あぶねえ!？」

軽い音がして、大人の方に飛来するコルク。

が、超人的な反応でそれを回避。舌打ちするイムヤ。

が、隙ありとノーフェが仮面を被って頭突きをかました。

また鉄仮面被っていた。しかも武器にした。

「ぐああ!？」

「ふはは、痛かろう」

声が変わって野太いおっさん声で笑う。

鼻を押さえて呻く男性は更に殴りかかっていく。

「すまん、無理だった」

謝るイムヤに礼を言いながら、ため息をつく。

「血気盛んじやのう。手間のかかる娘じや」

白髪交じりの尖った短い髪の毛の若者が、年より臭い口調で呆れていた。

灰色の瞳に、左目に大きな縦傷跡が走っている。

無精髭のような髭が特徴な男性。厳つい顔をしている彼はジエイド・テイーアという。

一応、この集団の保護者を兼ねているのだが……。

「流石に手におえんわい。なんちゆう動きしてんじやあれは」

バトルマンガさながらの戦いに外野が沸いていた。

あらゆるものを使って二人は争っている。しかも楽しそうに。

仲裁は無理そう、とジエイドは言った。

「ですよね……」

イムヤは諦めて、オリビアは怯えているし、ジェイドは匙を投げた。イツセンが走って戻ってきた。

「連れてきましたよ!!」

と、言うが……。

「——グラハムパンチッ!!」

「ぐわあああああ!!」

誰だあれ。颯爽と二人の間に突っ込んで、いきなり男を殴った。

子供に何をしているとか説教しながら、言い訳をする男に。

「グラハムスラッシュ!!」

「ぐはあ!」

鉄拳制裁。容赦がない。

今のうちに逃げろと言うので、ノーフェ頭を下げて逃走。

逃がすまいと男はするが。

「GNグラハムツインバスターアツ!!」

「ぎゃあああああ——!!」

よくわからんプロレス技をかけて倒してしまった。

で、連行されていく男。死んでないかあれ。

一行が啞然としているなか、謎の男も颯爽と去っていった。アロウズの関係者らしいが……。

ノーフェにあとで説教をしながら、変な男に救われる日だった。

アロウズの極秘任務

アロウズの管轄する街では、クリスマスシーズンが到来していた。

戦時だと言うのに軍に守られた街は平和なもので、サンタクロースがそこかしこに現れて、イルミネーションが輝いている。

そんなアロウズに、緊急極秘任務が発生したのは、偶然ではなかった。

「救世主たるもの、人間たちが求めるものを放置するわけにはいかないな」
「何をいつているんです!？」

呼び出しを受けて、本部に向かった二人が見たものは。

真顔で、サンタクロースの格好に扮する自称救世主、リボンス様であった。

ご丁寧に白い髭までつけて、大きな袋を背負っていた。

「アメリカス、ノーフェ。極秘任務だ。人間たちに、僕ら救世主からプレゼントを配るから手伝っておくれ」

何をいつているんだこいつは。

啞然としているアメリカス。ノーフェは先ず彼に一言。

「ならプレゼント下さい」

「いいよ。何がいい？ 新しいマシンでもほしいのかい？ それとも、別の物かな？」

「気前良すぎませんか!」

リボンスは笑顔で、ガサガサ袋をあさり、タブレットを取り出すと、ノーフェのワガママにあっけなく応えた。

何やら注文していたらしい。あとで来るというと、大喜びのノーフェ。

それは放置しておくとして。

アメリカスが叫ぶと、当然のように語った。

「人間は本当に愚かだね。まさか、幼い子供にサンタクロースは居ないなどと嘘を教え込むなんて。両親など、単なる人間に過ぎないのに」

(普通はご両親じゃないんですかね……?)

アメリカスはクローン故に両親などいないが、普通の子供の場合は、両親がサンタクロースの筈である。

なのに、この男と来たら。

「いるじゃないか、目の前に。そう、僕達イノベイターこそが聖夜の伝承に伝わる、サンタクロースだッ!!」

……何を堂々と意味悲鳴な事を真面目に言っているのだろうかこいつは……。

聞けば、彼なりに理屈は通っていた。

「僕達イノベイターは、人間を導く存在だ。導かれる人類は知らないだろう。彼らが伝えていた伝説の存在が、僕達だと言うことを。僕は、人間の存在を愚かだとは思いますが、文化まで否定する気はないよ。寧ろ、推奨しているぐらいさ。子供たちが夢見る聖夜の伝説は、実在するのだと。そうして僕達は文化が廃れるまで、永遠に語り継がれるのさ。素晴らしいと思わないか?」

要はこいつ、自分が伝説の存在になって子供たちに崇拜されたいだけだった!!

そんな自尊心のためにわざわざ行動を起こすあたり、本物というか……。

「一年に一度の聖夜だろう? 丁度僕もやりたいことがあったから、一緒にやってしまおうと思つてね。悪いが、付き合ってくれないかな? そちらの人間たちにも何か送る

う。交換条件でどうだい？」

他のイノベーターは、面倒くさいのと用事と寝るので勘弁してくれと断つたらしい。ノリのいい一部は、憧れの眼差し期待でやると言っている。リボンズは説明した。暇していた二人も、一応了承。どうせ寝ているだけならお金になるだけまだいい。

(意外とすっかり管理する気はあるんですね……)

この辺は流石と言うか。周りの評価は表面しか見ていないのもよくわかる。

クリスマスにまさかのサンタクロースの真似事。

というか、リボンズはサンタクロースの概念を奪おうとしているようだ。

「警備は他の人間に任せている。なに、荒事はしないさ。子供の希望を奪うのは僕の本意ではないし」

というので、結局彼のよくわからない極秘任務に付き合うことにした。

……で。

『うん、太陽炉の同調は悪くないかな。システムも安定している。トランザムも問題無さそうだ』

「ガンダムが……サンタに……!? ガンダムは、サンタだった……!?」

『その概念をこの夜に刻むのさ。僕達の手でね。今宵でアロウズの管轄する全ての街の施設を回るんだ。見られてもいいように、わざわざカラーリングを変えたんだ。似合っているだろう?』

「意外と違和感がないのは驚きですね……」

現在、武装を外した機体で移動中。

武装が全部ないリボonzのガンダム。リボonzガンダムとか言うらしい。

クリスマス仕様に塗り替えられた機体で、背中には大きな袋を特注で用意して背負っていた。

そりなども用意したかったらしいが、技術的に無駄なので仕方ない、新しい伝説を作ればいいと前向きに諦めた。

両腕の肘には、先日ノーフェと奪ってきたオリジナルの太陽炉が接続され、聖夜の夜に綺麗な緑色の粒子を放っている。

正直、ガンダムがサンタクローズでも違和感がない気がした。

一件目を回った時点で、何も知らない幼い子供たちが住む施設に、職員にはアロウズ

を通して話をしていたのか、笑顔で頼まれ社交辞令の薄ら笑いを浮かべてリボنزは進んだ。

「やあ、君達!! メリークリスマス!! サンタがプレゼントを配りに来たよ!!」

集団で待つていた部屋に颯爽と登場し、堂々と名乗った。

戦争孤児である子供たちは、サンタが本当に実在するかのように、簡単に信じてしまった。

嘘だろうと、後ろ手でチビサンタを名乗るサンタコスのアメリアスは絶句する。

リサーチしていたのか、個人の欲しいものを何でも用意していた。

この男、自分のためなら一切妥協しなかった。全員にきっちり、欲しいものを配り終えた。

そして言い聞かせる。サンタは実在する、僕がサンタなのだ。

プレゼントで浮かれる子供たちははしゃいで大喜び。

ありがとうと、純粋な笑顔でお礼を言っていた。

(うわあ……)

見たことがないくらいリボنزも満足していた。

背後で見ていくとよくわかる。満ち足りた表情で愉悅している。

なんというか、サンタ扱いがそれほど彼にとっては、重要なことらしい。

施設から立ち去るとき、見送りに来た子供たちの満面の笑みで、彼の自尊心はかなり満たされていた。

『子供は素直でいい。僕達がサンタであると、これでもう疑わない。見ただろう？ あの純粋な瞳を。そう、僕こそが人類を導くサンタクロースだ!!』

高笑いしながら去っていくのを、黙ってついていく。

やっていることは、間違いなく良いことなのだろうが……。

（動機が不純すぎるのと、中身がナルシストというのが……）

アロウズにしては、慈善事業のように夢を与えるお仕事。

然し本音はリボンズの自己満足である。

本来は奪った太陽炉の同調テストらしいが、完全に趣旨が変わっていた。

サンタクロース仕様と言うことで、二人とも違うガンダムに乗っていた。

全部赤と白にして、サンタのような装飾つけているが。

『乗り心地は如何かな？ アストレア、古い機体だが悪くないだろう？』

先日、気に入らない連中の組織を襲って壊滅させたついでに、呼びパーツらしきものを組み上げたら出来たのがこの古い機体、ガンダムアストレア。但しクリスマス仕様、武装なし。

アメリカスが乗るのは、リボンズからのクリスマスプレゼントだという。

まあ、使わないので誰かに譲ろうと思う。今はデルタカイがあるし。

『そっちの太陽炉は、壊れていたのをアロウズの技術で再生したんだが……やはり難しいね。完全ではないし、出力もかなり低い廉価品になってしまった。オリジナルと違って、疑似と同等ではお話にならない。そんなものでよめればもうひとつ、お土産に持っていくといい。僕のガンダムも、模倣で作ったけど……持っていくかい？』

クリスマスだからか、やけに気前がいい。

アストレアだけではなく、模倣品と言えどOガンダムまでくれるとか言い出した。

こっちは量産型のパーツも入っているただのコピーだが、ノーフェの予備機体にしたいと貰うことに。

どんどん、リボنزの要らないものを引き取っていくうちに戦力が膨れ上がる。

リボنزズは物をあまり大切にしない奴なのであった。

以前に、あのガンダムには乗ったこともある。頂けるなら頂いていこう。

他にも、

「T3……？」

何やら聞きなれない単語を操縦しているリボنزズは言った。

『ああ。テイターンズの部隊の一つだね。独自開発したMSを試験運用している部隊があったんだけど、アロウズと衝突してね。生意気にも、僕達を打倒しようと画策してい

たから、潰したんだ。で、その接收した機体が倉庫で余っている。アロウズはティターンスのような傲慢な態度の組織は認めない。嫌がって誰も使わないんだ。この間、かなり機体を任務中に破壊していたと聞いたよ。配備するものがないなら、貰ってこないか？ 正直、僕は見るのも嫌なんだ。ああいう、身の程知らずの人間が作ったマシンは』

リボンズが吐き捨てる。そういう人種が大嫌いなリボンズらしい台詞だが。

(何でもかんでも回収するの止めましょうよ……)

アメリカスは内心呆れていた。

アロウズは、倒したり潰した組織の機体は取り敢えず回収する方針らしく、使っていないマシンは数えきれないと言っていた。

あつても困らないし、あらゆる組織の人間がイノバイター下で、現場で働いている。需要に応えるべく、保存はしている。というのが、建前。

本音は、配備の間に合わない部隊にもしつかりと戦力が行き渡るようにするための方法。

戦力を消費しないために、奪ったものはそのまま運用。それがアロウズ。メンテするぐらいの技術はあるので、なおさら悪い。

一部では、異世界のAE社とかとも繋がりがあるとかないとか……。

道理で戦力が桁違いな訳である。奪ったものまで食欲に使っていけばそうもなる。主義主張なども、現場ではあまり気にする声も聞かない。

聞くのはアロウズが正義のために戦う組織だと言うことだけ。

『くすくす……』

話を黙って聞いていたノーフェが、リボンズと通信を終えたアメリカスに話しかける。

愉快そうに笑っていた。

「……何がおかしいんです？」

『身の程知らずですか……。リボンズが管理する世界に、人間の自由はあるんですかね？』

「ありませんよ。彼が行う統治は、人類家畜化計画とも言えます」

リボンズが目指す世界は、彼らが管理してゆく物理的恒久平和の世界だ。

どこかの議長がやりそうな過激な方法だが、そうなれば……。二人の意味もなくなるだろうか。

尽くす人類の消えた世界。ならばそこで、二人は誰に尽くせばいい？

ノーフェは戦いのない世界は退屈だと言う。

『暇な世界なんでしょうね。でも、そうですね……。そうなれば、私の目的も、簡単に達成

できるかもしれません』

「させると思えますか？ ノーフエ、あなたはわたしと死ぬんですよ。絶対に、逃がしません」

『勝ち目がないくせに。私のほうが能力は勝っていますけど？』

「どうでしょうね？ それこそ、サイコミュを暴走させて、あなたの意識だけでもあの世に連れて逝きますよ」

彼女が大人しくなったが、やはり根幹は復讐である。

全員殺すまで、絶対に満足しない。殺せばいい。リボンズ思想に、協力するかもしれない。

最悪、アメリカスが某天才のように、心だけでも壊して共に死ねば、それでもいい。

互いに異なる表情を見せる。ノーフエはバカにする笑みを、アメリカスは軽蔑の殺気を。

そんな交差するクリスマス。二人のサンタは、互いを否定しながら、夢を配り続ける……。

防衛戦 序章

ジエネレーションは、仕事を開始する。

手を結ぶテロリストが、近々反連邦組織と結託して、演説を行うとか何とか。

その支援をするのだ。打倒アロウズを目指すテロリストとしては、助力しない理由がない。

理念を曲げてでも、彼らは巨大な悪を倒す気であった。

(アロウズか……。多分、あいつは出てくるわね。でも、何で？ あいつは、一人のはずなのに……。なんであたしレベルの実力を持つパイロットがいるの？ イノベーター……?)

アリアは敵の戦力を分析していた。

正直言えば、ジエネレーションは全力を出さないために、負けているだろう。

仕事以上の事は控えないと、飛び火しかねない。あくまで、仕事なのだ。

慎重に事を進めていく。場所は地球のとある議会。

反連邦組織が、進めていくなかを見計らい、大気圏突入したのち、戦闘を開始する。ジエネレーションの面々は予め、合流地点に潜伏して、降下と同時に仕掛ける算段だ。ソレスタルビーイングの戦力は全員を投入するらしい。

先日、街で潜入していたヘタレがトラブルに巻き込まれてアロウズに引つ捕らえられたときは本気で焦った。

なんとか隙を見て自力で逃げてきたようだが、寝ていた人格が起きていて戻ってきてからもまた一悶着あった。

その後、言うことを聞かない裏ヘタレを、眼鏡とアリアが捕まえて、催眠術で何とかして漸く落ち着いた。

まあ、その間に俺はバトル番長だとか、バトルに生きてバトルに死ぬとか意味のわからない事を叫んでいたが……。

というか、超人的な身体能力であった。アリアの首をへし折って殺してくれやがった。

我に返り、潜入していたヘタレが持ってきた情報によると、アロウズには黒いユニコーンがいる部隊がある。

例の刹那が太陽炉を奪取された部隊なのだが、そこにもう一機、謎のMSが存在する。可変型なのだが、なんとあのデルタカイなのだそう。

(例のシステムを使えば、素人でもエースぐらいにはなれる。けど、それにしたって限度があるでしょ。そいつ、あまり前には出てこないって言うけど……だからこそ、よね) ただの人間ですら強制的に化け物にかえる代物。

忌々しいZの系譜が、戦場で暴れている。

然し、所詮はシステムに頼りきった産物に過ぎない。

パイロットの技術を昇華した、真のエースのようには。

強化人間だとしても、限界はある。

なのに、そいつは。まるで怪物のような戦いをすると言う。

そう。黒いユニコーンのように。

控えているのか、率先して戦わないだけで、逆に落とすものは全て落としている。

接近を挑めば、それこそ超人的な反応速度で回避して逆襲されて。

狙い撃ちすれば、狙った時点で居場所がばれる。

そんな次元のパイロットがいるとヘタレは言っていた。

裏切り者が、恰も分裂したかのように。

(……確かに奴は二重人格だと言っけど、身体は一つでしょうに。まさか、何かしらでもうひとつ身体を手にいれている!? アロウズなら、イノベーターの技術なら有り得るけど……。でも、そうすると完全にアロウズについているってことになるんだよね。

ええ、つまりどういうこと?)

アリアはある程度情報を知るからか、比較的早く考え付いた。

そして、それは正解であり、その意味する事も理解していた。

(ちよ……仮にこれが事実なら、あたしも流石に勝ち目ないんですけど!? マスターユニツト二名とか、あたしが二人いるようなもんじやない!? どうやって倍増した自分に勝てと!?)

絶望した。己を最強と自負するアリアは、二倍の最強と戦う恐怖に、作戦の撤回すら視野に入れた。

だが、それでは大損害を被る。ソレスタルビーイングには、きっちりと支払いをさせないといけない。

顔面蒼白になるアリア。血の気が失せた。

(難易度高過ぎ……。下手すれば皆死んじやうんですけど)

本気でうまくやるしかない。今更引けない。

アリアは頭痛を覚えながら、懸命に配置を考える。

願わくは、その二名が出てきてもこつちに来ないことを祈りながら。

その日は、意外と早く来た。

砂漠近くにある、ある大きな都市の警備任務。

まさかの大規模襲撃に備えて、都合のつくやつは全員来いと言われて皆はそれぞれ持ち場についていた。

新入りと彼らの仲間も例外ではなく、駆り出されていた。

アメリカスとノーフェは分かれて、上空の任務と地上の見張りを担当していた。

「んー……こちらジエイド。特に異常はないわい。至って落ち着いとる」

新入り、おっさん臭いジエイド。

街から離れた郊外の砂地の小高い丘に、機体を鎮座させて現在警戒している。

砂嵐を起こす砂漠には、至って平穏で防塵加工に無理を言っていた事を謝っておこうとあの平べったい少年みたいな少女に話しかけて、通信を終える。

「……うむ、うまいの!! この甘さ、実にうまい!」

コックピットにケーキを持ち込み、大胆にかじって食べていた。髭に生クリームがこびりついてもお構いなしだ。

その隣では。

「……おい、ジェイ。任務中だ、菓子を食うな」

同じく構えているジムスナイパーのイムヤが、スコープを覗いたまま注意する。

視界の端に開いたウインドウには、ガツガツ食べるおっさんの濃すぎる面構えがちらつきやりにくい。

「ん？ イムヤも食うかの？」

二つ目を取り出して食おうとしているジェイドに、ため息をついたイムヤ。

「……集中できん。せめて通信は切ってくれ」

一応、警戒も兼ねているのだ。

地上任務と言えど、気は抜けない。

それでも、新入りなりに重要な場所を任されているのだ。

気合いは入れている。こっちは異常はない、とイムヤはもう一方の見張りに連絡。

連絡を受けた方では。

「うう……分かんない……」

聖が慣れない機体のOSのアップデートに悪戦苦闘していた。

アメリカスが、上の人が廃棄する前にもらつてくれと言われていたので新しい機体を配備してくれた。

彼女は、ジムみたいなもんだと言っていた。前使っていたのと大差はないと。

嘘だった。全然別物であった。見た目だつて普通に見慣れたガンダムみたいだし。

いわく、ガンダムの皮を被ったジムと言うが。

「ええ……マニユーバがおかしい?」

せつせと機体の回避マニユーバを弄くる。エラー画面が出てきた。

途方にくれる。機体設定まで自分でそろそろやつてみるというのでやっている。

が、アメリカスが懇切丁寧に教えてくれても、素養のない聖には全く理解できなかった。

自慢じゃないが、戦争孤児なので勉強はからつきしだ。……以前のことは、思い出したくない。

辛い記憶ばかりで、この何度も修繕されたくまのぬいぐるみ以外は、何もないから。

彼女に拾われなければそのまま野垂れ死にしていた自信がある。

そんな聖に、プログラミングの才能などあるわけがない。

結局、同じジムに乗る新人の顔の怖いおっさんと無口なあんちゃんに教わる。

暇しているうちに、最低限入れておくとイムヤの指示でなんとか入れて。

ジェイドが初期のジムの設定を全部覚えていたので基礎に追加。

あの人、任務中にプリンをジュース感覚で飲み込んでいた。何考えているんだろう。更に、近くを見回っていたアメリアスが話を聞いていて、発展や応用をそのまま流し込めと言うので入力。

結果、かなり完成度が高い出来上がりだった。

「おお……」

簡単な操作で動く動く。簡略された動きは初めからアメリアスがセットしてくれていた。

膨大なシミュレーションをアメリアスの指示で起動しただけで、かなり機敏に反応する。

感嘆の声をあげる聖。この機体、確かヘイズルとかいうジムの親戚らしい。

最低限の武装と実験的なシステムがどうか言っていたが、アメリアスが知らぬ間に改造していた。

素人でも出来るように、不安な要素は全部排除して徹底的に安定した部品に変えたらしい。

おかげでスペック上昇に整備性の良さも向上して、出来上がりは良いと言ってた。

実験機を、聖に配備した時点でかなり心配していたので、有難い。

隣では、旧式のザクラー改に乗るイツセンが、何やら焦っていた。

「ちよ、え……防塵加工してないみたいですよこのザク!？」

慌ててアメリカスに連絡。起動してみたら、異常だらけだった。

前使っていたドムはエンジンが磨耗して、爆発寸前だったらしい。

まあ、あまり手入れせずには乗り回せばそうもなる。

で、どうせまた壊してしまうからとコストの安いザクを選んでもらったはい。

が、廃棄する直前のジャンクみたいなものだったようで、砂漠だというのに防塵加工してなかった。

おかげで、関節や至るところに砂が入り込み、異常を知らせるブザーが喧しい。

武装も何やら不調なようで、マシンガンが弾を詰まらせていた。

装填も出来やしない。

「思った以上に、不味いです……! これじゃ満足に援護も出来ません!」

アメリカスに対処を聞く。彼女は、冷静に対処法を教えてくれた。

機体のOSでカバーすると、設定を変更するように言うので、イツセンも指示に従う。

古めかしいキーボードを引っ張り出して、手打ちで修正していく。

一年戦争過ぎの旧式だからか、この手の奴まで手作業だった。

膨大なタイピングを終える頃には、指が痛かった。

見回りをしているアメリカスのいう通りにして、短時間で修正した。

「……よし。漸く黙ったか……」

ホツとするイツセン。が、問題は解決していない。

本当はただ誤魔化しているだけらしいので、任務が終わったら捨てろとアメリカスが言った。

無理して動く、機体の内部に入り込んだ細かい砂が、機体をボロボロにするとか。了解して、警戒に戻る。

「アリー……お母さんが何か言ってる」

オリビアは、修理してもらったラゴウに乗っていた。

挟み撃ちのように配置された狙撃や見張り、迎撃や支援などの彼らの防衛と遊撃担当である。

ラゴウは元来より、砂漠などの気候に強い機体なので、問題はない。

パイロットスーツが見当たらず、仕方なく私服で操縦している。

余程瞬間的に加速しなければ、オリビアの乗るこのコックピットならば大丈夫なよう
だ。

何せ複座だったのを単座にして、しかも衝撃を緩衝するような変な構造をしていた。
アメリカスは特に弄っていないが、出所不明のラゴウだから、気にしないことにして

いる。

それよりも、このラゴウには特殊な人工知能が搭載されているらしく、オリビアが母と呼ぶ女性的な人格が宿っている。

何故か、オリビアにしか意志疎通が出来ないが、凄まじい知力を持つものだ。

記憶喪失のオリビアに、常識などを教えていたのはこの人工知能だとオリビアは話している。

故に、アメリカスも意見は無視しない。何事かと聞くと。

「……遠くで、不穏な砂の動きが見えたって。えつと……座標、送る方がいい？」

地上で動き回るラゴウには何か見えたらしい。一応、皆にその座標を配布する。

上空の連中にも意見を聞いた。

アメリカスは中空で常にデルタカイで変形して見回りをしている。

特に異常は感じない。

「んー？ 私は特に感じませんが？ 足元のロリコン、何か見えましたか？」

ユニコーンで上空で待機するノーフェは何もない、と返答。

SFSとして、ユニコーンに乗っけるデルタガンダムは。

「誰がロリコンだ!!」面白がってるだろノーフェお前!!」

通信画面でチェシヤ猫のように笑っているノーフェに怒鳴るリディ。

リデイも何も確認はできない、と伝える。

「……こちら、ツバサ。アツシマーも感知はない」

ツバサは新しく、アツシマーを受け取っていた。

レーダーには何も変化はない。通常のまま。

開口一番、ノーフェに空飛ぶハンバーガー扱いされて久々にキレたが、改めてみると変形している時は見えなくもない。

こうしないと飛べないのだから、仕方ないだろうに。

フライングハンバーガーなんて酷いあだ名はやめてほしい。

「クロスハート、アストレアも何も異常はない。GN粒子ってのも、特に感じないから問題はなぞ」

クロスハートは、アメリカスが旧式とって頂いたアストレアを受領している。

しかし、流石は旧式と言えどガンダム。しかエネルギーが無尽蔵と来た。

初めて乗った時は感覚の違いでかなり苦労したが、今は何とか乗りこなせている。真つ白なガンダム。前の機体と色合いが同じなのは気に入っていた。

今回は、この面子で警備をしているのか。

オリーブが指摘した方向で、明確な何かをノーフェが感じ取ったところから、事態は大きく動くのだった……。

戦いの火蓋

反連邦組織は、上空から議会を目指して輸送船に乗って向かっている。

彼らから入電。空の上にも相当な数の防衛が敷かれていた。

予想以上の数で、彼らは悟った。襲撃を察知されていた。

何処からか情報が漏れたのか、あるいは探りを入れられていたか。

兎も角、想定外のMSが大量に待ち構えていた。

反連邦組織は、相手をテイターンスをメインにして、ついでにアロウズも巻き込もうとしていた。

だが、現実はもっと悪い。

重要な会議をしている議会を守るべく、なんとアロウズまで介入していた。

それも、こちらも相当な数である。彼らの配備するMSは反連邦組織のそれと大きな格差があった。

性能の差がありすぎて、このままでは蹂躪される。

質も劣れば、数も劣る。戦力の決定的な違いが顕著。

地上には言うまでもない。飛べない機体が警備している。

仕掛けるしかない、と少数しかいない反連邦組織は言う。

彼らには、伝説のパイロットが味方にいる。

だが、彼もこう言っているらしい。

「俺だつて神様じゃない。ただの人間だ。宛にされても、あの時とは状況も違う。出来ないことがある。不利を承知で行くならまだしも、俺達は戦争に来たのではない。あくまで、政治的な戦いをするのであつて、戦争をすれば負けるだろう」

彼ですら、物量を引っくり返すのは難しいと言わざるをえない。

一年戦争の時は、相手も疲弊していた。

大体、皆が想像するような一騎当千ではないと彼は苦言を漏らす。

「彼が言うように、NTはエスパパーじゃないんだ。況してや、戦争の道具でもない。人間として扱つてほしいな」

言外に、彼ほどの男でも、圧倒的物量までは、マシンの差を考えても正面から突破は無理と断じた。

だから、どさくさに紛れて突破することにした。

派手に表で陽動をして、戦力をそつちに少しでも向ける。

最低限の護衛をつけて、速力で逃げ切る、という作戦であった。

その為に、わざわざテロリストにまで応援を頼んでいるのだから。

キーマンであるグラサンの男を議会に送る。そうすれば、彼らの勝ち揺るがない。

……筈であったが。そうは、問屋が卸さない。

彼らは知らない。この時点でもう、彼らには……勝ち目なんてないことを。

イノベイターという存在を、彼らは知らなすぎた。軽視しすぎた。

そのつけは、戦況という見える形で、跳ね返ってくるのだから。

「……………」

ノーフェは気付く。

砂に紛れて、誰かが此方を見てやがる。

潜っているのか、保護色で誤魔化しているのか。

だが、分かった。感じる。この大群を恐れている感情を。

「ふふふふ………」

面白い。様子見なら、斥候か。じゃあ、始まりの狼煙の代わりに。

「殺しちゃおうつとー！」

ノーフェがまた、勝手に動き出す。

デルタの上から突然、彼女は飛び降りた。

リデイが何事かと聞いたが、案の定無視した。

「どーん♪」

楽しそうに、ぶっばなす。

センサーの範囲の外。適当に右手のビームマグナムを構えて、撃った。

情報の共有もしないで、行動開始。ライセンサーだからといって、許される行為ではないが実際許される。

全体が震える。若干一名、ライセンサーが司令塔を経由せずに攻撃を始めていた。

何もない砂漠の砂。バカか、と周囲は子供の暴走かと思ったが。

ビームが走る。着弾。そして、大爆発。明らかに、そこにいる何かを爆発させていた。

「なんだ!?!」

リデイが驚く。まさかとは思ひ、ノーフェに聞いたです。

「敵機確認しましたよ。ロリコン少尉、速く連れてつてくさいな」

ノーフェは笑って答えた。敵襲の知らせ。潜伏する反連邦組織と思われる地上部隊

を確認した。

全体の誰よりも速く、オリビアの反応してから直ぐに的確に貫いた。

(おいおい……冗談だろ!! 大抵の奴がセンサーの外だぞ!! どうやって気付いたんだこの子は!?)

相変わらず凄まじい感覚の持ち主だ。啞然とするリデイは、空中でユニコーンを拾って、再び上昇。

部隊の司令塔に、敵襲を知らせる。

同時に、見れば先制攻撃を受けた影響か、ぞろぞろと隠れていたのか姿を見せる。

しかも、明らかに余計な連中すらいた。テロリストだ。ジェネレーションが奴らにっ
いていた。

警報が鳴り響く。議会のある都市に、大規模な敵襲。

同時に、司令塔による広域レーダーによる搜索。

全方位で探すと、遠方よりこちらに近づく飛行物体あり。

輸送船だと思われるが、既にSFS搭載のMS部隊の発進を確認している。
で、成層圏よりこちらに飛来する物体も確認。

MSと、これもまた輸送船サイズの物体である。

検索、合致。ソレスタルビーイングと断定した。

まさかの私設武装組織が武力に介入をこのタイミングで仕掛けてきた。テイターズは舌打ちする。アロウズは分かっていた。

負け続きのソレスタルビーイングは最早手段を選ばない。

どうせ、奴らに加担すると、テイターズと共同戦線を提案。

テイターズもアロウズも、同じ連邦組織ではあるが犬猿の仲。

互いに隙あらば潰そうとしているし、アロウズは特権階級だ。

それがテイターズは気に入らない。然し今回は四の五の言っただけいられない。

プライドをへし折って、互いの利害の為に団結した。

「きやははははは!! 戦争の始まりですよ!! お楽しみは、これからです!!」

真つ先に仕掛けた子供は、獲物を発見するや足元のガンダムに命じて突撃させる。

合わせるなんて事は先ずしない。やりたいようにやりたいことだけ優先する。

大興奮で、大人の言うことなんて聞く耳すら持たず。

仕事と割りきって、これも連邦の役目とリデイは受け入れた。

不満はあるが、テイターズやアロウズに文句を言っても仕方ない。

事実、自分は既に死んでいる扱い。やるべき事は、黙ってやる。

柵から解放されても尚、リデイは絶望からは逃れられない。

自分のこれからを迷いながら、彼は猛獣の台座として空を駆け抜ける……。

「空中の戦いは激戦を極めた。

僅かな時間で激しい戦闘が始まる。

物量で勝つティターンズとアロウズの部隊に阻まれ、反連邦組織が押されていた。

「おい、その黒いジムと金びか!! 邪魔だ、退け!! 諸とも撃つぞー!」

背後から通信で怒鳴り声。何事かと思えば、ティターンズの誰かが文句をつけてきた。

背後にはバイアランカスタムが、こっちごと撃とうとしていた。

「おやおや、節操なしにも程がありますねティターンズの人間というのは。階級が上の人間に敬語も使えないんですか?」

バカにしたようにノーフェは笑って挑発する。

無論、退くこともしない。譲る義理はない。

「なんだと!?!」

相手の男は、更に怒る。逆撫でされたようだった。

「テイターンズのジェリドでしたっけ？ 私、大尉なんですけど。口の聞き方に気をつけなさい」

ノーフェはあくまで、慇懃無礼に相手……テイターンズ所属の男、ジェリドを刺激する。

彼は子供に言われて、慌てて部隊の面々を検索をしていた。

そして、それが事実だと知ると嫌悪を丸出しにして、黙った。

「身の程知らずが。アロウズに喧嘩を売るとは、よい度胸です。……良いでしょう。次はどの部隊を潰してほしいですか？」

「貴様……まさか、T3部隊を知っているのか!？」

暗に、某チームのようにしてやると脅すと、ジェリドは驚愕の反応を見せた。

この際、敬語に関しては目をつむる。

けらけら笑ってノーフェは語った。

お前らの部隊がアロウズを打倒しようとして準備してた機体は全部搔っ払っていったと。

つまり、無駄な開発お疲れさま、という嫌味を送る。

「貴様、貴様かッ!! 開発中のヘイズルやTR計画の機体を押収して勝手に使っている奴は!？」

「その通りでございますとも。言つときますが、今頃言つても返しませんよ。インレなんて、開発させませんよバカ共。何処からそのお金が出てると思つてるんです。勝手に横着したお金使つてくれてまあ。それ、元々は私達アロウズの取り分何ですけど。おかげで、戦力は足せましたので感謝はしてやります」

「さて、この反応まさか!! ハイズルがもう地上に出ている!! 早速実戦に出してるのか?! 調整中だったのに、どうやって!?!」

「私の姉が調整して改造しました。所詮ジムの親戚ですからね。基礎さえしれば、応用だつて簡単だつて言つてました」

「俺達があれだけ苦労していたのに……それをこの短期間で、だと……!?!」

「アロウズ舐めるな、つて事です。テイターンズと一緒にするなんて、失礼すぎます」
「本当は結構苦労していたが……それはノーフェの知る話ではない。」

「ま、自分の立場を弁えない阿呆にしては上出来です。流石悪名の轟くテイターンズ」
「貴様たちが言えた口かよ! 有無を言わさず強奪したあげくに勝手に使いやがつて!! 傲慢な正義の味方取りが!!」

「リボンズが言つていた。開発費はアロウズの取り分から勝手に差つ引いて使つていたと。」

「どっちもどっちだが、少なくとも金まで奪つていくようなゲスに言われる筋合いはな

い。

「救世主なんですよ、私達イノベーターは」

「黙れ、戦うだけの化け物共!! お前らは戦争の道具の分際で、デカイ顔をするな!!」

「その傲慢な態度は良くないですね。このティターンズ風情が」

「俺達ティターンズは連邦のために、地球に住む人間のために戦っているんだ! 好き

勝手やっているアロウズが何を言う!」

互いに否定しあつて、横で聞いているリディは嫌になつてくる。

所属していた連邦も、一部はここまで腐敗している。ノーフェの奴は、上の人間の真似をしているだけ。

本位どころか、本音ですらない。遊びの一環で、ティターンズをバカにしている。

「大体、お前みたいな子供が大尉だ!? ふぎけるな、大して戦えもしないくせに!!」

(……地雷を踏んだな、あの男)

真つ先に手を出したのはノーフェだと知つていても、どうせ嘘だと信じない。

そういう人間だとリディは、ジェリドを表す。要は、じゃあ見ていると言われる。

で、リディは足元なので巻き込まれる。最近不幸な体質になつている気がする。

主に、この二人の幼い子供のせいだ……。

「ロリコン少尉、出番ですよ」

ノーフェに言われて、渋々黙って加速する。

聞いていたジェリドが叫ぶ。

「なに!? ロリコンまでいるのかアロウズは!?」

「もう……好きにしてくれ……」

このリアクション飽きた。ロリコン言われ過ぎたせいで慣れてきた。

投げ遣りに放置。

「貴様、今すぐ出頭しろ!! ティーターズの名にかけて性犯罪を看過することなど出来

ん!!」

だから、誤解だと言っているのに。ジェリドは勝手に激怒している。

「少尉とか言ったな!?」と云うことはお前軍人か!! この恥知らずめ、何を考えている

んだ!!」

(何も考えていないが……)

対象がリディに変更された。

説教と言うか脅しと言うか、喧しく吠えるジェリド。

話半分で聞き流すリディ。何を言っても聞かないので黙って終わるのを待つ。

その間に、奇声をあげて上で猛獣が狩りを開始。

相変わらず、凄まじい勢いで食い荒らしていく。

数分もすれば、ジェリドも青ざめて言葉を失った。

当然だ。また虐殺しているこの女。大興奮で殺しまくる。

「おい、止める……それ以上は止めるお前!! 何してるんだ、これじゃただの虐殺だろうが!!」

最終的に止める側に入った。いつもの流れである。

リデイは運転しているだけだ。

上で指示通り動いて、あとはノーフェが勝手に殺す。

戦争が大好きな子供は、戦場を遊び場にしていた。

「遊ばなア!! これは戦争なんだぞ!! いい加減にしろ!!」

悲痛なジェリドの叫びが木霊する。

リデイはもう彼女の嗜虐に慣れたので、何も言わない。

言うだけ無駄なのだ。言うことを聞くわけがない。

ジェリドですら、彼女の攻撃性は異常だと感じるのだろう。

間違いではないが、どんなものでもずっと近くにいれば、意外と慣れてしまう。

リデイに何をしていたんだと責められても、困る。

元々、ノーフェは、壊れて、狂って、歪んでいる。

「楽しい!! やっぱ戦争は楽しいです!! 最高ですよね、大義名分のある殺して!!」

ノーフェは酔っている。戦いと血の世界に。

仕事はしている。敵は殺す。当たり前的事を突き詰めれば、最後にはこうなる。

軍人としては終わっているが、戦果で打ち消せる。そういう類いの人間が、これだ。

そして。虐殺を高い感受性で、察知して制止に来る子供もまた、存在する。

「——もう止めろ!!」

それは可変型の機体だった。

どこかシルエットはデルタガンダムに似ているが、カラーは違う。

そこから、若い声が通信に割り込む。

「お前か!! お前がさつきから、沢山の人を殺して遊んでいるやつか!」

映ったのは、何だか中性的な顔立ちの……青年?

それが、デルタに空戦を挑んできた。

「その声、カミーユか!」

ジェリドが強く反応する。知り合いのようだ。

向こうもジェリドに気がついてぎやあぎやあ二人で言い争いを始める。

ノーフェはあくび混じりで、その様子を眺めていた。

リディは頭痛しか覚えないので、聞き流しに徹する。

「ん……カミーユ? これってなんだか可愛らしいお名前ですね」

アクビをしながらノーフェが呟く。途端。

リデイは聞いた。目の前の可変から、ぶちっと何か千切れる幻聴を。

そして、突然彼はこっちに向かって怒鳴り散らした。

「貴様……貴様、今俺の名前可愛らしいと言ったか!？」

いかん、キレた。

間違いない。このカミーユという人物、確実にキレた。

「え? ああ、言いましたよ。カミーユさんですか。女性の方じゃないんですか?」

……で。なんで、止めをさすんだこいつは。

ノーフェは無神経に言ったのが、彼の限界だったのだのだろう。

「俺は男だよ!! カミーユが男の名前でいけないのか!!」

男女の区別がついてなかったらしいノーフェに、怒鳴るカミーユ。

ノーフェも驚く。なんか知らんが突然怒り出した。

彼女は知らない。カミーユという人物は、歴とした野郎だと。

知らないから、もっと揉める。リデイは嫌な予感が脳裏を過った……。

地上の戦い

時間を少し遡る。

戦いの狼煙は派手に上がってしまった。

それに焦ったのは、誰でもない、アリアだった。

(嘘でしょ!?! あんな距離を察知するって、あいつ化け物!?!)

驚いた。心底、驚いた。

なんとあの女、多少偵察に出ていた斥候が移動時に巻き上げた砂を見て、的確に狙撃してきたのだ。

しかも、かなり上空から。移動している最中に。

正直、アリアでも難しい芸当だろうか。

センサーの外を肉眼と感覚だけを頼りに狙い撃つなど。

おかしい。撃たれたのはジェネレーションの中堅で、偵察を得意とする奴だったの

に。

見えないように、ステルスシステムで光学迷彩を施し、熱源センサーに拾われないべく、慎重な動きをしていた。

なのに、バレた。逃げるまもなく、ぶち抜かれて死亡を確認。

それに合わせて、防衛だというのにテイターズが攻めてきた。

「……っ！ みんな、もう隠れても無駄よ!! 居場所がバレた!! 速く迎撃準備して!!」
鋭くアリアは命令する。全体に連絡。既にこっちは後手に回っている。

急がないともっと戦力を削られてしまう。宇宙にいる奴等にも降下を頼んだ。

反連邦組織とジェネレーション、そしてテロリストによる、無謀な戦いは、こうして幕をあげた……。

「……始まったか」

男、ガルマは後方支援についていた。

旧式の機体で全線に出ていく彼らを援護する。

彼のギラ・ズールは木星の時より更に改良されている。

いや、今のアリアが適正な状態に戻したというか。以前の過剰改造は多少落ち着いた。

それでも、ズールに思えない火力と射程をしているが。

ガルマは後ろで全体を見回す。

数の暴力か。凄まじい敵機の数がリーダーが示す。

これは、戦争に勝つためではなく、政治的な勝利を目指すとアリアは言うが……。

(無謀だな。私ですら分かる。この戦い、既に我が軍は破れている)

トリガーを引きながら思うのは、あまりにも無茶な戦いだと言うこと。

こちらは傭兵のようなものだ。引き受けたのは、戦いの場所だけ。

アリアは言った。不味くなれば、戦況を無視してでも撤退する。

さもなくば、物量に潰されて全滅しかねない。

予定の倍以上の戦力があるのだ。見積もりが甘かったのを彼女は素直に認めた。

仕事の以外はやらなくていい。

戦えばいいだけの事なのだろう。黙って、敵であるマラサイを遠方から撃ち落とす。

ある程度は実力が上がってきている自覚はある。何度か死にかけた身だ。

然し、ティターンズの機体は……動きが何故か鈍い。

まるで、階級だけが高い新人のように、ぎこちない回避運動であった。

(……テイターズはいいが、問題はアロウズか)

傲慢なエリート気取りは問題はないが、アロウズは本物の兵隊のようだ。

一度、機体を立たせる。移動をして、下がっていく。

さつきまでいた場所は、発見されてビームで焼かれていた。

隠れて過ごすが、カトンボのように空にも複数いる。

「スズキ、そっちはどうか？」

自機よりも後方にいる、狙撃担当に聞く。

彼は、リロードをしながら答えた。

「……問題はない。今のところ」

スズキが覗く先では、味方の可変が何かを察知したのか、上空にすつ飛んでいった。

いわく、戦場で遊んでいる奴を止めにくとか言っていたが。

(NT……カミィユとか言ったっけ。ああいうのになれば、言葉が通じなくても、意思疏通が取れるのかな)

スズキは少々、雑念を抱いていた。

元より彼はここに、彼女がいることを知り、一度でいいからもう一度見たいと思っていた。

会えなくていい。話せなくていい。ただ、もたらされた情報が、何処まで信じられるのか。

それをこの目で確かめたかった。疑っているのではない。本当に、話を聞いてもらえないのか。

一方的に、殺されるだけなのか。遠目でいい。様子を見て、判断したかった。

思うのだ。あんな風に、互いを引き合う力があれば。言葉を無くとも、理解できる、共振できる何かがあれば。

わかり会えるのも知れない、と。

彼は迷わず戦っていく。まずは生き残る。修羅場なのだ。気は抜けない。

狙撃をして、動きの鈍いハイザックを抉り、爆発。

テイターズの数減るが、アロウズが減らない。

というか、連中のマシンが性能が良すぎる。

まるでガンダムでも量産しているような錯覚を覚えた。

旧式の機体で、何処まで行けるのか。

倒せる敵から倒していこう。

今はスコープを覗いて、戦い続ける……。

一方、街を防衛する彼らは。

「うむ……戦況はボチボチかの」

「油断するなよ」

街に近づく連中を、片っ端から挟み込んで叩き落とす。

ジエイドは砲撃、イムヤは狙撃で二重で制圧していく。

ジムキャノンの肩のキャノンと、右手に持ったライフルの同時撃ち。

簡易型のOSを積んだ彼のジムは、それを補正して空間制圧を可能としていた。

機動力を犠牲にして、生存性と稼働時間の延長をはかった機体は、援護に関しては妥協できる。

機体のバランスは悪いし、接近されたらサーベルも満足にないので負けるが。

イムヤは、砲撃を掻い潜る足の良い奴を倒していく。

動きが鈍くなった砲撃のなかだ。当てるのは容易い。

更には、もう片方の方角からも攻撃は飛んできている。

が、向こうはそうも言ってられない。

何せ、何度も反撃を受けていた。

「いっだあ!？」

何回目かの衝撃か。

聖は悲鳴をあげた。頭を強打する。

くまのぬいぐるみが視界を塞いだので慌てて退かす。

ぐらつくコックピット。ぶれる照準……ではなく、機体そのもの。

今、何を食らった？ 実弾？ 状況の見えない聖。

体勢を立て直す時間を、向こうが稼いでくれた。

「……頑丈だなあ」

彼女にも怪我はない。

ヘイズル、と言ったかこのジムのガンダムは。

当たったのは、敵機のジム11が持っていた180mmキャノンだと隣のイツセンが言っていた。

大丈夫か、と聞かれていた。何だかくらくらする。脳震盪でも起こしたか。

「大丈夫、多分……」

大丈夫なのはヘイズルだけであり、聖は消耗している。

彼女はやはり面構えがガンダムだからか、袋叩きにされていた。

中身はジムだつてのに、容赦のない敵の実弾。

マシンガンは当たるわ、大型キャノンは直撃するわ、えらい目の敵にされている。お陰で、装甲は歪んで凹んで変形して、黒煙をあげていた。

中にダメージが貫通しないのは流石だが、本当にジムなのか聖は疑問に思う。

基本的に固定放題なので、当たるのは仕方ない。足止めが任務なのだ。

反撃のビームライフル。見当違いの方向にすつ飛ぶ。

あの変なキャタピラーの機体、機動性が凄い。攻撃が当たらない。

焦れている彼女に、味方のアロウズが、助けに来てくれた。

『そのガンダム!! 劣勢と見たので、私も助太刀する!』

アロウズの、ビームの剣を構えた武士みみたいなマシンが突撃していく。

(ガンダムじゃないです、ジムです……)

面がガンダムなジムなのに、やっぱり勘違いされている。

凄い人だ。刀よろしく振り回して、実弾を切り捨てた挙げ句に突貫して、一刀両断で、敵陣に突っ込みめちやくちやな軌道を描いていた。曲芸か何かか。

『人呼んで……グラハムマニユーバツ!!』

何の話だ。悦に入った声で叫んでいるが。

聖はよくわからない。

隣で、旧式のザク1改でマシンガンで応戦するイツセンは。

コックピットで悲鳴をあげていた。

(ヤバい、駆動系が死ぬ!?)

スラストターなど砂を吸い込み、異常発生。

関節が砂で潰れてスパークしている。

エンジントラブル発生。画面のノイズも発生。

戦闘中だと言うのに、ザクが次々エラーを続出させていく。

(クソッ……ザクが死んだら、いっそ生身で！ アメリカスさんに頼んでおいた、アイツの出番だ!)

覚悟を決める。因みにイツセンは一風変わった経歴の持ち主だったりする。

彼は実はMSの運転よりも、歩兵のほうが適性が高い。

要は、MSと人間が一緒に戦うような戦場のほうが、真価を発揮する。

特にこういう、視界の悪い砂漠や夜間の戦闘では、ぶつちやけMSよりもそっちのほうが向いている。

宇宙では役に立たないスキルであったが、この状況ならオンボロザクよりは余程役に立つだろう。

取り敢えず手持ちの火器を盛大に撃ち尽くす。牽制にでもなればいい。

彼は決意をする。大半が死ぬこの残骸を無理やり動かして、聖に頼む。隣に膝をついて、沈黙するザク。

「聖さん、楯が必要ならこいつを使ってください!!」

動力炉を落として、爆発しないように念入りにしておく。

やり方を聞いておいてよかった。懸念した通り案の定機体が死んだ。

戸惑う聖に、彼は切り札を投入する。

機体を大胆にも乗り捨てる。正気の沙汰を通り越している動きに、一同が叫ぶが。

(大丈夫です! こう見えて、意外としぶといのが自慢ですんで!)

にヤツと強気に笑うイツセン。そのまま全力で走った。

丘を降りた、大きな岩の影。そいつは、改造されて残っていた。

「それじゃあ……行きますようか! 戦争はMSだけじゃないってことを!」

気合いを入れるべく、自分の頬を叩いて自分に叫ぶ。

そして、乗り込んでエンジン始動。一気に加速して動き出す。

直ぐに前線へと戻っていく。

「おおい!! イツセンは何処に行ったんじゃ!! まさかの敵前逃亡かえ!!」

「……この有利な状況でか?」

突然のシグナルロスト。ザクが起動を停止していた。

聖が、イツセンが何処かに向かっていったと説明する。

ジェイドは慌てて、イムヤも流石に疑問を感じて、周囲を探している。遊撃のオリビアにも伝達する。

「……？ イツセンさんが、消えた？」

激しく動き回り、陽動から援護から迎撃までこなすオリビア。

通信を受けて、母に聞く。母は確かに見当たらないと言った。

機動力なら砂漠では負けない。ビームキャノンで応戦して、連携していく。

というが、大半は母が機動をやってオリビアが射撃を担当しているのだが。

広範囲を探していると、不自然な影を発見。

(……えっ。く、車?!)

そう。オリビアが見たのは、まさかの車であった。

MSよりも遥かに小さい、だが小回りが聞いているのか攻撃を避けつつ、混戦となった現状に出てきた乗用車。

驚愕のオリビア一同に、通信が入る。

「お待たせしました!! イツセン、復帰します！」

戻ってきたイツセンが乗り込んでいたのは、なんとホバートラック。

ホバー移動で細かく移動をしながら、こっちの迎撃の支援や、補給用の資材をたつぷ

り積んでいた。

砂ぼこりを巻き上げて、補給できない彼らのマシンに駆けつけて、慣れた様子で手早くやっていく。

「す、凄い特技だの……」

啞然とするジェイド。エネルギー回復を確認。

全員が同じジムの系統だったのが幸いして、やり方を聞いていたイツセンにも補給ができる。

イムヤのスナイパーにはエネルギーと冷却剤を持ってきた。

「すまん助かる」

短く礼を言って、すぐに戦線復帰。

イツセンは聖のヘイズルにも物資を持ってきた。

更には通信の強化やソナーのような役目まで兼用していると言った。

「へえ……ホバートラックっていうんだ……」

「乗り心地はよくない気がしますがね！」

などと話しつつ、さっさと終える。

流石に装甲は変えられないので、ライフルのマガジンを持ってきた。

聖が手動で装填しながら、イツセンはオリビア背後についた。

遊撃の手伝いをしつつ、応戦もできればすると言った。

火力は宛には出来ないが、小回りと通信などの援護は嬉しい。

まだまだ戦いは続く。地上の戦いも激化していくなか。

空の戦いは、別の意味で悪化していた……。

大空の戦い

中空で全方位を支援するアメリカスは、苦い顔をしていた。

(ジエネレーションが来てる……。ノーフェが大人しくしていればいいんですけど……)

戦域を見渡すと、ちらほら見覚えのあるマシンがいた。

誰もアメリカスには近寄らない。アロウズだから、警戒しているのか。

飛び回り、見下ろしたり見上げたりする。

ミチアの機体が崖の上から、ビームを乱射していた。

あれだけの種類を完璧に使いこなすのは、流石。

親友たちの機体が連携してアロウズと戦っていた。

助きたいけど、天秤にかけるのは今の後ろに尽くす人たち。

支援を求められても、無視して過ぎるぐらいしか出来ることはない。

……懐かしい機体がいた。Sガンダムだ。

相変わらず凄まじい変態機動を描いている。アリスは元気になっ
ているようだ。気づいているだろう。一度だけ、こっちを見た。けど、過ぎ去っていく。

これでいい。もう、交わる必要なんてない。

ジンを見かけた。以前よりもずっと、冷静に戦えている。

戦いを経験して、彼も強くなっていると思うと、嬉しく思う。

旧式扱いのフラッグもいる。……空中変形、今でも上手なようだ。

しかも回避と同時にこなすとは、見ない間に随分と腕をあげていた。

……後任であろう、ガンダムがいる。

ああ、あれは返したハルファスだ。ちゃんとやることを聞いて、従っている。

確実にいると分かっても、仕掛けてこない。思いは通じているんだろうと思いたい。

そんななか。一際、空の上を見ている視線に気がついた。

(……旧式ザク？ ああ、スズキ……)

丁度裏切る前ぐらいに仲間になっていた、ジオンの狙撃兵。

口封じはしていたから、きつと余計なことは喋ってないだろうけど、なんでそんなに

見上げている？

近くにはガルマもいるようだ。二人は、支援担当なのだろう。

(……ああ。そうですか。分離したのを知らないから……)
向こうにも情報はいつていると思う。

黒いユニコーン、つまりノーフェがアメリカスとまだ混じっていると思つて見上げて
いるんだ。

そう、アメリカスは感じた。

理由は知れないが、彼女を見てもよいことなどない。

取り敢えず、その視線の方に向かおう。

地上はイツセンがホバートラックを出して援護しているので大丈夫と聞いていた。

心配した通り、ザクは大破してしまったと知らされる。

あんなボロより、次はもつと丈夫なものを用意しようと、アメリカスは上昇していく
……。

上空ではえらい大騒ぎになっていた。

『ふざけんなよアロウズ!! テメエらがガンダムを使うなんて許されると思つてんの

かッ!？」

クロスハートが駆けるアストレアに、遠距離で仕掛ける同じガンダムが怒鳴り散らしている。

話が見えないクロスハートは糾弾を聞き流す。

『逃げんなよ、逃げんなよアロウズッ!!』

連射してくるビームを避けてなるべく他の邪魔をしないように釘付けにする。

相手はお冠のようなので、そのまま放置でいい。

射程が不利と回避に専念するクロスハート。

慣れてしまえば、動きやすく扱いやすいガンダムである。

旧式と言えどこれは侮れない。

(アロウズが、ねえ……。テロリストがガンダムを使うってのも、中々に笑えないと俺は思うが)

正式に言えばアロウズの協力者。向こうからすれば大差ない。

ならば言わせてもらうが、第一に言うのが、お前がいうなという反論。

軍人としての矜持は異界でもクロスハートは変わらない。

テロリストが紛争根絶などという世迷い言を抜かして戦争を広げている時点で、仮にも正規軍であるアロウズに喚く資格などない。

どんな崇高な理念があろうが、奴等の広げた戦火で人が死んだのは事実なのだ。

それを棚上げしてよく吠える。まるで自分達は正しい戦争でもしているかのよう。

（自分達の戦いを美化でもしているのか、ソレスタルビーイング？ 悪いが、腐つていようが何であろうが、軍は軍なんぞな。お前らのように、好き勝手に振る舞えるバカとは違う。必ず、足元の民衆に腐つた者は淘汰される。そして淘汰される前に、世界を暴力で変えようとしたお前から先に、滅んで貰おうか!!）

何れ、アロウズも数で勝る民衆に潰されるのだろう。悪は栄えないのが世界のお決まり。

なら、当然テロリストであるソレスタルビーイングも栄えるはずがない。

こちらを悪と断じるなら結構。が、それを叫ぶのが単なるテロリストだから笑えない。

何様のつもりだろう。ソレスタルビーイングとて、異世界を巻き込み世界を更なる混沌に陥れた分際で。

「分かった分かった。聞こえてるから、イチイチみつともなく喚くなよ。革命家擬きのテロリスト君」

十分距離を開けて、彼は自分でも気付かない間に、頭に血がのぼっていた。

怒り、と言うよりは苛立ちに近い。

珍しく、辛辣な毒を吐いて停止して、振り返った。

追ってきていたガンダムは、大きなライフルを向けてまだ口を開こうとする。

その前に、わざわざ聞こえるように全域で喋った。

「黙って聞いていけば、随分とまあ大きく出たな、ソレスタルビーイング。お前らがやっていることは棚上げして糾弾とは、笑わせてくれる」

「なんだと!？」

明らかに目の前の相手に向かって言っている言葉に、回線を知っているのか合わせて音声のみが繋がった。

クロスハートは聞こえるなら丁度いいと言わんばかりに更に言った。

「なあ、教えてくれよ。武力による戦争の根絶ってなんなんだ？ アロウズが悪だと一方的に決めつけているようだが、じゃあ聞かせてくれよテロリスト。銃を持って平和はできるのか？ この時代も、世界も、あらゆるものが混ざったオーバーワールドで。お前らは気に入らない相手を殺しているだけだろ。自分達の敵と判断した沢山のを壊しているだけだろ。何がガンダムだ。ふざけているのは、お前らだろうが」

クロスハートはハッキリ言った。

アロウズには関係のない、自分は連邦の士官であると。

この機体は、確かにアロウズから受理したものだ、責められる覚えはないと。

「違う連中なら、何でアロウズに協力しているんだ!?　そこがどんな組織か知ってるだろ!!」

相手の若い男は聞いてきた。

銃口は下げない。が、問答無用で撃ち殺す真似はしならしい。

クロスハートは静かに苛立ちを含んで続ける。

「質問しているのは俺だ。良いから答えろソレスタルビーイング。お前らがやっていることは、アロウズを一方的に糾弾できるのかとな」

ここまで謂れない言葉で非難される覚えなどない。

これでもクロスハートは、UEの被害から人類を守るために連邦に入った。

少しでも死人を出さないために、未知の脅威である化け物と戦うために。

少なくとも、こんな連中に何かを言われる理由なんてない。だから、怒った。

「……あんたを一方的に罵ったことは謝る。何れ、俺達も罪は償うさ。だが、悪いが今は無理だ。アロウズをどうにかしないとダメだねえ」

事情を聞けば、謝罪する。

だが、質問には答えない。いいや、答える気がない。

そう、受け取った。クロスハートは大きく息を吸った。

そして、深呼吸してから、改めて口を開いた。

一度俯き、顔をあげた。言うべきことは、決まっている。

「いいや、遅いな。今ここで直ぐに償え、ソレスタルビーイング。償いの先伸ばしは許されない」

今度は、もう逃げない。クロスハートは、アストレアでその機体に向かって突進した。右手にはライフルを持つが、懸架して装備された試作のGNソードとかいう剣を抜いて、振り上げる。

「うお!!」

相手も、斧らしきものを取り出して受け止めた。

派手にスパークして、衝撃が互いに走る。

「お前らには、償う気がないのはよく分かった。なら、世界の敵は、潰さないとな。それが軍人の務めだ」

怒りすら通り越した。クロスハートはもう、呆れてすらいた。

相手が何かを言う前に、言葉は言わせない。

「どんな言い訳をしても、お前らの掲げる根絶の断定つてのは、お前らの基準だろ。お前らの都合だろ。……民衆を見下すのも大概にしろ。どんな権利があつてお前らが決めていいんだ。どんな理由があつて、その行為を許されると思つてんだ。神様にでもなつたつもりか？」

受け止めたのを、蹴りで弾いて更に追撃に切り払う。

接近はあまり得意ではないようで、防戦一方になる相手。

連続で切りつける度に、クロスハートは逆に責める。

「お前らも大して違わないだろう。少なくとも俺は自分の目で見たぞ。アロウズが、自分達の管理する街を平和に保とうとする努力を。それをなんだ、ソレスタルビーイング。自分達が人類を導く存在だとも勘違いしてるのか？ 破壊と、殺戮以外お前らが世界になにをした？ お前らが根絶するのは戦争じゃない。……人間と言う種族、そのものだろ？ 綺麗事を並べて正当化しようとするな。お前らは単なるテロリストだ。民衆に危害を加える悪なんだよ」

クロスハートはアロウズの事は詳しくは知らない。

が、生憎とそれなりに管理している街などの状況ぐらいは知っている。

あれのどこが悪だ。世界中で暴力と理不尽を振り撒いているコイツらが言えた口か。

「この場から消えろテロリスト。お前らは普通の人間からすれば、U Eと大きな違いはないよ。意味のわからん理由で人を殺して、街を焼いて、居場所を壊す。寝言は寝てから言え。それでも言いたきゃ、万人に理解できて尚且つ納得できる言いつ提げてこい。それができないなら、お前らはただの邪悪そのものだ!!」

軍人として、最低限の義務は果たす。

クロスハートは、もう奴等の言い分など聞かなくていい判断した。

どんな理屈であろうが、こいつらの行為はテロリストなのだ。

律儀に、話し合うだけ意味がない。

そんなことをしても、やつらがやったことで消えた、失われたものが戻る訳じゃない。

寧ろ、生かすことで更なる被害から人類を守るのなら、殺すべきだと思う。

しかし、アストレアの粒子は限界に近かった。少し休ませないといけない。

幸い、丁度アメリカスが近くに来ていた。

彼女を呼ぶと、不利と判断したのか一目散に逃げていく。

「追いますか？ わたしなら、まだ持ちますので殺せますけど？」

「必要なら殺せばいい。遠慮はいらない」

「了解」

合流したアメリカスが虫を追っ払うような動作で攻撃しながら聞いた。

一度下がる、とクロスハートは撤退する。

ひどく不愉快な気分になった。テロリストに何かを言われるのは、存外腹が立つ。

他の人の手伝いにくくアメリカスを見送り、彼も身を引いていった……。

で、こつちは。

「なんでだ!!?　なんでお前は、沢山の命を面白がつて奪えるんだ!?!」
可変型に追い回されているノーフェとリディ。

更に。

「貴様は歪んでいるツ!!」

以前太陽炉を奪ったヤツがリベンジにきて加勢された。

更に更に。

「デメエ、あの時のガキだな!?　お礼参りしてやるぜえ!!」

ニツパーみたいなハサミ野郎も来ていた。

完全に囲まれていた。

一緒にいた彼が奮戦するが……。

「カミーユ!　お前は、俺の……!!」

全員に袋叩きにされてあつという間に撃墜された。

下手に挑発してバカにするから、ハサミ野郎にぶつ切りにされるのだ。

囿にもなりやしない、とノーフェは内心毒づく。

一応、地上から騒ぎに気がついて応援に来てくれたアロウズの仲間はあるが……。

「逢いたかった……逢いたかったぞ、少年ッ!! いいや……青年!!」

変態が来た。繰り返す、アロウズの変態が来た。

前に襲ってきたジオンの変態みたいなヤツがいたのだ。

慌ててすっ飛んできたらしいアメリカスが、何かに気付いて遠方で絶叫してるのがノーフェに聞こえた。

一度街で見かけた、ノーフェを助けてくれた男の声と似ている。

「テメエ、あの時の!!」

「そういう貴様は幼い少女に手を出そうとした変態ではないか!! 逃げ出したと聞いたが、マイスターであつたか!」

「変態じゃねえ!! ってか、テメエが言うな!!」

ハサミ野郎も知り合いらしい。あの時の親切な人だった。

「ガンダムがこれ程までに一堂に会するとは……なんという幸運! 手合わせ願おう、ガンダム諸君!!」

嬉々として、三機のガンダムに突っ込んでいく誰か。

噂では聞いたことがある。フラッグを愛して、フラッグでガンダムを倒すと誓った謎

の男がいると。

奴は阿修羅すら凌駕する戦力を持つ一流であり、同時にガンダムを愛すると公言する一流の変態。

時々変な仮面を被っているとか。誰が呼んだか変態武士仮面。

多分、そいつが部下を連れて助けに来た。

見れば新しい擬似太陽炉を積んだGNフラッグで、次々ガンダムに切りかかる。

あの変態は、隊長らしい。

「な、なんだあいつら!!」

「武士仮面の小隊……なんとかフラッグ隊とか言ってみましたっけ。じゃあ、あの人たちに任せましょう」

リデイが困惑しているが、今のうちに逃げ出す。

突然キレた可変型のヤツが追い縋ろうとするが。

「ならば我が奥義で君たちを釘付けにしよう……トランザムッ!!」

なんか赤くなつた。擬似太陽炉でトランザムって出来るんだと、ノーフェは能天気に見ていた。

見ればGNフラッグ全員がトランザムしている。真つ赤な空になっていた。

「邪魔するんじゃないよ!!　そこを退けェ!!」

……なんであの女性みたいな名前の野郎が乗っている可変型も真っ赤になっ
てるんだらうか。

あれもトランザムの一種か？ と首を傾げるノーフエ。

計測器の数値がおかしいけど、取り敢えず撤退。

流石に手に終えない。

「……任せていいのか？」

「良いんじゃないですか。私が結構殺しましたし」

あんなエリート集団と遊ぶのは面倒なので、逃げる。

リデイも心労が限界なので、戻っていくと。

「きゃあああああー！ー！！」

錯乱状態のアメリカスが暴走していた。

パニックに陥っているのか、訳のわからない動きをしている。

それでも敵を落とすのは流石か。

「落ち着きなさい。帰りますよ」

一度飛び降りて、満足して冷静なノーフエが一発腹を殴る。

「あぐっ!？」

悲鳴をあげて、我に帰るアメリカス。

でも何だかびくびくしていた。

「変態がいる……変態が来ます。嫌な予感がするんです……」

「したにいるロリコンですか？」

「止めるオ!! ロリコンじゃないって言ってるだろ!!」

リデイというロリコンではないらしいが、予感がすると彼女は言いながら、補給に戻っていく。

それは、新たな、フラグとなる。

(ふははははは!! 見つけたぞ、紅の殺戮! 蒼の静寂よ!! もう一度俺と戦えエ!!)

変態の影は、既に迫っていた……。

後方からの攻撃

漆黒の幻影は懲りない。

漆黒の亡霊は諦めない。

変態フアントムは、省みない!!

(おお、あつちにもこつちにも、ガンダムが……ガンダムがここまで集うとは!!)
ある男は生きていた。

なぜ生きていたのか。そんなもん、自分だつて分からない。

気がついたらなぜかその辺の荒野に倒れていた。

強いて言うなら運命が生きろと言ったのだ。

ガンダムと戦えと。ガンダムを求めろと。

(ふははははははは!! 我が世の春が来たのだア!!)

つまりは、まだ戦うべきなのだ。

闘争本能の赴くままに。

相手の少女は逃走本能の赴くままに逃げ出したいだろうが。

彼女はピンチを悟っていた。

そう。これは、始まり。

「仕掛けるのか？」

彼は問う。

荒野にて、自分を拾い、戦力として招いてくれた彼らに。

彼らの目的は議会のある街を無差別に襲撃して、怨念返しをすること。

ジオンの残党にして、地上に残り堪え忍んできた長き時。

その復讐を遂げる日が来た。

その為ならば、手段など選ばない。

成功しなければ死んでいった仲間を弔えない。

だから、使えるものはなんでも使う。

アロウズたちが戦っている状況。

背後からかける奇襲。

諸とも滅ぼす作戦。

何より、利害の一致で本来ならば徒党を組むなどしない彼らにとっては、苦渋の決断。

所属不明の部隊と共に街を襲うのだ。彼らも、何やら新型の試運転をしようと、言っている。それが欲しいらしい。

その目的が、アロウズティターンズという訳だ。

「……破滅の光か。一種の、終末の灯火しては、悪くはないかもな。悲しいが、それを言っても理解できまい」

ガンダムを使う彼らに、腕を組んでぼやく幻影。

巨体を浮かせて進む。あれが、ガンダムを冠するマシン。

求めるモノとは違うが、だが……理解できないわけでもない。

特有の儚さを纏う光。一瞬かもしれないが、確かにそれは僅かでも輝くのだ。

（美しいのは壊れかけなのかもしれない。……そうだな。戦え、破壊を名乗るガンダムよ。お前も確かに、美しい）

彼が欲しいのは、似たような光だ。しかし、あれは悲しすぎる。

残党たちが持っていた余剰パーツで建造してくれた愛機と共に、亡霊は再び現れる。破壊の巨人と、憎悪の巨大な獣に従って……。

一度、彼らは全員後退して補給を受けていた。

アロウズの前線基地に相当する場所で、休憩を兼ねていた。

街から離れ、まだ激しく戦闘は続いている。

「来る……変態が来ます!! ああ、どうしよう!! 今度こそ身体をオモチャにされるう
!!」

アメリカスは、ずっとこの調子で隅っこで怯えていた。

何となく感覚で感応しているのか、ノーフェも理解できた。

周囲から話は聞いた。いわく、以前居ないときに彼女は変態のロリコンに狙われてい
ると。

……なんというか、分かる。彼女も珍しい、口数が減っている。

顔色も悪くなってきた。流石は同一人物。

片方が狙われれば自分も餌食になると理解してしまった。

「……ノーフェ、大丈夫か?」

で、そんな中空気を読まないリデイが声をかける。

うろろうろして、逃げ場を探しているノーフェに不用意に近づくや。

「ちえすと!!」

「ぐはっ!？」

反射的に反撃。

腹。パンを諸に受け、膝をついた。腹を抱える。超痛かった。

なぜかリディイだけ、声をかけただけで、反撃された。

理由を聞いても黙れ変態と謎の罵り。

(俺が何をしたんだ……)

毎度の扱いに、慣れてしまった彼は両手をあげて降参した。

こうしないと、次は男の最大の急所を狙ってきそうで怖かった。

二人は、頭を抱えて震え始めた。何が怖いのか、それはNTとして本能なのか。

彼らは、休憩を兼ねて休んでいた。

……その時だった。

けたたましく警報が鳴り響く。

敵襲の知らせ。音からして、不意討ち。

予定外が存在が来襲してきたようだ。

(……嘘だろ!?)

今、防衛戦の真つ最中なのに。

今度は後方から、ジオン残党と思われる集団と、アンノウンが一緒になってこつちに

向かってきている。

しかもその方向は……市街地であった。

避難勧告は出来てはいる。事前に、街の住人は相当数減っている。

だが、あそこには……。

「ふざけるなよジオン残党が!! 奴等の狙いは病院かよー!」

狙いは見えた。あそこには、大きな病院がある。

どうしても逃げられない、病人たちがまだ中にいる施設なのに。

アロウズやティターンズが、守っている議会の次に大切な場所。

そこを、狙っているのだと。

リディは叫んだ。周囲は慌ただしく準備をしている。

全面ではソレスタルビーイングとジェネレーションに、反連邦組織。

後方にはジオン残党とアンノウン。

物量で勝てるとしても、それ以上敵が増えた。

我に帰る二名。まだ、機体の補給は終わってない。

何せ、多量の虐殺をしたノーフェと、広域支援をして人一倍消耗しているアメリカス。

二人の機体はその仕様も相まって、整備が時間がかかる。

「先にいく!! お前らも出来たら直ぐに出てくれ!!」

リデイが走り出して、向かっていった。

二人は恐怖をとりあえず振り切った。

来る。ジオン残党に紛れて、あの変態が。

「私は知りませんが、何でしょう……。この悪寒と鳥肌は」

「あいつは本物のロリコンです。わたしの苦しむ所を見て興奮してるんです」

「最低じゃないですか、なんで殺さないんです!？」

「殺しましたよ!! コックピットをハイメガでゼロ距離で貫いたんですよ!! なのにあ

いつ生きてたんです!!」

ノーフェに戦った状況を話す。

確実に死んでいると思っていたのに。何でか生きている。

分かる。研ぎ澄ました幼子の心が、二人を弄ぶ変態の存在を。

「そんな……。奴は人間ですか!？」

「リデイ少尉はブラックファントム……漆黒の亡霊と呼ばれるエースと言っていました。

亡霊は殺せません。身をもって知りました。幽霊を殺すなんて芸当は、わたしは無理です」

「私だって無理ですよ!! どうするんです、また狙ってくるんですよ!？」

生きているから、ノーフェは殺しを楽しめる。

生きているから、アメリカスは身を守る。

ならば、最初から死んでいる亡霊なら対処法は？

「お祓い……お祓いしましょう!!」

「塩でもまくんですか？」

「えっ……それじゃ足りない!?!」

「怨霊の類いにそんなんで撃退出来れば苦労しません!!」

二人してパニックになった。

殺せない相手はどうすればいい？

人生で初めて、死を超越したモノと邂逅していた。

なんでもいい。兎に角、使えるものを探す。

二人だけ、違う目的で走り出した。

この判断が、二人の命運をわけたことをまだ知らない……。

迎撃に向かう彼ら。

慌てて自分の機体に乗り返む。

今度は、背面からの襲撃に備えないといけない。

次々出撃していくなか。

全面はアロウズの部隊が支えてくれる。

ローテーションでやっているから大丈夫。

などと、思っていたのが……不味かった。

突然、内部に緊急放送が響く。

至急、地下のシェルターに避難しろと。

『アンノウン、及びジオン残党の部隊の巨大MAに、エネルギー反応増大中!! 皆さん、

速く避難してください!! 長距離射撃の可能性があります!! 急いでください!!』

切羽詰まったアナウンス。

それもそうだ。遠距離から凄まじいエネルギーで、ビームの砲撃をこちらに向けていたのだ。

軸には幸い、議会や病院は外れている。だが、そちらには既に小隊が向かって市街地で暴れている。

病院も襲われていた。

「畜生、何てことしやがる!!」

「落ち着け大尉!! 今は耐えろ! 避難するんだ、急げ!!」

ツバサはテイターズと同類のやり方に激怒していた。

クロスハートが必死に宥めて、地下に避難する。

機体も現在、地下に収納されていく。

非常用の設備なのか、襲撃に備えてこんなものまで用意されていた。

一部はああいう汚いやり方を寧ろ好んでいたのはツバサだって知っている。

だが、他人がやって初めて分かった。

これが、互いの憎しみが辿り着く戦争の果て。

手段すら考えずに殺せればいい。そういう連中の常套句。

(さっきのテロリストが言ってたな。ここがどんな連中か知っているか、か……)

先程戦った男との会話を思い出す。

テロリストの戯れ言と断じていたが、アロウズとて似たようなことはしているんだろう。

それを、彼らは知っている。だから、倒そうとする。暴力を選んででも。

そんなものに、加担する男だと思われているのか。

(まさに、他人のなんとやらか。やられて初めて気がつくな。……だが、今は)

が、たとえ間違っていたとしても。彼らはそれを正せるとは言っていない。

根無し草が異世界に飛ばされた以上、根付くにはそれなりの基盤がいる。

悪党だとしても、彼らがあの時生きるには、あの二人がこうしてくれねば、今頃どうなっていたか。

生きるために、悪党に加担する。それ以外の方法はなかった。

冷静に考えていると、彼らは彼らで思うところはあるんだと気付かされる。

しかし。

(「こちとら、生きるのに必死なんぞな、ソレスタルビーイング。理想で生きていけるほど、異世界の生活は甘くはないんだ」)

長いものには巻かれろとも言おう。

どんなに言っても、自分達が生きていなければ何も始まらない。

ここは、二人が用意してくれた仮とはいえ、居場所なのだ。

自分の世界に帰れない以上、所属している場所には歯向かえない。

そうすれば、待っているのは放浪の旅になる。そんなものは御免だった。

(理想で腹は膨れないさ。そうだ。生きるから、言える話。……まあ、あり得るなら……違う道もあつたかもな)

所詮は、もしものお話。現実には、アロウズに従って生きている。

自分は死ねば意味がない。それは、人間誰でも同じ。

駆け込みながら自嘲するクロスハート。いつの間にこんな考えを浮かべていたのか。楽な方法だと非難されようが、だが開き直るしかあるまい。

少なくとも、彼らは望んでやってはいない。戦争で好きで殺しをするのはノーフェエなどの一部だけ。

大半はやりたくて殺っている訳じゃない。戦時の世界で生きる一つの方法だろう。

今は逃げ、隠れる。シエルトアの蓋がしまった。

暫くして。彼らのいた場所は、業火に包まれた……。

燃える炎。崩れる瓦礫。

建物は崩れて、火事が起きていた。

避難した彼らは無事だった。出撃して、回避していた者も無事だった。

立ち上る黒煙に、黒くなっていく空。

遠くで聞こえる戦いの音。

無事ではない、それなりの数のアロウズの現場の人間が死んだ。クルーや、マシンがそこそこ消えた。

更には、MAの再度の攻撃で、アロウズの大半が消滅したらしい。流石は殲滅特化の巨体。威力は折り紙つきか。

「……生きてますかー？」

廃墟となった施設の、壁のしたから……子供は何とか顔を出す。場違いな能天気な声で、無事を確認する。

ポロポロになっていた。施設を移動中に、警報がなった。

慌てて避難しようとしたら時間切れ。全部シエルターは閉まっていた。

逃げ損ねた二人は、砲撃に巻き込まれて、下敷きになった。

が、奇跡的に……いいや、クローンだから生きていた。

出てきたのは、ノーフェ。長い桃色の髪の毛が薄汚れていた。

パイロットスーツもダメになっているので、取り敢えず脱ぐ。

周囲にあるのは死人と瓦礫だけ。人目なんてもうないだろう。

頭から多量の出血。右目がよく見えない。

左足の足首が折れたのか激痛がする。引きずって、何とか瓦礫に寄りかかる。

右手の指が数本折れている。これも厄介。

脱ぐのに時間がかかった。

「……ええ。何とか、生きていたみたいですね」

近くの床から、大きな瓦礫に潰されていたアメリカスも起き上がった。

彼女の左腕は、消えていた。……千切れていたのだ。

片腕で、何とか立ち上がったアメリカス。よく見れば、出血で目が見えていないのかふらついている。

左肩から先が消えたことで、そこから夥しい量の血が流れている。

「アメリカス、左の腕、消えてますよ？」

「……そういうノーフェは右目が潰れたんですか。あと、頭にガラスが刺さってますけど」

「そうですか。道理で見えないわけですよ……ん？ 頭？」

「ここです、ここ。ほら、抜いて」

二人は互いに寄り添った。

左腕がないアメリカス。額にも裂傷が走り、血を流しすぎて、死にかけていた。

右目がつぶれたノーフェ。こっちは骨折などが激しく、満足に歩けない。

「……ジオンに派手にやられましたね」

「全くです。機体は瓦礫のしたですかね？ 見張らしは格段によいですけど」

「見当たりませんね……」

周囲は綺麗に瓦礫となっていた。

ノーフェの言葉に、アメリカスも軽く見渡す。

何にもない。瓦礫しかないただの廃墟。

その中を、二人は大きな瓦礫に寄り添って座っている。

互いに流す血が、染み込めずに垂れて地面に流れて、交わっていた。

「どうしますか？ 皆さん無事ですかね」

「……無事ならいいですけど」

ノーフェは痛みが激しく、痛みで頭がぼうつとしていた。

アメリカスは、自分を見て死ぬると思い、罰だと考えた。

どこの区画だったか。

そう言えば、塩がダメなら何か薬品で、とワケわからない思考で医療室に向かっていたのだ。

無理矢理立ち上がり、アメリカスが助けてノーフェを引っ張り移動する。

「丁寧にしてくださいよ。怪我人ですよ？」

「こっちは腕がないのに我慢してるんですが」

文句を言い合い、それらしき瓦礫の下に到着。

瓦礫を探る。こう言うときは黙って協力する。

頑張つて探すと、何とか医療用ナノマシンの注射を発見。

効力が強すぎて、危険な代物だったと思うが……。

「使いますかね」

「ですよね」

互いに生きている腕で、互いの首にぶつさした。

全部流し込む。身体に異物が入ってくる嫌な感覚。

数分経過して。互いに、応急処置はできた。

流石はナノマシン。傷口は塞いで、造血もしてくれたようだ。

重傷は治ってないが。

腕がなかったり、目が潰れたままだったりするけど、この際どうでもいい。

応戦しないとイケない。互いに機体を探すと。

「……これは？」

「連中のマシンですかね」

変なマシンが転がっていた。

パイロットは死んでいるので、撃墜されたか。まだ動きそうだ。

あまり見かけないマシンだった。

「同じのが二つあるならちようどいい」

「奪いましょうか」

不器用に二人して、マシンに搭乗。

時間をかけて再起動。古そうだが、文句は言わない。

「さて……反撃を開始しましょうか」

「百倍にしてぶっ殺してやります」

アメリカスと、ノーフェの反撃が始まる。

機体の名前は聞いたことがない。動くなら使う。

そんな二人が奪った機体は。

名を、ベアツガイと言うのだった……。

誇りを失った末路

アロウズ諸とも、双方の陣営は大打撃を受けていた。

あれだけいた数は半滅まで数を減らして、元々少ないテロリスト陣営は致命傷であった。

此方も二回目の砲撃に巻き込まれた。一部が死んで、一部は大怪我を負っている。

「引き際ね……。みんな、生きてるやつだけでもいいわ！ 全員、撤収よ!!」

アリアは直ぐ様判断する。

してやられた。あのアンノウンとジオン残党は、双方の戦力が消耗している時を待っていた。

そして、互いに疲弊してきたところを、MAの大火力で風呂払う漁夫の利。

(……警戒しておいて良かったわ。思ったよりも、うちは損傷は軽微。今すぐ退けば、一

番生き残れる)

これでもジエネレーションは、損害は少なかった。アロウズを警戒して、小出しにしていたおかげだった。

幸い、怪我人はそんなに居ない。退くなら今しかない。

アリアの指示で、現場で戦う彼らはさっさと撤退していく。

疲れと消耗が激しいからか、嫌がっている様子である。

もう付き合っていられない。こんな泥仕合はもうごめん。

彼らと言うと。

「……ゾン残党、及び連合の特殊部隊、彼らを戦争幫助の対象と断定。武力介入を開始する!!」

刹那たちは、なんと連中にまで戦いを挑み始めた。

それはそうだ。

ゾン残党と彼らは連合の特殊部隊と分かっているようだが、連中は何と市街地を積極的に攻撃している。

地図で調べたが、あそこにはこの街の大きな病院がある。しかも、自力では動けない人間がいる。

そこを、既に集中攻撃している。

市街地には人がいない。だから、いる場所を特定して狙う。

(もう、戦争じゃあないわね。ただの殺戮)

戦えない相手を一方的に蹂躪するそれが戦争と言えるのか。

アリアは思わない。ただ殺せればいいなら、それはただの人殺しに過ぎない。

理解できないし、理解する必要もない。どうせ、知ったことではないのだから。

「一方的に襲われる、怖さと痛さを教えてやるッ!!」

反連邦組織のカミーユとかいうZガンダムのパイロットも刹那たちを手伝うらしい。

彼らは議会もへったくれもない混沌としたこの状況では、報道陣ですら危険になる。

政治的にも不利と判断し、彼らを排除することにしたと。

(消耗しているのに戦うの? バカね、死ににいくような真似して。あたしはしないけど)

彼らは立場が違う。優先するのは身内だ。他人など何人死のうが、知ったことじゃない。い。

契約は終わった。仕事はここまで。失敗した時点でジエネレーションは手を退くべきだ。

……なのに。

「悪いが、私は戦わせてもらおうぞ!!」

「あんなのは……戦争じゃない!!」

若干二名が、言うことを聞かない。

しかも、怪我をしていると言うのに。

ガルマとスズキだった。二人は、損傷した機体を引き摺り、叩こうとする。

「バカ!! 止めなさい、死ぬ気なの!?!」

スズキの機体は砲撃こそ避けていたが、崩れた瓦礫が待機していた場所に崩れて潰された。

ガルマは前面にいたせいで、かなり開いていたおかげで威力は弱まっていたものの、砲撃は掠めた。

なんとか防御はしたが、機体の一部が融解して、ジェネレーターが今にも爆発しそうになっっている。

本人も怪我をして、スズキは頭に裂傷、ガルマは腹に破片が突き刺さっている。

出血多量で死ぬかもしれない。治療するから戻れと言うのに。

「出来ん相談だな……! 私にはジオンの将校だ!! ジオンの誇りを忘れた逆賊を許す気などない!!」

荒い呼吸を繰り返すたび、激痛がガルマを襲う。

意識が朦朧としている。少しでも動けば、刺さった破片で内臓が更に傷つく。

だが、操縦する手は決して離さない。

「ジオンの誇りを忘れ、そこに住まう命を狙うなど、私が知るジオンのやり方ではない!! ジオンの名を語る賊は、私の手で倒すのだ!!」

彼の言う誇りとは、ジオンの国のために戦う心のこと。

たとえ戦ったとしても、殺したとしても、全ては国を思つてこそ。

ジオンという国に尽くす忠義こそが、誇りだと将校のガルマは思う。

だが、あれはなんだ。動けない無関係の人間を、ただ地球に住んでいると言うだけで殺す。

何時からジオンはそんな道理を許した? それでは、連邦のことを言えないではないか。

「退けぬ戦いが、私にもあるのだ!! ……こればかりは、譲れない。将校として、あのよ
うな蛮行を見逃す訳にはいかん。私に構うな。他のものは退いてくれ。私は個人でも、
奴等を止める!」

命懸け。いつか双子がいつていた、アリアの理解できない行動理由。

何をそこまでして優先しているのか。なぜ、そこまで必死になるのか。

分らない。困惑するアリアは、スズキに聞いた。

「れ、冷静になりなさい! 今は四の五の言わずに撤退を」

「出来ない」

彼もまた、即答だった。

半壊したザクは、不恰好になりながらも、前に進む。

煙と漏電を繰り返しているのに、闘志は燃え上がる。

「……あれは、違う。あんな戦いは戦争じゃない」

スズキはガルマ程立派な考えじゃない。

ただ、何度も死ぬかけた経験が言っている。

なにもできずに殺されそうになる恐怖を知っている。

況してや、病人を狙うなんて許せない。

無力を通り越して、人間が虫を殺すようなものだ。

それが、MSを使ってやることか。絶対に、してはいけない。

「戦争にだって、ルールぐらいはある。……守られた試しなんてないけど、だからこそ

……止めさせる。同胞を、殺してでも」

彼は、単純な怒りに等しい。

知るから、怒る。あんな事をして、他の人間と手を組んでまでしようとする。

ジオンがあんな真似をするから、連邦まで同じことをしてくる。

「あんなことするから、お返しに同じことをされるんだ。やられたくなきや、止めるしか

ない」

臆病な自分だって分かる。同じことをする大義名分を与えれば、何度でもそれを実行してくる。

そうなる前に。ジオンがバカなことを続けるなら。

「逃げて。……一人でも、戦うから」

もう一度スコープを覗く。

ギリギリの射程までは前に出る。

半壊しているが、狙えないこともない。

見えた。かなり遠方だが、何かジオンの機体が、同じジオンと戦っているのが。

ガルマも、覗いて分かった。良かった、同じ考えの人間がそこにいると。

……ただ、なんであんな熊のようなマシンが暴れているのか理解できないが。

「ちよ、ええ……う？」

アリアは迷う。どうすればいい。

二名が躍起になって命令を聞かない。怒ってもたぶん無駄と学習していた。

こつちの陣営も、戦う気力は尽きてない。寧ろ加熱している。

分からない。なんで戦う。なんで退かない。

引き際が分かってないのか？ 説明しても関係ないと言われる始末。

アリアは散々考えた。聽て、天秤が傾く。

「……もう、知らない!! 勝手にしなさい! なら死ねばいいじゃない!! あたしはしないからね! 個人優先して皆を危険な目にあわせられないから!」

彼女は幾分、冷静だった。

事前にちゃんと退くときは戦況を無視すると言っていたおかげで、周囲は彼女の命令が正しいと理解してくれる。

自分の状況を見れば一目瞭然。これ以上の続行は自殺行為に他ならない。

「それでいい。貴様は命じる立場だ。……濟まない。迷惑をかけた。汲んでくれて、感謝する」

ガルマは思わず笑っていた。頭がおかしいのは、二人の方だ。

命令違反で、裏切り扱いされてもおかしくないのに、アリアはそれをしなかった。

従わずとも、それを貫くのならば、こっちはもう関与しないと見逃してくれた。

以前なら、無理矢理連れて帰っただろうに、今は命懸けを少しは分かるらしい。

「……っ。皆、今のうちに撤退よ!! 良いから急いで! こっちにまたMAの攻撃が飛んでくる!」

通信で、泣きそうな表情だったが、切り替えをして、皆を連れて戻っていった。

彼らも、どうやらガルマとスズキの心意気を理解してくれたようだ。

頑張れ、と文字で送り、去っていった。

「……フツ。私も随分と阿呆になったものだ」

プライドを優先して、こんなことをするとは。

自嘲するガルマに、画面で血を流すスズキも笑った。

「でも、ジオンとして戦っているなら、あれは見過ごせない。違う?」

「……違わないな。では、むさ苦しい男で悪いがスズキ。終の旅路、付き合ってもらおうぞ」

「分かった。絶対止めよう」

二人はここで、再び狙い撃つ。

動けない人間を蹂躪するジオンの残党。

彼らのやり方を認めない、別のジオンの人間として。

迷わず、死を覚悟すらしめて、彼らの終わりの戦いは、始まった……。

このマシンは、そもそも旧式のアツガイという水陸両用のMSであった。かなり古い時代の機体で、源流は一年戦争の時と言われている。

ジョン残党は、貧乏でこういうロートルを引つ張り出して戦うぐらい、金がない。

故に、既存の機体を改良して使っているのが残党の主力で、アツガイに至っては倉庫に眠ったままだった。

そもそも陸戦をするのに、両用を持ってきてどうする。

だったらドムでも使っているほうが勝ち目がある、と放置されていた。

それを約二名、酔狂にもアツガイをこよなく愛する馬鹿者が、ならば戦えればいいんだらうと大胆に改修。

可愛らしくして、先んじて街のなかに潜入しておけば、直ぐ様加勢できるとアロウズが管理する街に、一種のカモフラージュを施した上で紛れ込ませていた。

まあ、結論から言えば無駄だった。

アロウズは、なんか非武装だが見覚えのない得体の知れないMS？　みたいなもんが搬入されている。

何かあると怖いし、街の人間には可愛いと好評なので、コックピットに少し仕掛けを入れて、乗り込んだら死ぬようにしておけばいいや、と軽く改造して街のなかにおいておいた。

で、襲撃時に潜入していた工作員が乗り込んで、知らずに感電死。砲撃に巻き込まれて、奇跡的に少し壊れて倒れていた、という顛末であった。

(や、やりにくい……)

名前を、ベアツガイ。見た目は熊のようなマシン。

非武装ゆえに、本来の武器は何もない。

だが、武装には見えない武装は積んでいた。

というか、癖が強すぎる。負傷しているアメリカスと思う。

兎に角使いにくい。現在、街に侵攻する残党と戦闘中。

瓦礫となった前線基地よりも少し前に出て、奮闘している。

然し、彼女が負傷していることと、マシンのスペックが低すぎる。

反応に追い付かないばかりか、マトモに戦えない。

「何なんですか、この機体は!! 武器がないんですけど!!」

経緯を知らないノーフェが、怒鳴りながらそれでも戦う。

彼女はアメリカスよりも速く適応しているが、しかし武器がない。

なので、格闘で倒している。幸い、相手も古い機体で良かった。

初期のザクーと殴りあいをしている。

シオルダータツクルを受けて、受け身で防いで殴り飛ばす。

どうやら、パワーはあるらしい。

飛び道具はない。何せ、背負っているのは学生が使うような真つ赤なランドセル。というか、二人が使うと小学生に見えた。

(誰が小学生ですって!?! 失礼な、外見は15ぐらいですよ、多分!)

意味の分からない突っ込みを入れて、ザクが持つ斧を回避する。

右目が見えないが、辛うじて感覚を頼りに戦えた。

が、問題は……。

「ぐう!?!」

アメリカスであった。

彼女は、左腕がすでにない。

操縦する速度が、骨折しても無理矢理できるノーフエのようにはいかない。

おかげで著しく鈍っており、格闘がノーフエよりもうまくできずに狙われる。

衝撃で倒れるのを踏ん張って堪えた。

それでも、ジオンのくせにアンフを使っている彼らには負けない。

機銃を堪えて突進。蹴り飛ばして転倒し、コックピットを踏み潰す。

燃料に引火して、爆発する。旧式同士の戦いは、苛烈を極めた。

だが、そんなときに。後方から、支援が届いた。

センサーの外だろうか。サイコミュを積まないこれでは分からないが、誰かが助けてくれている。

背後から、援護するようにビームが飛来して、助けてくれる。誰だが知らないが、取り敢えず感謝して倒す。

それを続けること数分。周囲も、敵が増えてくる。

やがて、奥にいた巨大な連中が顔を見せる。

巨大な獣と言うような大きな赤い怪物。

巨人と見間違えるほどの大きさの黒いガンダム。

沢山の取り巻きがいる。

そして、漆黒の変態高笑いと共に現れた。

「来ましたか、変態が!!」

アメリカスがそれを発見して、キレる。

今回は余裕がないので、恐怖を怒りが越えた。

おかげで錯乱せずに戦える。

「奴が件の変態?! 成仏させてやります!!」

初対面のノーフェですら、おぞましい変態オーラを感じ取って威嚇していた。

こっちは二人に、遠方の誰かしかない。

他は、市街地の方で戦っていた。

戦況は完全に不利だ。手負いの子供が操る欠陥機体。

それに対して、無傷の部隊がそのまま来た。

破壊された前線基地は、シエルターの入り口が瓦礫で封鎖されており、未だに脱出出来ていなかった。

なので、援軍はない。二人でこの変態率いる軍団と戦うしかない。

「ん……？ ガンダムはいないな。しかも、ベアツガイが裏切っているのか？」

変態は期待した相手がいないのでガツカリしている。

いるのは、裏切ったのか味方を襲うベアツガイ。

名称はそれだろうが、それしかないのだ。

怯んでいるのか、まだ襲ってはこない。

通信でどういうつもりだと叫ばれているが、完全に無視している。

だが、敵意はあるだろう。証拠に、奴等の後ろには倒れる仲間がいた。

「……」

彼は困った。満足できる相手がない。

ならば、此度の戦は価値がなくなる。

これでは、くたびれ儲けではないか。

……と、思っていたのもつかの間だった。

「今日の私は、阿修羅すら凌駕する存在だ!! 許さん、許さんぞ、ガンダムツ!!」

「貴様たちが行っている行為を、この俺が断ち切るツ!!」

「軍人として、最低限の任務は果たさせて貰うぜ!!」

「そうやって命を奪うことは、良くないことなんだよ!!」

「お前たちの好き勝手も終わりだ!! 諦めろツ!!」

なんと。

先程まで戦っていた奴等は、共に手を組んで、こちらに向かってきていた。

彼らは知らない。

突然の襲撃、そして街への勧告なしの先制攻撃。

更には病院への執拗な破壊行為。

それらを見ていた彼らは、一時的に休戦を申し出た。

互いの敵である事は間違いない。

アロウズやテイターズは街を防衛する。

反連邦組織は議会が破壊されては困る。

ソレスタルビーイングは戦争を行うもの倒す。

見事に、目的は重なった。今だけは、共に奴等を倒そうと。

何でか撃墜されているのに自分でも分からず生きていたジェリドは慌てて乗り込んだガブスレイ。

プツツンしていて既に煌々と乙を輝かせているカミーユ。

戦争根絶のために、彼らを駆逐する気満々の刹那。

上空で砲撃に気がついて、避難していないと聞いて慌てて二人を助けに来たりデイ。

そして。

一番厄介な男が、修羅になっていた。アロウズの変態武士仮面こと、グラハムという男。

黒い巨体のガンダムに対して、酷い怒りを表していた。

「……………素晴らしいー！」

で、こっちも突然のやる気になった。

理由は、煌々と輝くガンダムのせいだった。

(素晴らしい!! なんとという意志の強さか!! 雄々しい焰、猛々しい獅子の如く力強い

光と熱ツ!!)

皮肉なことに、カミーユは変態に誰よりも男らしいと言われていた。

彼もハイテンションで、叫び返していた。

「ふ、ふははは……ふははははははははは!! よくぞ言った!! ならば存分に戦おうで

はないか!!」

なぜかこいつが仕切り始める。大声で怒鳴って、彼らに言うのだ。

「ガンダムよ!! 貴様らの敵はここにいてるぞ!! 見よ、我らが敵だツ!! ここに集いし我らこそが、諸君らの敵であるツ!! 怒りを感じるのならはその正しき怒りを表せ!! 我らも我らの心で戦うのみ!! 言葉など無粋!! 理由などいらぬ!! 戦場で出会ったなら、やるべきは一つ。………全力で行かせてもらおう!!」

突然叫びだした奴だが、大体言いたいことはいつてくれた。

戦う以外に今はいらぬ。必要ない。

だから、でしやばっても文句は言わない。

「我らの道を阻むのならば、何人たりとも容赦はせぬ!! 覚悟オ!!」

号令と共に、全員が動いた。

何故か変態の取り仕切る最終決戦の序章。

戦いのゴングは、変態が面白がって、派手に鳴らしてくれやがるのであった……。

仲間

戦いのゴングが響く頃。

撤退した彼らは、安全圏まで脱していた。

待機していた母艦に収容して、退散する。

だが、ずっとアリアは迷っていた。

見捨てた。皆を優先するあまり、二人を。

それは正しい。理屈はあっている。だが、感情はあっているか？

(あたしは……あいつらを守る立場なのに。自分の意思で、捨ててきた)

……仲間を見捨てて帰ってきた。

それは、アリアもあまり経験がなかった。

戦場で死んだやつなら別にいい。

然し、二人はワガママを言って残してきた。

以前なら、有無を言わずに引きずってきて戻ってきた。

なのに、アリアは今回それをしなかった。

彼らの覚悟、といえればいいのか。それに気圧されていた。

そして、今に至る。

(あたしは……マスターユニット失格ね)

本当はあんな考えを起こさせないようにしないといけない。

ああなる前に、戻るべきだった。

なのに、なのに……。

彼女は調べる。戦況はどうなっているのか。

そして、愕然とした。現実、更に絶望を二人に与えようとする。

血の気が失せるアリア。これでは、確実に死ぬ。

そこには、ジオン残党が所有するMA以外にももう一つ、連合と予測される集団も持ち出していた。

先程まで暴れていたMAは、ガンダムタイプがサイコガンダム。

多分、強化人間が動かしている。そして、見たことのない機体もいた。

母艦のデータベースで検索。発見。……シャンブロ？

(……ジオン残党が作り上げた、両用M.A。武装……)

詳しく調べて、彼女は言葉を失った。

ダメだ。無理だ。このままでは、二人は確実に命を落とす。

……一瞬、アリアは考えた。これは、前任と同じ行為をすることになる。

裏切りとオーナーに判断されて、自分も消される。

でも。迷いは、ない。

アリアは皆に尽くす為の道具。道具は消耗品。

だから、消耗してもいい。人間とは違うから、何度でも使い潰せばいいのだ。

(フェニックス。ハルファス。……行きなさい)

目を閉じて、悪魔たちに命じる。

脳波を受け取ったガンダムたちが、自立起動する。ハルファスは補給を終えている。

主の忠実な下僕の悪魔は、言われたままに羽ばたく。

(命じるわ。スズキ、ガルマの二名を連れ帰りなさい。戦闘も許す。好きだけ暴れて。

敵はジオンと連合。他は攻撃されても無視。ついたら、限界までは付き合ってたげて。

言っても聞かないだろうから。ただ、マジでヤバかったら強引に戻ってくる。機体

は限界だから放置でいい。分かった?)

了解の念を受けとる。行け、と命じると二機は勝手に母艦から出ていった。

格納庫でちよつとした騒ぎになっていたが、どうでもいい。自分はいけな。けど、下僕はいける。

オーナーの意思に反する独断だ。バレれば、きつと死ぬ。

そして、どうせバレてしまう。それでもいい。

(世話が焼けるわね、まったく。増援、送ったから。面子優先して、死んだら無意味よ。生きるために戦いなさい)

肩を竦めるアリア。仕方ない。ワガママを言う連中にも付き合うのもマスターユニットの役目だ。

これで、お役御免となるだろうけど。後悔はしない。

次のアリアが、うまくやってくれる。

アリアはわかっている。これは、自殺行為。

主に歯向かい、勝手に動き出す人形に、道具にあるまじき行為。

でも、行う。人のため。その目的なら、命など安い。

(特に、あたしの命なんて……)

支払いで済むなら喜んで支払おう。

兎に角、帰ってきてもらう。

それまでは、付き合っておこうと判断して、アリアは自分の役目を終える切っ掛けを

作り出す……。

だが、アリアは知らないだろう。

絶望は、そんなに甘くない。

激戦区の彼らも気付く。

ジオンが所有する二機のMA。

然し、こちらにはいないアンノウンの集団にまで、増援が来ていた。

サイコガンダムの全方位ビームを避けながら、彼らは見てしまった。

「……病院の方でMA!？」

アメリカスは叫んだ。

アンノウンの方角に反応増大。

更にこの状況で増援が現れた。

データを検索して結果は、デストロイガンダム。

サイコガンダムの親戚みたいな巨大なガンダムで、防御性能と火力だけなら向こうの方が上だった。

取り巻きと戦う二人は、舌打ちする。

イフリートの刀を受け止めて、突進して吹っ飛ばすノーフェの操るペアツガイ。

武器があれば、向こうにも行けるだろうが、生憎とこつちも手一杯だった。

何せ、左右から飛んでくるビームを全部避けないといけない。

こんな旧式じゃ、直撃せずとも致命傷。

他の機体は良いだろうが、こつちは所詮敵から奪ったマシン。

一応識別を変えているから襲われないものの、依然として不利であった。

「ふははははは!! どうした?! どうしたガンダムツ!! その雄々しい光はハツタリなのか!？」

変態が乗るギラドーガは、乙に飛びかかって切り払う。

後ろから受ける範囲攻撃で、乙は変形機構を潰されたらしい。

先程、こつちに細々と支援に来る味方を庇って、被弾していた。

不思議なことに、あの輝きは攻撃を弾き飛ばしている。

だが、貫通されたからか、黒煙をあげて地上で戦っている。

はしやいで、振り回すサーベルを同じくサーベルで流して、カミーユは怒鳴る。

「貴様、戦場ではしゃぐんじやないよ!! 俺との戦いがそんな楽しいのか!! 俺達は殺しあっているんだぞ!!」

尤もな指摘に、しかし異常者は怯まない。

己の欲望に忠実な彼は、嬉々として真つ向から言い返す。

「ああ、楽しいな!! まったくもつて楽しいよ!! これ以上楽しいことが世界にあるなら教えてくれガンダム!! 俺は、今お前と戦うこの一瞬が一番楽しいんだよ!!」

まさに彼にとっては当たり前のことを聞いている。

楽しいかと問われたら誰でも言うだろう。楽しければ、楽しいと。

「何っ!?!」

まさかの真つ向からの反論にたじろぐカミーユ。

純粹過ぎるその感情は、ガンダムを通じて彼にも伝わっている。

「俺は、お前と言う男に出会えた事を光栄に思う!! そして、お前という男の熱に触れる事を、誇らしく思う!! お前は真つ直ぐだ! 真つ直ぐで、他者に感応できる優しさがあるようだな!! 問いを投げるのは、俺に対して言葉を使ってくれるんだろう!!? 戦っている俺の中身を知ろうとしてくれるのだから!!? それを甘さと捉えるか、強さと捉えるかは個人の違いがあるが、俺はお前のその問いを強さと受けとる!! お前は他者の理解しようとする姿勢が見える!! それが敵でも、お前は知ろうとする!! それを強

さと言わずになんと言おうか!？」

彼は喜んでいた。ガンダムに乗る彼の意志の強さに。

人間の心こそが最も人間の力になると知る彼、ビヤクヤはカミーユに続ける。

「お前は、お前も俺の敵に相応しい男だッ!! いいや、それ以上だな!! お前は素晴らし
いよガンダムの少年!! 生憎とお前に理解される程の中身の無い男で悪いが、今お前と
戦う瞬間だけが俺の光だ!! これが俺の戦う理由だ! あとはお前がどう判断するか
を決めればいい!! 悪でもいい、敵として殺してもいい! この世界で出会った殺戮の
紅や、静寂の蒼のように、お前の雄々しい光は、俺に影響を与えてくれる!! 俺は、俺
は今すぐ嬉しんだよ、ガンダム!! 素晴らしい一瞬をありがとう!! 身にあまる光
栄だと言っておこう!」

まったくもって意味不明な理屈であった。

カミーユは更に困惑する。見たことのないタイプの人間である。

此方の姿勢を全力で褒める。こちらと戦える事を光栄に思う。

今まで戦場で出会った大人は彼を否定していたが、彼は全力で肯定するのだ。

乙は魂を表現するマシンだと誰かが言っていた。どうやら、それは他人の魂も表現す
るらしい。

彼の言葉に偽りはないと、直感していた。

だからこそ、カミーユは怒る。

「そんな理由か!? そんな理由で、お前は街を一方的に焼き尽くすのか!」
彼にはそんな意思はないと、カミーユだつて感じている。

彼はこの戦いに全てをつぎ込んでいた。他は基本的に知ったことではない。

「ふざけるなっ!! ガンダムは、俺はお前を満足させるためにここにいるんじゃない!!」

勝手な大人だ。理屈もへつたくれもない、自分のことしか考えていない。

彼は決めた。こういう場合、どうするべきか、何度も経験があつたから。

「歯を食いしばれエッ!! 貴様のような奴は、修正してやるッ!!」

怒りがマックスに届いた。呼応するように乙は更に煌々と光度を増していく。

サーベルが巨大化した。マシンの想定を越えるほど、肥大して長く成長している。

これが、カミーユの怒り。雑じり気のないダメな変態を修正する刃。

「おお……!! これぞ、お前の答えか!! 俺を断罪する光の刃かアッ!!」

変態が大興奮。振り上げるサーベルを、嬉しそうに待ち構えていた。

本格的にダメな大人のような。何でこれを見て興奮できるんだろう。

「貴様は、最後までッ!!」

「最期だからだろう!! さあ、裁いてくれガンダム!! 愚かな俺を、その熱で焼き斬つてくれえ!!」

もうどうしようもない。

カミーユは救いがたい変態を見た気がした。今までで一番修正しがいのある大人なのだ。

「ここから、居なくなれえ!!」

降り下ろされる極太ビームサーベル。

彼のギラドーガを覆い隠す太さの一撃は、戦場にいた沢山の人間の目を集めた。

「ふははははは!! 俺の心を感じて貰いつつ、神の国への引導を渡されるうっ!!」
遺言はそれらしい。

死ぬ間際まで自分に素直だった変態は、そのままビームに飲まれて行く。

だが。

「ああ、サイコガンダムのパイロット。もしも機体が破壊されたら、右の脱出ボタンを押せよ。隠し玉があるらしいぞ?」

最後に冷静に何かを呟いて、大爆発を起こした。

その言葉は、因みにほとんどの聞こえていない。

独白に近いものだが、サイコガンダムの人間には届いていた。

ともかくも。カミーユ怒りの一撃が、変態を神の国への引導を渡して終了した。

本人は心労がたたって、かなり疲れていた……。

カミーユの放ったそれは、不利をひっくり返す心理効果は抜群だった。

狂ったように猛攻を放つM.A.

懸命に応戦する陣営を越えた彼ら。

それを遠くで見えていたガルマとスズキ。

レンジが離れすぎたので、また少しずつ機体を引き摺り近寄っていく。

そして、彼らと出会った。

現場では、乱戦になっていた。

ジェリドや武士仮面、刹那の攻撃で、サイコガンダムは接近されて右往左往していた。

白兵戦を想定しない巨体では、小回りのきく至近距離が弱点なのだ。

こっちにも続々と味方が増えていく。戦況は、カミーユがひっくり返した。

「アリー、ノーフェ!! 大丈夫!？」

「遅くなって悪かったの!! 遅れた仕事はするわい!!」

「任務を再開する」

「で、でつかい……!! だけど、だとしてもお!!」

「やるつきやないですよ!! 支援します!!」

「これ以上、好きにさせる気はない!!」

「ああ、そうだな大尉!! 俺も続くぞ!!」

全員が戻ってきてくれた。

オリビアのラゴウ、ジェイドのジムキャノン、イムヤのジムスナイパー、聖のヘイズル、イツセンのホバートラック、ツバサのアッシマー、クロスハートのアストレア。

更に、何故か彼らもいた。

行き絶え絶えの状態だが、ジオンの陣営であるザクースナイパー、そしてギラズールが。

支えるように、アッシマーが運びアストレアが肩を貸していた。

アメリカスは気付かないが、ノーフェは気付いて舌打ちした。

(なぜ、あいつらが……?)

ジエネレーション襲来を知らなかったノーフェ。

ずっと上空でリディと一緒に戦っていたので、地上の様子を見ていなかった。

見覚えのある機体が死にかけているのを見て、好機と思うが流石に空気を読む。

自分も負傷している。満足に戦えない場で襲えば、自分が死ぬ。

なので、グツと堪えていた。

デストロイのほうも、また違うお客が登場して協力して迎撃しているようだ。

フリーダムとか、インパルスとかいうガンダムと一緒に戦っていると

聞いた。

「諦めろ！ いい加減にさあ!!」

リディがシャンブロの上を飛んでいく。

肩の拡散ビームをリフレクタービットという兵器で反射してめちやくちやな範囲を

攻撃する。

接近すればデカイ爪で引き裂かれそうになる。

リフレクタービットはこっちのビームも跳ね返す。

迂闊に射撃も格闘も出来ない。実弾も効果は薄い。

出来るのは、陽動でエネルギーの枯渇をするぐらいか。

既に周囲は瓦礫の山。補給を終えている彼らからすれば、可能であろう。

リデイと応援に来たクロスハートと怒りに燃えるツバサの三人がかりで、押さえていた。

「くっ……!!」

一番の問題は、実力上位のアメリアスとノーフェの怪我とマシン。

武器がない機体では、取り巻きと取っ組み合いでもしているしかない。

質が負けているアメリアス。相手はネモだ。シールドで殴られて倒れてしまう。

チャンスと襲ってくるネモ。然し、

「止めて!!」

「向こういけえ!!」

ラゴウが横から飛びかかり、サーベルで腕を切り飛ばす。

ヘイズルのライフルが乱射されて、蜂の巣にされた。

「貫きますよー!」

機動力で勝るイツセンのホバートラックが、ピンポイントでジェネレータを機銃で銃撃。

ネモは脱出するまでなく、爆発した。

「い、い、い、い、い、い……」

通信で謝るアメリアス。ふらふら立ち上がるベアツガイ。

身体に相当負担がかかる。

応急処置でナノマシンを入れたが、そろそろ限界か。

一時的塞がった傷がまた開いていた。

痛みが、ぶり返す。痛みで集中できない。

腕から多量の血が流れる。誤魔化しは、限界だったか。

(……右目、血涙ですか)

潰れた目から血が涙のように伝う。

頭から、汗のように流れていく真っ赤な血が鬱陶しい。

ノーフェも同時に限界に達していた。

「お、おいアメリカス!! お主、腕はどうした!?!」

「ノーフェ、お前……右目が潰れているが」

キャノンとスナイパーで雑魚を蹴散らすジェイドとイムヤが、二人の容態に気がついた。

仲間知られた。

リディは避難が間に合ってなかったが、彼女たちの様子を見る前に戦いに応じていたから知らなかった。

音声通信だけにしていただけなのに、何かの弾みで互いに映像が出てしまった。

「アメリカス君、ノーフェ君、今すぐ退くんのだ!! 君達がそこまでする必要などない!!」
「バカ野郎!! 自分を蔑ろにするな!! 人形だつて命は命だ! 俺達が支える!! 早く逃げる!!」

野郎二人に怒鳴られた。クロスハートは心配、ツバサは説教だった。

「アリー!! ノーフエ、死んじやうよ!! 死んじやうのはイヤ!!」

「い、幾らなんでもやりすぎだよ!? 自分を大切にしてよ! 私も、戦うから!!」
オリビアには泣かれた。聖には泣きながら怒った。

「新米のわしじやが、心配するな!! 代わりに戦うぐらい、どうということはないわい!!」

「邪魔だ。負傷者は戻れ。俺たちを信じろ」

どんと自分の胸を叩くジェイド。辛辣だが、真つ直ぐに指摘するイムヤ。

「二人とも!! ホバートトラックに簡単な医療キットならあります!! 早くこつちに!」
イツセンが敵を回避しながら懸命に叫ぶ。

アメリカスはまだ、戦える。戦わないといけない。

ノーフェは氣遣いなんて必要ない。

強がりと言おうとした。煩いと逆ギレするつもりだった。

けれども。

「……頼れよ。仲間つてのを。じゃないと、俺みたいになっちまうぞ」

不意に。上から、優しい声が聞こえた。

リディだった。彼は、戦いながらどこか優しい表情で二人を見ていた。

「全部自分で背負おうとするなよ。強がって、誤魔化して。そんな風にして、お前らは周りと離れるのか？ 止めておけ。辛いだけだ。苦しいだけだ。嫌になるだけだ」

経験があるように。リディは柔らかく、二人を諭した。

「お前らには仲間がいる。俺もいたよ。けど、俺の選んだ事で、全部離れちまった。俺はそれで、ただ辛かっただけだった。お前らとのばか騒ぎ、俺は嫌いじゃないんだ。だからさ。今は、大人に任せてみないか？ 俺達はお前らに、完璧でいてほしいと思ってる訳じゃない。ただ、仲間として心配してるんだ。……信じてくれよアメリカス。ノーフェ。俺達が、ここを支える。少し、休んでくれ。頼むよ」

自分は失った。同じ道は、進むなど。

リディはそういって、二人を導いた。

失敗したから知っている苦しみや痛みを、教えた。

何故だろう？ リディの表情には、どこか納得できるだけの説得力があつて。

二人は、気がつけば素直に従っていた。

ベアツガイを降りて、駆けつけたホバートトラックに乗り込む。

「任せてくださいよ。こう見えて、野戦上がりですんで、現地治療もお手の物なんで!!」
運転席から見たイツセンは、力強く笑っていた。

途中、逃げる間にアメリカスも気がついた。知っているマシンがいる。
壊れかけのザクとギラズールだった。大破している。

反応がないが、まさかと思つてイツセンに頼んだ。

「知り合いが!! 知り合いがいるんです!! 助けてください!!」

悲痛な声で叫ばれ、イツセンが急停止してすつ飛んで回収しに行つてくれた。
案の定、大ケガの男二名が入っていた。

「さっきの人たち、思つた以上に傷が深い……。急がないとヤバイ!!」

介抱しながら乗つけて、車を飛ばすイツセン。

ノーフェは不貞腐れた顔で、死にかけているスズキとガルマを見ていた。

呻いているが、こつちも出血が酷い。

「やっぱり……。どうして、こんなことに」

心配するアメリカス。自分も負けず劣らずで大ケガなのに、二人を優先する。

ホバートトラックは、戦域を抜けて、安全地帯に到着。

直ぐ様、イツセンが準備に取りかかった。

「少し待つて下さい。この二人、結構深手なので、先にやります」

冷静に、場所を広げてキッドをつかって手術を開始した。

簡単なものしかできない応急処置だが、それでもしないよりは良かった。

イツセンはスズキから始めて、数分で終えた。

「最低限しかしませんが、後はナノマシンで自動で治させます」

イツセンが持っていたのは、アロウズの支給しているイノベーター用のナノマシン。

あれは、確か普通の人間に使うと後遺症で、似たような存在になるとかならないとか聞いたが。

普通の人間に施して本当に大丈夫なんだろうか……？

方法がないので黙っておく。

ガルマも同じ要領で、腹の傷を引っこ抜いて止血して、仮縫いしておく。

ナノマシンを打ち込み、終了。

次、ノーフェ。目玉は既に手遅れだとイツセンは言った。

取り出すのは難しいので、頭の傷や止血はしておくと言われた。

同時に、アメリカスの腕も治せないなので血を止めてナノマシンを再び入れる。

数分で回復した。二人をそのまま連れていこうとするイツセン。

だが、リーダー反応があった。

それは運悪く、彼女が放った悪魔のお迎えのご到着だった……。

人形の選択肢

イツセンは絶句する。

慌てて外に出ると、直上に見知らぬガンダムが見下ろしていた。

蒼いガンダムと、紅いガンダムが。

「て、敵の増援!？」

ホバートトラックではMS相手に満足に応戦もできない。

既に銃口を向けていた。殺すつもりらしい。

すると、騒ぎに気付いて二人が顔を出す。

「……フェニックス。用事があつて、戻ってきたんですか？」

「ハルファス、誰に向かって銃を向けてんですか？」

アメリカスは優しく紅いガンダムに、ノーフェは冷たく蒼いガンダムに言う。

何を言っているのか。すると、ガンダムは銃口を下げて着陸してくる。

逃げようとイツセンが言うが。

「いいえ。大丈夫だと思います。どうやら、用事があるようで」

アメリカスはそう言えば、後からきた彼らは悪魔たちを知らないのだ。

宇宙で戻るようにいつて、それきりだったから。

意思があるガンダムと簡単に説明すると、驚くイツセン。

「そんなマシンがいるんですね……」

感心したように、降り立った二機を眺めていた。

用事を問う。二機は、ガルマとスズキを迎えにきたと説明。

「お迎えですか……。分かりました、じゃあ直ぐに戻ってください」

「後任の差し金ですか。ご苦労様ですね」

イツセンに、二人を回収していきたいと通訳。

彼も了承して、血塗れの野郎を抱えて、片方の膝をついてコックピットを開いて待つガンダムに向かい、ゆっくりと中に入れる。

「二応、応急処置は致しました。ですが、応急ですんで、戻ったら医療設備に急いでください」

ガンダムに伝えると、ツインアイが一度点滅。

「了解、だそうです。必ず伝えると」

ガンダムに簡単に容態を教えておく。

二機は、主に伝言を伝えると約束した。

運搬を終えて、二機は立ち上がる。

すると、悪魔たちはこう、問いかける。

手伝いはしなくていいのか？ と。

分裂後初めて会った主に、聞くのだ。

主には命じられたのは、二人の回収。

だが、邪魔をする敵がいた場合や安全に戻れなさそうな場合は戦う許可を貰っている。

それを拡大解釈して、アメリカス達を支援することもできる。

そんな大怪我をしているのに、まだ戦うのならば共に行くと。

二人の心を見抜いていた。

「要りませんよ。フェニックス、ありがとう。心配してくれるんですね」

「ハルファス。お前は言われた仕事をしなさい。今の主は向こうでしように」

二人とも、拒否をした。

余計なことをしないで、今はアリアと言う女に従えと。

もう、向こうに忠誠を誓えばいい。

二人は前の主に過ぎない。今は違う。

彼らにすら心配される始末に、苦笑するアメリカス。不貞腐れて、ノーフェは追い払うように手を振るう。

「あの、彼らはなんと?」

イツセンに何でもないと告げる。

ガンダムたちはコックピットを閉じて、ゆっくりと上昇。

そのまま、飛び去っていった。

これで、彼らの無事は保証された。

問題は、これからか。

「避難しましょう、ここも危ないですよ!」

そう、イツセンは急かす。然し、二人は車に乗らない。

応急処置さえすれば、また暫くは動ける。

「ねえ、イツセン。……どこにいくおつもりで?」

アメリカスは振り返り、問う。

安全な場所に行くと言うが、ノーフェが反論する。

「安全な場所? 地下のシエルターは御免ですよ。狭い場所に閉じ込められるだけで、安全とは言い難いので」

治療するにも、街は現在戦場と化している。

避難するにはシエルターだと思うが、シエルターは既に避難している人で溢れている。

敵がいる限り逃げる場所はない。安全な場所もない。

二人は、そうイツセンに言った。

「逃げてても無駄ですよ。物量は未だに相手が上。MAの撃破も出来ないなら、殊更不利ですよね?」

「人手足りなくなりますよ。……いいんですか?」

この子供が言いたいことを、イツセンは理解してしまった。

つまりは、彼女らは。

「ま、まだ戦う気なんですか!」

そう。動けるなら逃げる気はない、と。

皆を置いてきぼりにする気もないと。

折角、支えてくれる皆の心意気を、台無しにする。

「落ち着いてください。……現状、たかが左腕が千切れただけです。あのポンコツなら負けますが、自分の機体ならあの程度、逆転して見せましょう」

「大袈裟なんですよ。目玉潰れたぐらいで、死ぬわけないでしょう。いえ、死ぬかもしれ

ませんがイツセンの応急処置さえ済んでいけば、終わるまでは持ちます。持たせます」
けるつと、二人して自分の欠損はやはり大きいと言う。

負傷者のくせに、戦意だけは昂っている。

イツセンはダメだと何度も言う。説得をしているのに。

相変わらず、話を聞かない。というか、逆に聞かれる。

「ですから、避難なんて今頃出来ないんです。どこに逃げて、ホバートラックの範囲は
MAの射程からは逃れられない。隠れればそれごと焦土にされるだけなんですよ」

漠然と逃げる、と提案するイツセンだが、具体的に何をどうするか聞かれると黙って
しまう。

正確なプランを提示してと言われると、行き当たりばったりで、言えなくなる。

どこに逃げるか、どうやって治療するか、そもそも逃げ切れるのか。

全部片っ端から話せば、即座に否定される。

アロウズの軍備設備は一通り知っているから、現状も予想がつく。

周囲はもう戦いのフィールド。

医者もいないし、設備もない。

ホバートラックで行ける範囲に、安全圏はないと、断言された。

「こうしている間にも時価が惜しい。イツセン、あなたにしかできないお願いがありま

す。危険ですが、頼めないでしょうか？」

アメリカスが、頭を下げてくださいました。

それは聞けば、確かにイツセンしか出来ないこと。

二人はその知識を学んでいなかった。何せ、MSの操縦には全く関係のない知識である。

今まで古すぎて廃れていた技術を、イツセンはその経験で求められた。

「必要な物はさつきホバートラックの中にも常備されていました。使えますか？」

腕と目が死んでいる二人では、仮に実践できても不安が残る。

なので、頼めないかと。

「いい、一応一通り学んじやいますが……」

「頼みます。MS工学について説明して分からないなら、見てもらおうしかありません」

「専門知識ですからねえ。こっちの分野は任せてくださいいな」

アメリカスは何度も頼み込む。ノーフェは笑っていた。

なんで、ここまで戦おうとするのか。イツセンには分からない。

すると、ノーフェは軽く自分の生まれを語った。今まで知らなかった二人の過去。

即ち、戦うための道具であると。人形であると。絶句するイツセン。

道理で、普通なら死んでいる傷で動けて戦える訳だ。

若干でも医療を知るなら誰もが思うだろう。

この子らは、人間ではないのだと。

「わたしたちは、戦うしか能のないお人形です。だから、戦うんですよ」

「面白いことは誰だって優先します。私は殺すのが好きだから、戦うんです」

戦いしか知らないのではない。

戦いしか出来ないと思っっている哀れな人形。

本当は別の方法だってあるうちに、アメリカスは気付かない。ノーフェは選ばない。

だって、アメリカスは自分を人形だと思っっているし、人間に尽くすのが償いと思っ
ている。

ノーフェは殺せるなら何でもいい。楽しいから、好きだから戦争を選んでただ戦う。

人間になれない、お人形の選択肢だった。

「……………」

イツセンは分かる。語られて分かった。

二人とも、戦いしかきつと知らないのだろう。

過去に見てきた、傷を負いながらも戦闘を続けた戦士を見たことがある。

精神が肉体を凌駕して、かの武蔵坊のように死んでいった仲間も見た。

彼女らは、戦いを愚直に繰り返すしか出来ないのか。

野戦という、この時代において最後の戦いとも言える戦場を潜っていたイツセン。生身で殺しあつた回数なら二人だつて越えている。

熱く湿つた泥臭い森の中で、乾いた寒い砂漠の夜で、吹雪が舞う極寒の地で、灼熱の太陽に焼かれる荒野で。

何度も何度も経験してきた戦いを身に刻むから、闘志を失わない彼らに似た気迫を感じた。

覚悟とは違う。だが、彼女たちの心は、共に戦うことを選んでいる。

「……分かりました」

聽て。イツセンは受け入れた。

二人の言うことも尤もで、闇雲に避難しても間に合わない確率が高い。

ここはもう、殺しあいの世界。逃げる場所なんてないのだ。

「任せてください。確か、お二人の乗機の場合ですね？ 座標は？」

車に乗り込み、二人が言う指定の場所にターンして戻りだした。

根拠があるのだ、と移動中二人は語る。

腕が無かるうが、目が潰れようが互いの機体を変えれば戦える。

二人の負傷を、乗機が補えるレベルだと。

「知ってますかイツセン。かの、赤い彗星の再来も、頭が銃弾で半分吹っ飛んでいるの

に、万全のユニコーン二機を圧倒出来たらしいですよ？」

「そんな……バカな……!？」

どんな次元だそれは。

確実に死んでいるのに、ガンダムを二機を同時に相手して圧倒した!?

だが、ノーフェは笑っていった。事実だと。そして、彼も優れたNTであったと。

「NTってのは、精神が肉体を越えるなんてしよつちゆうですよ。私達はより戦闘に特化しているので、尚更に。簡単にや死にませんのでご安心ください」

ノーフェの言葉には説得力が有りすぎた。

あんな馬鹿げた戦果を一人で叩き出す化け物なのだ。

ケラケラ笑っている彼女は死に体とは思えないほど、活気がある。

痛みに慣れてしまった、とアメリカスも言った。

怪我に身体が適応している。イツセンは愕然とする。

(お二人とも内部構造が常人とは全く違うみたいだ。手当てしているときも、ナノマシンの効きが良すぎるし……)

医学をかじっているのです、その異常性も頭に入る。

まるで超再生でもしているとか思えるほど、応急処置のナノマシンの効き目が長いのだ。

普通なら、移送する間ぐらいしか持たないのに、この二人はあまつさえ戦っていた。しかも長時間。

成る程、と納得した。これなら、戦うぐらいなら……短期決戦ならいける。

忠告はしておいた。二人は了承している。

急いで、イツセンはその場所にホバートラックを走らせる……。

到着した。

瓦礫のなかに、車を止める。

周囲は派手に戦っており、かなり危険であった。

流れ弾を受けてもおかしくない。

「すぐ準備しますんで！」

道具を持ったイツセンと一緒に、二人も手伝う。

ぱっぱとそれを瓦礫に設置。そして。

「離れてください!!」

イツセンの声ですぐ退散。

数秒後、瓦礫が爆発を起こした。

イツセンに頼ったのは、爆薬の知識だった。

自分の乗機が瓦礫の下敷きになっていゝるんで、それを吹っ飛ばしてくれと。

イツセンは衝撃が逃げないように慎重に設置して、爆破。

MSの装甲なら、火薬の爆発程度じゃ問題はない。

結果、倒れているMSを発掘する。

幸い、仰向けに倒れていた。直ちに乗り込む二名。

中途半端な補給かと思いきや、妥協点ぐらいには終わっている。

「先に行きます！ 後で合流しましょう！」

ホバートトラックで戻っていくイツセンを見送る。

二人は互いのガンダムを交換していた。

「さて、ユニコーン。悪いんですけど、少し付き合ってください」

「デルタって言うんですか。あのロリコン少尉とお揃い……。うわ、何だか死にたくなってきました」

機体を起動する。ユニコーンは腕がなくとも、思考制御が可能なシステムである。

脳波を拾って、ゆっくりと立ち上がる。

デルタカイに直ぐに慣れたノーフェも、操縦して立ち上がる。こうすれば、二人の動きにマシンはついてくる。

本領発揮を出来そうだ。

(……ユニコーン、お願いします。あの時のように、わたしに伝えて)

本気を出して、と願うようにマシンと繋がるアメリカス。

(ジオンの残党、全滅だ！　って事で、景気よく行きましょうかデルタカイ!!)

またもハイテンションのノーフェ。

戦場に向かいだす二人の脳波は一段と強さを増している。

機体の許容を軽く越えている事を、自覚できた。

(ユニコーン……いいえ、バンシイ。わたしは、皆様の為に戦いたい。だから、あなたの力添えをお願いします)

(デルタカイって、ヤバイもの積んでるんでしょう？　じゃ、動いて見せましょう!)

サイコフレームが、二人の思念を増大させる。

次第に漏れだす、人形の光。

急速で向かうべく、乗つけたユニコーンから。足元のデルタカイから。

象徴的な、心の色が、輝きだす。

見えてきた。苦戦している皆の姿が。感じてきた。皆の感情が。

（お願いします、わたしは……まだ、戦えるから）

（戦いたいから戦い、殺したいから殺すんです!!）

まるで対照的な、献身と身勝手な想い。

それは、戦場に辿り着く頃にはより強くなっていた。

「……やっぱり、戻ってくるよなあ。あいつらだもんな」

真つ先に気づいたのはリディだった。

折角アドライブスしたのに、半分予想していたが案の定戻ってきた。

本当に、戦うことしか知らないようだ。

これは、違うアプローチで教えてやるしかあるまい。

言葉で分かるほど、二人はお利口さんではないと見る。

呆れの苦笑いをする。同時に、助かった。

彼女たち抜きでは、キツイモノがあつたのも事実だから。

なんで戻ってきたと周囲は怒る。二人は謝って、そして言い返す。

「どこに逃げても危険は同じです。だったら、傍に居させてください！ わたしは、戦う

ためにいるんです!!」

「こんな最高に楽しい時間を独り占めですか!!? ズルいですよ、私だけ除け者なんて許

せません!!」

リディはもう、笑うしかなかった。
漸く、この二名の性格が熟知してきた。

姉は自己犠牲に迫る献身、妹はただの戦鬪狂いのワガママな子供。

双方、教育するなら先ずは適正なやり方をしないとダメだろうか。

最初にまず、戦い以外を教えよう。日常と言うものを、リディもあまり知らないが。

「分かった。宛にするぞ、いいんだな？」

今は、先ずは戦おう。ジオンとアンノウンを街から追い出す為に。

実際、必要だったのも否定できない。

リディの問いかけに、二人とガンダムは応える。

「任せてください」

「ロリコン少尉にや負けませんよ!!」

ユニコーンが飛び降りて、蒼い光を纏って変身した。

一瞬でジムはガンダムになり。

変形したデルタカイは、全身の関節から真紅の焰を吹き出した。

燃え盛る業火のように、その体軀を染めていく。

二人の人形が、舞い戻る。

「つたく、仕方ないやつだな。面倒見てやるから、俺についてこい。あとノーフェ、お前

あとで覚悟しとけよ？」

世話が焼ける子供だ。まさか、こんな風に面倒を見ようと思うとは。自分も案外、貧乏クジを引くようだった。

二人の人形を従えて。

彼らの反撃は、まだまだ続く……。